

蒼炎の勇者がダンジョン
に居るのは間違っ
て居るだろうか

クツペ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『女神アスタルテ』を倒したアイク

まだ見ぬ地を見るために旅に出たが…

目次

閑話	1	第二話	90
閑話くベル・クラネルく前編	1	第三話	98
閑話くベル・クラネルく後編	13	第四話	106
閑話くワユ編く①	24	第五話	115
閑話くワユ編く②	32	第六話	123
閑話くワユ編く③	41	第七話	134
閑話く戦争遊戯編 i f く	48	第八話	143
閑話く戦争遊戯編 く	59	第九話	150
閑話①	66	第十話	160
閑話②	75	第十一話	168
本編		第十二話	175
第一話	83	第十三話	184
		第十四話	193

第十五話		200
第十六話		210
第十七話		222
第十八話		231
第十九話		237
第二十話		247
第二十一話		257
第二十二話		268
第二十三話		278
第二十四話	戦争遊戯①	284
第二十五話	戦争遊戯②	291
第二十六話	戦争遊戯③	299
第二十七話	戦争遊戯④	308

第二十八話	戦争遊戯⑤	317
第二十九話	戦争遊戯⑥	324
第三十話	戦争遊戯⑦	333
第三十一話	戦争遊戯⑧	342
第三十二話	戦争遊戯 after	
354		
第三十三話		365
第三十四話		373
第三十五話		384
第三十六話		393
第三十七話		402
第三十八話		414
第三十九話		425

閑話

閑話くベル・クラネルく前編

くベル side く

あの日の僕は調子に乗っていた。ダンジョンの三層で出てくるモンスターでは物足りないと感じ、エイナさんや神様の言いつけを無視して僕は五階層まで降りて行ってしまった。

そしてその行動に罰が当たったのだろう。本来だったら中層にいるはずのミノタウロスがその日に限って何故か浅層である五階層にいたのだ。

「ブモオオオオー！」

「うわああああー！ー！！！」

ミノタウロスのレベルは2相当。僕は現在駆け出しのレベル1。ミノタウロスと戦つても勝てるわけもなくただただ逃げていただけだった。

後のことも考えないでただひたすら走った。そしてついに行き止まりに追い詰められてしまう。

「ブモオオオオー！」

追い詰めたと言わんばかりに咆哮を上げるミノタウロス。その様子に足が竦んでしまい、その場にへたり込んでしまう。

（神様、すいません……僕はここまでみたいです。おじいちゃん、やっぱりハーレムなんて僕には無理だったよ。）

圧倒的な死が近づいてくる。僕は抵抗するでもなく心の中でただ独白を続けていた。（ああ、僕にはやっぱり英雄も、ましてや勇者なんて程遠い存在だったんだ。なろうとするのも、憧れるのも恐れ多い。なりたいたいと思っけていてもなれないとは心のどこかで思っけていたさ）

この世界で有名なお伽噺、『ファイアーエムブレム・暁の女神』。下界の子供たちならば誰でも憧れる、世界を救った勇者。『蒼炎の勇者』アイク。

そのものは国を救い、過去の大戦の英雄を相手取り勝利し、最後には世界を救ってしまつた。

おじいちゃんはこの話をあまり好きではなかつたみたいだけど、僕はこのお話が大好きだった。憧れだった。そして自分もそうなりたいたいと何度も思つた。彼の勇者のように、誰にも負けない強さが欲しいと思つた。

それが蓋を開けてみればこれだ。目の前に迫ってくる死を肅々と受け入れようとし

ている。仕方ないじゃないか……レベル1はレベル2には敵わない。

ミノタウロスが武器を振り上げ僕に向けて振り下ろそうとしたとき、突然一筋の剣筋が見えた気がした。

ミノタウロスは血をまき散らし絶命する。僕は返り血を浴びてしまったがこの状況を受け入れられずにただ固まっていた。

「すまん、こちらの不手際だ。大丈夫か？」

ミノタウロスを倒したのであろう男性は彼の勇者にそっくりだった。青い髪に黄金の剣。かなりの重量があるであろうその剣を片手で軽々と振り回す様は、まるで彼の勇者、『蒼炎の勇者』と同じだ。

「すすす、すいませんでしたああああー!!!」

情けない悲鳴を上げながら僕はその場を走り去ってしまう。お礼の一つも言えずにその場を走り去ってしまった。

* * * * *

彼との再会は次の日の夜に実現してしまった。彼はオラリオ屈指の大手ファミリア『ロキ・ファミリア』の団員らしく、ダンジョン遠征終了の宴会を『豊穡の女主人』で開催していた。

彼は一人で黙々と食事をしている。運ばれてきた料理を彼一人で全て平らげかねな

いほど。

宴会の席にいた狼人が彼に文句を言うとな彼もまたその宴会の席を後にして空いている席を探す。しかし今日は店側も繁盛しており、空いている席はどこにもなかった。

「すまない、相席をしてもいいか？」

僕が座っていたテーブル席は僕が一人で座っていたため相席をすることは可能だった。昨日言い損ねたお礼を言いたかったので相席の申し出を受け入れる。

「あ、はい。どうぞ」

「私もこつちで食べていい？」

「え、あ、はい」

『剣姫』アイズ・ヴァレンシユタイン、『ロキ・ファミリア』の宴会の方の席ではなくなぜか彼に着いてきた。そのせいでこつちのテーブルに向けられる視線が痛い……特にさつき文句を言っていた狼人の男声と山吹色の紙をポニーテイルにまとめたエルフの少女からの視線が鋭すぎる……睨みつけるというよりもガンを飛ばすの方が正しいレベルに。

そして彼が席に着き料理の注文をすると、そこからが凄かった。

「こいつ何もんニヤ！どんだけ食えば気が済むニヤ!？」

「ああ！こつちの皿もう空です！次の料理お願いします！」

「まだ食べますよね？」

「当然だ。肉があればもつと食いたいな」

「まだ食べられるの……」

「見てるだけでお腹一杯になってきそうなんですけど……」

「この料理はうまいな、オスカーの作った料理の次位にうまい。そして一皿がこの量だ。気に入った」

「シル、あなたが連れてきた大食漢の冒険者とは彼の事ですか？」

「違うよ！私が連れて来たのはあの人と一緒に座ってる白髪の方！」

運ばれてくる料理を次々と平らげて行き、それでもなお注文をしている。その様子に従業員の方は嬉しいはずだが絶叫しており、他の席で食べていたお客さんはこちらを化物を見るように見ており、同じ席に座っている僕とヴァレンシュタインさんはそれだけで満腹になりそうだ。

彼が出てきた料理を粗方平らげ、次の料理が来るまでまだ時間がある。

「あ、あの！」

「ん？どうした？」

「あの、今日は助けていただき、ありがとうございます。僕ベル・クラネルって言います」

「ああ、どこかで見たことがあると思っただらああの時の少年か。あれはもとはと言えば俺の所為だ、こちらこそすまなかった」

「いえ、あの……お名前をお伺いしてもいいですか？」

「アイクだ」

「へー、暁の女神に出てくる英雄と同じ名前なんですな」

彼の親が青い髪を見て彼の勇者に憧れつけた名前なのだろうと勝手に解釈していたが、その時アイクさんがとんでもない発言をする。

「同じ名前も何も、本人なんだがな」

「……はい？今なんて——」

言われたことを素直に受け入れられなかった。というよりも何を言っているのかが分からなかった。

「お待たせいたしましたー……」

新しく料理が運ばれ、アイクさんは食事を再開する。

「ベル……って呼んでもいい？」

「え、あ、はい。ヴァレンシユタインさん」

「アイズ」

「へ？」

「私の仲間はみんな私をアイズって呼ぶ」

「分かりました、アイズさん。それで、この人が本人というのは……？」

「そのまんまの意味。気が付いたらダンジョンにいたんだって」

「えええ——ムグッ！」

とても信じられない！あの物語の勇者が目の前で大食いをしていると言われても全く信じられない！

思わず絶叫しそうになった僕をアイズさんの手が僕の口をふさぐ。

「あまり大きな声出さないで。あんまり騒ぎにしたくない」

目の前で起こっていることを意に介さず、アイクさんは食事を続ける。

「おかわり」

「ニヤに!?もう一皿平らげてるニヤ!もうちよつと味わって食えニヤ!」

「ちゃんと味わってる。オスカーの作った料理の次位にうまいな」

「ほう、うちの料理よりもうまい料理を出す奴がいるなんてね」

「俺の傭兵団のシェフをなめるな」

「ゴゴゴゴ……:という音でも聞こえてきそうな雰囲気を発しながらも食事を続ける。

「そうだ!今日ダンジョンでもおもしろい出来事があったんだけどよお!」

突然『ロキ・ファミリア』の宴会がなされている方から声がかかる。

「帰る途中逃げたミノタウロスいただろ？あの最後に一匹倒したのも自称英雄のあいっ
なんだけだよお、あいつが倒したミノタウロスの返り血が襲われてた冒険者にぶつか
かってトマトみてえになつてんたんだよ！ははは！今思い出しても笑えるぜ！」

その冒険者は十中八九僕のことだ……僕は僕が情けなくなつてくる。思わず机をた
たきその場から逃げ出そうとしてきたところでアイクさんが僕の腕をつかみ引き留め
て来た。

「放してください！」

「自分の弱さから目を背けるな。自分が弱いことを、弱かつたことを風化させるな」

何を言っているのか理解ができない。弱い自分なんて早々に忘れ去りたい忌まわし
い記憶でしか無いはずだ。

「何を……言つて——」

「自分が弱かつた時のことをいつまでも頭に入れておけ。そうすれば、今よりもずっと
強くなれる。俺だつて今のお前みたいな時期があつた」

「……え？」

「俺は親父を目の前で殺された。俺がもつと強ければ、親父を守れたかもしれない。あ
の時の弱い自分を思い出すと腹が立つてくる。でも、あの時弱い自分がいたからこそ今
の俺がいる。だから今は弱くてもいい。今すぐに強くなれなくてもいい。お前は冒険

者だろ？ ゆっくりと強くなっていけばいい」

その言葉が胸に重く響いた。誰だって最初は弱い。その弱さを、悔しさを糧にして努力を続けることに意義があるのだと。

「僕は……強くなれますか……？」

「強くなりたいと願うものは必ず強くなれる。俺がそのいい例だ」

言いたいことは言い終えたという風に、彼は食事を再開した。彼の言葉はここに食事に来ているお客さん、従業員たち全員が聞き入っていた。

「アイクって、そういうこと言う人なんだね」

「何のことだ？」

「なんかアイクって、なんでも放っておく人だと思ってたから」

「あのなあ……俺はグレイル傭兵団の団長だったんだぞ？」

「うん、知ってる……ねえアイク、私も強くなれるかな？」

「さつき言ったとおりだ。強くなりたいと願うものは、必ず強くなれる。自分を信じろ」

「うん、そうする。あ、これ貰うね」

「おい、自分で注文しろよ。俺から肉を取るな」

アイズさんは強い。レベルアップの最速記録保持者だ。そのアイズさんでも今の現状には不満なのか、アイクさんにそんなことを言っている。

「よっしやー！今から宴会恒例飲み比べ大会やー！優勝賞品はリヴェリアのおっぱいをもむ権利をくれたるわ！」

「俺もやるっすー！」「俺も！」「当然参加するぞ！」

『ロキ・ファミリア』の宴会でまた何か盛り上がってる。というかおっぱいって……そんな、女性の胸を揉む権利だなんて……

考えただけで恥ずかしくなってきた僕は俯いて赤面した表情を隠す。何やらもう一人この席に来たようだ。

「はあ……下らん」

「いいのか、止めなくて」

「私が止めたところで何も変わらん。お前は参加しないのか？」

「あいにく、俺は食うことで口が忙しくてな。あ、おかわり」

「まだ食うのか……」

「だから食うの早すぎるニヤ！」

「なんだ、飲みたいのか？ほら」

「いいの？」

「飲みたければ飲め」

「ありがとう」

ジョッキに口をつけ酒を飲み始める。何故か『ロキ・ファミリア』の面々がギョツとしている。

「おい馬鹿、やめろ！」

アイズさんからジョッキを引つ手繰るリヴェリアさん。その表情には鬼気迫るものがあつた。

「何かいけないのか？」

「アイズは極度の酒乱なんだ。この間飲んだ時はロキに馬乗りにしてボコボコに殴つていたが……」

顔を赤くしたアイズさんは拳を握り突然アイクさんに殴りかかる。アイクさんはその拳を平然と受け止めている。酔つているとはいえレベル5のアイズさんの拳をいとも簡単に受け止めるアイクさんはレベルいくつなのだろうか？

「何のつもりだ？」

問いかけるが何も答えずうつろな表情のまま掴まれて無い手を手刀の形にして切りかかってくる。腕で受け止め受けて、拳を受けてめていた手を放し手刀を放ってきた腕をつかみぶん投げた。

酔っぱらつておりうまく受け身を取れなかつたのか、背中から地面に思い切りたたきつけられアイズさんは気を失う。

「女将、すまない。今日はこれでお暇させてもらう。リヴェリア、黄昏の館までの道を覚えていないから案内してくれないか？」

「あ、ああ……分かった」

あまりの出来事に呆然としながらも何とか再起動を果たし、僕も自分の飲食代を払い店を後にした。

閑話くベル・クラネルく後編

くヘステイア side く

ベル君が『豊穣の女主人』とか言う食堂から帰ってきてダンジョンに潜った次の日、ステータスを更新した時に僕は驚愕を隠そうともしなかった。

まず一つ目、今までに無い位ステータスの上り幅が大きかった。僕は今までに眷属を持ったことが無いから確証はないけど、ベル君のステータスの上り幅は正直言って以上だと思う。

そして二つ目、スキルが発現していた。そしてこのスキルがベル君の急成長を促しているものであると確信する。

【勇者願望】

- ・ 早熟する
 - ・ 勇者に対するあこがれが大きいくほど効果上昇
 - ・ 勇者に対するあこがれが続く限り効果は続く
- 早熟するなんて確実にレアスキルだ……そしてこの勇者、オラリオで勇者と呼ばれて

いるのはあの忌々しいロキの所の団長、フィン・ディムナだ。つまりベル君は『ロキ・ファミリア』の所の団長に対して憧れを持つことがあった？

「ベル君、ロキの所の団長と何かあったのかい？」

疑われることを承知でベル君に訊ねる。別にロキの所だからということではなく、スキルが発言する理由は何かしら原因があるはず。それを知ることが無い限り、このスキルをベル君に教えるのは危険だ。

それに他の神々たちに狙われるリスクまでついてくるとなると尚更だ。

「へ？『ロキ・ファミリア』の団長っていうと、『勇者』のフィンさんですか？なにもありませんよ？」

とりあえずロキん所の団長は白。他に誰かいるのかな？

「ベル君、正直言つて今日の君のステータスの伸びは尋常じゃない。これがいつまで続くかは分からないけど、これは君の成長期だと思っておいてくれ」

スキルの存在を馬鹿正直に教えるわけにはいかない。だからと言って今回のステータスを誤魔化すわけにもいかない。嘘を付くのは心苦しいけど、これも君のためなんだ……！

ステータスの写しをベル君に渡す。ベル君はその伸び率に驚き、喜んだ。

「神様……これ本当に僕のステータス何ですか!？」

「うん、本当だよ！僕がベル君に嘘を付いたことがあつたかい？」

まあついさつき嘘を付いたことは黙っておこう。

「いいえ、神様が嘘を付いたことなんて有りません！ということは本当にこれが僕の今のステータス……あれ？スキルの欄がおかしくありませんか？」

「いや……少し手元が狂つちやつてね、いつも通り空欄だったよ」

「そうですか……」

心苦しい！嘘を付いていることの罪悪感が半端じゃない！

「ま、まあさつきも言ったけど今の君は多分成長期だ。だからと言ってあんまり無理しないでくれよ？君は僕の、たった一人の眷属なんだから」

「はい、僕は神様を一人にするわけにはいきませんから」

「うん！それでいい！というわけで、僕は数日留守にするよ」

「お出掛けですか？」

「まあね、神からの招待状。パーティーみたいなものさ」

「分かりました。楽しんできてくださいね！」

安く手に入れたドレスを着て、ホームである廃教会を後にする。

僕は僕にできることでベル君を守る。そう心に誓いながら。

* * * * *

くベル side)

あれから数日が経ったけど、神様はまだ帰ってこない。何かあったのかと心配になるけど、今の僕にできることは神様のために強くなることだけだ。

今日は『怪物祭』だけれど、僕はダンジョンに潜るつもりだ。ステータスの更新はできないけれど、経験値の貯蔵はできるからダンジョンに潜ることは無駄にならない。

「おーい、その白髪頭。ちよつと待つニヤー!」

『豊穡の女主人』の前を通ったところで声をかけられる。周りをキョロキョロと見回すが白髪頭は見当たらない。

「そこでキョロキョロしているお前にや!シルの許嫁!」

「許嫁!?!なんですかそれ!?!」

「おい白髪頭、お前暇かニヤ?」

「いえ、ダンジョンに潜るつもりでしたけど」

「だったらおつちよこちよいに財布を届けてきてほしいニヤ。あのおつちよこちよい、『怪物祭』に行くって言っておきながら財布を忘れて行ったニヤ」

「アーニヤ、それでは説明不足です。すいません、クラネルさん。アーニヤが言ってることはシルにこの財布を届けてきてほしいということですよ。本来なら私たちの誰かが行くべきなのですが、私たちはお店の準備がありますから」

「はあ、そういうことですか。分かりました」

シルさんの財布をリユーさんから受け取る。落とさないようにしっかりとポケットに入れておく。

「シルはさつき出発したばかりです。急げばすぐに合流できるでしょう」

「分かりました」

一礼してその場から駆け出す。しかし僕は『怪物祭』の盛り上がりを嘗めていた。人混みが多すぎて全く進めない。

ようやくコロシアムに到着したが、あまりにも人が多すぎたため辺りを見渡すが、薄鈍色の髪をした女性はやはり見つからない。

途方に暮れていると、何やら聞き覚えのある声が耳に届いた。

「おーい、ベルく〜ん！」

「あれ？神様？どうしてここに？」

何やら布に包まれた箱を背負った神様がいた。ここで会えるとは思わなかったのだから思わず驚いてしまった。

「何でって、君とデートしに来たに決まっているじゃないか！さあ、ベル君！僕とデートしようー！」

「待ってください神様！僕ちよつと人を探してるんですけど……」

「そんなのデートしながら探せばいいじゃないか」

「そうですか……?」

僕の腕を取り、引っ張りながら屋台を見て回ったり、クレープを食べたりじやが丸君を食べたりしながらシルさんを探すも、やはりシルさんは見つからない。

諦めかけたその時、何やら回りが騒がしくなっている。

「モンスターが逃げたぞー!」「何で!?『ガネーシャ・ファミリア』が嚴重に保管しているんじゃないの!?!」「そんなの俺が知るか!とりあえず逃げるんだよ!」

「神様!『ガネーシャ・ファミリア』から調教用のモンスターが逃げ出したみたいです!僕たちも——」

「ねえベル君……その逃げ出したモンスターって、もしかしてこれのことかい?」

神様が指さした方を見ると、腕に鎖を巻いたシルバーバックがこちらを見下していた。そして拳を握り腕を引いたかと思うと、僕たちを狙ってその引いた拳を伸ばしてきた。

「神様!」

僕は神様と一緒に横に大きく飛んで躲す。シルバーバックが殴ったところには大きなクレーターが出来上がっていた。

神様の手を引っ張りながら、シルバーバックから逃げる。しかし、シルバーバックは

他の一般客を見向きもせず僕たちを執拗に追いかけてくる。

「ベル君！そつちはダメだ！」

「え？……あ」

僕たちが逃げて来たのはダイダロス通り。とても複雑に入り組んでいる為、何もしらずに入ったら出てこれないようなところだ。

シルバーバックはお構いなしに僕たちを追いかけてくる。ここまでかと思い、神様をメイン通りに続く道の扉に入れて扉を閉める。

「ベル君!?駄目だ！君も一緒に逃げるんだ！」

「神様、僕を拾ってくれてありがとうございます……どこのファミリアにも門前払いされて絶望していた僕を、あなただけは拾ってくれた。とても感謝しています」

「駄目だベル君！ここを開けるんだ！」

「僕があいつを食い止めます。その間に神様は逃げて下さい」

神様は泣きながらその場を走り去る。僕はナイフを抜いてシルバーバックと対峙する。

シルバーバックは拳を振るうが上体を逸らしそれを躲す。伸びきった腕をナイフで切るが浅い。

そんな攻撃は効かないとばかりに、シルバーバックは連続で拳を振るってくる。転が

りながらも何とか躲すが、腕を振るった際の鎖に当たってしまい吹き飛ばされる。

急いで立ち上がりシルバーバックの身体めがけてナイフを振るが、シルバーバックの身体に阻まれナイフは粉々に砕け散ってしまう。

攻撃手段が無いベルはその場から走る。メイン通りにいかないように狭い路地裏を通る。シルバーバックの敏捷では今の僕には追いつけないが、引き離せもしない。

苦し紛れにはなつてくる拳と鎖を何とか躲していくが目の前に急に段差が現れ転んでしまった。しかしシルバーバックもその段差ですっ転び呻いている。

前に進むにもシルバーバックの巨体がその道を阻んでいるため来た道に戻ろうとするが、シルバーバックが振るった鎖が鞭のようになり、僕を吹き飛ばす。

「がはっ！」

壁に叩きつけられ肺の空気をすべて吐き出してしまふ。

（神様は、うまく逃げ切っただろうか……アイクさんならここでもまだ諦めないんだらうけど、今の僕ではあいつに太刀打ちできない……）

シルバーバックは10層付近に出現するモンスターだ。今の僕のステータスでは太刀打ちできない。

「ベル君！」

幻聴だろうか、神様の声が聞こえた気がした。声のした方に目を見やると息の切らし

た神様が背負っていた箱を大事そうに持っていた。

「神様！」

シルバーバックは神様の方へ拳を振るおうとした。しかし落ちていた石をシルバーバックの目をめがけて投擲する。偶然当たったそれはそいつをひるませるのに十分なダメージを与える。

神様の手を引きその場から走り物陰に隠れる。

「神様！どうして逃げなかつたんですか!？」

「君を助けに来たからに決まっていますだろう！」

そう言つて箱の中身を僕に差し出してくる。中には黒いナイフが入っていた。

「神様、これは……?？」

「僕がヘファイストスに三日間土下座して、ようやく作ってもらつた君専用の武器さ！」

君が強くなればなるほど、そのナイフは強くなる。君専用の、君だけの武器さ」

「神様……」

「それを使つて、君があいつを倒すんだ。ここで、君のステータスを更新する」

「そんな！僕ではあいつなんかは……」

「君は勇者を目指しているんだらう?どこの勇者だか知らないけど、君が目指している勇者はあんな雑魚も倒せないほどの雑魚勇者なのかい?」

「いいえ！僕が憧れている彼は、もっと強いです！」

「だろ？そんな君が憧れている勇者に近づくためには、君があいつを倒すんだ。すぐに強くなれなんて僕は言わない。少しづつでも強くなればそれでいいんだから。その為の踏み台に、あいつにはなつて貰おうじゃないか！」

奇しくもそれは、アイクさんが言っていた言葉に少し似ている。受け取ったナイフを鞘からだし、胸に当てて誓う。

「神様、僕があいつを倒します。その為の力を僕に下さい！」

「うん！」

服を脱ぎ、その場でうつ伏せになる。神様は指先に針を刺し、僕の背中にそれを塗る。

「ステータス更新完了！行つておいで、ベル君！」

「はい！」

僕は物陰から勇んで飛び出す。もう恐怖心は無い。神様から貰った力と、アイクさんの言葉。これがあれば、あいつなんかには負けるわけがない！

シルバークラックは僕に気付いたのか、先ほどと同じように拳を振るってくる。先ほどと違いステータスを更新した僕はそれを余裕を持って躲す。そして先ほどと同じように腕を黒いナイフで切り裂く。先ほどとは違い、腕に一本の切れ込みが入り血が噴き出す。

「グオオオオー！」

痛みに悲鳴を上げ左腕で殴りかかってくる。その左腕にナイフを刺し、動きを止める。そのままナイフを引き抜き、胸にある魔石を狙ってナイフを突き刺す。

「はああああー！」

声を荒げながら深く深くナイフを突き刺す。シルバーバックの魔石が破壊されシルバー

「神様！やりました！」

僕は今日、冒険をした！

閑話〜ワユ編〜①

〜ワユside〜

大將が『正の女神』アスタルテを倒してから暫くが立ち、大將は一人旅に出た。

あたしも強い人を求めて各地を転々としている。そして疲れたらグレイル傭兵団の砦で羽休めをし、また各地を転々としていく。

確かに行く先々で強い人たちと手合わせをして、その瞬間は満たされるのだが終わってから悶々としてしまう。これじゃない感がどうしても出てしまう。

やっぱり一番は大將だ。しかしその大將は旅に出てからというもの、グレイル傭兵団の砦には一度も帰ってこない。

今日も各地を転々としている日々。今日はベグニオン帝国、導きの塔があるテリウス大陸最大規模の帝国に立ち寄った。

ベグニオン帝国を当てもなく彷徨う。皇帝サナキ様がいる城の付近に來ると突然声をかけた。

「あら？ワユさんですか？お久しぶりですね」

「シングルーンさん、久しぶり！」

王室親衛隊隊長シグルーン。皇帝サナキ様のそばに控えている筈の彼女がどうしてこんな所にいるのだろうか？

「ワユさん、ちょうどよかった。今少しお時間よろしいでしょうか？」

「うん、大丈夫だけど。何かあったの？」

「ほんの数刻前から宝物庫に飾ってある『神剣エタルド』独りでに輝きだしまして……それだけならよかったです。がカタカタと揺れ始めたのです」

「え？それって心霊現象？」

「そして配下の話によると、揺れ出したのは本当に少し前。ワユさんがここに近づいてきた時なのです」

「ふーん」

「ワユさんは導きの塔の戦いで『神剣エタルド』をお使いになられてましたよね？何か心当たりはありませんか？」

導きの塔で大将は大将の因縁の相手、漆黒の騎士を一騎打ちで下した。その後漆黒の騎士のエタルドと大将のラグネルが共鳴し出したらしいのだ。そして大将はエタルドをあたしに渡した。

その場で満足にその剣を使えるのがあたしともう一人、デイン王国のエディという剣士だけだったのだが、エディはソーンバルケという剣士から借り受けたヴァーグ・カ

ティという剣を使っていたため、エタルドはあたしが使うことになった。

「うーん、エタルドを使ってたって言ってもほんの少しの間だし、あんまり心当たりはないかな？ごめんね、力になれそうにないや」

「それなら、少しエタルドを見ていただけませんか？サナキ様の許可は既に頂いているようなので」

シグルーンさんの配下の騎士がシグルーンさんにサナキ様の意向を伝えていた。

「分かった！じゃあお言葉に甘えさせて貰おうかな！」

「はい、ではご案内いたします。こちらです」

シグルーンさんの案内で宝物庫に向かう。宝物庫には見たことのないお宝、なんだろう。あんまりそういうのに興味ないから全部がガラクタに見えてしまう。

その中で一番目立つ場所に『神剣エタルド』は飾られていた。

エタルドを見た瞬間、ドクン！と鼓動を感じた。まるで運命の相手にあった女の子のように……こんなこと言ってるけど、全部ミストの入れ知恵だ。

エタルドは確かに輝いており、カタカタと揺れている。私が宝物庫に入った瞬間、より一層輝きは増し、エタルドそのものがショーケースを突き破りこつちに向かってくる。

反射的に手を差し出す。するとエタルドの柄は私の手にすっぽりと収まってしまった。

元あつた場所に戻そうとするが、エタルドを置いたところでまたこちらに飛んできてしまう。

そう言えば大将もラグネルが自分から離れてくれないって言つてたっけな……あれ？つまりこれつて、あたしが……？

「……ワユさん、申し訳ないのですが、今からサナキ様と謁見していただけますでしょうか？エタルドは持ったままで」

「え、う、うん」

皇帝の執務室に案内される。皇帝の部屋の前で「サナキ様、シグルーンです。御入りしてもよろしいでしょうか？」とシグルーンさんが聞くと中から「うむ、構わんぞ」とサナキ様の声がした。

「失礼します」

シグルーンさんが一礼し部屋の扉を開ける。あたしもそれに倣い一礼して部屋へと入る。大将はこういうお辞儀とか出来ないみたいだけど、あたしは最低限ならできる。「サナキ様、突然の来訪お許しく下さい。早急に対応しなければならぬ事態が発生しました」

「おお！ワユではないか！久しぶりじゃな」

「お久しぶりです、皇帝」

「うむ、してシグルーンよ。その早急に対応しなければならぬ事態というのは、先程のエタルドの件についてか？」

「はい。エタルドがワユ殿を主として選びました。ラグネルがアイク殿から離れないように、エタルドもまたワユ殿から離れなくなってしまうました」

「ふむ……」

「ゼルギウス将軍が無き今、このエタルドを使えるのはアイク殿とワユ殿の両名でございます」

「ならば話は早いじゃろう。もともと国宝として置かれ直したのは三年前のデインとの戦争が終わってからなのじゃ。その時でさえエタルドはそこになかったし、今更無くなった所でさして影響はあるまい。ご先祖様には申し訳ないがな」

それに、と続けるサナキ。

「それに剣のことは埒外じゃから分らんが、国宝として奉られているよりも、剣は剣として生きて行った方がそのエタルドも喜ぶのではなからうか？エタルドがワユから離れない時点で、どんなに建前を述べたところでどうしようもないのだがな」

「つまりエタルドをワユ殿にお渡しする、ということでしょうか？」

「それしかないじゃろう。してワユよ、受け取ってくれるな？」

「え、ええつとお……本当にいいんですか？」

「構わんよ。もとよりのただの置き物みたいなものじゃ。そのまま腐っていくよりも、そなたのような剣士が使ってくれる方がエタルドも喜ぶじやろう」

「は、はあ……分かりました。……返せませんよ?」

「良いと言っているじやろう。してシグルーンよ、話はそれで終わりか?」

「はい、突然の来訪失礼しました。ワユ殿を城の外まで送ってまいります」

「う、うむ……ワユよ、少しわしの話し相手になる気は——」

「ではサナキ様、お仕事頑張ってください」

「……」

がっくりと項垂れるサナキ様。机の上には大量の書類が乗っかっていた。恐らくあれをすべて処理してしまわなければならないのだろう。

本当、しが無い傭兵で良かったと思う瞬間だね。あんな大量の書類とにらめっこしなくちやいけないって考えただけで頭が痛くなってくる……

「ワユ様、態々ご足労頂きありがとうございます」

「う、うん。これ本当に貰っちゃっていいの?」

「サナキ様がよろしいと仰られていたではありませんか。それに先ほど試した通り、エタルドはワユ様から離れたくないようですしね」

「分かった。じゃあ遠慮なく貰っていくね!じゃあまたね——」

思いがけない宝物を手に入れてしまった。このままいろんな国に行ってもいいんだけど、折角だから傭兵団の皆にこのことを自慢しに行こう！

でも今日中に帰るのは無理そうだ。しかも中途半端に国から出っっちゃってしばらく歩いてきたから戻るに戻れそうな距離じゃないし……

仕方がないから今日は野宿だ。ミストがあんまり女の子がそういうことするものじゃないって言ってたけど、あたしはあんまり気にしたことが無い。

あたしを襲ってきた連中は返り討ちにすればいいだけだし、食料も何とかなるからね。

その辺で捕まえた野生の兎を潰してナイフを使って捌く。木を集めてきて火を起す。こういう時に魔法が使えれば便利だと思うのはあたしだけなのだろうか？

さらにとって来た枝をナイフを使って削り串を作る。その串にうさぎの肉を突き刺したき火の炎に当て焼いていく。

火が通ったところで少しのスパイスをかけてがぶりとかぶりつく。

全て平らげ、まだ寝るのには早いと思い、何をするでもなく夜空を見上げる。久しぶりに見た夜空はとても綺麗だと思った。

すると突然目の前が青く淡く光り始める。その光はだんだんと輝きを増し、やがてあ

たしを包み込む。

思わず目を腕で庇う。光が収まったかと思うと、あたしは見たこともない場所に転移させられていた。

「あれ……う……は、ど……？」

閑話〜ワユ編〜②

気が付いたら知らない場所にいた。辺りを見回すと薄暗い屋内、何やら石みたいなのが大量に転がっており、その傍には白髪の少年も転がっていた。

「ねえ君、大丈夫？」

少年の傍らにより、肩を揺すりながら問いかけてみる。少年の方は何も反応をせず倒れたままだ。

ざっと少年を見て外傷がないことを確認した後顔に手を持って行き呼吸の有無を確認する。呼吸は正常に行われているところから、ただ眠っているだけなのだろう。

そのまま少年を置いて少し歩き回ってみようと思った矢先、壁にひびが入り何やら手足のようなものが生えてくる。

珍しい光景にまじまじと見つめていると壁から何やら異形の化物が出て来た。

すると突然、異形の化物はワユに向けて拳を振り下ろしてきた。腰に差したエタルドを抜き化物をすれ違いざまに切る。

化物は姿を灰に変え何やら石のようなものを落とす。その後も壁からはピキピキと音が鳴り、次々と怪物は生み出される。

傍で倒れている少年を見殺しにするのは寝覚めが悪すぎる。どうやら倒せば姿を灰に帰ると分かった。

エタルドを抜いて向かってくる怪物を次々と切り伏せていく。

「あーもう！後で絶対報酬貰うからね！」

* * * * *

生み出された化物をすべて倒し終える。少年のそばに座り、少年が目覚めるのを待つ。そう時間がかからないうちに少年は眼を覚ました。

「う……ん……あれ？ここは……僕生きてる？」

「あつ！起きた！」

「え!?えつと……あなたは？」

「あたしはワユ。ねえ、どうしてこんなところで倒れてたの？」

「えつと……魔法を新しく覚えられたので試し打ちをしていたら急に意識が遠のいて

……あれ？さつきよりも魔石が多い？もしかしてあなたが？」

「うん、眠りこけてる君を守りながら戦ったけど……そうだ！」

手をポンと叩き名案が思いついたと言わんばかりだ。

「ねえ、あたしは君を守ったよね？」

「え？あ、はい」

「ということとは君はあたしに然るべき対価を払う必要があると思わない？あたし傭兵だし、依頼は無かったけど……」

最後の一言を少年に聞こえないようにボソツと呟く。

「そ、そうですね……僕はあなたに何をすれば——」

「というわけだから、君にはあたしの質問に全て答えてもらう！それが今回の君があたしに払う報酬だ！」

* * * * *

↳ワユside↳

少年の名前はベル・クラネル。ここは迷宮都市オラリオ？っていうところらしく、そのダンジョン？っていうのに潜っていたようだ。

今あたしはベルと地上に向かってる。

「ねえベル、テリウス大陸ってどこにあるか分かる？できれば明日までに帰りたいんだけど？」

「テリウス大陸？何言ってるんですかワユさん、テリウス大陸はお伽噺の話じゃないですか？」

「へ？お伽噺？テリウスが？」

「ワユさん、『ファイアーエムブレム・暁の女神』っていうお伽噺知らないんですか？蒼

炎の勇者アイクが女神アスタルテを倒して世界を救うお話なんですけど」
「ぶふっ！けほっ、けほっ！」

え!?!お伽噺!?!大将がアスタルテを滅ぼしたのってお伽噺だったの!?!そんなはずないじゃん!アスタルテを滅ぼしたのはついこの間だよ!?

というか大将、なんでそんなお伽噺の主人公なんかになってるの……

「だ、大丈夫ですか、ワユさん？」

「う、うん……大丈夫、大丈夫……」

な訳がない！頭が追いつかない！え？つまりここってテリウスどころか、あたしがいた世界じゃないの？

そう言えばオラリオなんて聞いたことないな。

「あ、ワユさんってどこのファミリアなんですか？」

「ファミリア？」

「あ、ファミリアっていうのはですね、地上に降りてきた神様たちが『神の恩恵』っていうのを下界の人に刻んで、その恩恵を刻んでくれた神様を主神、神様と冒険者の集まりをファミリアっていうんですけど」

「いや、気が付いたらここに居たんだよね。だからそのファミリア？っていうのにも、『神の恩恵』？ってやつも知らないんだ」

「え!?じゃあ身寄りがないんですか?」

「そうなるね」

「じゃあ僕のホームに来ませんか?今日助けてくれたお礼ってことで」

「確かに……他に行く当てもないし、そうさせてもらおうかな」

* * * * *

ベルに案内されたホームと呼ばれた場所は廃教会だった。

この廃れ具合が傭兵団の砦を彷彿とさせるなあ。その廃教会の前に誰かが立っている。

「ベル君!どうしてこんな時間にダンジョンに潜ったんだい!?それに後ろにいるのは女じゃないか!」

「ごめんなさい、神様……どうしても発現した魔法が気になってしまって……あ、神様。

この人が倒れていた僕を助けてくれたんですよ。ワユさんっていうんです」

「ふーん……」

え?これが神様?あたしが知ってる神様はユンヌとアスタルテだけだけど、少なくともアスタルテの方は神々しかったけど……ユンヌの方は子供っぽかったから神様と言っても色々あるんだろうね。

「まあお礼を言っておくよ。『僕の』ベル君を助けてくれてありがとう」

「神様、ワクさん気が付いたらこの世界にいたらしくつて、身寄りも恩恵もないらしいんです」

「ん？それはどういうことだい？」

「なんか青い光に包まれたと思ったらダンジョンにいたんだ」

「つまり君はまだファミリアに入っていないと……？」

「あれ？気が付いたらいたことに關しては無視なの？」

「そう言う難しいことはあんまり考えても仕方がないじゃないか！それよりも、君はどここのファミリアに所属していないんだね？」

「うん」

『僕の』ベル君に色目を使わないなら！僕のファミリアに入らないかい？まだ眷属は一人しかいない零細ファミリアだけど……」

「え、いいの？」

「そつちが良ければ」

「ありがとう！えつと……」

「僕はヘスティア！気軽にヘスティア様とでも呼んでくれ」

「うん。よろしく。ヘスティア、ベル」

* * * * *

「廃教会の隠し扉を通ると地下室のようなものが広がっていた。そこには最低限生活できるものが揃っていた。」

「なんかこの狭さとかやつぱり砦を彷彿とさせる。こういうところの方が落ち着くな。」

「じゃあワユ君、早速恩恵を刻もうと思うんだけど、良いかい?」

「どうすればいいの?」

「とりあえず上を脱いでそのベッドにうつ伏せになつてくれ」

「分かった」

早速上に脱いでいる鎧を外し、ロープを脱ぎ上半身を露わにする。

「う、うわわわわ!?!」

「べ、ベル君!?!君は外に出ててくれ!ワユ君、なんでベル君の前で急に脱ぎ始めるのさ

!?!」

「え?ヘスティアが脱げって言ったからだけ?」

「君には恥じらいっていうものが無いのかい!?!」

「別にいいんじゃない?減るもんじゃないし。まあボーレとかガトリが覗いて来たらしばき倒してるんだらうけど。」

「はあ、じゃあ刻むよ」

針を指先に刺し、背中を軽くなでる。何か変な感覚が身体を駆け巡った。

「はあああああー!? 君一体何者なのさ!」

「うん? どうかしたの?」

「何で恩恵刻んだばかりでレベル7なのさ! レベル7ってフレイヤの所の『猛者』と並んで世界最強じゃないか!」

* * * * *

ワユ

L v. 7

力 : F 3 1 7 +

耐久 : G 2 5 6 +

器用 : E 4 0 5 +

敏捷 : E 4 0 9 +

負の女神の加護 E 剣士 SS

《スキル》

【待ち伏せ】

・ 後の先を取りやすくなる

【流星】

・ 高速の五連撃を放つ

【神剣に選ばれしもの】

・神剣エタルドを装備可能

・装備時耐久のステータスに+補正

* * * * *

「神剣エタルド……？どこかで聞いたことがあるような……まあよくはないけどいいや。ワユ君、明日ギルドに行つて冒険者登録をしてきてくれ。このステータスの写しも一緒に出してね。スキルの欄とか詳しく聞かれても答えなくてもいいから」

「はい」

「ベル君も、彼女にスキルやレベルに関しては無言で黙ってほしい。君は根が素直過ぎるから嘘を付くのが苦手かもしれないけど、こればかりは隠し通してほしい。彼女が他の神々に目を付けられないようにしてほしい」

「は、はい。分かりました」

次の日、ワユとベルとともにギルドに行きベルの担当冒険者のエイナ・チュールにお願いし冒険者登録をした。

その際多少眉を動かしたものの、そこまで表情の変化が無かったのは、アイクという前例があったからに他ならない。

閑話くワユ編く③

冒険者登録をしてから数日、あたしはまだあれからダンジョンに潜っていない。というのでもダンジョンについての知識をある程度覚えさせてからじゃないとダンジョンに潜らせては貰えないらしい。

ギルドの講義室っていうところであたしはエイナさんから講義を受けさせられていた。

「……じゃあワユさん、ゴ布林と戦うときの注意点は？」

「敵に攻撃をさせないようにズバツと切り捨てる、先手を取られたら躲してズバツと切り捨てる！」

「違います！何度言ったらその脳筋思考を直してくれるんですか!？」

「そうはいつでも大将と戦ってた時とか向こうで戦ってた時なんかはそんな感じだったし」

「そんな戦い方を覚えさせた大将っていう人に説教しないとイケませんね」

「ねー、エイナ、もういいじゃん！あたし誰にも負けないし。今なら大将にだって勝てる気がする！」

「だからその大将って誰なんですか!?!それに、そう言っただけで油断して帰ってこなかった冒険者は大勢いるんです。私達はそう言った人たちを少しでも減らさなくては行けませんから」

ダンジョンで戦ったモンスターよりも導きの塔で戦った竜鱗族の方が間違いないけど……あの禿げ黒竜王なんかはダンジョン吹き飛ばせるんじゃないかな？

「ではもう一度、コボルトと戦うときの注意点は？」

「敵に反撃する隙を与えずに切り捨てる」

「も……ちっがう……!」

* * * * *

「ただいま……」

ヘスティア・ファミリアのホームに帰るころにはすでに日が暮れていた。あの後何とかダンジョンに潜る許可は貰えた、その時のことは思い出したくない……もう一生勉強しなくてもいいんじゃないかっていうくらい頭使ったなあ……

ホームに着くと誰もいなかった。ヘスティアは恐らくバイト。神様がバイトしている世界って何なんだろう……

ベルはダンジョンに潜ってるんだろう。最近手合わせどころか誰とも戦ってないから、そろそろ欲求不満になって来た。

「ただいま帰りました」

「ベル、お帰り」

「ただいま帰りました、ワユさん。神様はまだ帰ってないんですか？」

「まだバイトだつて。もうベルでもいいかな……ねえベル、今暇？」

「え？まあこの後は特に予定はありませんけど」

「じゃあさ、あたしと戦ってみない？鍛えてあげよつか？明日からあたしもダンジョンに潜れるんだけど、最近戦ってないから身体が訛っちゃっててさ」

「え？今からですか？」

「そ、今から！」

「はあ……確かにレベル7の人に鍛えてもらえるなら願ったり叶ったりですから。よろしくお願いします！」

「じゃあ暴れても問題なさそうなどころに行こうか……案内よろしく！」

* * * * *

ホームから少し歩いてオラリオを一望できる時計塔の広場に到着した。ここならある程度暴れても問題なさそうだし、それなりのスペースがあつてちょうどいい。

「じゃあ始めよつか。言っておくけど、手加減は無しだからね！手合わせでも手加減なんかしてたら強くなれないって言うのが、あたしと大将の自論だから」

「はい、よろしくお願いしますー！」

腰にさしている剣、『倭刀』を抜いて峰をベルに向ける。手加減しないと云ってもキルロイさんがいないんじや万が一ということもあり得る。この世界って回復の杖とかないのかな？

ベルは黒いナイフと普通の鉄のナイフを抜いて構える。

「どこからでもおいでー！」

黒いナイフで切り付けてくる。それを難なく回避し、がら空きの懐に刀を打ち据える。

「うわっー！」

恐らく我流なのだろう。それに短剣はその名の通りリーチが短い。

自らの速さを以って敵に多くの攻撃を叩きこまなくてはならず、隙を上手く突かないと一方的にあしらわれてしまう。

ベルは今の一撃をもろに受けあまりの攻撃力に一撃で気を失ってしてしまう。

「……あれ？おーい、ベルー？」

ワユは気を失ったベルの頬を何度か叩くが全く反応が無い。

ベルが気を失っていることを確かめながらワユは今までの講習でエイナに言われたことを思い出していた。

ワユはレベル7。オラリオのみならず世界最高峰のレベル7だ。レベルは一つ違うだけでも明確な実力差が生まれてしまう。

レベル7のワユがレベル1のベルに峰打ちとはいえ全力で攻撃したらどうなるか。下手したら死んでいてもおかしくはないのだ。

暫くして、ベルは目を覚ました。

「痛たたた……すいません、早々に気を失ってしまったみたいで」

「ううん、手加減しないで攻撃しちゃったあたしも悪いよ。そう言えば講習で言ってたな。レベルは一つ違うだけでも全然実力差が有るんだったね」

そしてワユはベルが気絶している間に考えていたことをベルに伝える。

「ねえベル、短剣だけじゃなくて普通の剣も使ってみない？」

「へ？普通の剣、ですか？」

「そう、短剣だけだとしても火力が足りなくなっちゃうし、相当自分が早くないと十全に扱えないんだ。それにベルは体が小さいでしょ？」

「うぐー！」

気にしていることをズバリと言われて返答に詰まる。それに構わずにワユは続ける。

「メインの武器は短剣でも大丈夫。ただ普通の剣だつて便利だよ？自分の速さを生かして戦うところは短剣とそう大差はないし、短剣よりも相手から距離を取って戦えるから

攻撃を外した際のカウンターのリスクも減る。それに……」

「それに……? なんですか」

「あたしの剣術、あたしの奥義、それを普通の剣なら全部教えてあげられる」

「奥義……ですか?」

「うん、ちよつと見ててね」

腰からエタルドを抜き剣を構える。

右袈裟切り、そのまま切り上げ、切り上げた勢いを使って半回転しながら薙ぎ払い、バク中をしながらの切り上げ、着地した勢いを殺さずに突き、これを目にも止まらぬ速さで繰り出す。

「うわあ……! ……すごい! ……すごいですね!」

「奥義『流星』。高速で敵に五連撃をぶつけるっていう単純な技だけど、この速さなら敵に防御も反撃の隙も与えずに、一方的に攻撃を浴びせることができる。短剣でもできるかもしれないけど、敵との距離感を考えると普通の剣の方がベストだね」

「ワユさん……僕にもその奥義、使えるようになりますかね……?」

「あたしが全部教える。強くなりたいんでしょ? 憧れの勇者様に近づきたいんでしょ?」

あたしはヘスティアからベルのスキルについて聞いていた。早熟することよりも憧

れが続く限りということに注目している。

そしてベルの話を聞く限り、その憧れの相手は間違いなく大将だ。

「はい！僕はアイクさんみたいになりたいです！誰にも負けない、仲間を守るために戦うあの勇者に！」

「決まりだね。じゃあ武器は暫くこれを使ってよ。じゃあ明日から特訓開始だよ！」

閑話～戦争遊戯編 i f～

戦争遊戯の始まりの合図が鳴り響いて早々、ワユがエタルドを地に刺し障壁を出現させた。この障壁を壊すことができないのは、ワユ自身がこの障壁をエタルドで思い切り殴りつけ破壊できないことで確認済みだ。

そして最初の待機場所でブルーシートを敷き、おもむろにヴェルフが懐から不思議な道具を取り出した。

「ヴェルフ、それ何？」

「これは『他の世界線の自分が見れる』っていう魔道具だ。使える人は限られてるらしいが、なんだか面白そうだから買ってみた。幸い値段も安かったしな。どうだ、どうせあいつらが諦めるまで暇なんだ。ここに居る奴らで、少し試してみないか？」

「どれ、私も混ぜたっていいだろうか？」

「タケミカツチ様!?! どうしてここにいらつしやるのですか!?!」

「細かいことは良いだろ、命。お前たちの作戦を聞いた時から『鏡』で見ている暇になることは目に見えている。ならば、ここで談笑するのも悪くはないだろう」

「私も混ぜたってよいだろうか？」

「ウラノス!? あんたは祈祷しているよ! ダンジョン大丈夫なんだろうな!」

「少しくらいいいだろう。どうせ数日サボったくらいじゃ何も起こらんじやろ?」

「手前も参加するぞ、何やら面白そうなことをしているではないか」

「ゲツ! 椿!」

「そう嫌そうな顔をするではない、お前たちの勝ちは確定しているだろう」

「私も参加しよう」「あたしも混ぜて!」

「リヴェリアさん!? ティオナさんまで!? 一体これはどういう事なんですか?」

「なんか来ないといけない気がしてな」「右に同じ!」

すでに収集が付けれられなくなってきた。オラリオにいる神たちはこの状況に全力で突っ込んでいることだろう。

「私たちも参加してよいだろうか?」

「レヴィス!? お前はダンジョンに籠っているよ! と言うかお前ストーリー上の敵じゃねえか!」

これはどう收拾付けるのだろうか……

* * * * *

「じゃあ誰からやるか……ベル、お前から使ってみろ?」

「ええ!? 僕ですか……?」

「おお、物は試しだ、やってみろ」

魔道具に手を翳すベル。しかし魔道具には何も変化は無く、ベル自身に何かが起こったわけでもない。

「あれ……？失敗？」

「まあ使える人は限られてるっていうしな、次命、やってみるか」

「はあ……分かりました」

魔道具に手を翳す命、しかし反応はベルと同じく何も起こらない。

「これ本当に故障してないだろうな、ヴェル吉？」

「大丈夫だって、多分……じゃあ次は俺だ！」

* * * * *

くヴェルフver.く

魔道具に手を翳すと、ほのかに魔道具が光り始めた。

「これは、頭に何か流れ込んできやがる……これが違う世界線の俺……？」

「それで、何が見えたんだ？」

「いくつかあってだな……とある世界の俺は記憶喪失で倒れているところに王子に拾われて、そのまま自警団に入れられた」

「……は？」

「そのあと何やかんやあつて俺は世界を滅ぼした邪神になった……!? はあ! なんじやこりゃ!」

「世界を滅ぼした邪神? ヴェル吉がか? あつはつはつは! 有り得ん有り得ん」

「しかも何か色んな姿形してやがるし、なんか女版の俺の息子としても出てきやがった……」

「女版のヴェルフってなんだよ!」

「知るか! 俺が聞きたいわ! ……さて、まだ何か……翼が生えた天馬に乗って優雅に歌ってるな……それとこれは……絵画? つておい! 何で水着とかバスタオル渡されて喜んでその絵を書いてるんだよ!」

集まっていた面々がその発言に大笑いする。

「おい変態!」「水着フェチ!」「バスタオルフェチ!」

「うるせえ!!!」

ハーハーと肩で息をするヴェルフ。ベルと命は憐みの視線を送っている。

「クツツ! なんなんだこの魔道具! 碌なもんじゃねえな! 次は誰が行くんのだ?」

「では私が、火傷は早いほうがいいでしょうから」

* * * * *

リリiever.

「これが違う世界の私……ですか……どうやら私はとある島国の王女のようなですね」
 「な！羨ましい！」

するとみると顔を赤くして行き、俯いてしまった。

「お、なんか面白そうなことでも起こったか？」

「見えたものは細かく言えよ、そして火傷しろよ」

「……髪が長い剣士に『その剣であたしを好きなようにして！』と言ったり、ピンクの髪をした鎧を着こんだ騎士に『貴女は愛を信じますか？』と言ったりしてますね……」

「「可愛い！」」

「まだ違う世界が見えますね……これは、セーラー服？というものでしょうか？その服を着た少女の使い魔になってますね……って！」

「またもや顔を真っ赤に染め上げてしまう。周りは何も言わずにリユーの方を見つめている。」

「……花嫁衣装を着てます……ウエディングドレスを着ながら戦ってます……翼の生えた馬に乗りながらだったり、本を持って魔法を使いながら……」

「「「可愛いな！」」」

「次です！次の方どうぞ!!」

* * * * *

くウラノス ver. く

「先程はああ言ったが、流石に早めに帰ったほうがいいだろう」

そう言いながら魔道具に手を翳す。

「おお、神でもこの魔道具は使えたか……儂も記憶喪失になって王子に拾われて世界を滅ぼす邪神になっておる」

「……またかよ!!」

「それと……城に一人取り残されて、その城を一人淡々と守らされておるな……周りが結婚していく中、いつも儂だけが取り残されて行っておる」

「[[[[[……]]]]」

「固い、強い、おそい……大きなお世話じゃ!」

* * * * *

くリヴェリア・椿・ティオナ ver. く

「次は私が行ってもいいだろうか?」

「リヴェリア様来たー!」 「リユーみたいなギャップ萌え期待!!」

リヴェリアが魔道具に手を翳す、しかし他の人に比べて光が淡い。

「む?これは……」

「なんか、光の規模小さいですね……」

「あはははは！どうした『九魔姫』よ、そなたほどの魔法使いが魔道具を使いこなせないとはなあ？」

「いや、少し淡いが光は纏っている。全く使えないというわけではないのだろう」
「ならば次は手前に試させる。意外といけるかもしれないぞ？」

リヴェリアに続き手を翳すが、リヴェリアと同じくらい淡い光しか生み出さない。

「む？手前も駄目だ、リヴェリアと同じような反応しかない」

「じゃあ次あたし！」

テイオナが手を翳すが、結果はあまり芳しくない。

「えー、この魔道具壊れてない？なんかリヴェリアと椿と同じくらいの光しか発さないんだけど」

「試しに三人でやってみるか？手前だけだったりリヴェリアだけだったりだと発動しなかったが、三人でやればうまく行くかも知れんぞ？」

「確かにな。光量も三つ足せば今までの一人分の光量になるだろうしな」

三人が一つの魔道具に向けて手を翳す。するとリヴェリアの推察通り、先ほどよりも強い光を纏いだした。

「三人分の私たち……いや」

「これは、手前たちが三姉妹ということか？」

「確かにみんな同じ翼が生えた馬に乗ってるし、顔立ちもなんとなく似てるしね」

「私が長女らしいな……ん？これは……」「あたし末っ子みたいだね……ん？これって……」

リヴェリアとティオナが顔を見合わせる。リヴェリアの方は若干顔が赤い。

「違う世界線の私たちは、姉妹で同じ人物を好きになってるな」

「あー、その人と結ばれてるの私だ！」

「男不倫か？」「浮気？」「最低だな男」

その場に集まってる者たちが勝手に推測したことを自分勝手に言い放っている。その男性の風評被害は大変酷いものになってしまっている。

「手前はそこの二人とは違うものに惹かれているな……ん？違う世界線の手前が惹かれているのは」

そう言ってる椿はリユーの方をじっと見つめ、他の人の視線も同時にリユーの方へと集中する。

「どうやらそのものと同じ人を好きになってしまっているな。しかしその妖精は王女、手前は一兵士、相手は世界を救った一国の王子。結ばれることは無く、自分の気持ちをただ胸に仕舞ってしまっているな」

椿が語った違う世界線の椿の失恋に、涙を流すものがいた。

「お姉さまよ、どうやら手前たち三人、特別なことができるそうだぞ？」

「へー、実践してみる？」

「しかし相手がいないだろう、それに私たちは馬に乗っていない」

「見よう見まねでいいだろう。ヴェル吉、ちよつとこつちに來い」

ヴェルフが疑心暗鬼になりながらも椿の方へと歩み寄っていく。

ヴェルフをリヴェリア、椿、ティオナの三人で囲み、それぞれがどこからともなく棒切れを取り出しヴェルフに向けて構え、

「「トライアングルアタック!!!」」

「ぐはっ!!!」

三人が同時にヴェルフに向けて棒切れを振り下ろす。レベル差十三人同時に殴られたヴェルフはその衝撃に耐え切れず気を失った。

* * * * *

くレヴィス ver. く

「本当に何で貴様はここにいるんだ……」

「あまり細かいことは気にするな。白髪が増えるぞ、妖精の王族」

「余計なお世話だ！」

レヴィスが魔道具に手を翳す。因みにヴェルフはいまだ意識を取り戻していない。

「私が国の女王か」

「ふっ、お前が女王とは。滑稽だな」

「私自身が女王ではない、違う世界線の私、だろ？これは……息子、娘？世界によつて変わるが敵国に捕らわれていた自分の子供を謎の敵の攻撃から庇つて一度死んだな」

ぐくつと息を呑む音が聞こえた。

「その後は……いろいろな世界が見えるな。子供の選択一つで物語が変わり過ぎじゃないか？しかも子供と戦うことになるのは、それにその世界の龍を我が子が倒せなければ孫たちと戦うことになる……複雑すぎて最早着いて行けん」

「……俺（私）達はお前の言っていることに着いて行けん……」

「命さん……今までの話に着いて行けてますか？」

「ベル殿……いいえ、皆様が何を仰っているか、自分には皆目検討もつきません……」

くタケミカツチver.く

「最後は俺か……では！」

タケミカツチが魔道具に手を翳す。

「別の世界線の俺……大陸一のスナイパー（笑）……ミ〇ヤが俺を守る……何なんだこれは、神を馬鹿にするのも大概にしろ！」

「馬鹿にされ過ぎワロタ」（笑）ってなんだよ（笑）って……！」

「ったく……ある時は帝国の將軍、主人公の宿敵……！なんか俺は色々忙しいな……」
「タケミカツチ酷使され過ぎじゃね？」「どんだけ別世界の自分要るんだよ……？」

タケミカツチの方をとんとんと叩くものがいた。タケミカツチはそちらを見向きもしないが、他のものはその者の正体を見てギョツと目を見開いた。

その者はタケミカツチの肩を叩き続ける。しつこいと思つたタケミカツチは怒りの形相を浮かべながら振り返つた。

「ええい、しつこいぞ！なんなんだ一体!？」

「やあ、(・ω・)」

「あ、違う世界線の俺じゃん」

「[[[[ギヤーーー!!]]]]」

漆黒の鎧を纏つた騎士、漆黒の騎士がいた。

閑話く戦争遊戯編く

「ちゅー訳で二週間後に『ヘステイア・ファミリア』と『アポロン・ファミリア』で戦争遊戯やーいやー、ドチビが負けると分かっている戦争遊戯ほど楽しみなものはあらへんな！」

ついこの間開かれた『アポロン・ファミリア』主催の神の宴。何を思ったのかアポロンは神の宴でヘステイアに戦争遊戯を吹っ掛けたのだ。

「なあ、戦争遊戯ってなんだ？」

「はあ……お前が冒険者登録した時に教えただろう。戦争遊戯はファミリア間の戦争だ。勝った方が負けした方になんでも一つ絶対命令権を得ることができる」

「せやーアポロンが勝ったらドチビの所のベル・クラネルが『アポロン・ファミリア』に改宗、ドチビが勝ったら『アポロン・ファミリア』の全財産、及びホームの没収、アポロンのオラリオ永久追放や。ドチビン所の眷属は眷属が二人、アポロンの所はその何倍もおる。やる前から結果なんて分かりきってるわ」

これでドチビの吠え面拝めるで！なんて騒いでいるが、実際の所はどうなのだろう？

「リヴェリア、戦争遊戯っていうのは実際の戦争と同じか？」

「いや、戦争遊戯によってルールが違う。ファミリア間の全面戦争になることもあれば、人数或いは戦力差に圧倒的な偏りがある時は出来るだけ対等にルールが設定されるが……」

グラスに注がれた水を一口口に含み、一呼吸おいて続ける。

「今回の場合、どうあがいても戦力差が有り過ぎる。助っ人の制度を『ヘスティア・ファミリア』側に設けない限り、もはや戦争でも遊戯でもない、一方的な蹂躪になるだけだ」
「そう言えばドチビのこの眷属、今回の宴に連れてきてるやつがベル・クラネルやなかかったな……まあ大したことあらへんやろ。なんかベル・クラネルは酒場で『アポロン・ファミリア』と喧嘩したらしいしな。何でドチビんとこにあんな可愛い子がいるんかは分からんし不満やけど……一人で戦場なんて覆せへんからな」

どのようなルールになろうとも、『ヘスティア・ファミリア』には方に一つも勝ち目はない。

ロキが一人ではしやいではいたが、誰一人として意見が出ないところを見ると、思っていることは皆同じようだ。

* * * * *

そして戦争遊戯が始まる二週間の期間はあつという間に過ぎた。

此度の戦争遊戯のルールは『攻城戦』。『ヘステイア・ファミリア』が『アポロン・ファミリア』の大將が守護する城の玉座を奪い取るというのが、今回のルールだ。

細かいルールとして使う武器、魔法、スキルに制限はない、『ヘステイア・ファミリア』には一名の助っ人を認める、互いの眷属が戦闘で命を落としても文句を言わないこと。

最後の一つのルールはかなり批判の声が出たが、ルールを決めた主催者側はその意見を一蹴している。

つまり今回の戦争遊戯では死人が出てても全く不思議ではない、とても苛烈なものになると予想、いや、確信ができる。

「あー、あー！皆さんこんにちは。今回の戦争遊戯実況を務めさせていただきます『ガネーシャ・ファミリア』所属、喋る火炎魔法こと、イブリ・アチャーでございます。二つ名は「火炎爆炎火炎」です。では主神のガネーシャ様、一言お願いします！」

『俺がガネーシャだ！』

「ありがとうございます！」

なかなか起こらない戦争遊戯とあって今日はどこの酒場も商店も盛況だ。

ギルド前の特設スタジオでは『ガネーシャ・ファミリア』の眷属とその主神であるガネーシャが此度の戦争遊戯の実況をするらしい。

『ロキ・ファミリア』の面々は『黄昏の館』で全員で見ることになっている。これは主

神であるロキの命令だ。

ちなみにロキが座っている机の前には二つの容器が置かれており、今回の戦争遊戯でどちらが勝つかを賭けている。

戦争遊戯が始まる前まで自分の名前を書いた紙を入れればよいことになっているため、まだ全員分入っているわけではないが、殆どのメンバーが『アポロン・ファミリア』に入っていた。

負けたファミリアに入れたメンバーは後日の打ち上げで勝った方のファミリアに入れたメンバーに何か奢ることになっている。

アイクはまだ投票していないのだが、周りからはどちらに入れるか注目されているようだ。

「ねえアイク、まだ入れないの?」

「申し訳ないけど、この人数差じゃアルゴノウト君たちは勝てないって」

テイオナの言うアルゴノウト君はベル・クラネルのことだ。

「もう少し待て、せめて構成員が分らないと入れるに入れられん」

そう話しているとロキがおもむろに指を鳴らす。空中には鏡が出現し、現在の戦争遊戯の現状が映し出されている。

これは下界で唯一許されている『神の力』の鏡だ。任意の場所の光景を一方的に見る

ことができるが、使えるときはギルドを運営しているウラノスが許可を出した場合のみだ。

ロキの鏡が城で待機している『アポロン・ファミリア』のメンバーを映し、次いで城から離れた場所に集まっている『ヘステイア・ファミリア』のメンバーを映し出す。

そのメンバーは『ベル・クラネル』、元『ソーマ・ファミリア』の『リリルカ・アーデ』、元『ヘファイストス・ファミリア』の『ヴェルフ・クロツゾ』、元『タケミカツチ・ファミリア』の『ヤマト・命』、謎の覆面冒険者、そしてもう一人のメンバーを見た瞬間、今までにないほどの驚愕を生み出し、次いで今までのことが全て腑に落ちたというような表情をする。

ウダイオスをアイズが倒してその帰還中にラグネルが光り輝いたこと。あれはやはりエタルドが近くにあったということだ。

ベルがミノタウロス戦で見せた回避術、それは彼女が教えたものだ。

ベルがミノタウロス戦で見せた高速の五連撃、それは彼女の奥義『流星』だ。本物は遠く及ばないが、冒険者に刻まれた『神の恩恵』が限りなく本物に近づけていた。

今まで有り得ないという理由で切り捨てて来た考えが実は正しかった。

アイクが席を立ちあがりロキの前においてある器に、自分の名前が書かれた紙を入れる。それは大方の予想を裏切る『ヘステイア・ファミリア』の方へとだ。

「アイク、正気か？」

「ああ、何だったら、今『アポロン・ファミリア』に入っている紙をすべて『ヘステイア・ファミリア』に入れ替えないことを後悔するぞ」

それは予想などではなく確信だった。『ヘステイア・ファミリア』が負けることを全く疑っていない口ぶりだ。

ヘステイア・ファミリアの最後のメンバー、『グレイル傭兵団』の『ワユ』。腰に白銀の両手剣を携え、攻めるべき城を真つすぐに見据える。

(というかこれで負けたら、あいつはクビだな)

* * * * *

今回の戦争遊戯の結果を伝えよう。結果としては『ヘステイア・ファミリア』の勝利だった。

開始の合図が鳴ると同時、ワユと覆面の冒険者は二人で『アポロン・ファミリア』の待つ城へと乗り込んだ。

『アポロン・ファミリア』の大将以外の冒険者の実に三割が戦闘不能、もう残りの七割は死亡が確認された。

『アポロン・ファミリア』の大将であるヒュアキントス・クリオがいる玉座に辿りついた二人は何を思ったのか踵を返し、城を後にした。

見れるのは光景だけで声は聞き取れないが、その場を去る直前ワユはヒュアキントスに対して何かを言っていたようだ。

暫くが立ち、ヒュアキントスの前にはベルが単身現れ、レベル3のヒュアキントスとレベル2のベルとの激戦の末、見事ベルがヒュアキントスを下し此度の戦争遊戯の勝者は『ヘステイア・ファミア』となった。

アイク以外の全員が『アポロン・ファミア』に入れていたため、後日遠征の打ち上げでは全員の出費が決まった瞬間でもあった。

閑話①

オラリオ郊外、現在オラリオは隣国の『ラキア王国』という国からの攻撃を受けている。

ラキア王国は神アレスが納めている国で、国の軍人全員に『神の恩恵』が授けられている。しかしその眷属たちの殆どがレベル1かレベル2。いくら国全体でオラリオに攻めて来ようとも、オラリオにいる第一級冒険者たちには到底かなわない。

ラキア王国は過去六度もオラリオに侵攻してきている。その六度、全て撃退されているにも拘らず、神アレスは懲りることなく攻め続けてくる。

現在、侵攻の防衛に当たっているのは主なファミリアはオラリオの二大派閥の『ロキ・ファミリア』と『フレイヤ・ファミリア』だ。

そしてラキア王国の進軍を最前線で食い止めているのはアイクとガレスの二人だ。

「ぬうん！」

ガレスが掛け声とともに斧を振り回す。軍馬に乗ったラキア帝国の軍は上段のよう
に吹き飛ばされていく。

アイクの方は掛け声などは特に上げないが、来る敵を一人一人丁寧に撃退していた。元の世界の騎馬兵は一撃与えてその場から離脱という戦法を取り、その移動力を持ってこちらから迎撃することは少々困難だったため、必要以上に警戒しているのだ。

それともう一つ、まとめて吹き飛ばすと誤って敵兵の命を取ってしまう恐れがあるからだ。アイク自身納得はいいくないのだが今回の侵攻での怪我人を治療するのは、オラリオにとって収益がプラスになりギルド側からも主神からも、ファミリアの団長からも敵兵の命を取らないよう命令を受けている。

「……………」まで戦いづらい戦争は初めてだな」

「なんじゃ、随分と文句がありそうな言い種じゃな」

「文句と言うか……………まあ文句なのだろう。今までの戦争では向かってくる敵は撃退ではなく命を奪っていた。あまり褒められたことではないが、そっちの方が慣れている。このように手加減して戦うこと自体全く慣れていないからな」

「お主は手合わせなどでも容赦なく攻撃していたからのう」

ガレスはアイズやワユとアイクの手合わせ、もとい模擬戦（殺陣）を見ているためしみじみとした雰囲気ですう言い放つ。

二人とも戦場にいる空気ではない。次々と敗走していく敵兵を追いかけることもしない。

遠い本陣から銅鑼の音が戦場に鳴り響く。この銅鑼は最前線での戦いが終わりという合図でもあり、他の陣営に対するその場で待機という意味合いも込められている。

「とういか俺がこんなに最前線に出てきてよかったのか？『ロキ・ファミリア』は俺を秘匿したいんじゃないのか？」

「文句ならリヴェリアに言え。最も、この間の歓楽街の一件が尾を引いているうちは不可能じゃがのう」

アイクを最前線に送ったのはリヴェリアだ。歓楽街でアイクが春姫を助けた一件以降、リヴェリアとアイズの機嫌が少々悪いのだ。

「別に文句があるわけではない。ただ大丈夫なのかという確認だけだ」

アイク自身別に自分の存在がばれても少々面倒だと思っっている程度だ。何も理由も無く人や神を殺そうとする殺人鬼ではない。

ただお伽噺と言う伝承の所為で神のアイクに対する評価が少々辛辣になっているだけなのだ。

その時に他のファミリアが合同で侵攻を食い止めるこの作戦の、最前線と言う目立つ位置にアイクの存在を秘匿したい『ロキ・ファミリア』の面々が送り込むというのは違和感しかない。

そしてこれは完全にリヴェリアの八つ当たりである。リヴェリア自身ラキア王国の

侵攻でアイクがミスをするとは露ほどにも思っていないが、それでもこういった下らない奴辺りをしないと気が済まない程度には、機嫌が悪いのだった。

* * * * *

「大将ー！いるー？」

ここは『ロキ・ファミア』の本拠、『黄昏の館』。ラキア王国の侵攻はまだまだ続いているが、今は敵軍の殆どの兵が負傷したのか侵攻は止んでおり今まで防衛に参加していた面々も一旦自分のホームに帰って来ていた。

そしていつも通り、ワユがアイクを訪ねて『黄昏の館』を訪ねて来た。普通に門番に話を通せばいいだけなのだが、ワユは『黄昏の館』にいるであろうアイクをこのように呼び出している。

そして少し待っていると、ロキとアイクが一緒に出てくるのもいつも通りなのだ。

「ワユたん、今日も来たんやな。いつもいつも飽き、へんな……」

しかし今日はワユ一人ではなく、後ろにフリルが付いたエプロンドレス。俗にいうメイド服を着た狐人が顔を真っ赤にして少し俯き、大きなリュックサックを背負い立っていた。

「なんだ、春姫も今日は一緒なのか？」

「は、はい！アイク様、先日はありがとうございます！」

「ええ声で鳴くやんか、なあなあ、うちの子にならへん？」
「なりません！」

戯れている春姫とロキを放置し、アイクとワユは二人で話を進めている。

「それで、今日は何の用だ？」

「あたしがここに来たからには目的は一つだよ……って言いたいところだけど、今日はお金稼がない？あたし回復薬とか買ってたら金欠になっちゃって」

「そんなに大量に買ったのか？」

「ほら、いつもはあたしたちが自分で自分の分持つて行くからあまり多い数は持つて行けないけど、今日は春姫が荷物持ちしてくれるっていうから大量買いしちゃったんだよね」

「ちよつと、助けて下さいー！」

「ぐふふふ、久々に抵抗しないかわいい子に会ったわ。これは満足するまで——」

「ロキ、少しうるさいぞ」

「ぐふつー！」

館の前で騒いでいたため、中から出てきたリヴェリアがロキの頭を杖で殴った。本気ではないとはいえレベル6の冒険者の一撃にロキは頭を押さえてその場に蹲った。

「ううー……痛いやん、リヴェリア……」

「騒ぎ過ぎだ、中まで声が響いていたぞ」

「あ、リヴェリアじゃん。久しぶり」

「久しいな」

「そうだ、リヴェリアも一緒にダンジョン行かない？お金稼ぎに行こうよ」

「済まないが、今日は雑務が多くてな。また今度——」

「あたしと大将と春姫で——」

「まあ偶には気分転換も必要だろう。最近はラクシアからの侵攻ばかりで息が詰まる思いだったからな」

「え？今雑務がどうこう——」

「ラウルにでも押し付けなければいいだろう。どうせただ判子を押すだけの仕事だ」

「まあリヴェリアが良いならいいけど」

「ついでに他のメンバーも誘ってきてもいいか？皆も息抜きが必要だろう」

「そう言い残しリヴェリアは一旦『黄昏の館』に引っ込んでいった。ロキは頭を押さえながらよろよろと立ち上がり、春姫はロキを警戒しきった目をしながらアイクの後ろへと隠れた。」

「ワユ、潜ると言ってもどこまで潜るつもりなんだ？」

「うーん……60階層位？あたしと大将がいれば余裕だと思うんだよね」

ワユがその言葉を発した瞬間、ロキと春姫はピシリと固まった。そして二人を信じられないようなものを見る目で見える。

「確かに行けるかもしれないが、せめて50階層程度で止めておいてやれ。60まで行ったらうちの首脳陣が泣くぞ」

「なあワユたん、アイクの言う通り、行くとしてももうちよつと浅い階層で止めておかへん？今回は金稼ぎに行くだけやる？春姫さんのレベルがいくつか知らへんけどそこまですく潜る必要あらへんやろ？」

「ワユ様お願いです！潜るにしてももう少し浅い層でお願いします！そこまで深く潜ってしますと春姫は生きて帰ってこられません！」

「そういうわけだ、だからいくとしても59までだ。それより先は遠征で辿りつかないとお前が怒られるぞ」

「アイク様!?!」

「お待たせー」

リヴェリアに連れてこられたのは団長であるフィン、アイズ、ティオネ、ティオナ、レフィーヤだ。いつぞやの時も金稼ぎのためにダンジョンに潜った時と同じメンバーになつてしまった。

「雑務の方は良いのか？」

「目の前で凄い剣幕で迫ってくるリヴェリアと、ラウルに雑務を押し付けるの、どちらを選ぶかい？」

考えるまでも無く押し付ける方を選ぶ。そもそもアイクは雑務は嫌いだ。

「で、その狐人の子も着いてくるの？」

「は、はい……ワユ様に頼まれて、同行させていただくことになりました。サンジヨウノ・春姫と申します。どうかよろしくお願いいたします」

テイオネとテイオナとレフィーヤは気さくに声をかけているが、アイズは若干不機嫌になりながら春姫を見据えている。決して睨みつけているわけではないから春姫の方は気が付いていないが。

「で、ワユ。具体的に何階層まで行こうとか言う計画はあるのかい？」

「いいや全く。とりあえず大将からは59までは良いと言われているけど——」

「「「良い訳無いだろ!!!」」」

アイズとレフィーヤ以外の四人がそう叫び、結局春姫のレベルが1ということもあってこのメンバーで春姫を守りながら余裕を持って潜れる階層の30付近に潜ることになった。

閑話②

アイクたちは現在ダンジョンの17階層にいる。17階層にはゴライアスが約二週間周期で生まれ落ちるのだが、今回は運悪くゴライアスがまだどのパーティーにも倒されていなく、ゴライアスは健在だった。

いや、彼らからしたら幸運なのかもしれないが。

「ゴルウアアアアアアア——！」

ゴライアスがアイクたちの姿を見止めると、方向を上げる。最後衛にいた春姫はゴライアスの絶叫に竦み上がってしまったが、彼らは全員そんなものなどどこ吹く風という雰囲気だ。

アイクとワユがラグネルとエタルドを地面に叩きつけ剣戟を飛ばし、ゴライアスの腕をそれぞれ切断する。

すかさずアイズが風を纏い突貫し、ゴライアスの両足をそれぞれ切断しゴライアスは仰向けに倒れる。

「レフィーヤ、止め」

「は、はいー！」

彼らの戦闘を呆けていたレフィーヤはアイズの指示に応え、魔法の詠唱を始めた。

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり。狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢——アルクス・レイ！】」

レフィーヤが余裕を持って魔法を発動し、その魔法がゴライアスの襲い掛かる。四肢を欠損していたゴライアスにその魔法を防ぐ手立ては全くない。レフィーヤの魔法はゴライアスを撃破し、ドロップアイテムと巨大な魔石が転がっていた。

「むう……あたしも戦いたかったなあ……」

「そうね、流石にゴライアスもあんなにすぐ倒されるなんて思ってもみなかったでしょうね」

「おーい、春姫、大丈夫？」

「……は！す、すいません……あんな間近でゴライアスを見たのが初めてだったもので……」

「まあアイクやワユにこれから付き合っていこうと思っっているなら、あれくらいには慣れておいたほうがいいかもね？」

「ちよつとフィン、あたしを人外みたいに言うの辞めてよ。人外なのは大将だけだって」「ゴライアスの腕を一撃で落とせる時点でお前も人外だぞ、ワユ」

そもそもこの階層に来るまでの方法も一般の冒険者とは大きく異なる。

ワユを先頭に適当に歩き続け、縦穴があればどこに繋がっているかも、下の階層に敵がいるかどうかも確認せずに飛び込み、飛び込んだ先に敵がいれば即剣を抜き倒す。

ワユ以外のメンバーはその移動方法に呆れているが、一緒に潜っている以上ついて行かない訳にはいかなかったためともに飛び込まざるを得ない。

「とりあえずいったんこの魔石とドロップアイテムをリヴィラの町で換金して、それからもうちよつと深く——」

『ぎゃあああああ——!!』

18階層に続く階段から何人かの冒険者が17階層に走って来た。その中にはリヴィラの町で商いをしているものの姿まで確認できた。

「おい、何かあったのか?」

アイクは近くを通りかかった冒険者を一人捕まえて話を聞いた。彼らはアイクたちを見ると一瞬表情が明るくなるが、すぐにその表情は暗くなってしまう。

「あんたらも早く逃げろ!もうリヴィラの町はお終いだ!」

「詳しい話を聞かせろ。判断するのはそれからだ」

「リヴィラの町にいきなり全身鎧を着たやつが現れて、視界に入った奴を手当たり次第に攻撃し始めたんだ。俺たちも反撃したがあいつには一切の攻撃が効きやしねえ……魔法を使おうが、魔剣を使おうが、あの黒鎧にはかすり傷一つ与えられなかったんだよ

「！」

視線で続けるように促すアイク。身に纏っている雰囲気はモンスターと戦っている時の比にならないほど荒ぶっている。

「あいつが投げた槍が一人の冒険者を串刺しにしやがった……その隙に攻撃を仕掛けようとしたんだが、いつの間にかあいつの手元には槍が戻っていてそれで何人もやられた……もしかしてあんた、あいつに挑もうとしているのか？ 無茶だ！ お前たちの殆どが第一級冒険者だつてことは知っているが、あいつはそんな生半可なものじゃ——」

「情報提供感謝する。お前も早くダンジョンから逃げろ、引き留めて悪かったな」

アイクは冒険者の方から手を放し、その冒険者は上の階層へと向かっていく。この場に止まっているメンバーは皆一様にアイクの方を見ている。

「……ワユ、お前は俺に着いて来い。18階層に行くぞ」

「……了解」

「お前たちは全員ダンジョンから出る」

「アイク……私も——」

「お前が着いて来て、一体何になる？ あいつは一切の攻撃を受け付けない。それはもう説明したはずだ」

「……アイク様、ワユ様。18階層にいる黒鎧は一体何なんですか？」

「ほぼ間違いない、『漆黒の騎士』だ。御丁寧に、女神の加護を宿した鎧を着ている」

「だからここから先は、あたしと大将しか相手できない。いや、あたしでも長くは持たないかもしれない。攻撃は通じてても、漆黒の騎士は強敵、なんでしょ？」

「いいや、着いて行く。僕たちを連れて行くんだ。これは団長命令だ」

「断る、お前たちが無駄に命を散らす必要は無い。行くぞ、ワユ」

アイクはワユを引き連れ18階層に続く階段の方へと歩み出す。同時、残されたメンバーもアイクたちについて行こうとするが、アイクは剣を抜き振り向きざま剣を振るう。

先頭に立っていたフィンの足元に剣によって作られた一筋の線が刻まれる。もう少しでも足を前に出していたら、脚が切られていたかもしれない。

「アイク……!」

「言ったはずだ、お前たちが無駄に命を散らす必要は無い」

振り返り、地面にラグネルを突き立てる。アイクとワユをフィンたちと隔てるように障壁が生み出される。その障壁を残されたメンバーが叩き、アイクの方へと訴えかけてくる。

「待て、アイク、ワユ!この障壁を解くんだ!」

「アイク様、ワユ様!お願いします、この障壁を解いてください……!」

「必ずあいつを倒して帰ってくるから、待っててくれない、春姫？」

「……ワユ様……!!」

アイクは彼らを見向きもせず歩み出す。ワユはそのアイクについて行った。

「ねえ大将、あれでよかったの？」

「良かったも何もああするしか無いだろう。言っても聞かないというのは、同じファミリアに所属している俺が良く知っているつもりだ」

「……なんか三年前に状況が似てるね。あの時は大将が一人で漆黒の騎士と戦うって言っつきかなくて、大将が言った後本当はセネリオが結構駄々こねちゃってさ」

「そうなのか？」

「それでミストが大将について行っちゃって、ティアマトさんとかミストを止めようとしちゃたんだけど、ミストは聞かないで大将について行っちゃって。今回はミストじゃなくてあたしだけどね」

「戦力だけなら十分すぎる援軍だな」

「お？ 大将もあたしを認めてくれてるのかな？」

「お前のことは高く買っている。別に俺に勝つことにこだわる必要は無いだろう」
「いいや、あたしはいつか大将に勝つよ！ だってもう決めたから」

二人は話しながら18階層を歩き、リヴィラの町へと向かう。目撃情報があったり

ヴィラの町は、建物が瓦礫と化し、所々が赤黒く染まっており、激しい戦いがあつたことを物語っていた。

リヴィラの町のほぼ中心、そこには返り血を浴び、漆黒の鎧を赤く染めあげ槍を持ちこちらを待ち構えているかののように仁王立ちをしていた。

『……久シイナ、59階以来ダナ……』

「ほう、少しは反応するようになったのか」

『今ノ貴様デハ、我ヲ倒スコトハ叶ワナイ。今ノ我ハ、貴様ヨリモ強イ』

漆黒の騎士は槍を構え、突然こちらに突貫してきた。アイクとワユは咄嗟に反応し、地面を転がり漆黒の騎士の攻撃を躲す。

(以前より早い……！)

二人はラグネルとエタルドを抜き、漆黒の騎士を挟むように位置取る。

アイクはラグネルを地面に叩きつけ、斬撃を飛ばす。漆黒の騎士はその斬撃を槍で振り払い掻き消す。ワユはがら空きの背中に向けて上段から切り付ける。漆黒の騎士は首を180°回転させワユの方へと振り返りその攻撃を躲し、空いた左手でワユに向けて拳を放つ。

上段から剣を振り下ろしたワユはその攻撃を回避できない。咄嗟に自分から後ろに飛び衝撃を殺すが、拳をもろに喰らったワユは地面を転がる。致命傷にはなっておらず

すぐに立ち上がり剣を構える。
戦闘は始まったばかりだ。

本編

第一話

くアイク side く

女神アスタルテを倒し、石となったベオクとラグズは救われ戦争も終わった。

俺は戦争が終わってしばらくして旅に出た。ラグネルはベグニオン帝国に返却しようとしたが、なぜかラグネルの方が俺から離れてくれなかつたため、皇帝から俺へこの度の戦争の報酬として受け取った。

旅に出てしばらくが立つ。ホームシックというわけではないのだが、傭兵団の皆は元気でやっているだろうか？そんなことを思いながら歩き続ける。目的地は無い。ただ気が向くまま、いろいろな国を回ろうと思っている。

やがて夜の帳が降りたとき火を起こし食料である野生の動物の肉を焼きながら夜空を見上げる。戦争をしていた頃は、夜空をここまで綺麗だと思っただろうか？そもそも夜空を見上げるような習慣が無かつたわけだが。

肉が焼き上がりそれを頬張る。誰に取られるわけではないのだが好物だから仕方が

ない。食事を終えあとは寝るだけと思いマントに包まる。俺はマントがあればどこだつて寝られる。

しかしそこで異変が起こる。突然と目の前に青い光が出現したのだ。光はどんどんと膨らみそして俺を包み込む。突然の光に俺は思わず目を閉じてしまった。

やがて光が収まったかと思うと俺は先ほどの野営地ではなく、別の場所へと転移させられていた。

天井があるということは屋内ということなのだろうが、そこは屋外と言われても疑いが無いほどの植物が生い茂っており、遠くの方にはテントも立っている。

そして何やら騒がしい。ここがどこだか分からないため、あまり動き回るようなものではないということは分かっている。しかし困っている人が居たらどうにかせねばなるまい。

なるようになるかと思いうラグネルを背負つて声ができる方へと歩みを進めた。

暫く歩いていると先ほどのテントが立っているところの近くへとたどり着いた。ここでは巨大な芋虫みたいなモンスターか？それと多くのベオクが戦闘をしていた。芋虫型のモンスターに金髪の少女が風を纏つて切り込んでいく。緑髪の女性は何やら呟いており、そのものの足元にはなにやら魔法陣のようなものが展開されている。

その魔法を唱えている女性に芋虫型のモンスターが今にも襲い掛かろうとしている

が、他のベオクたちは他の芋虫型のモンスターと戦闘を行っており援護できそうにない。俺はあれを倒せばいいと思身を隠している場所から出てラグネルを植物型のモンスターの方へと向け、地面に叩きつける。ラグネルからは衝撃波が飛び緑髪の女性に襲い掛かろうとしていたモンスターは切断される。魔法が完成したようで大規模な炎が芋虫たちを一齐に焼き払う。あれは『レクスフレイム』なのか？

突然衝撃波でモンスターが切られたのだ。ベオクたちは何事かと思い一齐にこちらへ振り返る。俺は彼らに近づきながら。

「どうやら苦戦していたようだが、大丈夫か？」

* * * * *

くアイズ side く

私たちは先ほどの腐食液を出す芋虫型のモンスターと戦っている。数が多く負傷者も多数出ている。こいつらを切ったときに出る液体は物を溶かす腐食液で『不懐属性』の武器でないと太刀打ちできない。

魔法で一斉に倒すことのは合理的で、今は魔法を準備しているリヴェリアの方に気を引かせないようにしている。

ティオネが腐食液を無視して相手の身体に手を突っ込んで魔石を取っているように見えるが、気のせいだと思いたい。

『不懐属性』を持つているのはLv. 5以上の冒険者のみでこの数をとても捌ききれない。一匹がリヴェリアに襲い掛かろうとしていた。

「リヴェリア！」

思わず声を荒げてしまう。しかしどこからともなく飛んできた衝撃波で芋虫は切断され消滅する。その様子に私たちは呆然としてしまう。魔法を完成させたリヴェリアが魔法を発動しモンスターを一掃した。

私たちは先ほど衝撃波が飛んできた方を見る。すると青い髪で黄金の両手剣を持った青年がこちらに歩いてきた。

「どうやら苦戦していたようだが、大丈夫か？」

* * * * *
くアイク side く

「君は一体誰だ？ここは今『ロキ・ファミリア』の者しかないはずだが」

『ロキ・ファミリア』？聞いたことのない言葉だ。ロキとは誰だろうか？それにファミリアとは何だろうか？テリウス大陸ではファミリアなんて聞いたことは無い。

俺はラグネルを仕舞い、目の前に立つ金髪の少年に目を向ける。こいつはここにいる中でかなり強い部類に入るが、恐らくゼルギウス将軍の方が手強いだろうと思う。

「俺はアイクだ。こちらもいくつか聞いていいか？」

「……あ、ああ。構わないが」

受け答えに間があつたのは何故だ？それにこの場にいる全員が啞然としているのも気になるが……それは後回しだ。

「ここはどこだ？俺は気が付いたらここにいたんだが……テリウス大陸にこのような場所

は無いし、恐らくキルヴァスにもフェニキスの国にもこのような場所は無いはずだが」

「ここは迷宮都市オラリオにあるダンジョン、その五十階層だ。あなたが聞きたいことはまだあるのだろうか、その前にこちらからもいいだろうか？」

「構わん。俺に答えられることならな」

「あなたは『蒼炎の勇者』のアイクなのか？その青い髪、先ほど背負った黄金の両手剣、それは『神剣ラグネル』なのかい？」

「俺は確かにアイクだ。それは先ほど言っただろう。ただ『蒼炎の勇者』というのは知らん」

「……聞き方を変えよう。『女神アスタルテ』を倒して世界を救ったあのアイクなのか？」

「確かについこの間『女神アスタルテ』は倒したな。それがどうかしたのか？」

第二話

（三人称 side）

フアイアーエムブレム暁の女神。

これは迷宮都市オラリオに古くから伝わるお伽噺のようなものだ。『英雄物語』と並んでこの世界では絶大な人気を誇る物語。

暁の女神は全四部のストーリーで構成されている。

第一部はベグニオン帝国の支配からデイン王国を復興させる暁の巫女、ミカヤの物語。

第二部はクリミア王国王女、エリンシアの内乱を巡った物語。

第三部は三部の中でも前編と後編に別れると言ってもいいだろう。そしてここでアイクが登場する。

前編ではベグニオン帝国に送ったラグズ連合の使者を惨殺したベグニオン帝国元老院とラグズ連合との戦争の話。後半はそのベグニオン帝国に戦わされたデイン王国とベグニオン帝国元老院、サナキの声明によって集まったベグニオン帝国連合との戦争の話。

この第三部の終盤にぶつかったベグニオン帝国連合と、ティン王国の戦争で集まった負の気の影響で白鷺王子と王女、アイクの妹のミストが倒れてしまう。戦いの負の気でメダリオンに封印されている『負の女神』ユンヌを解き放つてはいけなく誰かがミストに伝える。アイクたちはその言葉を聞き『解放の呪歌（ガルドル）』を知っている皇帝サナキを呼ぶが、ユンヌは目覚めさせられない。その後突然と姿を現したミカヤの『解放の呪歌』『負の女神ユンヌ』を目覚めさせる。しかしそれは対となって眠っていた『正の女神』アスタルテを同時に目を覚ましてしまう。

戦いの負の気で目を覚ましたと勘違いした『正の女神』アスタルテは全人類を石に変えてしまう。しかし力を持つものは石にならずに済み『暁の巫女』ミカヤ、『勇者』アイク、『鷹王』ティバーンの三人の隊に別れ、ベグニオン帝国の『導きの塔』、『正の女神』アスタルテが眠っていた場所へと向かうことになる。今まで敵同士だった者たちと手を取り合いながら。

第四部は三隊に分けられたミカヤ隊、アイク隊、ティバーン隊が導きの塔へ向かう物語、そして導きの塔での最終決戦の話だ。

導きの塔では元老院のルカンとの戦い。アイクの好敵手にして父親の敵『漆黒の騎士・ベグニオン帝国將軍ゼルギウス』とアイクの一騎打ち。ゴルドアの竜鱗族、千年前の戦いの英雄、『黒竜王』テギンハンザーとの戦い。ベグニオン帝国宰相、セフェランとの

戦い。

それらを何とか打破していき最終的に導きの塔の最上階へとたどり着いたアイクたち。そこで『正の女神』アスタルテを『負の女神』ユンヌの力を借りてアイクが遂に倒す。

しかし対となっているアスタルテが倒されたことによりユンヌも消滅してしまうのだが、その後二人の女神は一つとなり女神アスタテューヌとなるのだが……それはまた別のお話。

このお伽噺は下界の神々にはあまり好まれていない。自分の同族である神が殺される話を好きになれる道理はないのだが、あまりに下界の子供たちに人気なためその話をするなどとも言われていないのが現状だ。

* * * * *

くアイク side く

先ほどの絶叫について顔を顰めてしまいそうになる。絶叫が収まったかと思えばその場にいたほとんどの人がこちらに詰め寄ってきて何か聞きたそうな顔をしているが、それを先ほどの金髪の少年が押し止める。

「みんなそれぞれ聞きたいことがあるかもしれないけど、それはダンジョンの帰り道でも構わないだろう。何なら黄昏の館でだつて構わない。このダンジョンから帰還しよ

うと思うんだけど、アイクさんも一緒に行きますよね？」

「一緒に行かせてくれるならありがたく同行させてもらおう。ところであんたは？」

「僕はフィン。『ロキ・ファミリア』の団長をやらせてもらっています」

「出来れば敬語はやめてほしいんだが。敬語とかお辞儀とか、貴族の風習はどうにも肌合合わない。それと呼び捨てにしてくれて構わない」

「そつちがそういうのならばそうさせてもらうよ。アイク、君はファミリアに当てはあるのかい？」

「すまないが、俺はここの事はさっぱりだ。ここから出たらいろいろ教えて貰いたいだいが、いいか？」

「ああ、そうだね。君が良ければぜひうちのファミリアに入ってもらいたいんだけどね……それじゃあダンジョンから帰還する」

その呼び声に隊列を組んでこの部屋らしき場所から出て行く。道もわからないから俺は自動的に一番後ろをついて行くしかないのだが……

最前列にはフィン、最後列には先ほどの緑髪の女性がいた。耳が尖っているが……ベオクじゃないのか？緑髪の女性っていうとエリンシアを思い出すが、彼女とは全く違うタイプだろう。頭も良さそうだ。

「先ほどは助かった。礼を言う」

「いや、俺こそいきなり攻撃してしまつて申し訳ないと思つていたんだが、怪我はないか」

「ああ、お前のおかげだ。私はリヴェリア・リヨス・アールヴ。リヴェリアと呼んでくれて構わない」

「リヴェリア、先ほどの魔法は『レクスフレイム』か？でも魔導書はどこにも持つていないようだが……」

「ここでは魔法は詠唱によつて発動するんだ。お伽噺の世界では魔導書とやらで発動するようだが、回数に制限があるのだろうか？ここでは精神力（マインド）で発動するんだ。精神力が持つ限り魔法は使えるが、発動までの時間は魔導書とやらの比ではないな」

「お伽噺じゃなくて、俺の中では現実なんだがな。ならばここは俺にとっては異世界、ということになるのか？」

「こういった頭を使う作業はすべてセネリオに任せていたから自分で考えるのはどうにも性に合わない。」

「とにかくお前の魔法はすごかった。あれだけの魔法を使えるのは恐らくセネリオと皇帝位のものだっただろう。トパックやカリルは炎魔法を得意としていたが、あれほどの威力の魔法は使えなかつたはずだ」

「ふっ……蒼炎の勇者にお誉め頂き恐悦至極の至りだよ」

「あのなあ……」

蒼炎の勇者ってお言うのがそもそも俺なのかどうか知らない。少なくとも俺はその名で呼ばれたことは無い。

俺の世界の戦争がお伽噺だというのならば、誰かがそう呼び始めたのかもしれない。確かにアスタルテにとどめを刺したときはユンヌの蒼い炎を身に纏っていた。

「ミノタウロス！ミノタウロスが出現しました！」

隊列の前の方からそのような声が聞こえて来た。ミノタウロスと言われても何かはさっぱり分からないが。

「リヴェリア、ミノタウロスって何だ？」

「牛型のモンスターでLv. 2相当」

「強いのか？」

「うちのファミリアにとつては相手ではないが……おい、どこへ行く？」

「少し戦ってみたくなった」

「止める！お前は『神の恩恵』を刻まれていないだろ!?!いくら女神を倒したから……」

おい、話を聞け！

リヴェリアが何やら叫んでいるが俺は隊列の前の方へと突き進んでいく。

「団長、あれ私たちがやっちゃっていいよね？」

「さっきのは物足りなかったんだ。別に構わねえよなあ？」

「まあいいだろう。じゃあ——」

「待ってくれ。俺にやらせてくれないか？」

褐色の肌の少女や狼の耳をはやした青年……彼はラグズなのか？彼らを押しつけ
フィンに聞く。

「勝てるのかい？」

「さあ？やってみなくては分からんだろう」

「ちよつと！蒼炎の勇者だか何だか知らないけどすつこんどいてよ」

「お前が出る幕じゃねえ、引つ込んでろ！」

「ならば、俺があいつらを倒せばお前らは俺に戦わせてくれるのか？」

「「はあ!？」」

近くにいたものから声上がるが俺には関係ない。敵ならば容赦なく倒す。それだけだ。

「あつはつはつは！いいよ、アイク。戦いたければ戦ってくれて構わない。ティオネ、
ティオナ、ベート。ここは彼に任せよう」

「団長!？」

「正気!？」

「……チッ」

目の前にはミノタウロスと呼ばれた牛のモンスターが七体。背負っていたラグネルを抜き、相手へと切りかかる。

第三話

アイクは一番近くにいたミノタウロスに向かって切りかかる。しかしその攻撃は余裕を持って躲されるがそれは想定内。寧ろこんな直線的な攻撃にまんまと当たる様ならば、期待外れだ。

別のミノタウロスが持っていた棍棒を無造作に振ってくる。それを躲さずにあえて剣で受け自らは後ろに飛ぶ。バク中の要領で着地をし何回か剣を振る。

(こんなものか……冒険者とやらが苦戦するからどれくらいのものかと思えば……)

そう思いながら剣を構えずにミノタウロスの元へとゆっくりと歩みを進める。二体のミノタウロスが同時に襲い掛かってくるが、身を翻す最小限の動きだけでそれを躲し、すれ違いざまに剣を振る。それだけでミノタウロスは灰へと姿を変えた。

(残り五体……)

「おいおい……」

「冗談……だろ？」

「あれで『神の恩恵』を受けていないのよね……？」

あつさり仲間ミノタウロスが倒されたことに動揺したのか、こちらに向かつてくる気配が全くない。興奮めとばかりにアイクは剣を真上に回転させながら投げる。

その剣は一体のミノタウロスの上に飛んでいき、アイクはその剣を空中で掴みそのまま落ちてくる勢いを利用してミノタウロスを切る。魔石ごと切られたミノタウロスは絶命する。

結果を確認せずにバク転をしながら手近にいたミノタウロスを切り上げる。今までよりもあつざりと剣が通りミノタウロスは絶命をする。

(残り三体……)

しかしここでイレギュラーが発生する。アイクに勝てないと判断したのか、ミノタウロスは身を翻し上層に上る階段へと走っていった。アイクはラグネルを地面を切るように叩きつけ衝撃波を発生させ一体のミノタウロスを撃破する。

しかし二体のミノタウロスは仕留め切れずに上層へと逃げてしまう。

ここで仕留めなくても上の冒険者が仕留めてくれると判断したアイクは身を翻しフィンの元へと向かう。

「すまん、二体仕留めそこなった」

今までアイクの戦闘を呆然と眺めていた『ロキ・ファミア』の面々だが、アイクの一言に急に現実へと意識を帰還させる。

「皆、上層にはレベルの低い冒険者がたくさんいる！急いで仕留めろ！」

前列の方にいた第一級冒険者たちはその言葉にその場を駆けだす。

「何をそんなに焦る必要がある？あの程度なら誰でも倒せるだろ？」

「君の世界の常識とこちらの世界の常識は違うのさ。君はまだ恩恵を受けてないからわからないだろうけど、この世界ではL v. 差は基本的に覆せない。いくつもの戦争を生き抜いてきた君からしたら弱いのもかもしれないが、普通の冒険者からしたら十分に彼らは脅威なんだよ」

「つまり俺が仕留めそこなつた牛のせいで死人が出るかもしれないということか？」

「そう言うことだ」

いうが早いがアイクもその場を駆けだし上層の階段を昇っていく。ダンジョンの構造は全く分からないが、そんなことを気にしている場合ではない。

ミノタウロスの足音、もしくは冒険者の悲鳴を聞き分けることに全神経を集中させる。

「うわああああー！！！！」

すると遠くから悲鳴が聞こえて来た。悲鳴が聞こえて来た方へ走るが壁がアイクの進行を阻害する。ラグネルを抜き壁を破壊しながら進んでいく。

すると一人の白髪の少年がミノタウロスに襲われていた。さらに後ろは行き止まり

で逃げ場がない状況。

ミノタウロスが少年を仕留めようと武器を振り上げる。急いで剣を抜きながら疾走しミノタウロスを切る。返り血で少年は真つ赤に染まってしまいが致し方ないと割り切る。

「すまん、こちらの不手際だ。大丈夫か？」

アイクは少年にそう声をかけるが返り血で真つ赤に染まっているのに分かるほど顔を真つ青にして悲鳴をあげながらその場を去ってしまった。

呆然と少年が走っていった方向を見ているアイク。遠巻きに金髪の少女がアイクを見ていることに気が付かないまま。

「アイズ、ミノタウロスは？」

狼人の青年が金髪の少女、アイズに声をかける。アイズはアイクの方を指さし

「彼が倒した」

* * * * *

くアイク side く

「馬鹿者！最後の最後に油断して！」

「すまない。油断していたわけではないがこれは完全に俺の落ち度だ」

俺は現在リヴェリアに説教されている。ミノタウロスに一人で突っ込んだことにつ

いてなのだが、俺はあいつらをそこまで強いとは思っていない。うちの傭兵団であいつを倒せないのは神官だったキルロイ位のものだろう。

「確かにお前は規格外に強い、それは認めるがダンジョンはそう言った独断専行は命取りになる。覚えておけ」

説教されている中俺は少し頬が緩みそうになる。意識して引き締めようとしたがどうやら隠しれなかつたらしい。

「何がおかしい」

「いや、すまない。誰かに説教されるということが少し新鮮だな。俺を説教してきたのはミストとティアマト位のものだったからな。お前に説教されるとティアマトに説教されていたことを思い出す」

少し懐かしい気分になりつい口が回ってしまふ。そのことに毒気を抜かれたのか、呆れたような表情を浮かべるリヴェリア。副団長というところがティアマトと同じポジションンということも影響しているのだろうか。

「さあ着いたよ、ここが僕たちのホーム。黄昏の館だ」

その大きさに驚きを隠せない。これは俺たちが正の使徒と戦ったタナス公の屋敷程度の大きさはあるのではないだろうか？

「みんな、おつかえりい〜!!」

屋敷から女性の声が聞こえると同時、こちらに突っ込んでくる。敵意は無いようだが……

褐色の肌の少女たちがそれを躲し、金髪の女性がそれを躲す。最後尾にいた茶髪の少女は躲しきれずに胸を揉みしだかれるなどなすがままとなっている。

「ぐふふふふ、少しおっぱい大きくなつた?」

「な、なつてません!」

絶叫しながらも振り解けないでいる。その赤髪の女性にリヴェリアの杖が襲い掛かる。

「そのくらいにしておけ、ロキ」

「くうううくつ!何するんやママ!」

「誰がママだ」

リヴェリアからもう一発杖による制裁を食らい頭を押さえ悶絶する。

「ロキ、少しいいかい?」

「ん?なんやフィン?なんかあつたんか?」

「まあね、ダンジョンで凄い人と出会つたよ」

フィンはこちらを向き手招きをしている。こちらに来いと言うことだろう。

「ん?誰やこの兄ちゃん?うちのファミリアにこんなごついゴリラみたいなやつおらん

で?」

「ゴリラみたいで悪かったな……で、お前は誰なんだ?」

「人の名前を聞くときはまず自分からうちゅーやる?」

「ああ、すまん。俺はアイク。この世界では『蒼炎の勇者』っていうのが一番分かりやすいのか?」

俺自身そんな二つ名は聞いたことないので若干疑問形になるのは仕方がない事だ。

そんな俺の様子をまじまじと見つめやがて顔を青くしていく。

「う、嘘はついて無いようやな……つまり……本物?」

「?本物も何もないだろ。俺は俺だ」

「ぎゃー!!うちを殺すんか!?アスタルテと同じように殺すんか!」

「あのなあ……俺はそう簡単に人は殺さん。必要に駆られたときだけだ」

「人は殺さんうちゅーことは神は殺すんやろ!」

「は?神?誰が?」

「うちが神や!神口キうちゅーんはうちの事や!助けてママ!」

かなり怯えられているがどういふことだろうか?というかこいつが神?こんなおっさんみたいな言動するのが神なのか?と思つたが、ユンヌもかなり子供っぽかつたな。最初に知らないで邪神と言って嫌われたな。

「神も人も殺さん。というか、なんであんたが俺がアスタルテを倒したことを知ってるんだ？」

「はあ!? 白々しい! お伽噺の最後はお前がアスタルテを殺してハッピーエンドみたいになってるけどなあ、神々はあのエンドに納得いっとらんねん! 同族が殺されてハッピーエンドとかふざけるなや!」

「それは俺の所為じゃないだろ……それに俺がアスタルテを倒さなかったらほとんどの人類が石のままだったぞ」

「……ほんまにうちを殺さへんねんな?」

「神など信仰してはいないが、神に誓おう」

その場の騒ぎは一応の収束を見せた。なんかどつと疲れたな……

第四話

（アイク side）

「で、なんで自分こんなところにいるんや?」

「こつちが聞きたいことなんだがな。突然青い光に包まれて、気が付いたらダンジョンとやらにいた」

「嘘は……ついて無いようやな」

「なあ、さつきからどうやって嘘を付いているのかどうか判断してるんだ?」

「なんや、知らへんの? 下界の子は神々に嘘は付けへんのや」

「俺は肉が大嫌いだ」

「……なんで自分、そんな嘘つくん?」

「少し確かめてみたくなっただけだ」

「茶化すなや!」

「全く……君たち、さつきから話が全く進んでいないよ?」

現在ロキの執務室でフィン、リヴェリア、ガレスの三人が同伴する中でいろいろと聞かれている。しかし、フィンの言う通り特に進展はない。

「自分元の世界に帰りたいんか？」

「帰りたいと言えば帰りたいが、別にこちらで生活をして構わないと思ってる。冒険者とやらは、傭兵団よりも生活は安定しそうだから。ただ惜しむべくは、傭兵団の皆がこの場にいないことだが……」

「それで、ファミリアの当てはあるんか？」

「全く無い。こっちはこの世界に来たばかりだ。知り合いの神なんているわけがないな」

「じゃあうちのファミリアに入るか？」

「良いのか？よく分からない風来坊だぞ？」

「構へん構へん。自分がうちに危害を加えないのなら構わへんわ。それに、外にいる子たちも、自分にはここに居て欲しい様やしな」

椅子から立ち上がりドアを開ける。外には先ほどミノタウロスを倒す際に押しのけてしまった褐色の肌の少女と金髪金眼の少女がいた。

「あ、あははく……いつから気がついてたのロキ？」

「最初からや」

「それでさ、彼ファミリアに入るの？」

「入れさせてもらえるのならば入れさせてもらうが。迷惑というのならば他のファミリ

アを探す」

「そんなことないって！むしろ大歓迎なんじゃないかな？」

手を大げさに振りながら歓迎の意を示してくれる。後ろの少女も首をしきりに縦に振っているところを見るとそういうことなのだろう。

「ほな、恩恵刻むで。アイク、服脱いでベッドにうつ伏せになってくれ」

「下もか？」

「アホか！上だけでええわ！野郎の下半身なんて見とうないわ！恩恵は背中に刻むもんやて、さつき説明したやないか」

「そう言えばそうだったな。すまない」

マントを取って肩当てを外し鎧の類をすべて外し上半身を露わにする。その様子を見ながら部屋にいる面々が何やら呆けている。

「どうかしたか？」

「いや、自分ただ体鍛えたらそんな体になんねん……」

「特別なことは何もしていない。よく食べよく鍛える。それだけだ」

「儂よりも筋肉凄いいんじゃないか……？」

「あはは……同じ男として自身無くすよ……」

「お前は小人族なんだから比べるのがそもそも間違ってるぞ……」

「アイクって……ドワーフ？」

「一般的なベオクだ。俺の世界にドワーフなんて種族は存在しない」

そう言いながらベッドにうつ伏せになる。ロキが上にまたがり背中をべたべたと触ってくる。

「自分みたいなのが一般的って……もうええわ。ほな、行くで」

ロキが自分の人差し指に針を刺しその血を背中に軽く塗る。すると言葉にしにくい感覚が身体中を駆け巡る。

「終わったでほな早速ステータス拝見タイムと……」

背中に何やら紙を乗せる。確かステータスは『神聖文字』っていう神かエルフの一部にしか読めない文字で描かれており、それを共通語に直して眷属に渡すらしい。

「なんかもう……突っ込むのも疲れたわ……」

* * * * *

アイク

L v. 8

力：F 373+

耐久：F 328+

器用：E 406+

敏捷：F 378+

魔力：I 0

負の女神の加護 E

《スキル》

【見切り】

・ 戦闘時、敵のスキル、アビリティの無効化

【天空】

・ 高速の二連撃

・ 一撃目は自らの体を癒し二撃目は敵の耐久を下げたうえで攻撃を行う

【神剣に選ばれしもの】

・ 神剣ラグネルを装備可能

・ 装備時耐久のパラメーターに+補正

* * * * *

「[[[[[.....]]]]」

俺の恩恵を刻んだロキが疲れたような声を出し、フィンたちに紙を渡した。それを見て全員が目を見開いて黙っているわけだが。

「おい、どうかしたのか？」

「いや、あのね……いろいろと突っ込みたいところはあるんだけど……君はオラリオで唯一——いや、世界で唯一のレベル8だ」

「レベル8？それってどうなんだ？」

「ついさつきまで世界には最高でレベル7、フレイヤ・ファミアアの『猛者』オツタルが最高だったんだけど、たった今君は世界で最強の冒険者になったということさ」

「今までお前がやってきた偉業を考えれば当然なんだろうが……」

「国を救い、自分よりも強い好敵手を倒し、千年前の戦の英雄とされる黒竜王を倒し、女神を倒して世界を救ったとなればこのレベルでも納得なんじゃが……」

「寧ろこのレベルでよく収まっているな……」

「いやいやいや！何皆冷静になってるのさ！これって凄い事でしょ!」

「凄いを通り越して呆れるで……」

「ロキ、もう服は着ていいのか？」

「周りが何やら騒がしいが、俺にとつてそこまで重要ではないだろう。」

「ま、この後のことはこの後考えればええ。それよりも今日は宴や！アイクも参加するやろ？」

「宴？なんのだ？」

「ダンジョンの遠征からの帰還と、アイクの歓迎会を兼ねてな。明日の夜はどんちゃん

騒ぎや！とりあえずアイクのパラメーターはここに居る奴らの秘密ってことで頼むで？」

部屋にいた全員が頷く。そこまで秘密にしなければならぬものなのだろうか？

「アイクは明後日ギルドに行つて冒険者登録してきてな。まあ騒ぎになるやろうけど、我慢しいや」

「ねえねえアイク、この後暇？」

「もう少し待ってテイオナ。アイクに館の案内と部屋の案内をしなければならぬ」

「それ、私がする」

「アイズが？」

「うん」

やっと褐色肌の少女と金色の髪の少女の名前が分かった。テイオナとアイズか……：なんかワユに似た気配がするが、気のせいかな？

「そう言うことなら任せるよ。アイク、アイズに着いて行つて」

「分かった。よろしく頼む、アイズ」

* * * * *

一通り館の案内をし終え、最後に中庭に来た。中庭に来て立ち止まったかと思うと、腰にさしていた剣を抜きこちらに切りかかってくる。

咄嗟の事だったがラグネルを抜いて迎え撃つ。それだけでアイズが装備していた剣は砕け散ってしまう。

「……何のつもりだ？」

「あなたは……どうしてそんなに強いのか？」

「親父の剣技は極めれば誰にも負けない。俺はそう信じている」

「誤魔化さないで。剣技の事じゃない。私はあなたの強さの秘密を知りたい」

「俺は、目の前で親父が殺された。その時は漆黒の騎士を倒したい一心だったが、エリンシアとクリミアを取り戻す戦争の総大将に祀り上げられたり、その後は世界を救う軍隊の総大将みたいなものだ。その時に共通してあったものがある。守るべきもの、仲間是谁一人として死なせたたくない。俺はそのために強くなった」

俺の語りをアイズは黙って聞いている。

「お前は、何故強くなりたい？」

「私は……」

「強くなりたい理由なんて人それぞれだ。あんまり背負い込みすぎるなよ」

頭を軽く叩くように撫でて中庭を出る。特にやることもないので自室に帰って寝ようと思っていたのだが、中庭を出たところでリヴェリアと遭遇した。

「あの子は、強くなれると思うか？」

「まだうちの破天荒剣士の方が強いが、伸びしろはあるだろうな」

「破天荒剣士？」

「気にするな。ただの例えだ」

話は終わりと判断しその場を立ち去ろうとするが、リヴェリアに肩をつかまれ引き留められる。

「言い忘れていたが、ダンジョンに関する知識なんかを私が教えていくことになった。お前の強さならば間違いなく死ぬようなことは無いと思うが、知識を吸収しておいて損はしないだろう。明日から早速やっていくからな」

「はあ？嘘だろ？」

「嘘でこんなことは言わない」

言いたいことだけ言っただけ去っていくリヴェリア。明日からの地獄を考えると気が下がっていく。恐らく戦闘中よりも負の気を発している気がする……

第五話

くアイク side く

『豊穡の女主人』にて

「こいつ何もんニヤ! どんだけ食べば気が済むニヤ!？」

「ああ! こつちの皿もう空です! 次の料理お願いします!」

「まだ食べますよね?」

「当然だ。肉があればもつと食いたいな」

「まだ食べられるの……」

「見るだけでお腹一杯になってきそうなんですけど……」

「ここの料理はうまいな、オスカーの作った料理の次位にうまい。そして一皿がこの量だ。気に入った」

「シル、あなたが連れてきた大食漢の冒険者とは彼の事ですか?」

「違うよ! 私が連れて来たのはあの人と一緒に座ってる白髪の方!」

「カオスやな……」

この店でダンジョンから帰還した祝いと俺が『ロキ・ファミリア』入団の祝いということで宴会が開かれたが、始まって暫くして主賓であるはずの俺は追い出された。俺と一緒に飯が食えないだとかなんとかか。

俺も周りに遠慮して食う量を減らすようなことをしたくなかったからその提案を受け入れて、一人で座っていた白髪赤眼の少年と相席させてもらい、なぜだかついてきたアイズと三人で飯を食っている。

そう言えばアイズがこつちに来たとき『ロキ・ファミリア』を含む男の冒険者たちの目線が一気にこつちを向いてきた。特に狼のラグズ？のあいつの目線は鋭かった気がするが。

代金はファミリアの方で出してくれるとあって遠慮せずに食べ続けている。最初は興味深げにこつちを見ていた連中も、暫くするとこつちを見ようともしていなかった。

テーブルの上にある飯をある程度平らげて皿を裏に下げてもらって次の料理が来るまでの間手持ち無沙汰だ。

「あ、あの！」

「ん？どうした？」

「あの、今日は助けていただき、ありがとうございました。僕ベル・クラネルって言います」

「ああ、どこかで見たことがあると思っただらああの時の少年か。あれはもとはと言えは俺の所為だ、こちらこそすまなかつた」

「いえ、あの……お名前をお伺いしてもいいですか？」

「アイクだ」

「へー、暁の女神に出てくる英雄と同じ名前なんですな」

「同じ名前も何も、本人なんだがな」

「……はい？今なんて——」

「お待たせいたしましたー……」

料理が運ばれてきた。俺は会話を打ち切り食べることに集中する。

「ベル……って呼んでもいい？」

「え、あ、はい。ヴァレンシユタインさん」

「アイズ」

「へ？」

「私の仲間はみんな私をアイズって呼ぶ」

「分かりました、アイズさん。それで、この人が本人というのは……？」

「そのまんまの意味。気が付いたらダンジョンにいたんだって」

「えええ——ムグツ！」

「あまり大きな声出さないで。あんまり騒ぎにしたくない」

「おかわり」

「ニヤに!? もう一皿平らげてるニヤ! もうちよつと味わつて食えニヤ!」

「ちゃんと味わつてる。オスカーの作った料理の次位にうまいな」

「ほう、うちの料理よりもまい料理を出す奴がいるなんてね」

「俺の傭兵団のシェフをなめるな」

「ゴゴゴゴ……という音でも聞こえてきそうな雰囲気を発しながらも食事を続ける。

「そうだ! 今日ダンジョンでおもしろい出来事があつただけだよお」

『ロキ・ファミリア』の宴会が行われているテーブルの方で何やらラグズの青年が叫んでいる。

「帰る途中逃げたミノタウロスいただろ? あの最後に一匹倒したのも自称英雄のあいっ
なんだけどよお、あいつが倒したミノタウロスの返り血が襲われてた冒険者にぶつか
かってトマトみてえになつてんだよ! ははは! 今思い出しても笑えるぜ!」

自称じゃなくしてお前らが勝手にそう呼んでるだけだろ。

そんなことを考えていたが、ふと目を隣にやると隣でベルが俯いて震えていた。放つ
ておくとそのまま飛び出していきそうなほど。

ベルのようなタイプはこういつた場合言われた相手を怒るのではなく、自分に怒りを

覚えるタイプだ。俺も昔親父が殺されたときは自分の弱さが恨めしかった。

とうとう限界を超えたのか、立ち上がってその場を走り去ろうとする。俺は腕をつかみその場に止めさせる。

「放してください！」

「自分の弱さから目を背けるな。自分が弱いことを、弱かったことを風化させるな」

「何を……言つて——」

「自分が弱かった時のことをいつまでも頭に入れておけ。そうすれば、今よりもずっと強くなれる。俺だって今のお前みたいな時期があった」

「……え？」

「俺は親父を目の前で殺された。俺がもつと強ければ、親父を守れたかもしれない。あの時の弱い自分を思い出すと腹が立つてくる。でも、あの時弱い自分がいたからこそ今の俺がいる。だから今は弱くてもいい。今すぐに強くなれなくてもいい。お前は冒険者だろ？ ゆっくりと強くなっていけばいい」

「僕は……強くなれますか……？」

「強くなりたいと願うものは必ず強くなれる。俺がそのいい例だ」

言いたいことを言つて俺は食事を再開する。何やら静まり返っているが気にすることではないだろう。

「アイクって、そういうこと言う人なんだね」

「何のことだ？」

「なんかアイクって、なんでも放っておく人だと思ってたから」

「あんなあ……俺はグレイル傭兵団の団長だったんだぞ？」

「うん、知ってる……ねえアイク、私も強くなれるかな？」

「さつき言ったとおりだ。強くなりたいと願うものは、必ず強くなれる。自分を信じろ」

「うん、そうする。あ、これ貰うね」

「おい、自分で注文しろよ。俺から肉を取るな」

「……は飯屋なんだから自分で注文すればいいだろう、全く。」

「よっしゃー！今から宴会恒例飲み比べ大会やー！優勝賞品はリヴェリアのおっぱいをもむ権利をくれたるわ！」

「俺もやるっすー！」「俺も！」「当然参加するぞ！」

なんか下らない事が始まったな。こっちで飯食っててよかったな。

「はあ……下らん」

そんなことを言いながらリヴェリアもこちらの席に移動してきた。

「いいのか、止めなくて」

「私が止めたところで何も変わらん。お前は参加しないのか？」

「あいにく、俺は食うことで口が忙しくてな。あ、おかわり」

「まだ食うのか……」

「だから食うの早すぎるニヤ！」

待っている間、大分前からおいてあつた酒を少し飲む。あまり酒は飲まないが、たまにはいいものだ。

酒を飲んでゐる俺をじつと見つめてくるアイズ。

「なんだ、飲みたいのか？ほら」

「いいの？」

「飲みたければ飲め」

「ありがとう」

ジョッキに口をつけ酒を飲み始める。何故か『ロキ・ファミリア』の面々がギョツとしている。

「おい馬鹿、やめろ！」

アイズからジョッキを引つ手繰るリヴェリア。その表情には鬼気迫るものがあつた。

「何かいけないのか？」

「アイズは極度の酒乱なんだ。この間飲んだ時はロキに馬乗りにしてポコポコに殴つていたが……」

突然向かいに座っていたアイズが拳を握りこちらに殴りかかってくる。普通に受け止めるが突然のことで状況がうまく理解できない。

「何のつもりだ？」

問いかけるが何も答えずうつろな表情のまま掴まれて無い手を手刀の形にして切りかかってくる。腕で受け止め受けて、拳を受けてめていた手を放し手刀を放ってきた腕をつかみぶん投げる。

酔っぱらっておりうまく受け身を取れなかったのか、背中から地面に思い切りたたきつけられアイズは気を失う。

「女将、すまない。今日はこれでお暇させてもらおう。リヴェリア、黄昏の館までの道を覚えていないから案内してくれないか？」

「あ、ああ……分かった」

アイズを横に抱きかかえ店を後にする。店を散らかした迷惑の詫びを兼ねて、また明日来るかとのんきなことを考えながら。

第六話

宴会の次の日、冒険者登録をするためにギルドにリヴェリアと来た。俺一人でも問題は無いと思ったのだが、俺一人だと確実に騒ぎになるという『ロキ・ファミリア』の首脳陣談。ギルドの受付に知り合いがいるからという理由でリヴェリアがついてきた。

ギルドに到着し周りを見回す。まだ朝ということもあつて人は疎らだ。

「すまない、冒険者になりたいのだが。受け付けはここか？」

「はい、只今参りますので少々お待ちください」

少し待っていると受付の奥から耳の尖ったエルフの女性が出て来た。

「冒険者登録ですね、でしたらここに名前と所属ファミリアを書いてください」

幸い俺の元いた世界と字は同じらしい。俺は古代語は全く分からなかったが、流石に普通の言葉が分からないほど馬鹿ではない。

名前と所属ファミリアを書き込み受付嬢に渡す。

「名前は……アイクさん？『蒼炎の勇者』と同じ名前なんですね。所属ファミリアは、『ロキ・ファミリア』ですか？何か証明できるものつてありますか？」

「いや、同じ名前も何も……うぐっ！」

話している途中でリヴェリアが横から口を押さえて来た。エルフって認めた相手じゃないと肌の触れ合いをしない種族なんじゃなかったのか？

「彼は『ロキ・ファミリア』だ。私が証言しよう」

「リ、リヴェリア様!?!はい！分かりました！ではこの後ダンジョンに潜るに当たつての簡単な講習をするのですが……」

「それは私が責任を持つて教え込もう」

「は、はあ……それでは武器と防具の貸し出しは」

「必要ない……ラグツ！」

「余計なことを言うな……」

なんかさつきから喋らせてもらえん。何なんだ一体。

「分かりました。それでは冒険者として登録しておくのでダンジョンに潜れるのは明日からということをお願いします」

「エイナ、少し話したいことがある。個室を借りることはできるか。盗聴なんかができない完全防音の部屋が好ましい」

「はあ……あの、リヴェリア様。失礼ですが先ほどからどうして彼の口を押さえているのですか？」

「それも後で話す。出来るだけ早く案内してくれ」

「……分かりました。こちらへどうぞ」

エイナと呼ばれた受付嬢に着いて行く。俺たちは個室に通されリヴェリアと隣り合つて座り、対面にエイナが座る。

「まずは、これを見てくれ」

リヴェリアはエイナに一枚の紙を渡す。アピリティを消した俺のステータスだ。

「……レ、レベル8——!!!?」

「彼はアイク、『ロキ・ファミリア』、ひいてはオラリオに止まらず世界に唯一のレベル8だ。そして『蒼炎の勇者』本人でもある」

「……少々お待ちを……いきなりのこと過ぎて頭が追いつきません……」

「好きなだけ時間を使うといい」

「もしかして、ベル君を助けた冒険者って……青い髪に黄金の両手剣、筋骨隆々の大男」

「あいつは俺のことを何だと思ってるんだ……」

「アイク様、あなたは何故ダンジョンでベル君を助けたのですか？冒険者登録をしているということは、昨日はまだ冒険者じゃなかったということですよ？なぜあなたはダンジョンに？」

「知らん。青い光に包まれたと思ったたら、この世界にいたんだ。なぜ俺がこの世界に来たかなんて俺が聞きたいくらいだ。ベルを助けたのは、ミノタウロスを逃がした俺の責

任だ、俺が倒すのは当然だろ。もう一匹は、誰かが倒してくれたようだが」

「エイナ、頼みがある。彼の存在を公にしないでほしい」

「ええ、分かっています。彼の存在を公にしたら、世界中が混乱する所じやありませんから。全てのファミリアが手を組んで『ロキ・ファミリア』に戦争遊戯を仕掛けて潰される可能性だってありますから」

「潰される？何故だ？」

「お前は自分が向こうで何をしてたのか忘れたのか？」

「忘れてはいるわけがない。俺が殺してきたやつを忘れるわけにはいかないだろう」

「その殺してきた中に『神』がいたことも忘れてはいないようだな」

「ああ、それがどうかしたか？」

「アイク様、あなたはお伽噺の中で『女神アスタルテ』を倒して世界を救った勇者です。しかし神々は、『女神アスタルテを倒した敵』と思っています。確かにあなたが『女神アスタルテ』を倒さなければ世界中の人が石となつて世界は滅んでしまいましたが、神々としては倒したという結果が恐れるべきものなのです。下界の子供が、神々を倒す手段を持つているということは神々にとっては脅威なのです」

「始めてロキに会ったとき、酷く怯えていただろ？あれは自分の命の危機だと思つたらだと思え。自分の命を脅かす存在が近くについて、尚且つそれに対抗する手段が無いな

らば怯えない道理はあるまい」

「そこまで説明されてやっと理解した。つまり俺という存在を知っている神は少ないほうがいい、できれば誰にも知られないほうがいいということか。

「分かった。それならば俺はあまり外で活動しないほうがいいだろう。ダンジョンにも最低限潜るに止めておいたほうがいいのか？」

「そこまで遠慮する必要はない。ただ神々に会っても馬鹿正直に自分の正体を明かさなければ、基本的に何をしても構わない」

「ああ」

「では帰る前に少し寄る所がある。用が済んだらダンジョンの知識を叩きこんでもらうぞ」

「はあ……アイズとの手合わせが終わったらな」

「は？アイズと訓練するのか？」

「今日の朝申し込まれた」

「分かった……その後で良い。エイナ、礼を言う」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

* * * * *

「アイク、お前の武器はそれだけなのか？」

「基本的には、この剣は壊れないからな」

「ならば整備などはどうしている？」

「特別なことはしていない。剣に着いた返り血を拭く程度だ」

「念のため、もう一つ武器を用意しといたほうがいい。それに、お前が大事そうに持っているもう一本の剣、刃こぼれが酷い。武器として機能していないだろう」

「これか？これはお守りみたいなものだ。親父が俺に買ってくれた、初めての新品の剣なんだ」

「そうか……ならばもう一度綺麗なものにしておきたくはないか？」

「それはできるのならばそうしたいが、出来るのか？」

「今向かっているのは『ヘファイストス・ファミリア』。鍛冶が専門のファミリアだ。ロキが少し挨拶をしてこいと言っていた。主神には合わないほうがいいだろうが、あそこ
の団長にその剣を預けて整備してもらおうと良い」

ダンジョンの上に立っている塔、『バベル』。その中に『ヘファイストス・ファミリア』があるらしく、そこに向かっている最中だ。

「着いたぞ、この階だ」

何やら上昇する不思議な箱、——エレベーターというらしい——から出るとすぐに武器がたくさん飾られるショーケースが目に入る。

リヴェリアに着いて行きとある一室の部屋をノックする。しかし中から反応が無い。それはいつも通りなのだろうか、躊躇いなくドアを開ける。

「椿、いるか？」

「ん？おお、リヴェリアか？手前に何か用か？」

「ああ、こいつが新しくファミリアに入団したんだ。それでこいつの武器を整備してほしい」

「ん？新人か？名は？」

「アイクだ」

「ほうほう、彼の勇者と同じ名前か。それに背負ってる剣、なかなかの業物だ。見せて貰っても？」

「ああ、構わないが」

背負っているラグネルを抜き、椿と呼ばれた女性に手渡す。しかし椿は手には取ったが、俺が手を放すとラグネルを落としてしまう。

「レベル5の力で持ちきれんほど重い剣か……？アイクよ、レベルはいくつだ」

「すまない、少し事情があつて言うわけにはいかない」

「リヴェリア……訳有りということか。ならば聞かん。それで、見てもらいたい武器とは？」

「これだ」

ラグネルを拾い、リガルソードを手渡す。身構えていたようだがリガルソードは普通の剣だ。

「大分使い込んだな。使い込んだというよりは経年劣化というべきなのだろうが……直したとしても、昔のような切れ味は保証できないが」

「構わない。俺にはこいつ一本があれば十分だ」

ラグネル抜いてその場で軽く振る。

「なかなか面白いな、ひよつとして本物の勇者なのかもしれんな……なんて、そんなことあるわけないか。失敬」

的を得ていたのだが、黙っておいたほうがいい。

「樁、失礼するわよ。あら、リヴェリアじゃない、それとそっちは……見ない顔……!?あなた、その剣!」

「おお、主神様。彼はアイク。リヴェリアの紹介で手前が一つ武器を見ることになったのだ」

「神……ヘファイストス」

眼帯をした赤髪の女性。彼女が神ヘファイストス。彼女は俺が手に持っているラグネルに視線が釘付けとなっている。

「この剣がどうかしたか？」

軽く掲げてみるが、その反応にヘファイストスは後ずさる。

「なんで、その剣、神の加護が付いているの……？それも二つも。あなたは一体、何者!？」
「二つ？ああ、アスタルテとユンヌの加護か？もともとアスタルテの加護が付いていた
剣だ、その後ユンヌの加護が付け足されたのか」

「アスタルテ？ユンヌ？加護？アイク、といったかしら……？もしかして『暁の女神』の
アイク？」

「何を言っておるのだ主神様、そんなわけが——」

「違う。と言いたいところだが、神に嘘は付けないのだろう？『女神アスタルテ』は少し前
に俺が倒した。この世界では『蒼炎の勇者』と名乗ったほうが分かりやすいのだろう？」
リヴェリアが後ろで頭を抱えており、椿はポカンとした表情でこちらを見ている。先
ほど他の神にばれるなど言った矢先これだ。幸先が悪すぎる。

ヘファイストスは手直にあつた剣を手に取り、切っ先をこちらに向ける。腰が完全に
引けているが、敵意のこもった視線はそのままだ。

「すぐにここから出て行くか、私に倒されるか、好きな方を選びなさい！」

「そんな腰が引けたままで言われてもな……」

ラグネルを鞘に戻し、両手をあげたままヘファイストスに近づいていく。

「近寄らないで！」

「俺に敵意は無い。いいからその剣を仕舞え」

一歩近づいていくことにじりじりと後退していくヘファイストス。やがて壁まで後退してしまい逃げ場が無くなる。

破れかぶれに剣を振ってくる。左腕に着けた籠手で受け止め、刀身を右の手で掴み剣を取り上げる。その剣を後ろにいたリヴェリアに渡す。

「ヘファイストス、もう一度言う。俺に敵意は無い。だからその敵意のこもった視線を向けるのをやめてくれないか？」

「……嘘は……着いていないようね」

「ああ、ちなみに俺は超少食だ」

「……ふふ、どうしてそこで嘘を付くのかしら。ええ、分かったわ。まだ少し怖いけれど、あなたを信用しましょう」

「……あんなに取り乱している主神様、初めて見た」

「ロキもあんな感じだったぞ」

「ヘファイストス、どうしてこの剣に女神の加護がついてると分かったんだ？」

「私は鍛冶の神よ？武器に着いては誰よりも造詣が深いと思ってるわ。それに、その武器がどういう武器かどうかも分かるつもりよ」

「神へファイストス。アイクの存在は公にしないでほしい。他の神にも伝えないでほしい」

「分かっているわ、リヴェリア。『ロキ・ファミリア』を敵に回したくはないもの」

「すまない、助かる。アイクと全ファミリアの全面戦争になったときの事なんか、考えたくもない……」

「俺を天災みたいにするのやめてくれないか……」

「では椿、頼んだぞ。神へファイストス、では」

「ええ、さようなら。リヴェリア、アイク」

リヴェリアとバベルを後にする。エレベーターとやらは慣れないな。

バベルから出ると、どこからか視線を感じた。気のせいだと思いたいが、そうはいかないと俺の勘が告げている。

第七話

黄昏の館に到着しアイズを探す。中庭に行くと剣を二本持つて待ち構えいた。

「待たせたな」

「うん。はい、これ」

「これは？刃引きされているようだが」

「訓練用の剣。普段使ってる剣で事故でも起きたら大変だから」

「軽いな、だがいいだろう。準備はできているか？」

「うん」

「じゃあ、本気で来い！」

その一言が開始の合図となり、アイズは剣を構えて特攻してくる。普段使いしている剣が細剣に近いものだからか、突きの動作が多い。

アカネイア大陸にこのような剣術を使ってくる剣士はいなかったが、対処できないスピードでもない。

突いてきた剣の横から剣をあて、ベクトルをずらして自分は身を翻して躲す。あえて躲せるように剣を大きく振る。アイズは後ろに大きく飛んで距離を取る。その様子に

眉を擧める。

「距離を取り過ぎだ」

「……え？」

「なぜ俺の剣をそんなに距離を取って躲す？俺が剣を振った後、懐がから空きだっただろ、なぜそこを攻めてこない？それと俺は本気で来いと言ったはずだ。本気というのは、殺す気で来いと言うことだ。手加減をしているようでは意味が無いぞ」

「……『目覚めよ』」

アイズは魔法の詠唱をして身に風を纏う。先ほどとよりも速く、重い剣戟をアイクに叩きこむが、アイクは片腕でそれを受け止める。

「先ほどよりもスピードと威力が増している。それが本気か？」

「はあっ！」

剣を何度もアイクの剣に当てる。アイクからはまだ攻撃を受けていないが、それはアイズの高速度の剣戟に怯んでいるのではなく、防御に徹しているためだ。

（攻め切れない……！）

焦ったアイズは普段彼女がしないような大振りをしてしまう。それを苦もなく躲され隙だらけになってしまう。

「焦ったな、隙だらけだ」

アイクは掛け声とともにアイズを剣で薙ぎ払う。アイズは地面を転がりながら距離を取り衝撃を外に逃がしていく。剣を構え直し剣にも風を纏わせる。

「リル・リフアーガ！」

アイズ必殺技、風の力を利用しての渾身の突き技。アイクは腰を落とし迎え撃つ。アイクの顔にはかすかな笑みが浮かんでいた。

* * * * *

「リヴェリア、邪魔するぞ」

リヴェリアの私室の部屋を蹴り飛ばしあける。マナーは全くなっていないがアイクは全く気にした素振りを見せない。リヴェリアは顔を少し顰めていたが……

「アイクか……いきなり……！アイズ!？」

アイクは口から血を流し気絶しているアイズを抱きかかえたいた。

「アイズの治療を頼む。俺には治療の杖なんかは使えないからな」

「……一つ聞かせてくれ。ここまでやる必要はあったか？」

回復の魔法を唱えながらアイクに訊ねるリヴェリア。リヴェリアは吐血させて気絶させる必要性を全く感じないようだ。

「逆に聞くが、手加減をした訓練に意味なんてあるのか？死なないように威力を制限する、寸止め。そんなものに本当に意味なんてあるのか？」

「いくら何でもやり過ぎだ！訓練で死んだら元も子もないだろ!?それが分からないとは言わせないぞ?」

「随分と過保護だな」

「は?」

「俺は戦争を生き抜いてきた。目の前で死んでいく同じ軍の仲間たち、俺がもつと強ければ守れたかもしれないと、何度思ったことか。強くなるためには生ぬるい訓練では意味が無い」

「それでも——」

「リヴェリア、人は簡単に死ぬ。首を切られる、頭を潰される、心臓を貫かれるのは勿論、それ以外でもすぐに死ぬ。明日生きているかどうかも分からない状況の中で、そんな生ぬるい事をしていて生きて行けるのか?」

「だが……それでも——」

「冒険者だつて同じだろ?ダンジョンというモンスターにいつ殺されるか分からない。殺す相手が人かそうでないか、違いはそれだけでしかない。それに、こいつはまだまだ強くなれる。『神の恩恵』とやらを抜きにしても、ここには伸びしろがある奴がたくさんいる」

「んっ……あれ?ここは?」

怪我がの治療が終わり、アイズは目を覚ました。

「起きたか。それで、まだやるか？」

「アイク？ 私負けちゃったの？」

「ああ、俺に勝とうなどまだまだ早いな」

「もう一回、良い？」

「俺は構わん。行くか」

「待て」

「リヴェリア……？ どうしたの？」

「私も着いて行く。また突然担ぎ込まれたらたまったものではない」

「リヴェリアも、アイクと戦ってみる？」

「お断りだ。魔法職が物理兵、しかも私よりもレベルが高いんだ、戦うだけ時間の無駄だ

ろう。回復の方に専念させてもらう」

* * * * *

「あれー、リヴェリア、何やってるの？ 中庭にいるなんて珍しいね？」

「テイオナか。あいつらの訓練の監視だ。先ほどアイズが運び込まれたのでな、アイク

は手加減という言葉を知らないらしいからな」

「うっわー、何あれ？ アイズなんて魔法まで使ってるじゃん。あれを受けて平然として

られるアイクも人間辞めてない？」

アイズが風を纏いアイクに攻撃をし続けている。風を纏って力と敏捷を強化している今のアイズに対応できるのはレベル6以上の冒険者だけだろう。少なくとも同じレベル5、それ以下の冒険者ではまず対応できない。

アイクはレベル8、それを抜きにしてもアイクの表情にはまだまだ余裕があるが、攻めているアイズの方は表情の余裕がなさそうだ。

「一撃が軽い、お前の売りは確かにその速さと正確さなのだろうが、もう少し一撃一撃の威力を上げてみる。それだけでもかなり変わる」

「せあつー！」

「はあつー！」

次々と剣戟の音が中庭に鳴り響く。魔法を使い続けているアイズは精神力の限界が近付いているのか、焦りが出始めている。

アイクの薙ぎ払いを後ろに飛んで躲し溜めを作る。その勢いと風を利用して渾身の技を打ち込む。

「リル・リフアーガー！」

さっきの手合わせよりも早い。しかし突き技の弱点は動きが直線的だということだ。動きさえ見えれば躲すことはたやすい。

風の範囲を考えやや大きめに身を翻すことよってアイクはアイズの攻撃を回避する。かなりの勢いを持って繰り出され突き技だ、急には止まらない。

「隙だらけだ。もう少しタイミングというものを考えろ」

がら空きの背中に上段切り、アイクの攻撃の勢いと自分の攻撃の勢いが重なりアイズは中庭の端まで吹き飛ばされ、壁に激突することによってやく止まった。

壁には大きなひびが入っており頭から血を流して気を失っている。

「やり過ぎだ馬鹿者……」

「あつちではいつもこんな感じだったんだがな」

「被害者が可哀想になってくるな」

「向こうからいつも挑んできているんだ、承知の上だろう」

リヴェリアはアイズの元へと走っていく。傍らに座り杖を掲げて呪文を唱える。アイズが負った傷はたちまち塞がっていき血が止まる。

顔に付いた血をを綺麗な布で拭い、横たわらせる。

「ねえねえ、アイク。次、私とやらない?」

「テイオナか。構わないぞ。最も、約一名はこつちを睨んでいるがな」

「気にしない気にしない、うちのママはなんだかんだで治してくれるから」

「誰がママだ」

「武器はその剣でいいのか？」

「うーん、いつも使ってる剣よりは軽いし形状も違うけど……ちよつと待つてて」

テイオナはその場から走り去りどこかへ向かっていった。恐らくは訓練用の武器が置いてある部屋に自分が使いやすい武器を取りに行ったのだろう。

数分が立ち、いろいろな武器を携えて戻ってくるテイオナ。

「お待たせ！私はこれを使うけど、アイクはどうする？色々持ってきたけど」

テイオナが手に取った武器は大双刃剣。アイクが手に取ったのはアイズとの手合わせに使ったものよりも大きい両手剣だ。

それを片手で軽々と振り回し感触を確かめる。

「俺はこれで行く。どこからでも来い！」

「はああああー！！」

上段から切りかかって来たものを剣で受け止める。そのまま下からの攻撃が来た。それをバックステップをして躲す。

「戦いづらいな、そんな武器を使っている奴は初めて見たな」

「まだまだ行くよー！！」

上段、横薙ぎ、時折挟んでくる体術。最初は対応しきれずに距離を大きくとっていたアイクも慣れ始めた。最小限の動きで剣を躲し、体術には腕や足で受け止め隙をついて

攻撃を加える。その攻撃はティオナの剣に阻まれたが、ティオナは大きく後ろに吹き飛ばされる。

着地した瞬間を狙って切り上げる。ティオナは大きく後ろに飛び着地した勢いのままアイクに切りかかる。

「力任せに剣を振り過ぎだ。もう少し技の正確性を磨いてみる」

「ふうっ！はあっ！せい！」

ティオナは攻撃を続けるが動きを完全に見切ったアイクに掠りもしない。ティオナはアイクの足を狙い姿勢を低くしアイクの足元を刈り取る。アイクは飛んで躲しそのままティオナに空中から切りかかる。

ティオナはアイクの斬撃を受け止めるが、アイクの力と空中から落ちてくる力を加えた斬撃にティオナの武器は耐えられずに砕け散る。

武器を失ったティオナに袈裟切りを喰らわせる。刃引きされた剣なので切れることは無いが、衝撃に吹き飛ばされる。

「参った……」

第八話

「『怪物祭』?」

「そうそう、今日がそのお祭りの日なんだけど、アイクも一緒に行かない?」

『怪物祭』は『ガネーシャ・ファミリア』が主催している祭りで、コロシウムでダンジョンのモンスターを調教している様を一般の人々に見せるお祭りだ。その他にもメイン通りには屋台などが多数出店される。

連日のリヴェリアのスパルタ勉強会のせいで心なしかゲツソリした雰囲気になっていくアイク。今まで勉強などまともにしてこなかったというのと、リヴェリアの指導方法がスパルタということもあり、現在意気消沈している。

「私たちこの前の遠征で武器壊されちゃったでしょ? だからダンジョンにも行けないし折角のお祭りだし、どう?」

「そうはいつでも俺は一文無しだぞ? ダンジョンに潜つてもいないし、今は傭兵としても活動していないから金を手に入れる手段が無いからな」

「大丈夫だって! どうせダンジョンに潜ればすぐにお金なんて稼げるんだから。今日は

私が出すからさ！ねく行こうよー」

「分かったから離してくれ」

「うん！じゃあ外で待つてるからね！」

テイオナとその場で別れ、念のためラグネルを背負い外へ行くアイク。今日の『怪物祭』で何が起こるかはまだ誰も知らない。

* * * * *

とある喫茶店の一画で二人の神が会合をしていた。

一人は『トリック・スター』ロキ。もう一人は『美の女神』フレイヤ。フレイヤの方は質素なローブを身に纏っている。自分の姿を隠さないと下界の子供たちは彼女に魅了をされてしまうため、姿を隠す必要があるのだ。

ロキの後ろにはアイズが控えており、フレイヤの後ろにはオラリオ唯一のレベル7のオツタルが控えていた。

アイズとフレイヤは合うのが初めての為挨拶もそこそこに、フレイヤはロキに気になっっていることを聞く。

「ねえロキ、あなた最近変わった子を見なかったかしら？」

「変わった子？どういうことや？」

「偶然、バベルの天辺から見えたのだけれど。あの子の魂の大きさは通常の子供たちと

は比べ物にならない。それこそ、私たち天界の神々が力の全てを授けても正気を保って
いられるほどの」

「アイクのこと……?」

「これ、アイズ、余計なこと——」

「アイク?まさかお伽噺の?そんなの有り得ないでしょう。仮に本当に彼がこのオラリオに居たら、今頃オラリオはパニックになっているわ。それこそ『怪物祭』なんかやつてる場合じゃないでしょう?」

「そ、そんなわけないやん……神殺しをした英雄なんか居たら、全ての神が協力して潰しにかかるやろうな」

動揺を表に極力出さないように努める。しかし欠片でも出してしまふことはこの場合悪手だ。フレイヤはその動揺を見逃さない。

「ロキ、あなた何か知っているんじゃないの?」

「知らへんつてことにしておいたほうがええで。それがお互いのためにもなるし、オラリオにいる神々のためにもなるんや」

「つまり、あなたのファミリアにいるつてことでもいいのね?」

「他言無用にしとき。それがお互いのためや」

「ふふつ……ええ、そうね」

「ほんま分かつとるんやろうな？」

「分かつているわよ。それともう一人、面白い子がいたのよ」

「今度はなんや？」

「見つけたのは偶然。ちようどこんな風に——」

フレイヤが外を見ると白い髪少年が走り去っていく。その様子を見たのはフレイヤのみだ。

「ごめんなさい、少し用事が出来たわ」

「あんまり問題起こさんといてな？」

「ええ、大丈夫よ。行くわよ、オツタル」

喫茶店でロキと別れる。喫茶店を出てしばらく、闘技場へと向かう道すがら。

「ねえオツタル。本当にお伽噺の英雄が居たらどうする？」

「フレイヤ様に害をなすものならば、いかなる手段を持つて排除いたします」

「うふふ。ねえオツタル、少し彼を探してくれないかしら？恐らくこのお祭りに来ているわ。彼の気配、どこからか感じるわ」

「はっ」

「見つけたら少しちよつかい出してきてほしいのよ。そしてできれば、私の所に勧誘もね」

「了解しました」

「もう一人の方は私がやっておくわ。護衛は大丈夫よ」

フレイヤは『怪物祭』で調教をされているコロシアムの裏口へと回る。そこにはダンジョンで捕獲してきたモンスターが檻に入っている。

「生まれ！どこから入って来た！」

檻の前に立っていた『ガネーシャ・ファミア』の眷属の前でロープを取る。フレイヤの美しさの虜になってしまった彼は眼の焦点が定まっていない。

門番の懐から鍵を取り出しシルバーバッグの檻の前でロープを外しモンスターを魅了する。

「お願いね」

シルバーバッグは咆哮を上げ檻から市街地へと出て行く。他にも檻に入っているモンスターを魅了し檻から解き放つ。

* * * * *

テイオナ、テイオネ、レフイーヤと共にコロシアムでモンスターの調教を見学したアイクたちはコロシアムから出てきて、屋台などで店を回っていた。

すると突然街中で咆哮が鳴り響く。

「今の、モンスターの声ですか？」

「どうして街中に？モンスターたちは『ガネーシャ・ファミリア』が嚴重に管理しているはずなのに」

「とりあえずギルドへ向かうぞ。この状況に対処せねばならないだろう」

四人はコロシウムからギルドへと向かう。ギルドに向かう道すがら、ギルドの受付嬢のエイナに出会った。

「エイナか、今の状況はどうなっているんだ？」

「アイク様？『ガネーシャ・ファミリア』が捕獲したモンスター九体が街中に誰かの手によつて解き放たれました。現在ヴァレンシユタイン氏が討伐に向かっています」

「なんだ、アイズが動いてるんならもうすぐ片付くだろうね」

「私たちの出番はなさそうですね？」

気を抜いたのも束の間、モンスターがいるであろう街中とは逆の方向に別のモンスターが出現した。突然のことにギルドに避難していた一般人もパニックを起こしかける。

「何あれ!?あれも『ガネーシャ・ファミリア』のモンスター？」

「そんな事は後よ!あれを倒さないと、テイオナ、レフィーヤ、行くわよ!」

「うん!」「はい!」

「俺も後で向かおう、街中にまだ一般人がいるかもしれない」

「分かったわ、なるべく急いでね」

アイクはティオネたちが走り去っていった方向へと歩き出す。路地裏へ入ったかと思うとおもむろに足を止め剣を抜く。

「そこにいるのは分かっていいる。姿を現したらどうだ?」

前を向いたまま声を発する。家の陰からは大剣を背負った猪人が出てくる。

「お前がアイクか?」

「ああ」

「いつから気付いていた?」

「コロシアムを出たところだ。常に周りを警戒しておかないで傭兵団の団長は務まらない。お前は何者だ?」

『『フレイヤ・ファミア』のオツタルだ』

「オツタル……?どこかで聞いたな……」

「すまないが、これもフレイヤ様からの命令だ。悪く思うなよ」

オツタルは背負った大剣を抜きレベル7の敏捷を以ってアイクに特攻してくる。ここにレベル7、『猛者』オツタルとレベル8、『蒼炎の勇者』アイクとの一騎打ちが始まった。

第九話

路地裏でのアイク対オツタルの戦いはアイクの勝利で幕を閉じる。町のとある一角は二人の戦闘によって崩壊していた。それだけ彼らの戦闘が激しかったことを物語っている。

オツタルは仰向けに倒れ胸を激しく上下させ少しでも酸素を取り込もうとしている。身体の内たるところに切られた傷があり、出血も激しい。

一方のアイクは目立った外傷もない。うっすらと汗をかいているが、それだけだ。

「待……………」

「どうした、まだやるのか？」

「何故、俺を、殺さない…………？」

「俺にはお前を殺す理由が無い。無駄な殺生を控えるのは当たり前だろ」

「また、挑んでも、いいか…………？」

「ふっ、いつでも——誰だ？」

アイクは話していたオツタルから視線を外し、気配を感じていた方向に視線を向け

る。崩壊した瓦礫の物陰からは出てきたのは貧相なローブを纏った女性だろうか？

「あら、オツタル。負けてしまったの？」

「申し訳ありません……フレイヤ様……」

「フレイヤ？それがお前の正体か？」

「あら？だつたらどうするの？ここで私を殺すのかしら？」

「モンスターが解き放たれたタイミングで俺を足止めしてきたっていうことは、モンスターを解き放つたのはお前か？」

「ええ、そうよ。モンスターを解き放つたのは私。で、どうするの？」

「どうもしない。ここでお前を殺したところで起こつてしまった結果は変えられない。それよりも、なぜこのようなことをした？」

「とある子が欲しいのよ。でも今のままでは足りないわ。だから、これはあの子への試練。強くなったところで貰い受けるとしましょうか。ねえ、あなたも私のものにならない？」

アイクの元へと歩み寄りながらローブのフードを外す。フレイヤの輝かしい美貌が露わになる。これだけで下界の子たちは魅了されてしまう。

「断る。誰のものというわけではないが、今の俺の雇い主は『ロキ・ファミリア』だ」

雇い主というのは嘘である。アイクがお伽噺で傭兵をやつたことを逆手に取つた

嘘なのだが。

「嘘ね。あなた、嘘を付いたわね」

「……ああ、雇い主というのは嘘だ。単に拾ってもらった恩がある。その恩を仇で返すわけにはいかんだろう」

「うふふふ、ますますあなたが欲しくなってきたわ。その魂の大きさは下界の子たちの中でも一線を画する。私の力をすべてあなたに授けたとしてもきつとあなたは平然としているのでしょうかね？」

「さあな。もしかしたら暴走して、お前を殺してしまうかもしれん」

その一言に、倒れていたオツタルが急に起き上がりフレイヤを庇う様に大剣を構えたまま立つ。

そのオツタルを手で制してフレイヤはアイクとの会話を続ける。

「今のあなたでは私は殺せないでしょうね。あなたがアスタルテを殺せたのは、『負の女神』ユンヌの力を借りてのものでしょうか？今の生身のあなたでは、私に傷を与えることはできません、殺すことは叶わないわ」

これは嘘だ。天界の神々は下界に降りてきた時点で肉体の強度は『神の恩恵』を受けていない下界の子供たちと同じ。武神などは身体能力や培ってきた技術で下界の子供よりも強いものはいるが、フレイヤは武神でもない。肉体強度は下界の子供たちと何ら

変わらない。

「このことを知らないアイクはそれを鵜呑みにする。」

「話は終わりか?」

「ええ、また会いましょう? ああ、一つお願いがあるのだけれど、ダイダロス通りにいるモンスターは倒さないで頂戴。あれはあの子に対する試練なのだから」

「はあ……分かった。そのかわり一つ聞いていいか?」

「何かしら?」

「植物型のモンスターを解き放ったのはお前か?」

「植物型のモンスター? いいえ、そんなモンスター知らないわ」

「そうか」

一言だけ返事をしアイクはその場を走り去っていく。フレイヤとオツタルのみが取り残される。

「帰ったら治療しなくてはいけないわね」

「申し訳ありません……」

「ねえオツタル。彼、私に魅了されなかったわね」

「はい」

「何でかしら? やっぱり魂の大きさがそれだけ大きいと、私の力も通じないということ

かしら？それとも神の力を無効化する力でも備わっている？……まあいいわ、帰りましょう」

「はっ」

* * * * *

花型のモンスターとティオネ、ティオナ、レフィーヤ、途中から殆どのモンスターを粗方討伐し終えたアイズが戦っている。

ティオネとティオナは現在武器を持っていない。そのため素手でモンスターと対峙している。

モンスターの蔦をティオナが素手で殴りつける。しかし蔦の方はびくともせず、殴りつけたティオナの方がダメージを受けていた。

「痛ったーい！なにこれ固すぎだよー」

「打撃じゃ罅が明かないわね。レフィーヤ！魔法の準備！私たちは足止めよー」

「了解（です）！」

アイズが風を纏った剣で蔦を切る。しかし切ったところからすぐに蔦が再生してしまふ。

ティオナとティオネは少しでも自分たちに気を逸らすため素手で蔦を殴り続ける。

「【解き放つ一条の光、正木の弓幹。汝、弓の名手なり】」

三人が戦っている間にレフイーヤは魔法の詠唱に入る。速度重視の短文詠唱、通常よりも威力は落ちてしまうが速攻で決めたいときは仕方がない。

「狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢!」

詠唱が続き魔力を集中させる。しかしモンスターのヘイトがレフイーヤへと向いてしまう。

攻撃してきている三人を振り切り、触手を地面から伸ばしレフイーヤの腹を貫通する。

魔法の詠唱に集中していたレフイーヤは回避できない。倒れたレフイーヤを捕食するためか、花卉が開き、無数の牙が生え揃っている。口腔の奥には黄土色に輝く魔石が見えた。

「レフイーヤ!」

「こんの!」

ティオナとティオネは自分たちに気を逸らすために、アイズはレフイーヤを貫いた触手を切るために風を身体に纏う。

アイズが触手を切り魔石を破壊するために剣に風を纏い攻撃する。しかしアイズの風と激しい剣戟に耐え切れなかった剣は花卉を攻撃した時点で碎け散ってしまう。

アイズはモンスターの触手で吹き飛ばされてしまう。モンスターはレフイーヤから

アイズに標的を変更したようで、アイズの方へ触手を伸ばしていく。

「アイズ！」

触手がアイズに触れようとしたところでその触手とアイズの間で割って入った人影があった。蒼い髪にマント、黄金の両手剣でアイズを捉えようとした触手をすべて断ち切った。

アイズを肩に担ぎモンスターから距離を取る。

「アイク！」

「もう、遅っいー！」

「すまん、オツタルと戦っていてその後フレイヤに捕まっていた」

「オツタル!? 『猛者』でレベル7の? それにフレイヤって……」

「その話は後だ。テイオネ、こいつで最後か?」

「ええ、でも打撃は効きづらいし、鳶は切っても切っても生え変わってくるし」

「頼みの綱はフレイヤなんだけど、フレイヤもやられちゃって」

倒れているフレイヤの側へと移動し、息があるかの確認をする。微かにだが、まだ意識も保っているようだ。

「……アイク……さん……?」

「ああ、無事ではなさそうだな。俺が時間を稼ごう。アイズ、フレイヤにポーションを

飲ませてやってくれ。ティオネとティオナは俺と一緒にあいつを食い止める。レフィーヤは動けるようになったら魔法を頼む」

「でもあいつ、魔法を使おうとしたらレフィーヤが狙われたんだよ?」

「俺が全力で守ろう。それでも不安か?」

「いいえ、これほどに頼もしい俺が守る宣言は初めて聞いたわ」

「ふっ、そうか。では行くぞ!」

アイズとティオネ、ティオナはモンスターの元へ走り出す。モンスターはアイクたちに鳶を鞭のように振るい攻撃をしてくる。アイクはその鳶をラグネルで切り捨てる。

ティオネとティオナはモンスターの周りを走り回りモンスターの意識をアイクに向けさせ過ぎないようにする。

アイクはラグネルを叩きつけ衝撃波の斬撃で花卉を狙う。本能的に危険と察知したのか、鳶をすべて防御に回し斬撃はギリギリ魔石の間では到達しなかった。

「ウィーシエの名の元に願う。森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ。走れ、妖精の輪。どうかー力をお貸し与えてほしい!」

アイズに肩を借りて立ち上がるレフィーヤは魔法の詠唱をしている。

「【エルフ・リング】!」

『エルフ・リング』レファイヤーのみが使える魔法。エルフの魔法に限って、詠唱とその効果を完全に把握していれば使用できるといふ前代未聞のレア魔法だ。

【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏の前に風を卷け】

テイオネとテイオナを狙って突き出された鳶を空中で身を翻して回避する。

【閉ざされる光。凍てつく大地】

アイクに向かって振るわれる複数の触手をすべて切り捨てる。

【吹雪け、三度の厳冬——我が名はアールヴ】

魔力を集中させたレファイヤーに向かって地面から突き放たれた鳶を、アイクが全てきり払う。

【ウイン・フィンブルヴェトル】!!

その魔法は妖精の王、リヴェリアが使う魔法。オラリオ最強の魔導士が使う絶対零度の凍結魔法。

その魔法により凍らされたモンスターは完全に動きを止める。口腔の奥にあった黄土色の魔石をアイクが破壊しモンスターは灰へと姿を変えた。

レファイヤーは精神力枯渇、回復しきっていないダメージ、極度の緊張から解き放たれ気を失ってしまった。

「おーい、大丈夫かー?」

ロキとギルド職員のエイナが戦闘が終わったところに駆けつけた。

「町に解き放たれたモンスターはすべて討伐されました。『ロキ・ファミアリア』の皆様、ご協力ありがとうございました」

エイナは頭を深々と下げお辞儀をする。ロキを含めてここに居るメンバーの視線がアイクに向いていた。アイクが代表して答えろということだろう。

「頭を上げてくれ。そういうお辞儀とか敬語とか、そういう貴族の嗜みとかは性に合わない。背中がむずむずしてくる」

アイクが言い放った一言にエイナは頭を上げポカンとした表情を浮かべる。

その場にいたメンバーからは思わずといった形で笑いがこぼれる。

こうして長い『怪物祭』の一日は終わりを迎えた。

第十話

「ダンジョンにか？」

「そうなんだ。この前の遠征で何人か武器を駄目にしてしまつてね、それで武器の補修を頼んだんだけどその値段が存外高くてね。それと、うちのファミリアの備蓄も遠征前に比べると少し少なくなつてきてね。アイクも今はお金が無いだろ？ダンジョンで稼いだ金額のうち何割かは上げるから、一緒にどうだい？」

団長であるフィンが自らアイクに声をかける。つまりはお願いと名目上の命令ということだろう。

それにアイクの懐事情はいまだ無一文。基本的にリヴェリアのスパルタ教育を受けて、外出する気力が無いのでお金を使うことは無いが、有つて困るものではない。

傭兵団をやっていた頃は仕事が無いときなんかは本当にお金が無かつた。そのため若干貧乏性になつている部分は否めないが、いざという時のために先立つものは必要だろう。

「分かつた。今からか？」

「うん、準備が終わつたら正門まで来てくれ」

「了解した」

「と言ってもアイクが準備するものなどはあまりない。鎧、肩当てを付けてラグネルを背負うだけだ。」

「正門まで行くとフィンの他にリヴェリア、アイズ、ティオナ、ティオネ、レフイーヤが待っていた。」

「すまない、待たせてしまったようだな」

「いいや、むしろ時間がかからなさ過ぎてるけど、まああなたなら大丈夫だろう」

「特に号令をかけることもなくフィンを先頭にダンジョンへと向かい歩き始める。」

「あの、アイクさん！」

「レフイーヤか？どうかしたか？」

「い、いえ！この前の『怪物祭』助けてくれてありがとうございます……あのままアイクさんが来てくれなかったら、私あのまま——」

「俺の方こそ悪かった。もつと早くそっちに向かうべきだったな」

「『猛者』とフレイヤ様に絡まれていたんですよね？それなら仕方がないですよ。それよりも『猛者』と戦って勝ったことが驚きです」

「あいつはそれなりに強かったな。ただ、いつも手合わせをしていたうちの団員の方が厄介だったな。力で押ししてくるあいつは、まだ対処がしやすかった」

「アイク、その団員って誰？女の子？」

「ああ、年はアイズと同じくらいか……暇さえあれば俺と戦いに来てたな。あいつの技の正確さと速さには苦勞させられていたな」

「私とその子、どっちが強い？」

「今の段階ではあいつだな。ただこの先どうなるかは分からんな、それに今のあいつの実力も分からんからな。ただ相当強いぞ。一緒にアスタルテを倒しに行ったメンバーに入ってたからな」

この時、彼女の話をしたことが後々のフラグになるのだが、この場にいるメンバーには知る由もない。

* * * * *

「うりゃあああー！」

ティオナが新調されたウルガを振り回しモンスターの次々と灰に変えていく。ここまでフィン、リヴェリア、アイクは何もしていない。

「うーん、やつぱり手ごたえが無いなあ……」

「浅層じゃ仕方がないわよ。それよりも先に進みましょう」

今はまだ浅層。彼らトップレベルの冒険者からしたら手ごたえが無いのは仕方がない事だ。

「とりあえず18階層のリヴィラの町で休息を取ろう。それより深く潜るのはその後でも構わないからね」

17階層の階層主、ゴライアスも他のパーティーが倒した後のようでもまだ湧いていない。一行はそのまま18階層に到達する。

18階層はモンスターが湧かない階層であるため、ダンジョン内に町が存在する階層だ。ただしその街で買い物をするのと法外な値段を吹っ掛けられるためこの街で買物をする冒険者は限りなく少ない。

リヴィラの町の様子がおかしい。『ロキ・ファミリア』の一行が来てからというもの、自分たちが避けられているらしい。

「団長、何かあったんでしようか？」

「分からない、何かあったのは確かだろうけど。とりあえず情報収集をしようか」

町の一角へと歩みを進めていく。情報収集をするために歩いていると突然宿屋から男性が出て来た。

「ボールス！」

ボールスと呼ばれた男性はこちらを見ると目つきを鋭くしてくる。

「おい、これをやったのはお前たちか!？」

「これとはいったい何のことだい？」

「殺しだよ。この宿屋で人が殺されていたんだ」

突然出てきた殺しという言葉に一名を除いて息を呑む。アイクは一步前出てきてボールズに話を聞こうとする。

「殺し？誰が殺されたんだ？」

「ああん？見かけない顔だな……：新人か」

「一応な。それで殺された人物というのは」

「この中だよ。誰かに頭を潰されてやがる」

「ここに居たということは冒険者だろ。誰かステータスを見れる奴はいないのか？」

ステータスを見ることができればその者の名前、ファミリアなどの身元は判明する。しかしステータスにはほとんどの場合主神によるロックが掛けられており、特別な薬品を使わないとみることができない。

さらに背中に刻まれているステータスは『神聖文字』で書かれているため、『神聖文字』を解読できなければ意味が無いのだが。

「私が見よう。案内してくれ」

リヴェリアが名乗りを上げる。この中で満足に『神聖文字』を読めるのはリヴェリアのみだ。アイズは少しは読めるらしいのだが。なおアイクは全く読めない。

「ちっ……ちっただ」

ポールスは出てきた宿屋を指さし、先導するように歩みを進める。とある一室を開けると中には顔に布をかけられうつ伏せに倒されている死体が転がっていた。

その者を指さしこいつだと呟く。人の死体を見慣れていないレフイーヤは思わずといた風に見開いていた。

ポールスはステータスのロックを解除する薬品を懐から取り出し、死体の背中に振りかける。隠されていたステータスが浮かび上がり、リヴェリアがそれをのぞき込むように上から眺める。

『ハシャーナ・ドルリア』、『ガネーシャ・ファミリア』、『レベル4』

「レベル4!？」

オラリオにはレベル4以上の冒険者はそう多くは無い。最も多いのは『ロキ・ファミリア』か『フレイヤ・ファミリア』のどちらかだろう。

しかし『フレイヤ・ファミリア』の眷属たちはあまりダンジョンに潜らない。最も疑われるのはここに居る『ロキ・ファミリア』だ。

「お前らか!?!お前らがやったんだろう」

「言いがかりは止せ、俺たちがやったという証拠もないくせにあまり大きな声で叫ぶな」
「うるせえ!新米冒険者風情が!それでもねえと説明付かねえだろ!?!レベル4をいとも簡単に倒せるのなんかここではレベル5以上の冒険者だ!」

「そいつが殺されたのは昨日だろ？俺たちは昨日はダンジョンに潜ってはいない」

「ここに居る奴らじゃなくても、誰か違うやつがやったんじゃないか!?」

「そう言えば俺、あいつが女と入っていくのを見た」

やじ馬から目撃情報上がる。もっと早く言えと思わざるを得ない。

「女だど?ということはお前か?お前か?それともお前か!?お前は……無いな」

リヴェリア、アイズ、レフィーヤの順に視線を向けて行き、ティオナに視線を向けたところでこの言い種である。

「ちよつとーどこ見て言ってるのよ!」

暴れ出すティオナを後ろから羽交い絞めするティオネ。そのティオネのとある部分を眺めながらボールスは鼻の下を伸ばしている。

「お前は……ありそうだな」

「ああん!?私が団長以外のやつに触れさせるかっつうの!?ぶっ殺すわよ!」

今度はティオネをティオナが抑える。

「あはは……ご覧のとおり、彼女たちに男を誘惑するのは不可能だよ……」

フィン は頭を押さえながら呟く。リヴェリアとレフィーヤはエルフだ。認めた異性以外の肌の接触を極端に嫌う種族だ。さらにレフィーヤの場合は性格的に不可能だろう。アイズの場合はそう言ったことを全く知らない。双子の姉妹は今の反応からわか

るとおりだ。

「この部屋、そして彼の荷物の荒らされ具合からして、こいつが持っているものを探したけど見つからずに、痲癩を起こしたってことか？」

「……仮にそうだとしたら、この犯人はまだこの町の中にいる。殺してまで手に入れたものがあつたんだ、そう簡単にあきらめないだろう。ボールス、急いで町を封鎖するんだ。そして冒険者を一か所に纏めてくれ」

リヴィラの町のとある一角に、冒険者たちは集められた。集められた冒険者たちは『ロキ・ファミリア』の冒険者の手によって身体検査をされている。

しかしそこにアイズとレフィーヤが見当たらず、アイクは辺りを見渡すが視界に入る限りはいない。

「フィン、アイズとレフィーヤが見当たらないが」

「……そのようだね」

フィンも辺りを見渡すが姿は見えない。

すると突然冒険者が集まっているところ町の一角にモンスターが出現する。それは『怪物祭』でアイクたちが対峙したモンスターと同じ、花型のモンスターだ。

第十一話

突如リヴィラの町に姿を現した食人花。リヴィラの町の家屋から突き破り姿を現したそれは『ロキ・ファミア』のメンバーによつて次々と倒されていく。

戦えない冒険者は我先にと逃げますが、中には突然のモンスターに恐怖しその場へたり込んでいるものもいる。

「ひ、ひいいいいー！な、なんなんだよこれは!？」

その場へへたり込んでしまったボールス。そのボールスに食人花の触手が襲い掛かる。ボールスは自分の死を幻想した。そのボールスの前に人影が滑り込み、ボールスに向かつて放たれた触手を次々と切り払っていく。

「大丈夫か？」

「お、お前は……!？」

「戦えるのなら武器を取れ、そうでないのなら避難しろ」

「お前新米なんじゃ……」

「冒険者とやらに關しては新米だな。だが、戦闘経験だけはお前らには負けるつもりはないな。それで、避難するのか？」

「あ、ああ……すまん、任せてもいいか？」

頷き、敵へと向かうアイク。空中へと身を躍らせ、花卉の部分を切り裂く。食人花は灰へと姿を変える。

家屋の上上がりリヴィラの町全体を見渡す。戦況が厳しそうな所へ移動しようとしたところでフィンが来た。

「このタイピングでこれだけ多くのモンスター……敵に調教師でもいるのか？」

「調教師？」

「モンスターを調教師、使役させることができるのさ。そういう人たちのことを調教師と呼ぶ」

「つまりその調教師を殺せばこいつらはおとなしくなるのか？」

「それは分からない。この前の報告を見たんだけど、あいつらは魔石の色が通常のモンスターとは違うみたいだ。通常のモンスターと同じに考えるのは、楽観視しすぎている」

「ならばすべて倒すまでだ……おい、あれは何だ？ 一体のモンスターの様子が何か変だ」「何だつて？」

一体の食人花から人が生えてくる。そのモンスターは地上に向かって体から触手を打ち出している。

アイクはその触手から逃げる人影が三人分確認する。

「あれは、アイズとレフィーヤか……もう一人は分からんが」

「アイズとレフィーヤがあそこに？ アイク、みんなを連れてあいつの元へ向かう。先に行つて足止めをしてくれないか？」

「分かつた」

家屋から飛び降り異形のモンスターの元へと向かう。向かう途中にも、レフィーヤたちは逃走を続けている。

異形のモンスターは絶叫を上げながら触手を打ち出し続ける。向かつてくる触手を切り続けるが、切つたところでまたすぐに生えてきてしまう。

斬撃を飛ばし、本体を狙つたが身体からはやした触手を盾にして、アイクの斬撃は通らなかつた。

（以前戦つたやつより硬いのか……）

ティオナとティオネが合流し触手を切り裂いていく。フィンもリヴェリアを引き連れて合流しもスターの触手を切り払っていくが効果は薄い。

アイズも合流しようとしたが、先ほど戦つていた赤髪の女性に足止めを食らつていた。

遠くから魔力が昂っているのを感じられる。リヴェリアが魔法を詠唱しているよう

だ。

モンスターはリヴェリアの方へ進んでいくが、リヴェリアの詠唱が止まると同時に歩みを止めて辺りを見回す。

「レファイヤ、今だ！」

「——雨の元に降り注ぎ、蛮族どもを焼き払え！」

リヴェリアの詠唱を囀とし、離れたところからレファイヤが魔法の詠唱を行っていた。魔法に反応するモンスターの修正を逆手に取った見事な連携だ。

「ファイゼレード・ファラーリカ！」

炎の矢がモンスターへと降り注ぎ、爆炎をもたらず。煙で回りが見えないが、あれほどの魔法を受けて無事だとはとても思えない。

みんなが気を緩めたところで、モンスターが煙のうちから姿を現し壁を昇っていく。

「あ、逃げた！」

モンスターが壁を昇っていくのをティオネとティオナが追いかける。モンスターは壁を昇り続けるが、やがて二人はモンスターに追いつきティオナが魔石ごとモンスターの撃破する。

「馬鹿ティオナ、魔石ごと破壊してどうするのよ」

「…………あ」

ひとまずモンスターの方は片が付いたようだ。

しかしアイズの方はまだ決着が着いていない。アイズは風を纏いながら戦っているが、それでも押し負けている。相手のレベルは6相当。今のアイズでは少々厳しいようだ。

敵の蹴りがアイズの鳩尾に入り、クリスタルを破壊しながら壁へと吹き飛ばされる。頭からは血を流しており、あまりのダメージにアイズは身動きを取れない。

足元に落ちていた剣を足蹴にし、とどめの拳を振り上げる。

(動いて……動いて……！動いて！)

念じるが体は動かない。敵がとどめの拳をアイズに当てる直前、フィンとリヴェリアがアイズの前に立ち、槍と杖をクロスさせ拳をガードする。

「うちの姫君に手出しをさせるわけには」

「行かないんだ」

フィンはそのまま戦闘へ、リヴェリアはアイズの元へと駆け寄り無事を確認している。

リヴェリアとレフィーヤがアイズを治療している間、フィンは女性との剣を交えていた。

「君がモンスターを使役していた調教師か」

槍を突き出しながら女性へと問いかける。

「お喋りとは、余裕があるな」

拳を握り、フィンに肉薄する。

「何、君ほどじゃない」

上体を逸らし攻撃を躲す。槍で顔を狙うが敵は顔を後ろに背け躲す。そのままもう一度一突き、相手の頬掠め血を流す。

相手の拳がフィンの槍を真つ二つに砕く。しかしフィンは動揺せず、懐に持っていたナイフで敵の胸を切り裂く。

間一髪で躲すが、相手の体制は崩れたままだ。

「一つ忠告をしてあげよう、僕の相手に集中しすぎて周りの注意を疎かにしないことだ」
「何を言つて——」

フィンに問いかけたところで斬撃が飛ばされる。アイクは剣を叩きつけ、手にぶら下げたまま距離を詰め、横薙ぎにする。

女性は吹き飛ばされ、起き上がってくる気配はない。

「ありがとう、助かったよ」

「全く、出てくるなど言われたときは流石にどうしたもんかと正気を疑つたぞ」

「そのおかげで最高の一撃を加えられたじゃないか」

「いや、どうやらまだ動けるようだ」

「……へえ」

口にたまった血を吐き出し、肩を回しながらこちらに歩みを進めてくる。

フィンはナイフを構えアイクはラグネルをぶら下げたままだ。治療が終わったのか、リヴェリアたちと、テイオネたちも合流し形勢は一気に傾いた。

「今の攻撃、レベル6を超えているのか？レベル7……このままでは分が悪いな」

「こちらに背を向け逃走の姿勢に入る。アイズは身に風を纏い敵を追いかけるが、逃げられたらしく、少し経つとこちらに戻って来た。」

第十二話

リヴィラの町の騒動から六日、『ロキ・ファミリア』の一行は現在37階層まで潜っている。

37階層に到着してすぐ、休憩がてらリヴィラの町で起こった騒動についての会話が行われていた。

「ここまで来たが、今は何の手がかりも無し……か」

「犯人には逃げられたけど、暫くはおとなしくしているんじゃないかな？ あれだけのモンスターを調教するのもそれ相応の時間がかかるだろうしね」

「モンスターの調教ってどうやってやっているんだ？」

「あれ？ 『怪物祭』を見に行つたんじゃないかな？」

「あの時見たのは動物のモンスターが主だったからな。植物型のモンスターも同じなのか？ それに、ここまで潜ってきてあの町で出てきたモンスターには一度も巡り合つていない」

「基本は同じじゃないかな？ 植物型のモンスターを調教している調教師を見たこと

が無いから何とも言えないけど」

「あの人が人を殺してまで手に入れたかったあの宝玉は一体何だったんでしようか？」

「うーん、気になることはたくさんあるけど、今は手の打ちようがないね」

「そうだな」

フィンに相槌を打ちアイズの方を見るリヴェリア。あの騒動の負けからアイズは何かを抱え込んでいる様に、周りとの会話を避けている印象がある。

休息が終了ししばらく探索を続けると、大きなホールに出た。ホールに到着するや否や骸骨のようなモンスターがわらわらと湧き始める。

各々が武器を構え戦闘態勢に入るが。

「私が行く」

我先にとアイズが突貫してしまう。皆がその光景に呆けているとあつという間に湧き出てきたモンスターを倒しつくしてしまった。

「結局一人で倒しちゃったし」

「少しは苦戦してくれると可愛げがあるんだけどね」

物足りないと言った表情を浮かべたままこちらに戻ってくるアイズ。彼女にしては珍しく表情を顔に出していた。

「お疲れー！ポーションいる？それともハイポーション？エリクサーかな？あつ！お腹

すいちやつた？」

ティオナが戻ってきたアイズに怒涛の質問攻めをしている。その質問攻めにアイズは眉一つ動かさない。

「フィン、リヴェリア。アイズはあれで良いのか？」

「あまり良いとは言い難いね。ここ最近の彼女は少し無茶をし過ぎだ」

「良い訳がないだろう。今回は無事だからよかったものの、ここまで深い階層で一人突貫するのは自殺行為でしかない」

アイクにはまだダンジョンのモンスターのレベルがよく分かっていない。しかし一人で無茶をすると碌なことにならないのは、今までの経験上知っていた。

最たる例はやはりグレイル、アイクの父親だろう。

あの時の漆黒の騎士は女神の加護を受けた鎧を着ていたのと、彼の實力ではグレイル傭兵団総掛かりで挑んでも鎧袖一触されていただろうが、それでも一人で挑んだことは間違いだったと思っっている。

今回は良かったもののこれが続くようなら、遠からずアイズは命を落とすかもしれない、そう考えていた。

「これからどうする、フィン？」

「そろそろ帰ろつか。ロキに報告したいこともあるし。……食料も心許無くなってきた」

た」

アイクの方を見ながらフィンが呟く。もう少し潜れたかもしれないが、残りの食糧ではそう長くはもたない。その筆頭がアイクなのだが……

「分かった。お前たち、帰還するぞ」

「「はい」」

ただ一人、アイズは返事をしない。この時点でアイクは少し嫌な予感がしていた。

「フィン、リヴェリア。私一人だけ、もう少しだけ潜らせて。食料も要らないから。皆には迷惑はかけないから、お願い……」

「ちよつとアイズ……本気じゃないよね……？」

「深層に仲間を一人置いていくことなんてできないわ、危険よ」

「うーん、あんまり許可は出したくないけど、駄目って言っても聞かないんだろ？」

「……」

「はあ……だったら、リヴェリアとアイク。一緒に行ってくれるかい？」

「フィン!?」「団長!」

「フィン、良いんだな？」

「ああ、君たちが一緒なら間違えは起こらないだろう」

「これは命令か?それとも……依頼か?」

「アイク、お前何を——」

『ロキ・ファミリア』の冒険者アイクに対する命令か、『グレイル傭兵団団長』アイクに対する依頼か、どちらだ？」

「……依頼しよう、『グレイル傭兵団団長』アイク殿。アイズとリヴェリアを無事、連れて帰ってきてくれ」

「報酬は？」

「この先手に入る魔石の全てを報酬としよう。それで受けてくれるかい？」

「その依頼、受けよう」

* * * * *

「アイク、さっきのは一体何のつもりだ？」

「何のつもりというのはどういふことだ？」

「なぜあのような回りくどい事をした？」

「どこまで潜るかは知らないが、アイズとリヴェリアなら恐らく二人でも問題ないだろう。それに俺は冒険者である前に傭兵だ。傭兵には傭兵としての誇りがある」

それに、と続ける。

「親父から受け継いだたった二つのうちの一つだ。それは、世界が違っても変わらない」

アイクの表情は真剣そのものだ。ここで文句を言うのは筋違いだろうとリヴェリア

は判断し口をつぐんだ。

「二人とも、ごめん」

「気にするな、とは言えないな。そこまでして急に強くなりたいのは、あの敗北が原因か？」

「……」

「ま、いいだろう。これも依頼だ。報酬をもらっている以上、遂行せねばなるまい」

アイクは先に歩いていく。アイズとリヴェリアもそれに倣う。

少し歩いて行くと地面が急に揺れ出し、目の前が隆起した。隆起して来た岩の中から巨大なモンスターが現れる。

「階層主、迷宮の孤王、『ウダイオス』！」

ウダイオスはレベル6相当。ここに居る三人が協力すれば難なく倒せる相手だが。

「アイク下がつて、私が一人でやる」

剣を抜いたアイズが単身ウダイオスに挑む。アイズは相手を油断なく見据え、いつでも戦闘に入っても問題ないように構えている。

アイクはアイズの表情を見て剣を収め後ろに下がる。リヴェリアは少し不安そうにしているが、手を出すつもりはない様だ。

* * * * *

ウダイオスは拳を振り上げアイズに向けて殴りかかる。アイズはそれを後ろに飛んで躲し、動きが緩慢なウダイオスに向けて特攻する。

ウダイオスは再び空中にいるアイズに向けて拳を振るうが、空中で身を翻し躲したアイズはその勢いのままウダイオスに向けて剣を振るう。

しかしアイズの攻撃はウダイオスには通じなかった。アイズの力と剣では、ウダイオスの耐久を突破するのは非常に困難を極める。

『目覚めよ！』

アイズは魔法を発動し、その身に風を宿す。

ウダイオスはアイズに拳を振るうが、魔法で強化されたアイズの動きを捉えることはできなかった。

空中から風を利用して方向を転換、その勢いを利用して肩に剣を突き立てる。

ウダイオスは悲鳴を上げ、剣を突き刺した右腕は崩壊した。

好機と見たアイズはそのままウダイオスに突貫する。しかしウダイオスは地面から棘をはやす。

とつさの判断でアイズはウダイオスの攻撃を躲し続ける。そしてウダイオスは地中から巨大な剣を抜いた。

「馬鹿な！ウダイオスが剣を!?避ける、アイズ！」

剣を構え、地面に叩きつけるウダイオス。ウダイオスが叩きつけた衝撃波はアイクのラグネルの比ではない。

アイズは風を纏ったまま後退するが、ウダイオスが生み出した衝撃波の方が早い。

衝撃波の余波はアイクたちの方にも流れて来た。アイクは咄嗟にリヴェリアを横抱き、いわゆるお姫様抱つこの態勢を取りウダイオスから距離を取る。

「離せ！何のつもりだ!？」

「あのままでは俺たちも危なかっただろ、それに、アイズはまだ戦える」

衝撃波をもろに受けたアイズは少しの間蹲っていたが、咄嗟に起き上がり距離を取る。

ウダイオスは地面から棘をはやす。アイズは咄嗟に回避するが回避した先にウダイオスの剣が迫っていた。

自分の剣で受け空中に身を躍らせる。地面に着く直前に風を纏って衝撃を殺すが、完全に殺しきれてはいない。

「アイズ！」

リヴェリアは思わずアイズの元へ駆け寄ろうとする。そのリヴェリアの肩をアイクが掴みリヴェリアを制止させる。

「放せ！これ以上は見ていられん！」

「お前が前に出たところで何ができる。お前は魔法使いだろ？少しは白兵戦もできるよ
うだが、あれの前では無力だろう」

「それでも！それでも、アイズは助けなくてはならないだろ！」

「少し落ち着け、一人でやると言っているんだ。それに、本人はまだやる気のようにぞ
うるさい！私は！私は目の前で家族が失われるのは嫌なんだ……！」

「いい加減にしろ！」

「!？」

「過保護が過ぎる。あいつの成長を妨げるような真似はするな。それにこのような試練
は、お前が通って来た道なのだろう？」

「……」

「ならば、止めることはできないだろ。安心しろ、本当にまずい状況になったら俺が助け
に入る。あんなやつ、ゼルギウス將軍に比べたら屁でもないさ」

アイズは剣を支えに立ち上がる。アイズの瞳はまだ死んではいない。

第十三話

「目覚めよ！」

アイズが魔法の詠唱を行いその身に風を纏う。ウダイオスに向け突貫し敵の攻撃の棘を破壊する。ゴライアスは持っていた剣を横薙ぎにするがアイズは身を屈めその剣を躲し、ウダイオスに切りかかる。しかしその攻撃もやはりウダイオスの耐久の前には通じずに剣は弾かれてしまう。

着地した瞬間を狙ってウダイオスは再び地面から棘をはやす。駆け抜け、躲そうとするが敵の攻撃は少しづつアイズの身体を掠めていく。

ウダイオスは剣を持つ腕を引きアイズに向けて突きを放つ。直撃は避けるもののウダイオスの攻撃にあえなく吹き飛ばされてしまう。

それでもアイズは諦めない。

「風よー！」

今までの風よりも高密度の風を纏い、相手に突貫する。防御を捨て攻撃に全神経を集中させる。

ウダイオスの棘を躲す攻撃も持ち前の反射神経を以って躲す。しかしその棘に阻ま

れウダイオスの剣は見えなくなってしまう。

ウダイオスは棘に囲まれたアイズに向けて剣を薙ぎ払う。アイズは全神経を集中させ棘を破壊しながら放たれてきた剣を、風を纏った剣を以って迎え撃つ。

ウダイオスの剣は粉々に砕け散り、最大の攻撃手段である剣を失った。

残った刀身を以って攻撃を放とうとするが、アイズは既に空中に身を躍らせており、剣にも風を集中させていた。

『リル・ラフアーガ!』

アイズ渾身の突きはウダイオスの眉間に命中しその頭蓋に罅を入れ、その勢いのまま頭部を破壊する。その衝撃によってウダイオスの身体は崩壊した。

心臓部に残された魔石にアイズは歩みを進める。剣に風を纏わせ、魔石に向けて渾身の一突き。魔石は粉々に砕かれウダイオスはその身体を灰に姿を変えた。

こうしてアイズはウダイオス単身撃破という偉業を成し遂げた。

* * * * *

「馬鹿な……まさかウダイオスを一人で撃破できるなど……」

「信じてみるのも、悪くはないんじゃないか?」

アイズは先の戦闘による疲労でその場に崩れた。リヴェリアとアイクがそばに駆け寄りアイズの現状を把握する。

「生きてはいるようだな」

「ねえ、アイク……」

「なんだ？」

「私……これで少しは、強くなれる、かな……？」

「ああ、あれだけの激戦をこなして生き残ったんだ。この世界の『神の恩恵』とやらを抜きに考えても、今の戦闘の経験はお前の経験値となった」

「ふふ……良かった……」

その言葉を最後に気を失う。呼吸は正常なところからただ単に眠っているだけだろう。

「リヴェリア、回復薬を——！」

今の激戦が終わったばかりだ。当事者ではないアイクたちも気が緩んでいたのは否めない。

遠くから何やらガシャン、ガシャンと鎧の音だろうか？ 何かがこちらに近づいてきている。もしかしたら冒険者かもしれないとは思っていたが、それは違った。

その鎧を見た瞬間、アイクの表情は驚愕に染まり、次いでこの世界に来る前の、戦争をしていた時の雰囲気身を纏う。

「予定変更だ。リヴェリア、アイズを連れてここから逃げろ」

「アイク？いきなりどうした？」

「いいから言う通りにしてくれ。依頼の報酬とかはもう払わなくて構わない。だから早くこの場から離れてくれ」

だんだんと鎧の音が大きくなってくる。アイクは既にその姿を視界に入れている。

その鎧は深紅のマントを翻し、漆黒の鎧に身を包んでいた。手には剣ではなく槍を携えている。その槍の名前をアイクは知っている。銘は『ゼーンズフト』。

漆黒の騎士本人だからだ。

「……アイク、あいつは一体——」

漆黒の騎士は手にしていた槍を投擲してくる。アイクはリヴェリアとアイズをまとめて抱え横に飛ぶ。

「早く行け！」

「そう言うわけにもいかないだろう。既にあいつは私たちが敵と認識しているようだ」

立ち上がりアイズを後ろに下げ杖を構えるリヴェリア。アイズはラグネルを抜き手にぶら下げたまま、油断なく敵を見据える。

先ほど投げた槍はいつの間にか漆黒の騎士の手に戻っており、腰を落としてこちらの隙を窺っている。

「斬！」

アイクは剣を持ったまま走り出し空中へ身を躍らせる。その勢いのまま漆黒の騎士に切りかかるが漆黒の騎士は槍を横持ちにし、アイクの剣を防ぐ。

鏑迫り合いを漆黒の騎士が押しつけアイクは後ろに飛び衝撃を殺して着地する。

その間に漆黒の騎士は距離を詰めてきており槍を突き出す。

上体を右、左と逸らしその攻撃を躲す。漆黒の騎士は槍を上段から切り下ろし、アイクは剣でそれを受け止める。

「何故あんたがここに居る？」

『……』

「答えろ！」

「[レア・ラーヴァテイン]！」

アイクと漆黒の騎士が大立ち回りをしている感に魔法の詠唱を行っていたリヴェリアは準備していた魔法を発動する。

アイクは魔法の効果範囲から離脱し、劫火に焼かれていく漆黒の騎士を見つめている。

しかし漆黒の騎士は今の魔法で傷一つ付いていない。それどころか深紅のマントの一欠けらさえ燃えてはいない。

『無駄だ……才前程度ノ攻撃デハ、我が鎧ニ傷一ツ、付ケルコトハ叶ワナイ……我が鎧ヲ

纏ツタ我ヲ傷ツケルコトガ出来ルノハ、同ジ女神ノ祝福ヲ受ケタ、コノ世ニ存在シナイ、黄金ト白銀ノ劍ノミダ』

漆黒の騎士が片言で声を発している。アイクはその言葉に衝撃を受けている。

漆黒の騎士の女神の加護はクリミア開放の戦争でアイクが漆黒の騎士と一騎打ちをした際に失われたはずだ。

「お前の正体は何者だ！先ほどの打ち合いで、ゼルギウス將軍でないことは確認できているー！」

『……』

「答える気が無いのならば、無理やりにも聞き出すまでだ！」

「待て！アイク！」

リヴェリアの制止の声を振り切り、漆黒の騎士との距離を詰める。

上半身を狙い袈裟切りを放つが、見た目以上に身軽に動ける漆黒の騎士は上体を逸らすことでそれを躲す。袈裟切りを放ったまま逆袈裟切りをするが、それは槍に阻まれてしまう。

槍を薙ぎ払う。アイクは後ろに飛びその攻撃を躲す。漆黒の騎士は距離を詰め、アイクの剣が届かない絶妙な位置から突き、突き、薙ぎ払いを放ってくる。

漆黒の騎士とアイクの体格は同じくらいだ。腕の長さも同じくらいため武器のリー

手が長い槍の方が必然的に有利となる。

突きを斜め前に出ることで攻撃を躲したアイクは体を回転させながら漆黒の騎士に切りかかる。しかし石突きの方でアイクの胸を打つ。

「がはっ……!」

口から血を吐き出しながらアイクはその衝撃に吹き飛ばされる。何とか地面を転がりながら衝撃を殺すが、漆黒の騎士は槍を投擲する構えを取っている。

ちょうどアイクが止まったところで漆黒の騎士は槍を投擲してきた。その矢を間一髪で剣の上に跳ね上げさせ弾く。

武器が無くなったところを好機とみてアイクは一気に距離を詰め切りかかる。

武器を持たない漆黒の騎士は右腕でその剣を受ける。アイクの剣は漆黒の騎士の右腕の肘から先を切り落とす。

中に人が入っているのならば大量の血潮が飛び交うはずだが、それは全く起こらない。切り落とした肘から肩にかけて、植物がぎっしりと埋め尽くしていることが確認できた。

「人間じゃない!」

『ホウ……我ノ鎧ノ防御ヲ切り裂クカ……ドウヤラ才前ノソノ劍、彼ノ女神ノ祝福ヲ受ケテイルノカ。才前、一体何者ダ……?』

「俺はアイク。グレイル傭兵団団長のアイクだ」

『アイク、カ……覚エテオコウ。此処は引カセテモラウ』

「待て！お前は一体何なんだ!?!なぜその鎧がこの世界にある!?!」

アイクの質問には答えず、切られて右腕を拾い、いつの間にか左手には『ゼーンズフト』が握られており、アイクたちから背を向け歩き出す。

アイクは漆黒の騎士に手を伸ばすが、漆黒の騎士の足元に間方陣が出現したかと思うと忽然とその姿を消した。

「アイク……あいつは一体何者なんだ？お前は、あいつの何を知っている？」

「……リヴェリア、この件は俺がすべて片付ける。お前たちは手を出すな」

「何故だ？そんなに私たちは頼りにならないか……?」

「先ほどの攻防を見ただろう。お前の攻撃は漆黒の騎士には通じなかった」

「漆黒の騎士……それが奴の呼び名か？」

「ああ。あいつの中身は人間じゃなかった。何やら植物で構成された人形だった。つまり、あの鎧を破壊しなければあいつは常に動けるのだろう」

「お前はあの鎧を破壊する術を持っているというのか？」

「あいつの鎧を傷つけることができるのは、今現在俺のラグネルだけだ。お前の魔法も、アイズの攻撃も、『ロキ・ファミリア』全てが総出で掛かったとしてもあいつの前では無

力だ。……せめて『エタルド』を使えるあいつがいてくれたら……とりあえず帰ろう」
「……………ああ」

* * * * *

ここはダンジョン五階層。現在ここには大量の魔石が転がっている。

新しく魔法を発現させたベルが、魔法の試し打ちに来たところ、調子に乗って魔法を撃ち過ぎた結果である。

魔石の他にも、白髪の少年、ベル・クラネルも転がっている。

そしてそこに突然青い光が迸る。

光が収まったかと思うと、そこには紫の髪を腰まで伸ばし、白いカチューシャをし、一本のアホ毛が跳ねている。均整の取れたプロポーションの、十人中十人が美少女と答えるであろう少女が、腰に『白銀の両手剣』と一本の刀を携えて突然と姿を現した。

「あれ……………うーん(っ)は、ど(っ)い(っ)？」

第十四話

現在ダンジョン5階層、先ほどの漆黒の騎士との戦闘を終えダンジョンから帰還している最中だ。

いまだ目を覚まさないアイズを横抱きにし、ダンジョンを上へ上へと進み続ける。

「ん？なあアイク、お前の剣何やら光っていないか？」

隣を歩いていたらリヴェリアがアイクのラグネルの異変に気付いた。

「……………これは……………」

ラグネルが光り輝くこと、アイクはこのことに一つ心当たりがあった。

導きの塔でゼルギウス将軍と一騎打ちに見事勝利し、エタルドをゼルギウス将軍の傍らに立て、次の階層に進もうとした時だ。ラグネルとエタルドが両方光り輝き、共鳴し出した。

アイクの心当たりは、つまりエタルドが近くにあるということなのだが、一瞬でその考えを否定する。エタルドは現在ペグニオン帝国の国宝として飾られている筈だ。

それに今エタルドを振るえるのはワユのみだ。その考えが正しいとなると、この世界にエタルドを持ったワユがやって来たことになってしまう。

自分という前例があるが、その可能性は極めて低いと思いその考えを切り捨てた。

「……あまり気にするな。このまま壊れるということは無いだろう」

「……うん……あれ？ここは……？」

「目が覚めたか？」

「リヴェリア？あれ、私……アイク、下ろして」

「歩けるか？」

「大丈夫……少しふらつくけど歩けるから」

アイズを下ろし出口へと再び歩みを進める。

途中魔石が大量に落ちている場所があった。誰かが戦闘の後魔石を拾わずに帰ってしまったのだろうと思いいその場所は無視し、ダンジョンから脱出した。

魔石が大量に転がっていた場所でベルが倒れており、ワユが生まれてきたモンスターを皆殺しにしていたのだが、現段階でアイクがそれを知るすべはない。

* * * * *

ダンジョンに潜っていた後半組が黄昏の館に帰還したのは夜が明けてからだ。

にもかかわらず館の前では前半組のメンバーが後半組のメンバーが帰ってくるのを今か今かと待ちわびていた。

「お帰りーアイズー」

「ただいま、ティオナ、ティオネ、レフィーヤ」

「お帰りなさい、アイズさん！」

「フィン、今帰った」

「お帰り、リヴェリア、アイク。アイズはどうだった？」

「ウダイオスを一人で討伐してしまつたよ。何度も肝が冷えた」

「アイクの方は、何か報告はあるかい？」

「俺の方は特にない。俺は部屋で休ませてもらう」

「ああ、ちよつと待って。何で胸を庇いながら歩いているんだい？」

「……」

漆黒の騎士との戦いの際、胸に打ち込まれた石突きでの一撃。傍から見ても分かるほど動きに変化はないのだが、フィンの方は目は誤魔化せなかつたようだ。

「現在踏破されている階層に、あなたを傷つけられるほど強いモンスターはいない。リヴェリアとアイズが無事な所から、あなたはきちんと二人を守ってくれようだ。自分の身を犠牲にして」

「今回に関してはお前たちができることは何も無い。俺一人で、全て片を付ける」

その一言にフィンはアイクから聞き出すことを諦めたようだ。

「リヴェリア、アイクは一体何と戦つた？」

「リヴェリア、お前も分かっているだろう。あいつを相手取れるのは俺だけだ」

「アイク……だがあれだけの實力がある、お前一人で確実に勝てる保証はあるのか？」

「さてな。やってみなければ分からんだろう。だがそれでも、無駄に犠牲を出したくない」

「リヴェリア、彼がひとりですら確実に敵わない相手だとして、皆で挑めば勝てるとは思わないか？ 聡明な君ならばわかるだろう？」

「實力差の問題じゃない。それにあいつとの決着は——」

「漆黒の騎士」

リヴェリアはアイクの制止を振り切り、ダンジョンで戦った相手の名前を口にする。

「漆黒の騎士、アイクはそう言っていた」

* * * * *

少し、漆黒の騎士についての話をしよう。

漆黒の騎士とアイクとの因縁は、暁の女神の話から三年前のクリミア開放戦争まで遡る。

漆黒の騎士はデイン王国、『狂王アシュナード』直属の配下『四駿』の一人だ。

エリンシアとアイクたちがガリア王国に入ったところで、アイクたちはデイン軍に襲われてしまう。そのデイン軍を率いていたのが漆黒の騎士だ。

そして漆黒の騎士はアイクの父親、グレイルに意味ありげな言葉を残しその場を去る。

アイクと父親のグレイルはその夜、親子水入らずで話をしながらガリアの森を散歩する。突然、グレイルはアイクに対し砦に帰る様言い残しグレイルはそのまま森を歩き続ける。

嫌な予感がしながらもアイクは途中まで砦に向かって歩き続ける。しかし嫌な予感
は膨らむ一方だった。アイクは踵を返しグレイルが向かった方へと駆け出した。

森を駆け抜け、剣戟の音が聞こえた。アイクは走る速度を上げやがてグレイルと漆黒の騎士が戦闘をしている場面が目に入った。

漆黒の騎士がラグネルを、グレイルがウルヴァンを振り回し戦闘は苛烈さを増すばかり。漆黒の騎士はグレイルとの鏖迫り合いの後手にしていたラグネルをグレイルに向けて放る。

グレイルは一度それを手に取るが剣を取ることは無く、ウルヴァンを構える。漆黒の騎士は腰にさしていた白銀の剣、エタルドを抜き再び刃を交える。

その決闘の勝者は漆黒の騎士だ。グレイルはエタルドでその身を貫かれ倒れてしま
う。激情にかられたアイクは敵わないと知りながら、その戦闘へ介入する。

グレイル傭兵団団長のグレイルを下した漆黒の騎士だ。当然当時のアイクが敵うは

ずもなく、良いようにあしらわれてしまう。その後ガリア王国国王、カイネギスがその線上に馳せ参じようと咆哮を上げたところで漆黒の騎士はその場を後にする。

アイクはグレイルを背負いながら砦に戻るが、道中グレイルは息絶えてしまう。

その後ももう一度漆黒の騎士と戦う機会が訪れる。アイクの実力は申し分なかったものの、彼が使っている武器は漆黒の騎士の鎧に掛けられている女神の祝福を突破することができなかつた。

三度目の決戦、アイクはラグネルを携え、漆黒の騎士と対峙する。激戦の末アイクは辛くも勝利を得る。

漆黒の騎士から父親の敵を取ることができたと思われていた。

そして物語は暁の女神の話へと移る。

アイクはラグズ連合に協力している最中、デイン軍と対峙することになる。暁の巫女ミカヤ、その傍らに寄り添っていたのが三年前に倒したはずの漆黒の騎士であった。

再び漆黒の騎士と対峙するアイク。その際先の戦争で女神の加護は失われたと聞かされる。

その場では決着はつかなかったが、彼らの因縁はまだ終わらない。

デイン軍とベグニオン連合の最終決戦の際、人々は女神アスタルテの手によつて石へと変えられた。

三隊に分けられ出発する直前、ラグズの中でも最も仲の良いライから、漆黒の騎士の正体を知らされる。

そして導きの塔、アイクと漆黒の騎士は最後の一騎打ちを果たす。アイクは全力である漆黒の騎士を打倒し、アイクが見事勝利を迎え、アイクと漆黒の騎士の因縁は終わりを迎えたと思われていた。

* * * * *

「アイズがウダイオスを倒し終えた後、奴は突然姿を現した。なぜだか分からんが、奴の鎧には再び女神の加護が付与されているらしい」

仕方が無く、アイクはダンジョンで起こったことをフィンに説明していた。周りにいたアイズたちも、それに聞き入っている。

「あいつが身につけている鎧にダメージを与えることができる武器は『神剣ラグネル』、もう一つはこの世界に存在しない剣『神剣エタルド』、この二本しかない。だから過去の因縁に決着をつけるためにも、あいつは俺一人で倒す」

幸い実力そのものはゼルギウス将軍の方が上だ。あの槍さえ攻略出来れば負ける気はしない。

そしてアイクが漆黒の騎士と再び会いまみえるまで、そう遠くはないであろうことは想像に難くない。

第十五話

「なありヴェリア、なんで俺の部屋で仕事をしているんだ？」

「今お前を一人にしたら確実に無茶をしでかすだろう？ それこそダンジョンに潜りつばなしとか、漆黒の騎士を倒すまで帰ってこないとかな」

「だからってなぜ俺の部屋にいる？」

「団長命令だ。お前の監視、及び看病だ。いい加減ポーシオンくらい飲んだらどうだ？」

「はあ……昨日やられたところは既に痛まない。看病も不要だ。それに俺は一人でダンジョンの奥深くまで潜る気はない。道が分からんからな」

「ならば私が部屋にいたとて問題はあるまい？」

「あのなあ……」

漆黒の騎士との戦いの翌日、部屋で安静、療養を言い渡されたアイク。全く動かないのは身体が詭るので剣を振るくらいはしようと思っていたが、朝早くリヴェリアが部屋に来たかと思えば自分の仕事を初めて今に至る。

「なあアイク、私たちはそんなに頼りにならないか？ お前の傭兵団の仲間たちには劣るやもしれんが、それでもオラリオ随一の冒険者なんだぞ？」

神妙な面立ちでアイクに訊ねてくる。アイクとしては非常に答え辛い質問だ。

頼りになるかならないか以前に、彼らの実力をすべて把握しきれていない。それに今回に関しては自分でもうにかするしかないのだ。

「頼りにはしている。しかし、あいつとの戦闘は決して手を出すな。あいつの鎧に傷をつけられるのは俺だけだ」

「だが——」

「それに、俺はお前たちに傷ついて欲しくない。まだここに来て日が浅いがそれでも戦闘は一緒にこなしたんだ。仲間には傷ついて欲しくない、だから俺は俺にできることをするだけだ」

『護るべきものの為負けられない』、これはアイクの真情だ。父親を目の前で殺され息を引き取ったあの時、父親から受け継いだグレイル傭兵団、そして自分の手が届く範囲すべてを守る。そう誓った。

「……仲間に傷ついてもらいたくないのは、私も同じなんだが……さて、私の仕事も一段落した。出掛けるぞ」

「はっどいこに行くんだ」

「少し野暮用がある。付き合え」

* * * * *

黄昏の館を出たアイクたちが向かった先はバベル。『ヘファイストス・ファミリア』の団長である椿の工房を訪ねていた。

「椿、邪魔するぞ」

ドアをノックし、反応が無かったため部屋へと上がり込むリヴェリアとアイク。椿は武器の作成に集中しておりこちらの来訪に気が付いた様子はない。

「椿、少しいいか?」

少し声を大きくし、椿を呼びリヴェリア。こちらに気が付いたようで作業をいったん中断しこちらへと向かってきた。

「おお、リヴェリアとアイクではないか。いつから来ていた?」

「たった今だ」

「それはそれは、気が付かなくてすまなかった。して、手前になんか用か?」

「以前アイクの剣の整備を頼んでいただろう? それを受け取りに来たが、出来ているか?」

「出来ているぞ。すまないが、武器としてダンジョンで使うのはなかなか厳しいだろう。出来るだけ切れ味は戻しておいたが、やはり経年劣化には勝てん」

「いや、大丈夫だ。その剣は武器というよりもお守りみたいなものだからな。で、代金は?」

「代金など要らん、ただ一つ頼みがあるんだが。それを聞いてくれるならばこれは無料にしてやろう」

「頼み？なんだ？」

「手前が作った武器の試し切りをしてほしい。別に今すぐというわけじゃない。こちらが来てほしい時には声をかけよう」

「分かった、引き受けよう」

「ありがたい、他に用件は？」

「いや、無い。ではな、今度の遠征、よろしく頼むぞ」

「分かってている。決まったら伝えてくれ」

アイクとリヴェリアは工房を後にし、外へ出た。

バベルの天辺から視線を感じるが、こちらから如何こう出来ることではないので気が付かないふりをする。

「用事はこれだけか？」

「いや、この前の探索や遠征で心許無くなってきた備品の補充だ。荷物持ち頼んだぞ？」

遠征で消耗したのは回復薬系統。『ディアンケヒト・ファミリア』が経営している店へ向かい足りなくなった分とこれから使う分の回復薬系統をまとめて補充する。

無駄なトラブルを避けるためにアイクは外でリヴェリアが出てくるのを待つ。

その後ファミリアで使う雑貨などの補充のため、雑貨屋に入る。その雑貨屋でハーフェルフの女性がとある商品とにらめっこしていた。

「その商品、欲しいのか？」

「へ？あ！リヴェリア様！？アイクさんも！す、すいません！失礼な態度を……」

「別に構わないさ、それでこの商品、『神酒』か……欲しいのか？」

「いえ……欲しいと言う訳では無くて……あの、リヴェリア様。『ソーマ・ファミリア』について、何かご存じありませんか？」

『ソーマ・ファミリア』か……生憎だが、お前が知っている以上のことは知らない、が、それを知っている人物なら心当たりがあるぞ」

「え？どなたですか？」

「案内してやろう、わがファミリアのホームにな。アイク、この『神酒』買ってきてくれ」
「俺はお前の召使じゃないんだが……」

ぶつくさ文句を言いながら商品を棚から取り、会計をするためにレジへと向かう。

「随分と疲れているようだが、どうかしたか？」

「……え？」

「普段よりも若干表情が暗い。俺に何かできるとは限らないが、ゆつくり休むことも大

事な仕事だぞ」

「いえ、大丈夫です。私が新しく担当する冒険者への講習で疲れてるだけですから」
「そうか」

会計を済ませ店を出る三人。そのまま黄昏の館へと到着し、リヴェリアはエイナを応接室へと通す。

応接室で先ほど買ってきた酒瓶を開け、用意していたグラスへと注ぐ。

「それでリヴェリア様、『ソーマ・ファミリア』に心当たりがある方というのは？」
「少し待て、時機に来るだろう」

ドタドタドタと廊下を音を立てて走る音が聞こえてくる。その音はやがて部屋の前で止まり、応接室のドアがバン！と音を立てて開けられる。

「この匂い、『神酒』やな！」

リヴェリアがグラスへと注いだ『神酒』の匂いにつられてやって来たのは『ロキ・ファミリア』の主神、ロキだ。

「リヴェリア様、『ソーマ・ファミリア』について知っているお方というのは？」

「ああ、ロキだ」

「なありヴェリアー、これ飲んでもええか？」

「ああ、構わん。ただ、彼女の質問に答えてやってほしい」

「あん？あんたは……ギルドの？」

「こんにちは、神ロキ」

「ふむ……で、聞きたいことってなんや？」

『ソーマ・ファミリア』について」

「ええわ、あんたらに恩を作っておけるのも旨味やな。言っても、答えられるとは限らんよ。」

「分かりました、答えられる範囲でお願いします」

「分かったわ。んで、聞きたいことってなんや？」

「なぜ彼らは、『ソーマ・ファミリア』の眷属はあれほどまでにお金に拘っているのでしょうか？」

「その答えはこの酒や。とりあえず飲んでみい」

グラスをエイナへと手渡し、エイナは中に注がれている『神酒』を一口口に含む。

口に含んだ瞬間、エイナは『神酒』の味に打ち震え、固まった。

「リヴェリア、アイク、あんたらも飲むか？」

「いや、私は遠慮しておこう」

「一口飲んでみよう。それほどまでに美味しいのか？」

「飲んでみたらわかるわ」

アイクは『神酒』を一口口に含む。エイナほどの反応はしなくても、表情に多少の變化はあった。

「確かに、普通の酒よりはうまいが、たくさん飲もうとは思えないな」

「そんなん言うやつあんた位のもんやで」

「はっ！今まで何を……？」

「お、気が付いたか。で、どうやった？」

「口に含んだ瞬間、何も考えられなくなるほどの美味しさでした」

「せやろ？でも、これは失敗作や」

「失敗作……ですか？これが？」

「本物の『神酒』は麻薬や。一度飲んだらその味を忘れられなくなる。依存性が強すぎるんや」

そこで一度区切り、

「ソーマはまず眷属に成功した『神酒』を飲ます。その『神酒』に酔いしれた眷属たちに金を集めたらまた飲ませてやると言う。一度でも本物を飲んだらもう失敗作は飲めんくなる。せやから、あそこの眷属たちは他の冒険者たちよりも必死に金を集める。もう一度、本物を飲ませてもらえるようにな」

コンコンと、ドアが控えめにノックされた。

「ロキ、居る？」

「ん？お！アイズたん！なんか用か？」

「お客さん？」

「ああ、アイズ、挨拶しろ」

「こんにちは」

「お邪魔しています、ヴァレンシユタイン氏」

「んでアイズたん？うちに何の用や？愛の巣でも育みたいんか？」

「ステータスの更新をお願いします。あと、変なことしたら切ります」

「もー、つれないなアイズたんは。ええで、ほな行こか」

アイズとロキはそのまま退出し、部屋にはエイナとリヴェリアとアイクが残された。

「すまないな、あんな調子で。知りたいことは知れたか？」

「ええ、ありがとうございます。リヴェリア様。最近『ヘステイア・ファミリア』が少し

ごたごたしています」

「『ヘステイア・ファミリア』というと、ベルのいるところか。何かあったのか？」

「あまり詳しくは話せないのですが、新しい眷属を迎えまして、その方の担当になりました」

「それだけならばそこまで問題ではないだろう」

「その新しい眷属というのが少々問題児でして……なんか、言い方は悪いのですが、脳筋」というやつでして、新人冒険者の初期講義で少々疲れまして」

エイナは用意されていた水を飲むと同時に、

「アイズたんL.V. 6来たあああああー！！！！」

口に含んでいた水を勢いよく噴き出した。

第十六話

現在フィン達『ロキ・ファミリア』の首脳陣はフィンの執務室で次回の遠征についての会議をしていた。

「次回の遠征のメンバーだけど、レベル6の僕たちとアイズ、レベル5のティオナ、ティオネ、ベート、レベル4のラウル達。これは確定なんだけどね」

「あいつはどうするんじや？戦力だけなら連れて行かない理由は無いんじやが」

「それは悩みどころだね……確かに彼の戦闘力と対人戦に偏ってはいても彼の戦闘経験は『ロキ・ファミリア』で随一だ。ただこの前の探索での報告、漆黒の騎士のことを考えると……ね？」

「確かにあいつ一人で戦わせるのは論外とりたいが、私の魔法も通じなければ女神の加護とやらが付いた武器を持っているのはあいつだけだ」

「それほどなのか？あの漆黒の騎士というのは？リヴェリアの魔法が通じなかったというのには俄かに信じがたいのじやが……」

「事実だ。私の魔法は鎧に傷一つどころか、マントを塵一つ燃やすことは叶わなかったが、あいつの剣だけはあいつの鎧の腕を切り裂いた」

「本当に悩ましい限りだ……もう一本の神剣があれば誰かが使えるかもしれないけど、お伽噺の中の剣なんて有るはずが無いからね……」

「無いものねだりをしてても仕方がないからのう。それに、あの剣を使える奴は選ばれた奴のみだと言っていないかったか？」

「アイクのススキルにもあつたな。【神剣に選ばれしもの】、あれが無ければ持ち上げるこ
とすら敵わないのだろう。椿が持ち上げようとして持ち上がらなかつたからな」

「レベル5の力をもつてしても不可能か……もう一本が仮にあつたとしても、うちに使
えるのはいないだろうね」

余談だが、現在オラリオにはもう一本の神剣、『神剣エタルド』を扱える剣士がいるの
だが、それを知るのは『ヘスティア・ファミリア』のみであり、彼らがそれを知る術は
有りはしない。

「それにアイズたちのこの間の報告もある。59階層に行けば分かる、だつたかな？」

「今回の遠征、簡単にはいかないじゃろうな」

「これで漆黒の騎士と遭遇しようものなら、またあいつ一人に無茶を押し付けることにな
ってしまう」

「どうしたリヴェリア？最近あの小僧の心配を無性にしているようじゃが？」

「別にそういうわけではない、同じファミリアのメンバーを心配するのは当然だろう。」

あいつが一人で無茶をしようものならファミリア総出で以って止めるしかあるまい」

「戦力としては彼は最高だからね。誰よりも前に立って戦う、僕よりもよっぽど『勇者』だよ」

「連れて行かない理由は、無いじゃろうな」

「彼に無茶はさせないこと、一人で戦わせないこと。これが彼を連れて行くに当たって僕たちがしなければならぬ最低限の条件だ」

しかし彼らは知らない。今回の遠征先の到達階層の59階層で『ロキ・ファミリア』を待っている障害を、そしてそこにいるもう一人の強敵が居合わせていることを。

* * * * *

ダンジョン遠征当日、遠征メンバーはダンジョン前に集まっていた。

その中には『ロキ・ファミリア』のメンバー、幹部だけではなく他ファミリアのメンバーの姿があった。

今回の遠征に当たったっての武器の整備、回復薬などの補充をするにあたって彼らの存在は必要不可欠だ。

「フィンよ、今回はよろしく頼むぞ。それと、頼まれていた『不懐属性』の武器だ。注文通り、人数分揃っているぞ」

「ありがとう椿、助かったよ」

「礼は良い。手前にとつても今回の遠征はとても利益があるものだ。普段潜れない深層の鉱石やモンスターのドロップアイテムなどが貰えるとあつては、参加しない道理はあるまい?して、彼の武器は準備しなくても良かったのか?」

「彼とは?」

「アイクだよ。あいつの剣は確かに神剣、手前等がどうこうできる武器の枠を超えているし、事実壊れない。だがあれ一本だけで良かったのか?」

「彼がそう言っていたからね、無理に渡す必要も無い。ああ、勘違いしないでくれ。別に彼が憎いからそういうことを言っているのではなく、本人が要らないと言っていたからね」

「ならば良いのだが」

「当の本人はその会話を知る由もない。そしてアイクは他のメンバーと積極的に話していた。」

「ラウル。緊張しているようだが大丈夫か?」

「ア、アイクさん!?!だ、大丈夫つす! 恐縮つす!」

「別にかしこまる必要は無い。今からそんなに緊張しては、最後まで体力が持たんだらう」

「そ、そうつすね……アイクさんは緊張とかしないんすか? 初めての遠征つすよね……」

？」

「ああ、確かに敵は人かモンスターかの違いはあるが、かなりの死線を潜り抜けて来たつもりだ。戦いになる前から緊張していると、自分の実力の全ては発揮できないからな。だからこうして戦う前なんかは、他の仲間と積極的に話して少しでも緊張を和らげようとしていたんだが、逆効果だったか？」

「い、いえ！そんなことは無いっす！」

「ふっ、そうか。ならお互い頑張ろう。必ず生きて帰るぞ」

アイクはラウルとの会話を終え辺りを見回す。すると一人で佇んでいるアイズが目に入った。

アイクはこの間の24階層での戦闘の報告を受けていた。そしてそこで言われた言葉も知っている。そのことについて考えているのだろうと推測することは、そう難しくはない。

「気になるか？」

「あ、アイク……うん、『59階層に來い、知りたいことが知れる』。どういう意味かな？」
「さてな、俺はお前の事情に通じているわけではない。何やらファミリアの上層部と口キだけは知っていることで、俺たちが知らない秘密があるんだろう？」

「え!? どうしてそれを……」

「秘密の内容までは知らん、ただお前が知りたいことが知れるといいな」

「知りたいとは思わないの？」

「聞いたところで答えられないのだろう？ならば、話してくれる時を待つだけさ。多分、その秘密の存在を知らないやつが知っても、皆同じことを言うと思うがな。ここはそう言う連中の集まりだ」

「それを隠している私を、アイクは信用できるの？」

「お前はそう言うので裏切るような奴ではないだろう。それを言うなら、ここに来て日が浅い俺の方が信用はされないんじゃないのか？」

「そんなことない！」

アイクが自分を貶すようなことを言った瞬間、アイズは思わず声を荒げてしまう。しかしアイズもなげ声を荒げてしまったか分かっていないような表情をしていた。

「そんなことは無い！アイクはこの世界に来たばかりの時、何も知らなかった筈なのに私たちを助けてくれた！そんな人がそんな簡単に信用できてないなんて言わないで！」

アイズのがここまではつきりと自分の意見を言うことは珍しい。彼女は普段あまり言葉を発さず、一言二言で話を済ませてしまっていた。

今のアイズを見て目を白黒させてしまったのはアイクのみならず、ここに居る遠征メ

ンバー全員がこちらを珍しいものを見るようにしていた。

「悪かったな、俺は俺が正しいと思うことをしよう。そうしてゆっくりでも信頼を集めていくさ」

頭を叩くようにポンと撫でる。

先ほどのことが恥ずかしかったのか、はたまた別の理由からかアイズの顔は真っ赤に染まっていた。

「皆！準備は良いかい？これより『ロキ・ファミア』の遠征に出発する！」

* * * * *

今はまだ浅層、浅層に苦戦するはずもなく遠征は現在滞りなく進んでいる。まだ面々にも余裕があるためダンジョンについて話しているものもいる。

先頭を歩いているフィン、リヴェリアなどの幹部もまだまだ余裕がある。

「助けて下さい！」

突然、前方から小人族の少女が助けを求めて走って来た。見ると頭からは血を流しており、満身創痍と言つて差し支えないほどだ。

「どうかしたか？」

アイクはただ事ではないと判断し、小人族の少女へと話しかけた。

「助けて下さい！向こうでミノタウロスが……！今ベル様、一人の冒険者が対峙してい

ますが長くは持ちません！助けて下さい！」

「ダンジョンでは他の冒険者には基本的に不干渉が不文律だ。それを分かかって言っているのか？」

アイクが了承しようとしたところでリヴェリアが少女に訊ねた。確かにダンジョンでは他の冒険者には極力関わらないことが推奨されている。

それは他ファミリアの場合モンスタードロップアイテムだったり、魔石そのものの取り合いになることが珍しくないためだ。

「ならば俺が個人で行こう。お前たちは先に進んでくれて構わない、あとで合流しよう」
それだけを告げてアイクは少女を担ぎ上げ単身ダンジョンを駆ける。

暫く進んでいると、ダンジョンの道の真ん中に一人の猪人が大剣を携えて立っていた。

「『猛者』オツタル……」

肩に担いだ少女が眩く。道の真ん中に立っていたのは『フレイヤ・ファミリア』所属のレベル7、『猛者』オツタルだった。

「オツタル、そこを退け。俺たちはその先に用がある」

「そう言うわけにはいかない。これはあの方の意志だ」

「ということは、ミノタウロスはフレイヤの差し金か。なぜそこまで無茶をする？」

「お前が知る必要があるか？」

「まさか、以前言っていたもう一人というのがベルか？」

「……」

アイクの問いかけにオツタルは答えない。

「もう一度言う、そこを退け。俺はベルを助けなければならん」

「ここを通りたければ、実力で押し通るんだな」

携えていた大剣を構えるオツタル。

肩に担いだ少女を下ろし、巻き込まれないように下がっていると一言、背負ったラグネルを抜きオツタルと対峙する。

「以前と違って今回は戦わなければならない理由がある。手加減できんぞ」

「臨むところだ。それでこそ、我が好敵手だ」

その一言を切っ掛けに、アイクはラグネルで斬撃を飛ばす。

オツタルは紙一重でそれを躲し、こちらへと特攻してくる。構えていた大剣を上段で切りかかってくる。

アイクはそれを片手で受け止める。オツタルは全力で切りかかっているが、地面が陥没するばかりでアイクはびくともしない。

「やはりお前は強い。流星は世界を救った勇者だな！」

アイクは薙ぎ払いもう一度オツタルはその衝撃を空中で逃がし着地する。

着地した瞬間を狙って再び斬撃を飛ばす。避けられないと判断したオツタルは剣で受け止める。

地面からズザザと煙を上げながら吹き飛ばされる。

アイクはその間に距離を詰め上段からオツタルを切る。オツタルは大剣でそれを受け止める。足元には巨大なクレーターが生成されその衝撃の大きさが物語られている。

アイクは罅迫り合いをせずに剣を引き、もう一度上段、袈裟、逆袈裟と次々と切り付けていく。

アイクとオツタルの剣戟の度にダンジョンはグラグラと揺れる。

防戦一方だったオツタルがいか八か、身体を回転させながら薙ぎ払ってくる。

アイクはそれをラグネルで受け、自ら後方へ飛びダンジョンの天井に着地。その勢いを利用しオツタルへと剣を振り下ろす。

地面を転がり何とか躲す。オツタルが起き上がった瞬間をアイクは逃さずに再び切り付ける。

再び罅迫り合いになる。

罅迫り合いの最中、アイクは持っていたもう一本の剣を左手で抜き逆手に持つ。その剣の柄でオツタルの腹を殴りつける。

「まだやるか？」

「当然だ！俺はまだ負けてはいない！」

「ならばこれで終わりにする……！」

アイクはリガルソードを収め、ラグネ真上に放る。

「馬鹿め！戦闘中に武器を投げ捨てるなど万死に値する！」

千載一遇のチャンスを得たとばかりにオツタルは特攻してくる。

しかしアイクはそれを意に介さず、自らもまた跳び空中で回転している剣を拾う。

「……天空」

空中に身を躍らせたアイクをオツタルは見つめている。そしてアイクがその場から落下する勢いを利用してオツタルに切りかかる。

その一撃をオツタルは大剣で受け流した。

「これで終わり——」

だが着地したアイクはバク転をしながらオツタルを攻撃する。

咄嗟に剣で受け止めようとするが受け止めることは叶わず、為す術もなくその一撃を食らった。

「ば、かな……」

アイクの一撃をもろに受けたオツタルはその崩れ落ちる。

アイクは剣を振るい剣についた血液を払う。

「待たせたな、急ぐぞ」

後ろに待たせていた小人族の少女を再び肩に担ぎアイクは移動を再開した。

その場に倒れているオツタルに目を向けることも無く。

第十七話

少女に道を聞きながらベルがミノタウロスに襲われている場所へと到着した。ベルは膝をつき少女と同様に頭から血を流している。

ミノタウロスは持っている大剣をとどめと言わんばかりにベルへと振り下ろそうとした。

アイクは少女を下ろし剣を抜きながらベルトミノタウロスの間に滑り込み、ラグネルで大剣を受け止める。

「大丈夫か？あとは俺がやろう、下がっている」

「手を……出さないでください……！これは、僕が倒さなくちゃいけないんだ！」

ベルは立ち上がりながらそう叫ぶ。守ってもらうことを断ると言わんばかりだ。

「……勝てるのか？」

剣を受け止めながらベルの方を向く。ベルは小さく頷いた。

「ならば戦え、戦って勝て」

再びベルは頷いた。アイクは罅迫り合いをしていたミノタウロスを押し返し、自うんはその場から下がる。

ベルは黒いナイフと普通の鉄のナイフを抜いてミノタウロスへと対峙する。

ミノタウロスは大剣切りかかる。ベルはその敏捷を以って前へと踏み出し紙一重でそれを躲す。

鉄のナイフをミノタウロスの胸へと突きつける。しかしミノタウロスの熱い筋肉の前に、ベルのナイフは呆気なく碎け散る。

ミノタウロスは剣を持っていないほうの拳を振りかぶりベルを殴りつける。ベルは後ろへ転がることによつてそれを回避し、立ち上がった瞬間背負っていた刀を抜いて半身に構える。

(あの回避と剣の構えは……いや、有り得ないな……)

見覚えのある構えに回避術、しかしその可能性をアイクは切り捨てる。

ここにいるはずが無い人物の剣術を使えるからと言つて、その人物がいるわけがないと考えた。

「アイクー！」

その呼び声に振り替える。見ると『ロキ・ファミリア』の幹部陣が次々とこちらへ向かつてきた。

「来たのか？」

「今回の遠征で、お前を一人で行動させるわけにはいかないからな」

リヴェリアがムスツとした表情で答える。

「彼は……この間ミノタウロスに襲われた少年だよね？」

「ああ」

「こんな短期間で、ミノタウロスと戦えてる!? 彼ってレベルいくつ？」

「分からん、ただレベルが上がっていたなら短期間でレベルアップの話題で持ちきりになるはずだと思うが」

「ということはレベル？ 有り得ない！」

話している間もベルはミノタウロスへと勇敢にも切りかかる。

片手で持っている刀でミノタウロスの大剣を受け流し、ミノタウロスが大剣で切りかかって来たがら空きの懐に黒いナイフで切りかかる。

そしてとうとうミノタウロスが持っていた大剣をベルは刀で切断した。

「大剣を切った!? あの刀って一体……!」

大剣を切られたことで動揺したミノタウロス。その隙にベルはナイフを仕舞い刀一本でミノタウロスと対峙する。

刀を片手で持ち三度空を切る。右袈裟切り、そのまま切り上げ、切り上げた勢いを使って半回転しながら薙ぎ払い、バク中をしながらの切り上げ、着地した勢いを殺さずに突き、ベルの敏捷の限界ギリギリの速さでこれをミノタウロスに叩きこむ。

(あの剣術、『流星』か!?)

アイクは有り得ないものを見たような表情でそれを見ていた。

その攻撃ではミノタウロスを撃破するには至らなかった。しかしその刀傷に手を突っ込み、叫ぶ!

「ファイアボルト!」

雷を纏った蒼い炎、それがミノタウロスに叩きこまれる。

「ファイアボルト!!」「ファイアボルト!!!」

三度魔法をミノタウロスに叩きこむ。

ミノタウロスはその炎により蒼く輝き、身体は膨張する。そしてとうとう圧力に耐え切れずに爆散した。

その場所にはミノタウロスの角、そして精神枯渇により立ったまま気絶していたベルが佇んでいた。

* * * * *

ベル・クラネルがミノタウロスを撃破した。ベル・クラネルは現在レベル1、ミノタウロスはレベル2。本来なら倒すどころか傷を負わせることすら困難を極めるが、彼は黒いナイフ、刀、魔法を以ってミノタウロスを撃破してしまった。

それを見ていた『ロキ・ファミリア』の面々は驚愕を隠せずにいた。

そしてアイクは別の意味で驚いていた。

（あの剣技は『流星』……偶然か？）

ベルが最後に放った剣技、高速の五回切り。アイクはこの剣技に見覚えがある。

グレイル傭兵団ならばワユが、他にはデイン王国軍にいたエディという少年、砂漠でミカヤ隊が出会ったソーンバルケなどがこの技を使っていた。

剣を極めたものが使える高速の五連撃。相手に反撃を許さず、こちらが一方的に攻撃を与え続ける奥義だ。

（あいつらの『流星』に比べたら速さも鋭さも全然足りない、だがあの動きは……）

「嘘でしょ……」

「彼、本当にミノタウロス倒しちゃった……」

立ったまま気絶していたベルはやがてその場に崩れ落ちる。背中に刻まれている『神の恩恵』も丸見えだ。

「おいババア、あいつのレベルを見ろ」

「私に他のファミリアのもののステータスを覗き見しろと？ 前回は非常事態だったからやむを得なかったが、今回はそうではないだろ？」

ベートがリヴェリアに命令しているがリヴェリアはそれを一蹴している。本来同じファミリアのもののステータスを見ることすらタブーとされているのに、違うファミリ

アのものステータスを覗き見るなど論外だ。

「うっせえ、いいから見ろ！」

それでもベートは引き下がらなかった。

反論するのも億劫だと言いかのようになため息をついたりヴェリアはベルの傍らへと移動しステータスを読み上げる。

『ベル・クラネル』、『ヘステイア・ファミリア』、『レベル1』『アビリティオールS』

「本当にレベル1!？」

「それにアビリティオールS!？」

その事実、『ロキ・ファミリア』の面々は驚きを隠せない。ただ一人、アイクを除いて。

「アイク。考え事？」

「……」

「アイク？」

アイズはアイクの肩に手を置く。その行動によってようやくアイクはこちらに反応した。

「ん？アイズか、どうかしたか？」

「何か考えごとしてたみたいだったから……迷惑だった？」

「そんなことは無いが……アイズ、ベルが最後にはなつたあの剣技、こちらの世界で見たことはあるか？」

「最後の剣技……？あの五回切り？見たことないけど……それがどうかしたの？」

「いや、何でもない。やはり偶然だろう」

「それで、彼らどうしようか？このままここに放置しておくのは論外だとしても、誰かが外まで運ばなくてはならないだろう」

「気を失っているベルと満身創痍な小人族の少女、小人族の少女はいまにも気を失いそうだ。」

「俺が二人とも運ぼう。皆は先に行っていてくれて構わない、あとで合流する」

「いいや、あなたを単独行動させるわけにはいかない……ベート、アイクと二人で彼らを外に運んでくれないか？」

「チツ……分あつたよー！」

アイクがベルを背負い、ベートは少女を肩に担ぐ。そのままダンジョンの出口目指して足を進め出した。

* * * * *

ダンジョンから出たアイクとベートは怪我人二人を担いで現在『ミアハ・ファミリア』のホームへと向かっていた。『ディアンケヒト・ファミリア』ではないのは神格者的な間

題らしい。

アイクは『ミアハ・ファミリア』のホームの場所を知らないのでベートについて行っていた。

「ベート、と言つてたな」

「ああ？ なんか用かよ？」

「いや、言い方は悪いが、こんな時でないと二人きりで話す機会はそうそうないと思つてな。折角の機会だから少し話してみたくてな」

「ハツ！ 物好きだなてめえも！」

「そうか？ お前みたいな奴は、話してみると意外と良い奴だったりするもんだけどな」

「良い奴だ？ 笑わせんな！」

「ならば何故弱きものを貶してまで死地から遠ざけようとする？ お前が雑魚というものを嫌つているのならば、構わなければ良いだけだと思ふんだが」

「……」

ベートは思わず答えに詰まつてしまう。ベートなりに考えあつての行動だが、それをここで口にするつもりはないらしい。

「まあそのことについて深くは聞かない。お前の考えがあつての行動なのだろう。それよりも他に聞きたいことがある」

「ああん？んだよ？」

「お前は化身できるのか？確か、狼人という種族なのだろう？俺の世界のハタリの民は狼に化身するラグズだったが、大昔の大洪水でほとんど滅んでしまったみたいだな。この世界の巫人、猫人だったり狼人だったり化身できるのか？」

「化身しないと戦えなかった半獣風情と一緒にすんな。お前の世界がどうかは関係無え、こっちはこっちだ。出来る奴はできる、出来ないやつは一生掛かっても出来ねえだろうよ」

半獣という呼び方に眉を顰めるがここで折檻はしない。本来ならここで訂正させてもよかったが、今後の関係性を考えるとあまり強くは言えない。

「半獣という呼び方は止せ、あいつらだってそう呼ばれることは嫌がっている」

その一言を最後に『ミアハ・ファミア』のホームへと到着した二人。主神であるミアハとの接触を極力避けるためにベルをベートに渡しアイクは外でベートが出てくるまで待っていた。

第十八話

ベルと小人族の少女を『ミアハ・ファミリア』に預けた後、アイクとベートはダンジョンの18階層にて『ロキ・ファミリア』の遠征チームと無事合流を果たした。

「アイク」

「リヴェリアか、どうかしたか？」

「我々があの少年、ベル・クラネルの元へ向かう途中に一人、倒れている猪人がいたが、心当たりはあるか？」

「オツタルか？あれは俺がやった」

「はあ、やはりか……死にかけていたが、一体何があつた？」

「俺がベルの元へ向かう途中に妨害をしてきた。今回の一件、フレイヤが絡んでいるよ
うだぞ」

「神フレイヤが？一体なぜ？」

「フレイヤのお気に入りとやらになつたんだらう。あいつは自分の気に入った下界の子を魅了して自分のファミリアに入れるんだらう？」

『フレイヤ・ファミリア』には他のファミリアから改宗した眷属も多い。フレイヤのお眼

鏡に適った眷属をそのファミリアの主神、その眷属をその美貌を以って魅了し引き抜く。

そのため『フレイヤ・ファミリア』を憎んでいるものも少なくないという。

「ああ、確かにその手の話は稀に聞くが。なぜお前がそこまで『フレイヤ・ファミリア』の内情に詳しい」

「『怪物祭』の時オツタルと戦った後、フレイヤ直々に俺をスカウトしてきた。ご丁寧に、御自慢の美貌とやらを見せてきてな」

「何？それで、返事は」

「断った。というか、そこで了承していたら俺はここに居ないだろう」

「それもそうだが……神フレイヤの魅了は効かなかったのか？」

「特に何もなかったからきつと効かなかったのだろう」

「効かなかった理由に心当たりはないのか？ 言い方は悪いが、彼女の美貌を一目見たら大抵の男は彼女に落ちるぞ」

「さてな。心当たりはない」

「……まあいい。くれぐれも無茶だけはしてくれな。何かあったら私たちを頼ってくれ」

* * * * *

あれから数日が経ち、遠征チームは現在50階層で野営を行っている。現在は明日からの51階層以降の探索の会議中だ。

「では明日からの未到達階層への探索メンバーを改めて発表する」

そのメンバーは全員レベル5以上、当然アイクもそのメンバーに入っている。

サポーターはレベル4以上、それと数名のレベル3が呼ばれた。

『ヘファイストス・ファミリア』の整備士として、椿に着いて来てもらう」

「うむ、心得た。では早速、渡すべきものを渡しておく。注文されていた『不懐属性』の武器だ」

探索に行くメンバーたちに『不懐属性』の武器を渡していく。

注文していないはずのアイクにもこっそりと一本の大剣が渡された。

「椿、俺は武器は何も頼んではないが」

「金は要らん、余裕があったら使ってくれ。『不懐属性』銘は『アロンダイト』だ」

「……まあ使う余裕があったらな」

アロンダイトはアイクがラグネルを一度ベグニオン帝国に返却した後、暫く使っていた剣と同じ名だ。偶然か意図してかは分からないが、見た目も長さも重さもそれにそっくりだ。

「これで会議は終了する。皆、明日の探索に向けてしっかりと休息をとるように。解散

！」

各々が割り振られたテントへと移動居ていく中、アイクはダンジョンの49階層に向かっていた。

使う余裕があつたら使つてくれと頼まれた『アロンドイト』。ぶつつけ本番で使うわけにはいかないため、49階層に一度行き、適当なモンスター相手に試し切りをしようと思つた。

49階層に入る直前、アイクは自分を付けている気配に気付いた。

「誰だ？」

後ろを振り返らずに訪ねる。ピクツ！と驚いた気配が伝わって来たため仕方なく後ろを振り返る。

申し訳なさそうに表情のアイズとレフイーヤが縮こまったように立っていた。

「何か用か？」

「いえ、大した用じゃないんですけど……」

「アイクはテントに行かないの？」

「さつき樁から剣を受け取つてな、明日ぶつつけ本番で使うわけにもいかないだろうから小一時間試し切りをしようと思つていたんだが」

手に持つていた剣を二人に見せる。アイズはその剣に興味津々らしく、その剣を凝視

していた。

「持ってみるか？」

「持てるの？」

「この剣は普通の剣だ。誰でも使える」

アイズに剣を手渡し、渡されたアイズはその場で何度か剣を振ってみる。

「ありがとう」

「ああ、お前らももう休めよ。明日は大事な日なんだろう？」

他人事のように話すアイク。いまいちことの重要性を理解できているのかどうか、怪しくなってきたレフイーヤは、

「あの……未到達層に行くのって怖くないんですか？」

思わずといった風に聞いてしまう。アイクの場合基本的にすべての階層が未到達階層のようなものなので、特にこれと言って新鮮味はない。

そのような旨をレフイーヤに伝えると眉間を押さえたため息をついた。その動作はリヴェリアにそっくりだ。

「ねえアイク、私も着いて行って良い？迷惑はかけないから」

「何故だ？」

「今回の遠征、アイクの単独行動はできるだけ控えさせるように言われてて、それにアイ

クが戦つてるところが見たいから、かな……?」

「そう言うことなら別に構わん。俺の剣術をそう簡単に盗めると思うなよ?」

「ありがとう。レフィーヤはどうする?」

「私も着いて行つてもいいですか? 並行詠唱のための戦い方の参考にできればと思いついて……」

並行詠唱は戦いながら魔法の詠唱をする技術だ。

通常魔法はその場に止まり詠唱をしなければならぬ。しかしそれでは一人の時に敵から狙われたらどうしようもなくなってしまう。

そこで敵を倒しながら、或いは攻撃を防御・回避しながら詠唱をすることによって一人でも戦えるように並行詠唱という技術が編み出された。

リヴェリアは白兵戦を行いながら並行詠唱を行えるらしいが、レフィーヤの場合は走りながらやるのがやつとらしい。

「構わん。俺が見えない範囲を移動するなよ?」

「はい!」

それから小一時間、三人は49階層に出てくるモンスターを倒し、50階層の野営地に戻った。

いなくなった三人を待っていたリヴェリアから説教を食らったのは言うまでもない。

第十九話

50階層に到着した翌日、遠征チームの選抜メンバーはまだ見ぬ未到達階層に向けての進軍を開始した。

「51階層は正規ルートを進む！新種の接近には警戒を払えー！」

51階層から57階層までは迷路のようになっている。フィンの指示のもと、彼らは正規ルートを進んでいく。

彼らは幾度かの戦闘をし、52階層へ至る階段の前で小休止を取っていた。

「ここから先は補給ができないと思ってくれ」

言外にここで補給しろと伝えてくるフィン。しかしここまで無傷の彼らはただ緊張感を共有するのみに止めた。

各自が準備完了の旨をフィンに視線で伝える。それを確認したフィンを先頭に52階層への階段を下っていく。

52階層に到達するや否や早速戦闘になる。しかしここに居るメンバーはこの階層で後れを取ることは無い。

「おおっ、ドロップアイテム」

戦闘の際に落ちたモンスタードロップアイテムを我先にと回収しようとする樁の腕をアイクが掴みとめさせる。

「む、なぜ止める?」

「ここで回収するのは多分いい結果に繋がらない」

「何故だ?」

「勘だ」

するとそのドロップアイテムがあつた場所に火柱が咲く。

「これは……!」

「ヴァルガング・ドラゴンの階層無視攻撃!」

「止まるな! 狙撃されるぞ!」

フィンの号令のもとその場を突っ切り先に進もうとする。

しかし後ろにいた後衛隊に少々の遅れが生じている。先程の階層無視攻撃によってダンジョンの地面が崩れてしまった。

「きゃあああああ——!」

「レフィーヤ!」

運悪くその穴にレフィーヤが落下してしまう。そして不運は続くもの、落下した先にはヴァルガング・ドラゴンと思わしき眼光がギラリと光っている。

「ヴェール・ブレス！」

52階層にいたメンバー全員にリヴェリアから防護魔法が掛けられる。

その効果を確認する前に、アイクはレフィーヤが落下した穴へと飛び降りる。

「アイク！」

制止の声が聞こえるがもう遅い。空中で落下する速度を速めると落下中のレフィー

ヤに何とか追いつき空中で肩に担ぐ。

「無事か？」

「アイクさん!？」

「話は後だ。このままでも魔法の詠唱はできるか？」

「は、はい！」

「狙いはあの竜。着地と同時に放ってくれ」

それだけを伝え肩に担がれたレフィーヤは魔法の詠唱を開始した。

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり——】」

落下かつ早口の並行詠唱。落下中のアイクたちを狙って一匹のヴァルガング・ドラゴ

ンが照準を定め口を開く。アイクは『アロンダイト』を抜いて口を開いたヴァルガング・

ドラゴンへと剣を投擲する。

口から身体にかけて縦に切られたヴァルガング・ドラゴンの魔石は『アロンダイト』に

よって切断されヴァルガング・ドラゴンその姿を灰に変える。

「【穿て、必中の矢】！」

レフイーヤの魔法の詠唱が終わると同時、ヴァルガング・ドラゴンの待ち構えていた階層に着地するアイク。その衝撃に地面には巨大なクレーターが出来上がった。

「【アルクス・レイ】！」

その魔法は待ち構えていたヴァルガング・ドラゴンに多大なダメージを与えた。

「上出来だ」

手負いになったヴァルガング・ドラゴンに向けて剣戟を飛ばし次々と撃破していく。

だがこれで終わりではなかった。その階層に新しく生み出されたモンスター。飛竜が大量にこちらへと押し寄せて来た。

アイクはラグネルを再度構え、肩に担いだレフイーヤを落とさないようにしっかりと抱え直す。

次々と襲ってくる飛竜の攻撃を身を翻すことよって回避し、すれ違いざまにラグネルを振るう。

飛竜たちは次々と姿を灰に変えていく。しかし数が多く、減っている気配は感じられない。

暫く剣舞を演じていると肩に担いだレフイーヤが、

「アイクさん、魔法が来ます！離脱しましょう！」

と言ってきたため前方から来た飛竜の群れに突っ込み剣を横薙ぎに振るう。

前から来た群れはすべて姿を灰に変え突破口が開かれた。

「【ウイン・フィンブルヴェトル】！」

この階層に到達したリヴェリアが魔法を放つ。群がっていた飛竜を一掃し、新しく生まれてくる気配もなさそうだ。

担いでいたレフィーヤを地面に下ろすとフィンを始めとしたメンバーがこちらに向かってくる。

「レフィーヤ大丈夫!?!」

「怪我とかない?」

ティオナとティオネがレフィーヤの身を案じ声をかけている。

「はい、大丈夫です……アイクさんが守ってくれました」

「あのヴァルガング・ドラゴン、全部アイクがやったの?」

「そんなわけないだろう。レフィーヤが魔法で削ってくれたおかげだ」

「へー、やるじゃんレフィーヤ!」

ティオナはレフィーヤの肩を遠慮なしにバンバンと叩きながら賛辞を贈る。叩かれているレフィーヤの方はかなり痛がっているが。

ズンズンと音が聞こえてきそうな剣幕でリヴェリアがアイクの元へと向かってきた。正面に立つと腕を振り上げアイクの頬を平手打ちする。

「パァン! という音が響き全員がこちらに一斉に注目する。

「なぜあのような無茶を一人でしでかした……?」

「理由が必要か? 仲間が目の前で死ぬかもしれないという状況で助けに入ることに何を躊躇う必要がある」

少し赤くなつた頬を抑えることもせず、真つ正面からリヴェリアの瞳を見据えアイクは言葉を発する。

そしてアイクは気付く。リヴェリアの瞳から一筋の涙が零れ落ちたことに。

「頼むから、頼むから……一人が無茶をしないでくれ……! 私だって、目の前で仲間を失うかもしれないと思うと……!」

一度決壊したダムは脆い。そして一度爆発した感情を抑えることは困難だ。

涙を流し続け、子供ののように痲癩を起した彼女は止まらない。

「仲間を失いたくないのはここに居る皆が同じことだ! お前が一人で穴に飛び込んだ時、もう駄目かと思つた……頼む、一人で、遠くに行かないでくれ……!」

誰も言葉を発することが出来ずにいた。リヴェリアが泣いていることがあまりにも衝撃的過ぎたからだ。

ただ一人を除いては。

「俺は誰かを置いて先に死ぬつもりはない。俺を待っててくれる仲間がいるのならば、俺はそこに帰る。これじゃダメか？」

泣いているリヴェリアの頭を自分の胸に抱え込む。その行動にギョツとする者もあるが、リヴェリアはそれを振り払うことはしなかった。

「……その言葉、忘れてくれるなよ？」

そのままの姿勢でアイクだけに聞こえるようなかすれた声でポツリと漏らす。アイクの胸に頭を預けたまま、暫く涙を流し続けた。

* * * * *

58階層で敵が湧いてこないことを確認すると、集まって来たメンバーは未到達階層である59階層に向けての準備、補給などを各自行っていた。

あるものはポーションを飲んだり、武器の調子を確かめたり、武器の簡単な整備を行ったりなどだ。

団長であるフィンは次の階層につながる階段前で佇んでいた。

「フィン、どうかしたか？」

「ん？アイク……いや、次の階層についてなんだけど」

「まだ未到達階層なのだろう？」

「うん、そうなんだけど……昔『ゼウス・ファミリア』が59階層に到達したことがあって、その時の記録では『氷河の領域』らしい」

「氷河？」

「簡単に言えば大量の水でできた大地だ。でも、妙だと思わないかい？」

「何がだ？」

「僕たちが立っているのは59階層につながる階段の目の前だ。なのにどうして、全くもって冷気が伝わってこない？」

「さてな。『ゼウス・ファミリア』とやらの記録に間違いがあつたか、それ以降にダンジョンの中身が作り替えられたかだろう」

そのアイクの言葉をフィンは無考する。少し待っても何の反応も無い。

「何なら、少し見てくるか？」

「君はさつきリヴェリアに言われたことをもう忘れたのかい？それを抜きにしても、未到達階層に一人で行かせることなんて出来ない」

会話を打ち切り後ろを見回す。見るとメンバー全員が準備万端だと言わんばかりにこちらを見ていた。

「これより59階層に乗り込む。これから先はまだ誰も、神々ですら見ていない領域だ。心してかかるように！」

59階層、『ゼウス・ファミリア』の記録では氷河ということだったが、見渡す限り見えるのは緑一色。氷など欠片も無く、見渡す限りの密林が広がっていた。

「これは……どういふことだ？」

「この音は……？」

「……前進」

フィンの号令で歩き始める。歩けども歩けども見えるのはやはり森でしかない。

「これって24階層の……？」

レフィーヤがひとりごとのように呟く。近くを歩いていたベートはその呟きが聞こえたようで、わずかだが反応してた。

数分歩き続け、広場のような場所に出る。そこで目に飛び込んできたものに驚きを隠せずにいる。

「何……あれ？」

樹林が姿を消し、灰色の台地が広がる空間。

荒野と見紛う空間には、夥しい量の芋虫型のモンスターとそれを食らう食人花のモンスター。

その大群が群がるのは女型のモンスター、そして少し離れたところには人影が見える。

その人影を見た瞬間、アイクが前へと踏み出した。

「まさか、こんなところにいるとはな」

背中のラグネルを抜き、今にも飛びかからんという姿勢だ。

「お前の正体、見極めさせてもらうぞ」

その人影は37階層でアイズがウダイオスを倒した直後に出現した漆黒の鎧に深紅のマントを翻した、アイクの因縁の相手。

そのアイクを皆が見つめているのか、アイクが叫ぶ。

「漆黒の騎士！」

第二十話

漆黒の騎士の方へと歩み寄っていくアイク。そのアイクの肩をアイズが掴み、一本の剣をかざす。

「アイク……この剣……」

それは先ほどの戦闘でアイクがヴァルガング・ドラゴンに向けて投擲した剣。

『『アロンダイト』か……これはお前が持つてる。あいつ相手に使うことは無いからな』
「うん、分かった……負けしないで」

「アイク！」

リヴェリアがアイクを呼び止める。振り返ると皆がアイクを心配そうな表情で見返していた。

「大丈夫だ、約束は守ろう。あいつを倒し、お前たちの元へと戻ってくる。それに、お前たちの相手はあの怪物だろう」

アイクたちが話している間も、女型のモンスターは食人花、芋虫型のモンスターの捕食を続けている。

アイクが漆黒の騎士の方へと歩みを進めると、捕食されているモンスターと女型の怪物がアイクの方を見た。今にも飛びかからんという勢いだが、漆黒の騎士が手を上げるとその勢いは急激にしぼむ。

『再ビ会イ見エルコトニナルトハナ。貴様ハ覚エテイル、我ノ鎧ニ傷ヲ付ケルコトノ出来ル劍ヲ持ツモノヨ』

腰を落とし槍を構える漆黒の騎士。一方のアイクは劍をだらりとぶら下げたままだ。

「この間は御守りをしながら戦わなければならなかつたからな。今回はお前だけに集中させてもらおうぞ！」

言い終わると同時、アイクはその場から漆黒の騎士へと一気に距離を詰め飛び蹴りを放つ。

漆黒の騎士は槍でそれを防ぐが、勢いは殺しきれず地面を擦りながら森の中へと引き摺りこまれていく。前回の戦闘で中身が植物であることを見抜き、鎧の重量の割に中身は軽いのではと踏んでいたが、どうやら当たりだったようだ。

アイクはすぐにそれを追いかけることはせずに、ラグネルを地面に突き立てる。するとアイクの後ろには障壁が出現する。

この障壁は導きの塔でゼルギウス将軍がアイクとの一騎打ちをするために生み出した障壁と同じだ。戦闘が終わるまで解かれることは無く、どのような攻撃でも破壊され

ることは無い。

アイクと漆黒の騎士との一騎打ち、女型のモンスターと『ロキ・ファミリア』との戦闘に集中させるために打った一手だ。

女型との戦闘チームの方へ振り返りもせず、アイクは森の中へと走る。後ろを振り返らなかつたのはアイクが皆を信用している証拠だ。

森に入ると漆黒の騎士は辺りを警戒している。キヨロキヨロと見回し、でも隙は作らず。アイクは漆黒の騎士から身を隠しながら斬撃を飛ばす。

漆黒の騎士はそれを間一髪回避し、斬撃が飛んできた方向へと『ゼーンズフト』を投擲してくる。

様子を見ていたアイクは何なく躲し漆黒の騎士の前へと姿を現すと同時、再び斬撃を飛ばす。

手元へと戻した槍でその斬撃をかき消し、一気に距離を詰めて来た。槍を横薙ぎに振り払い、アイクはそれをバク転で距離を取る。足を地面につけた瞬間距離を再び開き斬撃を飛ばす。

『厄介ナ……！』

今までの戦闘で初めて苛立ったような声を出した。一応、感情というものも持っているようだ。

斬撃を再び槍を振り払い斬撃をかき消す。振り払った懐に向けて一気に距離を縮め胴へと袈裟切り。

漆黒の騎士は後ろに飛ぶことによつて間一髪回避する。着地した隙を逃さず攻撃を続ける。漆黒の騎士はアイクの攻撃を躲し、時には槍で受け止め何とか対応している。

「どうした、以前戦つた時より弱くなつたか？」

『小癩ナ……！』

漆黒の騎士は少し距離を取り、槍を連続で突き出す。しかしアイクは身を翻し半歩後ろに下がるといふ最小限の動きだけで回避し続ける。

「お前は良くも悪くも動きが機械的過ぎる。フェイントも入れなければ攻撃も単調だ。お前の動きは前回の戦いで見切つた、お前の攻撃は俺には当たらん。それが植物人形であるお前の限界なのだろう」

漆黒の騎士の渾身の突きを右斜め前に回転しながら踏み出すことによつて回避、そのまま回転の勢いを利用し漆黒の騎士の首を斬る。

兜が首ごと飛び完全に勝利したかのように思えたが、漆黒の騎士の中身は人間ではない。つまり首を切られても動けても不思議ではない。

飛んで行つた首を見向きもせず、切り払つたアイクの背中に向けて槍を突き出す。

しかしアイクはそこまで読んでいた。首を切っても、上半身と下半身を切り離しても、中身が人間でないのなら動いても不思議ではないと。

その槍を見向きもせずの地面を転がり避ける。地面を転がりながら方向転換し漆黒の騎士の方へと向き、剣を真上に投げる。

その剣の動きに注目してしまった漆黒の騎士はアイクの方への注意が疎かになってしまふ。

空中で回転している剣の場所に突然アイクが出現したと思ったときには、アイクは空中から漆黒の騎士めがけて剣を振り下ろしていた。

咄嗟に槍で一撃目を防ぐが、二撃目があることを漆黒の騎士は知らない。地面に着地したままバク転をして切り上げる。

漆黒の騎士の鎧の洞には一本の剣筋が走り、そこからは淡い紫色の光が漏れだしている。

この光は見覚えがある。この世界における魔石の色そのものだ。

「お前の原動力は、魔石ということか……お前は突然変異のモンスターと同列なのか」
『……』

胸を押さえ何も言わない漆黒の騎士。

「お前は何故さつきモンスターを使役しているような動きを見せた、そしてなぜモンス

ターはそれに従った？」

『……』

「赤毛の調教師、あいつと何かしら関係があるのか？」

『……』

アイクの質問に何一つ答ええない。もとより答えを期待しての問いではなかったのだが、ここまで露骨に何も答えようとしないときさすがにイラつく。

すると突然、『ロキ・ファミリア』の遠征組がいたところから爆音が鳴り響き、そちらへ目をやると爆炎が上がっていた。

その一瞬目を離れたすきに、漆黒の騎士の足元には魔法陣が現れ一瞬の間になくなる。

咄嗟に手を伸ばすがその場所には何も残っていない。また逃がしたということだ。

ここに燻っていても仕方がないので先ほどの爆音がした場所へと向かう。皆の無事を祈りながら。

* * * * *

アイクが漆黒の騎士の方へと向かいすぐに残ったメンバーは戦闘を開始した。いや、しようと思ったが正しい。

アイズがアイクに『アロンダイト』を渡され、漆黒の騎士と他のメンバーを分離させ

た後に、再び女型のモンスターと対峙してふと違和感を感じた。

そしてこの違和感の正体をアイズは直感的に悟った。

「……あれは、精霊？」

アイズの眩きを近くにいたメンバーが驚愕と共に聞き返す。

「精霊だ?!?あの怪物がか？」

『アリア!!アリア!!会イタカツター!貴方ヲ食べサセテ!』

女型の精霊は大声で言葉を発する。モンスター、もとい精霊が言葉を発するとは露ほどもにも思っていないかったメンバーはその光景に固まってしまう。

『貴方モ一緒ニナリマシヨウ?』

「皆、油断しないで。何が来ても対応できるようにしておいてくれ。レフィーヤ、魔法の準備を!リヴェリアは詠唱を待っててくれ、嫌な予感がする……」

フィンの指示と共にレフィーヤが魔法を唱え始める。

その魔力に反応したのか、女型の精霊が何やらぶつぶつと眩きだした。

『火ヨ、来タレ——』

「詠唱?!?モンスターが!?!」

女型の精霊が詠唱を始めると同時、その足元には巨大な魔法陣が展開される。

「【ヒュゼレイド・ファラーリカ】!」

レフイーヤの魔法が完成し、女型の精霊に向けて最大火力で発射される。魔法の矢は女型の精霊を寸分狂わず穿ち続け、やがて一斉射撃が終わり煙が晴れていく。目g他の精霊には傷一つ付かないまま。

「嘘でしょ……無傷だなんて……」

「リヴェリア、防護結界を張れ！」

『猛ヨ猛ヨ炎ノ渦ヨ紅蓮ノ壁ヨ業火ノ方向ヨ突風ノ力ヲ借り世界ヲ閉ザセ燃エル空燃エル大地燃エル海燃エル泉燃エル山燃エル命全テヲ焦土ト変工怒リト嘆キノ号砲ヲ我ガ愛セシ英雄ノ命ノ代償ヲ——』

「舞い踊れ大気の精よ、光の主よ。森の守り手と契りを結び、大地の歌を持って我等を包め。我らを囲え」

女型の精霊とリヴェリアの同時詠唱。それはともに超長文詠唱、しかし詠唱速度はリヴェリアよりも女型の精霊の方が早い。

その間に女型の足元の触手やモンスターは詠唱中のリヴェリアを狙う。その触手をテイオナやテイオネが切り、ガレスとベートと椿が迎え撃つが、それもギリギリだ。

『代行者ノ名ニオイテ命ジル与エラレシ我ガ名ハ火精霊炎ノ化身ノ女王——』

「総員、リヴェリアの結果まで下がれ！」

「大いなる森光の障壁となって我らを守れ——我が名はアールヴ！」

リヴェリアの詠唱が終わり、皆がその結界まで下がってくる。

「【ヴィア・シルヘイム】!!」

リヴェリアが物理・魔法の遮断結界を張り終えると同時、女型の精霊も魔法の詠唱を終える。

『【ファイアーストーム】』

世界が紅に染まった。目の前を巨大な炎が通過し、遮断結界のいたるところに罅が入っていくのが確認できる。

ガレスが前へ出、その炎を盾を以って防ぐ体勢を取る。やがて遮断結界は破壊され、ガレスの盾をも、その炎はすべてを焼き払っていく。

業火が過ぎ去った場所には倒れている『ロキ・ファミリア』の面々。そしてそれを意に介さずに、女型の精霊は新たに魔法の詠唱を開始する。

『【地ヨ、唸レ——】』

その詠唱を止める術を持たない彼らは、ただ魔法の完成を待つことしかできない。

魔法の詠唱を続ける女型の精霊、やがて魔法陣は巨大化していき、魔法の完成が間近であることを伝えてくる。

『【メテオストーム】』

魔法が完成し、次々と隕石群が落下してくる。それを防ぐ術もまた、彼等にはない。

皆が終わりを覚悟し目を閉じる直前、人影が彼らの前へと割り込み、黄金の剣を地面に突き立てた。

剣を突き立てた場所からは障壁が生み出され、リヴェリアの遮断結界を持つてしても防ぐことができなかつた魔法を次々と防ぎ、隕石群は消滅していく。

やがて音が鳴りやみ、うっすらと目を開けるとそこには先ほど一人で別の敵へと向かつて行つた『蒼炎の勇者』の姿があつた。

「無事、とは言えないようだな。お前達、生きているか？」

第二十一話

（アイズ side）

『アイズ、君は、君だけの英雄を見つけろんだ』

この言葉は私の父親の言葉だ。そして今になってなぜ思い出すのだろうか？

彼の姿がお伽噺の英雄そのものだからだろうか？彼の戦う姿に対する憧れからだろうか？それとも皆を守ろうとする彼の行動に惹かれているのだろうか？

考えても今一つ確信を得られない。

ただ皆を守るために誰よりも前に出て戦い、そして最後には勝つちやう彼は、とてもかっこいいものだと思う。

（……ああ、そういうことか）

そして突然思考が纏まる。

私の思い描く英雄像。誰にも負けないその強さ、どんなときにも諦めない心の強さ、そしてみんなを守ろうとする思いの強さ。

彼は私が思い描く英雄像そのものだ。

そしておこがましいかもしれないけれど、彼には皆にとつての英雄ではなく、私だけ

の英雄になってほしい。

世界を救った『蒼炎の勇者アイク』としてではなく、私にとつての英雄アイクになってほしい。

そして彼の隣に立てるだけの、ふさわしい強さが欲しい。誰もが認める、英雄の相棒に私はなりたい。

そのためには今ここで、敵の攻撃に負けて寝そべっているわけにはいかない。目の前、あの程度の脅威を排除できないで、何が英雄の相棒だ！

いつからだろう、彼のことを考えると心臓の鼓動が早くなる。いつからだろう、気が付いたら彼の姿を目で追っていたのは。

これだけは分かる、私が思い描く強さは、彼の強さそのものだ。

だからこそ、まずはあの精霊を倒し、私が彼の隣にふさわしいのだと認めてもらう第一歩にする。

そしていつか、私はこの思いを彼に伝える……

* * * * *

「無事、とは言えないようだな。お前達、生きているか？」

女型の精霊が魔法を完成させ、その魔法が彼らを襲う直前、アイクは彼らの前に割り込み目の前に障壁を発生させ女型の精霊の魔法から『ロキ・ファミリア』の面々を守つ

た。

しかしその前に受けた炎の魔法により皆が皆満身創痍、リヴェリアとガレスに至っては気を失っている。生きることが奇跡と言っても差し支えないだろう。

「……ア、イク……？」

「アイズ、立てるか？」

「……う、うん……！」

アイズは『デスペレード』を杖代わりにし無理やりにでも立とうとするが、喰らったダメージは大きくすぐに動ける状態ではない。

剣を地面に突き立てたまま、後ろで倒れているメンバーの傍に駆け寄り容体を確認している。

気を失っているリヴェリアとガレスの首に指を当て脈があるかどうかの確認をした後、顔に手を持って行き息があるかどうかの確認。

二人とも脈は確かにあり、息もしている。どうやら生きてはいるようだ。

その間にも食人花や芋虫型のモンスターはアイクが生み出した障壁を破壊しようとして攻撃を続け、女型の精霊も触手をぶつけ続けるが、ラグネルが生み出した障壁はびくともしない。

「フィン、生きてるか？」

「アイク……うん、何とか……ね……」

「あいつは今ここで倒さなくてはならないほど、緊急性を要しているのか？」

「……何が言いたいんだい？」

「一旦引いて出直す、もしくは今回は討伐を諦める。どちらにせよこのままでは戦闘の続行は困難だろう」

「……」

「幸いあの障壁はあの程度の攻撃で壊れることは無いが、ずっとここで燻っているわけにもいかないだろう。お前の悲願は知っている、そのために今までやって来たことも尊重しよう。ただ、無理して敵を倒し続けることが勇気ではない」

「……何が言いたいんだい？」

アイクの発言に若干の怒気をにじませ聞き返す。まるでここでアイクの言葉に従う気はないと言わんばかりだ。

「一旦引くことも勇気だ。このまま特攻するのならば止めはせん、俺もあいつを倒すことに協力しよう。ただ俺は、ここは一旦引くべきだと思う」

「悪いけど、ここで引くことはあり得ない。僕は僕の悲願を叶える為にはどんなことでもやると誓った。ここであいつを倒すことは、僕の悲願に一步近づく。僕はそう信じているからこそ、ここで引くわけにはいかない」

「そうか、ならば俺もあいつを倒すことに協力しよう」

「貴方の力を借りない、と言いたいところだけど……この状況でそこまでの強がりはない。貴方の力、存分に借りさせてもらおう」

フィンは無理やり立ち上がる。そして槍を二本持ち、そのうち一本を掲げ、

「君たちに『勇氣』を問おう。その目には何が見えている？」

アイクは剣を突き立てた場所へゆっくりと歩みを進めていく。

「恐怖か、絶望か、破滅か？ 僕の目には倒すべき敵、そして勝機しか見えていない」
皆が立ち上がるのを待たずに、突き立てているラグネルの柄を握る。

「退路などもとより不要だ。この槍を持って道を切り開く」

一息にラグネルを引き抜くと同時に、障壁は消滅しアイクは大量のモンスターと対峙する。

「フィアナに誓って、君たちに勝利を約束しよう——着いて来い！」

フィンが走り出すと同時に、倒れていたティオナ、ティオネ、ベートは歯を食い縛り動かない身体に鞭を打って立ち上がる。

アイクは障壁付近にいたモンスターをラグネルを一振り、障壁付近にいたモンスターはすべて魔石ごと砕かれ灰に帰り、次々と迫りくる女型の精霊の触手を全て切り払って

いく。

「それとも、ベル・クラネルの真似事は、君たちには荷が重いか？」

此度の遠征で目撃したベル・クラネルの『冒険』。

レベル1の彼がレベル2相当のミノタウロス、それも強化種を一騎打ちで下した。これを冒険と言わずして、何を冒険と言おうか。

「——雑魚に負けてられつかッツ!!」……上等じゃない」「私たちも冒険しなくちゃね」
発破をかけられたレベル5の王権者たちは次々と立ち上がり、各々武器を構える。

アイズも満身創痍の身体に鞭打って立ち上がる。愛剣である『デスペレード』を投げ捨て先ほどアイクに借り受けた『アロンダイト』を構える。

「ラウルたちは後方支援に徹しろ！僕とアイズたちで女体型に突撃する！レフィーヤ、君も来るんだ！」

ベル・クラネルの名前を聞き立ち上がったレフィーヤも前線へと連れて行く。フィンが指示を飛ばしている間も、アイクは敵の進行を食い止めていた。

「リヴェリア、ガレス。ここで終わりかい？」

いまだに意識を取り戻さないリヴェリアとガレスの元へと駆け寄り、フィンは問う。
「ならばそこで寝ている。僕は先へ行く」

答えを聞く間も与えずに、フィンは前線へと向かう。

「あの生意気な小人め……おい、起きろ、クソエルフー！いつまで寝ている！」
ガレスが意識を取り戻し、フィンを毒づき、リヴェリアを叱咤する。

「少し黙れ……脳筋ドワーフ……！」

やがてリヴェリアも目を覚まし出会った当初のような憎まれ口をたたく。

『リヴェリアさん！ガレスさん！』

二人の復活に後衛のサポート組は歓喜の声を上げる。

「お前ら、斧をよこせええええー！！」

「お前たち、私を守れ！」

ガレスが叫び、リヴェリアの足元には巨大な魔法陣が出現する。

リヴェリアの指示を聞いたサポート組はリヴェリアの援護をしようと思いき出そうとするが、その必要は無いとすぐに悟った。

「リヴェリアの援護は任せろ、お前たちはあいつらのサポートに徹しろ」

フィンが前線で次々とモンスターをなぎ倒していく。アイズは必殺の一撃を打ち込むために魔力を集中させている。

他にも前線では第一級冒険者たちが善戦している。アイクは後ろに下がって一人でリヴェリアの援護に回ったほうが戦力ダウンは免れると判断した。

リヴェリアはアイクの方を向き何やら言いたそうな顔をしているが、アイクはそれを

一瞥する。

「お前は魔法の詠唱に集中しろ。お前に向かってきた敵は、俺がすべて倒す。それとも、俺一人の援護では不安か？」

「……いいや、むしろ頼もすぎる！」

前線では女型の精霊の魔法をレフィーヤが防いでいる。そして彼らと精霊の彼我の距離は五十メートルを切った。

「【終末の前触れよ、白き雪よ——】」

リヴェリアが詠唱を始める。その魔力に反応し、芋虫型のモンスターや食人花が次々とこちらへ押し寄せてくる。

アイクは前に出て剣を一闪、斬撃を飛ばしモンスターを次々と撃破していく。後ろからはサポーター組からの魔剣による援護があり、一定の距離からモンスターを近づけさせない。

「【黄昏を前に風を卷け】」

後ろから向かってくる敵には椿が対応し、リヴェリアを守っている陣形は全くもって崩れることを知らない。

「【閉ざされる光、凍てつく大地、吹雪け、三度の厳冬——終焉の訪れ——】」

『詠唱連結』。エルフの王族であるリヴェリアのみに許された魔法特性。彼女がス

テータスに発現させた三つの魔法、そのどれにも含まれている詠唱属性。

「【間もなく、焔は放たれる】」

攻撃、防御、回復の三属性の魔法を『詠唱連結』によって使いこなし、九つの魔法を扱う彼女につけられた二つ名は『九魔姫』。

「【忍び寄る戦火、免れ得ぬ破滅。回戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む】」

「【ウイン・フィンブルヴェトル】から『詠唱連結』により膨大な精神力と異なる詠唱分が過ぎ込まれる。

「【ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に終幕を。焼き尽くせ、スルトの剣——我が名は、アールヴ】！」

迫りくるモンスターたちを殲滅していたアイクは、魔法の完成を確認した。急ぎリヴェリアの後ろまで下がり、リヴェリアは女型の精霊、それに付き従うもモンスターすべてに狙いを定めた。

「【レア・ラーヴァティン】！」

巨大な業火は目の前のものすべてを焼き尽くす。芋虫型のモンスター、食人花を焼き払い、その業火は女型の精霊を直撃する。

「上出来だ」

魔法の酷使による精神枯渇直前のリヴェリアの肩を抱き、その場に座らせる。

レベル8の敏捷の全力を以って、女型の精霊に向かって特攻するアイク。その間わずか数瞬、ガレスに向かって射出された縁槍の間に体を滑り込ませ、その縁槍をすべて切り捨てる。

全力の一撃に備えていたアイズがその場を駆けだし、アロンダイトを構え、その身を空中に踊らせる。

身に纏った風を足場とし、女型の精霊に向けて全力で突っ込む。

そして『彼女』は笑った。

『アイシクル・エッジ』

体内で練っていた魔法陣が顕現し、空中にいるアイズに向けて氷が射出される。

縁槍をすべてきっぱり払ったアイクは、瞬間その氷に向けてラグネルを投擲し、氷を粉々に砕く。

これでアイズの剣を妨げる障害はすべて取り払った。

「リル・ラファール！」

女型の精霊に向けて今まで蓄積させてきたエネルギーをすべてぶつける。直撃した女型の精霊はその姿を少しづつ灰へと姿を変えていき、やがて魔石が露呈する。

突撃したエネルギーをそのままに、アイズはの突きは止まらない。やがては魔石をも

砕き、女型の精霊は完全にその姿を灰へと変えた。

第二十二話

59階層の女型の精霊を撃破した後、芋虫型のモンスターや食人花は次々と散らされていくようにその場からいなくなり、恐らくは60階層に下って行ったのだろう。

そしてその戦闘での被害は甚大だった。一人を除いて殆どの冒険者が満身創痍、アイズ、リヴェリア、レフイーヤに至っては魔法の過使用による精神枯渇の状態に陥っていた。

59階層は未到達階層であったため、他にモンスターが出ないとも限らないため、急ぎ50階層のキャンプへの帰還が決まった。

ちなみに精神枯渇で動けない三人を運んでいるのはアイク一人である。他の冒険者は先ほども言ったように皆が皆満身創痍、一人一人を運びながら移動する余裕がなかったからだ。

レフイーヤとリヴェリアを両肩に担ぎ、アイズを横抱き、いわゆるお姫様抱っこの状態で運んでいる。最初リヴェリアは降ろせと文句を言っていたが、精神枯渇が酷く碌に抵抗できなかったため、為すがまま担がれているというわけだ。

三人も運んでいるアイクは当然戦闘など碌にこなせない。その為隊の後方、殿を務め

ている。

「アイク、結局漆黒の騎士はようになった？倒せたのか？」

肩に担がれたリヴェリアはアイクに問う。女型の精霊との戦闘に駆けつけた際には目立った外傷がなかったため、負けてはいないことは確認が取れているが。

「いや、また逃げられた」

「そうか……」

「だがあいつの弱点はもう分かった。次に邂逅した時には」

——あいつを倒す。

改めて決意をしたように言い放つ。

「それで、あいつの弱点とは一体何なんだ？」

「鎧の胸の部分を切った際に魔石の光が漏れだしていた。つまりあいつの原動力は魔石ということだろう。この世界は魔石で色々と動かせるんだろ？」

「ああ」

「そしてその魔石を破壊すればそれは動きを止める」

リヴェリアは首を縦に振ることでその問いに答える。

「それと同じだ。あいつの胸の魔石を破壊する、そうすればあいつは絶命、動きを止める筈だ」

それに、と続ける。

「あいつの槍術、というか戦闘能力はゼルギウス将軍、本物の漆黒の騎士よりも劣る。それにこつちには『神の恩恵』がある。ついさつき初めて『神の恩恵』力を全力で使ったが、中々のじやじや馬だな」

「『神の恩恵』をじやじや馬扱いか……慣れていない内はそうなるだろう。熟練の戦士ほど、最初は恩恵の力に戸惑うものも出てくる」

「ステータスの更新ですぐに身体能力が上がるんだろ？今までの自分に喧嘩を売っているようで、ものすごく癪なんだが」

「『神の恩恵』とはそういうものだ。遠征が終わったらステータスを更新してみたらどうだ？」

「気が向いたらな」

* * * * *

時は進み現在『ロキ・ファミリア』の遠征チームはダンジョンの18階層で足止めを食らっていた。

上層に進んでいる途中にいるモンスターに毒を貰ってしまい、その解毒薬をベートが地上に取りに行っている間は進軍できないということだ。

足止めを食らっている間は特にやることも無い。18階層はモンスターが生まれて

くることは無いため、警戒は最低限で構わないし、ダンジョンの遠征からの帰還ということでもあまり激しい鍛錬を行おうという者もない。

59階層で戦闘を行ったものは50階層で十分に休息を取ったため、ほぼ全快の状態だ。その為テイオナなんかは暇だー!と喚びてた。

18階層での警戒は基本的に当番制を取っている。そして今の当番はアイクとアイズだ。

「アイズ、もう戦闘の傷は完全に癒えたのか？」

「うん……」

「エリクサーとか、高等回復薬とか、この世界の薬が便利というか、馬鹿げているな」

「そうだね……」

「ただこつちの世界は治療の魔法が使える奴が少ないな。『ロキ・ファミリア』でもリヴェリア位なものだろう？」

「うん……」

「……いい加減こつちを向いて話さないのか？」

どういうわけかアイズはアイクと目を合わせて放そうとしない。元から口数は多く中たためただ相槌を打っているだけでも不自然ではあまりないのだが、一応目を見て話すことはできたはずなのだが。

「……ねえアイク、アイクって向こうの世界で仲のいい女の子とか多かった？」「女？それなりにいたんじゃないのか？」

話し始めたと思っただらいきなり女性の話である。流石のアイクも若干対応に困る。

「よく話をする同じ傭兵団の剣士とかは？あとはアイクが救った国の王女様とか、アイクが戦ってた国の大将も女の子だったよね？」

同じ傭兵団の剣士はワユ、アイクが救った国の王女様はエリンシア、アイクが戦った国の大将というのは恐らくデインの暁の巫女、ミカヤだろう。

「ワユとはそんな浮ついた関係にはなつたことが無いな。あいつは目があつたら勝負だなんだと騒いでいたからな。エリンシアは身分が違い過ぎる、それにあいつと結婚したのはあいつの国の騎士団長だ。ミカヤは結局デインの王女になつたからな、あいつと結婚したのは俺の傭兵団に一時いたあいつの弟のような奴だ」

言われた通りの女性との関係を一通り説明し終えたアイク。女性関係の話なんかはあまりしてこなかったし、アイク自身女性とそう言った関係になつたことも無い。

「そうなんだ……今も好きな人とかいないの……？」

「ああ……さつきからどうしたんだ？」

「なんでもない」

聞きたいことは聞き終えたと言わんばかりにぶいとそっぽを向く。何があつたかは

分らないが、何でもないとこのなら構わないかと思うアイクだった。

やがて18階層の見回りが終わろうとなったとき、18階層と17階層をつなぐ階段の所に白髪の少年と赤髪の青年、小人族の少女が倒れていた。

アイクとアイズは彼らの傍へ駆け寄り生きていかどうかの確認をする。全員意識は無いが呼吸はしている。

アイクとアイズは三人を『ロキ・ファミリア』のキャンプへと運び、フィンたちに事情を話した。

フィンたち幹部組は彼ら、というよりも白髪の少年を見ると快く承諾し、空いているテントへと運ぶように指示されたため。彼らをテントへと運ぶ。

テントに運び、一通り治療をして暫くが立つ。すると中から少年の声が聞こえて来た。

「——リリー・ヴェルフ！」

少年が目覚めたと分かったアイクはテントの中へと入り、彼らの容体を確認しつつ、何があつたかを聞きだすことにした。

「起きたか」

「ええつと……アイクさん!?あの、ここは!?仲間は無事ですか?」

「少し落ち着け、お前の仲間というのはそこに寝ている二人のことだろう」

いまだに目を覚まさない二人を指さし、ベルを宥める。二人を見て落ち着いたのか、ほっと胸を撫で下ろした。

「僕たちを助けてくれてありがとうございます(ご)ぎいます」

「構わない。それよりも何故あんなところで倒れていた？」

「僕たち中層辺りに潜っていたんですけど、その時に他のパーティーに怪物の群れを押し付けられてしまいました……その時の戦闘で回復薬がほとんど駄目になってしまいました、地上に戻ろうにも戦闘を避けられる装備じゃなかったのです。リリが18階層に降りれば一応の装備は整えられるって言っていたので、この階層を目指していたのですが……」

アイクは続けろと言う。

「17階層にゴライアスがちょうど生まれてしまいました……命からがらこの階層にたどり着いたということですよ」

17階層にいるゴライアスは此度の遠征で倒したのだが、運悪く生まれ落ちる周期に当たってしまったらしい。

「まだゴライアスは17階層にいるのか？」

「ええ、どこかのパーティーが倒していなければ恐らくは」

「分かった。すまないが、フィンに起きたことを伝えてきてくれないか？案内するから、

着いて来てくれ。それともまだ動けないようならもう少し休んでいて構わないが」
「い、いえ大丈夫です。案内お願いします」

* * * * *

ベルをフィンの元へと案内し、フィンに事情を説明している間にリリとヴェルフと呼ばれていたベルの仲間が目覚めた。

その頃にはすでに夕食の時間となっていたので彼らは『ロキ・ファミア』の面々と一緒に食事を取っていた。

そしてアイクは現在17階層に単身乗り込んでいた。先ほどベルに言われたゴライアスを倒すためである。本来なら大勢でパーティーを組んで戦うモンスタナーのだが、ゴライアスのレベルは4相当、アイクのレベルは8。一人で充分だと判断し、単身ここに乗り込んできた。

ゴライアスは17階層に乗り込んですぐの場所にいた。アイクの足音でこちらに気が付いたのか、ゴライアスはアイクが来た咆哮を向き、両手を握り腕を振り上げた。

その振り上げた腕をアイクがいた場所に振り下ろす。アイクは『神の恩恵』のステータスになれるためにも回避はせずにラグネルを掲げ、剣の腹でゴライアスの腕を受け止めた。

巨大なゴライアスの攻撃を受け止めるなど本来は不可能なのだが、アイクのレベルと

力のステータス、そして二神の女神から授かった加護により破損することが無く、切れ味が落ちることも無いラグネルがそれを可能としていた。

(……やはり『神の恩恵』は滅茶苦茶だな。こんな芸当普通なら絶対にありえんぞ)

心中でそう思いながら、アイクは受け止めた腕と剣の鏝迫り合いを押し返した。

回避されることはあっても受け止められたことは無かったゴライアス。その有り得ない事象に思わず仰け反り、動揺を隠せずにいた。

アイクはそんな好きを見逃すはずが無い。まずは動きを止めることを最優先とし、大きく仰け反ったゴライアスの足を狙って一気に距離を詰める。

加速とラグネルの威力、そしてアイクの力を以って振りぬかれた剣は、容易くゴライアスの右足を切断した。片足ではバランスが取れずに後ろへと倒れる。

腕を使って上半身を何とか起こし、目を充血させアイクを睨みつける。ゴライアスはアイクに向けて渾身の右ストレートを放つ。

しかし下半身の支えがないパンチなど見切るのも容易い。早くて威力が高いだけの攻撃は動きを見切つてしまえさえすれば十分に躲せる。

アイクは最小限身を翻し向かってきた右腕に剣を当てて右腕に一閃の剣筋を入れる。振りぬいた時にはすでにゴライアスには右腕の感覚は無かった。そのまま空中に身を躍らせ振りぬかれた右腕を切断する。

右半身のほとんどを欠損したゴライアスは咆哮を上げる。左半身しかまともに動かせないゴライアスには勝ち目などあるはずもない。

しかしここで少しのイレギュラーが発生した。アイクとゴライアスが戦闘している17階層と18階層の一本道、17階層の方に何人かのパーティーが目に入った。

何を考えたのか、戦闘中のゴライアスとアイクの方へと歩み寄って来たのだ。

その動きを見たゴライアスは、パーティーの方へと左腕を伸ばす。覆面を被った冒険者が先頭に立ち、その腕を受け止めようとしている。しかしゴライアスの攻撃を受け止めるのはほとんど不可能だ。この場合、アイクの方が異常なわけだが。

アイクは再び空中に身を躍らせ、そのパーティーに伸ばされた左腕を一閃、ゴライアスの腕は切断され血が大量に噴き出した。

「何を考えている、下がっている!」

その一団に乱雑に言い放ち、決着を早々につけることにしたアイク。剣を回転させながら上へと放り投る。

その剣の動きを目で追うゴライアスと後ろにいるパーティーの面々。回転している剣を空中でキャッチし、落ちてくる勢いを利用してゴライアスの胸へと剣を突き立てる。

胸に埋まっているゴライアスの魔石を破壊し、ゴライアスは消滅した。

第二十三話

ゴライアスとアイクとの戦闘を見たパーティーの面々は、アイクがゴライアスにとどめを刺しても呆けていた。

再起動を果たしたのはヒュン！と空気を切る音が耳に入ってからだ。音のした方向を見ると、アイクがラグネルに着いた血を振るって落としていた。

「あんたらは？」

「いやー、すごいね君。一人でゴライアスを倒すなんてなかなかできることじゃないぜ？」

帽子を被つたいかにも軽そうな男が代表してアイクの方へと歩み寄り、飄々とした態度を崩さずに話しかける。

「そりやどうも。で、俺の質問の答えはどうなんだ」

「俺はヘルメス。一応神ってやつだ」

「神か……」

一瞬眉を顰める。これまでであった神は初見で碌な反応をされなかった。

ロキとヘファイストスには怖がられ、フレイヤにはオツタルをけしかけられそのまま勧誘をされた。

「神はダンジョンには入ってはいけないんじゃないやなかったのか?」

「特例だよ特例、ギルドには黙っててくれよ?」

片目を閉じ、唇に自分の指を当てながらいけしやあしやあと答える。それはつまりギルドの定めたルールに反しているということなのだ。

「君…ベル君を知らないかい!」

ツインテールに豊富な胸を持ったロリっ子がアイクの身体に自分の身体を押し当てながら問う。

いきなりのことだったので回避ができなかったが、すぐに肩に手をやり押し返しなごら、

「少し落ち着け。人に物事を尋ねるなら、まずは自分の身分を明かしてからにしろ。それとベルとその仲間は無事だ。今俺が所属しているファミリアにもてなされている筈だが」

その答えにほっと胸を撫で下ろす。見るとそのロリっ子だけではなく一段全員がほっとしている雰囲気を醸し出していた。

「ああごめんよ。僕はヘステイア。『ヘステイア・ファミリア』の主神で、ベル君の主神

「や」

(また神か……)

本格的に頭痛を錯覚する。頭を押さえたため息を吐くようなことはしないが、そのような行動を取ってしまいそうな状況だ。

「ということは、貴方は『ロキ・ファミリア』の所属ということでしょうか？今ダンジョンで人をもてなせるほどの余裕があるファミリアは『ロキ・ファミリア』だけですが」「そうだが……ん？お前どこかで会ったことがあるか？」

ショートパンツに薄手のシャツ、覆面を被った冒険者の方に顔を近づけるアイク。そのアイクを避けるかのようにその覆面の冒険者は一步後ろに下がった。

「すいません……咄嗟のことだったのでつい……」

「気にするな、妖精、なんだろう？」

「青年君！僕たちを早くベル君の所へ案内してくれ」

アイクの腕を引っ張りながら18階層日続く階段の方を指指すヘスティア。その光景は親に何かをせがんでいる子供にしか見えない。

ため息をぐつとこらえ無言で18階層の方へと歩みを進めたアイク。ヘスティアを先頭に、その一行はアイクについて行く。

「……アスファイ、彼には注意をしたほうがいい」

「ヘルメス様？」

「常に動向を監視させられたらそれが一番いいんだらうけど、恐らく彼はそれを見破るだろうね。君の兜を使つてもだ」

ヘルメスの一言に動揺を隠せない。『ヘルメス・ファミリア』のアスフィは発展アビリティ『神秘』を持つている数少ない冒険者で、数々の魔道具を作っている。

その中には被ると透明になる兜があるのだが、その透明化をもつてしてもそれを見破るとヘルメスは言うのだ。

「それに彼の剣、戦闘技術、全てが底知れない。積極的に関わらないようにしてくれ」
「……分かりました」

その後『ロキ・ファミリア』のキャンプで食事をしていた場所へとヘステイアたちを連れて行き、アイクはこっそり合流しようとしたのだが、リヴェリアに見つかり説教されたことは言うまでもない。

17階層でしたことも無理やり聞きだされ説教の時間が伸びたことも最早言うまでもないだろう。

* * * * *

「お疲れーアイク。いい加減懲りないの？」

少し疲れたような表情を浮かべながら食事をしている場所へと移動しているとティ

オナから声をかけられる。

「懲りるって、何にだ？」

「あれだけ連続でリヴェリアに説教されてて良く懲りないなーって思ってた。言っておくけど58階層でリヴェリアが泣いてるところ、私初めて見たよ」

「懲りるも何もな……向こうでやっていたようなことをこつちでもやっているだけなんだがな」

「自分を犠牲にして一人で戦うこと？」

「少し違う。前へ立って、戦い続けることだ。これでも一国の軍の大將だったんだ。前へ出て戦うことは当然だと思っただがな」

普通は後方から指示を出すことが軍の総大將の仕事なのだが、彼の人望と力がなせる業なのだろう。

「あ、そうそう。全く関係ないんだけどね。リヴィラの町で不思議な子を見かけたんだ」「不思議な子？」

「なんかリヴィラの町で物品の根切交渉すつごく頑張ってたね。商人の方もその子にデレレレしちゃってさ、なんか町で売られてる値段の半額位の値段で商品買ってんだ」

「で、そいつはその後どうしたんだ？」

「なんかホクホク顔のまま19階層の方に向かっていったよ。ソロで」

本当に関係ない話だった。前との会話に何もつながりが無かったが、偶にはそういった雑談も悪くはないだろう。

次の日にはベートが地上から解毒薬を取ってきて『ロキ・ファミリア』の遠征チームは無事地上へと帰還した。

後日談なのだが、その後の18階層ではダンジョンに潜っていたヘステイア、もしくはヘルメスの所為なのか、黒いゴライアスが出現し騒然としたらしい。

リヴィラの町の冒険者、ベルたちを探しに行っていた冒険者達が協力して黒いゴライアスは討伐をしたらしい。

第二十四話〈戦争遊戯①〉

「乾杯！」

ベル、リリ、ヴェルフの三人は現在『焰蜂亭』という居酒屋でお祝いの飲み会をしている。

『ロキ・ファミリア』の遠征組が18階層から地上に帰還した後、ベルたちを探しに来ていたグループの一人のヘステイアが誘拐されるといふ事件が発生した。

ベルがヘステイアを救出する際に、ヘステイアは『神威』を表に出してしまった。その所為かどうかは不明だが18階層に黒いゴライアス、通常よりも強い個体が生み出されてしまった。

そのゴライアスをリヴィラの町の冒険者や捜索に着いて来ていたファミリアの眷属、ベル、リリ、ヴェルフらが協力し何とか黒いゴライアスの討伐に成功する。

その際『クロツゾの魔剣』を用い、ゴライアスに止めを刺したヴェルフのその行動は、偉業として認められ、晴れてヴェルフはレベル2へと至った。

「本当におめでとう、ヴェルフ！」

「いやー、まさかこんなに早くレベルアップすることができるとはな！これで発展アビ

リテイの『鍛冶』が取れるぜ、ありがとうなベル」

「う、うん……」

発展アビリテイの話が出てきた辺りからベルの表情が若干曇ってしまった。その表情の変化を見逃さずにヴェルフはベルに訊ねる。

「どうかしたか、ベル？」

「えつと……レベルアップしたつてことは、ヴェルフはもう僕たちとダンジョンに潜らないのかな……つて」

ヴェルフがベルとパーティーを組んでいた一番の理由はレベルアップの際に取得できる発展アビリテイの『鍛冶』を取るためだ。その目的が達成された以上、ヴェルフはもうダンジョンに潜る理由は無いとベルは考えたのだ。

「レベルが上がつて『鍛冶』が取れたからポインなんてしねえよ。お前らが良ければ、これからも一緒にダンジョンに潜らせてくれないか？」

「う、うん！勿論だよ！」

その後も宴会はワイワイと進んでいく。その中の会話で今回の探索に神がダンジョンに潜った際の罰則金の話が出てきて、『ヘステシア・ファミリア』及び『ヘルメス・ファミリア』にはファミリアの所持金の半分を罰金として課された。

「今回の件でベル様の株もさらに上がったと思います。少なくともあの階層での戦いに

参加した冒険者には認めてもらえたのではないでしょうか?」

「何だ何だ?どこぞの『兎』が一丁前に有名になったなんて聞こえて来たぞ?」

どこかの席からそんな声が聞こえる。ご丁寧に酒場に響き渡る程度の声量でだ。

「新人は怖いもの知らずで良いご身分だなあ、世界最速兎といい、嘘もインチキもやりた
い放題だ。おいらは恥ずかしくて真似できねえよ!」

その後もベル・クラネルという名前は出さずに、ベルを揶揄している呼び方での罵倒
が続く。ベルも自分の馬頭は聞き流していた。そんな下らない事で楽しい気分を害さ
れるのは御免だからだ。

「威厳も尊厳も無い女神が率いる『ファミリア』なんてたかが知れてるだろうな!きつと
主神が落ちこおれだから眷属も腰抜けなんだ!」

聞き逃せない言葉が耳に入る。自分のことはまだいいが、主神の罵倒は聞き逃すこと
ができない。

気が付くと席を立ち、罵倒を繰り返している席へと向かい拳を振り上げていた。

「取り消せ!」

「いけません!?!ベル様!」

リリの制止を振り切りそのまま乱闘へと発展する。ヴェルフも参加し、その乱闘の勢
いは広がるばかりだ。

しかし途中で一人の冒険者が拳を振り上げ、ベルに殴りかかりベルは吹き飛ばされた。

「ベル様！」

「あれは、『アポロン・ファミアリア』のヒュアキントス……？」

「レベル3の第二級冒険者だぞ？」

「どうした、まだ撫でただけだぞ？」

「我々の仲間を傷つけた罪は重い、相応の報いは受けてもらおうぞ」

そのままレベル3とレベル2の乱闘が勃発するかと思われた。しかし酒場の一席から机を蹴り上げる音が鳴り響いた。

「雑魚がピーピー喚いてんじゃねえ、不味い酒が余計に不味くなるじゃねえか。うるせえし目障りだ、消えやがれ」

『ロキ・ファミアリア』の『凶狼』ベート・ローガ。彼がここで間に割って入るなどとは誰も予想できないだろう。

実際にこの酒場にいる全員があまりの状況に黙りこくってしまった。

「ふん……がさつな。やはり『ロキ・ファミアリア』は粗雑と見える。飼犬の首に鈴も付けられないとは」

「ああ、蹴り殺すぞ、変態野郎？」

「……響が削がれた」

ヒュアキントスは『アポロン・ファミリア』の面々を率いて『焔蜂亭』を後にする。その後ベルたちも会計を済ませ『ヘステイア・ファミリア』もホームへと帰った。

* * * * *

あの酒場の一件から暫くが経ち、あの時の一件は今の所『アポロン・ファミリア』から何も言われていないし、『ヘステイア・ファミリア』からも『アポロン・ファミリア』に対して何も言っていないかった。

しかし現在、ヘステイアが手にしている手紙に書かれているエムブレムは『アポロン・ファミリア』のエムブレムだ。先日『アポロン・ファミリア』のダフネとかサンドラという眷属が『ヘステイア・ファミリア』にわざわざ届けに来たのだ。

「神様、その手紙は何なんですか？」

「ん？これかい？神の宴の招待状だよ。主催は『アポロン・ファミリア』」

その名前を聞くとベルは一瞬顔を顰めそうになる。が、それを表情に出さずに、ベルはヘステイアに問う。

「それで、何か大事なことでも書いてあったんですか？」

「うーん……今回の神の宴に眷属を一人連れてくるように書いてあるんだけど……時期的に見て狙いは間違いなくベル君だろう。罊が掛かっていると分かかってその罊

にかかる動物はいないだろうか？」

「え？まあ、そうですね」

「今になって酒場の一件を引つ張り出してくるのか、それともはたまた別の要件か……サポーター君は『ソーマ・ファミリア』だし鍛冶師君は『ヘファイストス・ファミリア』だし……」

「ただいまー」

ベルとヘステイアが頭を悩ましていると、おおよそ一週間ぶりにもう一人の眷属が帰って来た。

「ナイスタイミングだよワユ君ー」

帰って来たばかりのワユに飛び込んだヘステイア。神は下界にいるが、まさしく神がかりなタイミングだと言えるだろう。

「ワユ君、頼みがある」

「何、ヘステイア」

「『アポロン・ファミリア』の神の宴に一緒に来てほしいんだ」

「えー、ベルじゃダメなの？」

それは当然の疑問だろう。ワユは『ヘステイア・ファミリア』に所属してまだ日が浅い。そういう眷属を連れて行くとしたら、それはファミリアの顔と呼べる眷属を連れて

行くべきなのだが……

ワユに対してヘスティアとベルは酒場の一件を説明する。何があつたかを知つたワユは渋々ながらもそのお願いを承諾した。

第二十五話　戦争遊戯②

（ワユ side）

結局ヘステイアとベルに言われるがまま『アポロン・ファミリア』主催の神々の宴？つてやつに連れてこられてしまった。

グレイル傭兵団は基本的に貧乏傭兵団だったから、こういう宴は全くなかったけどオスカーさんの料理は最高だったから別に気にしたことが無い。

何が言いたいかというと、あたしはこういった宴っていうやつがどういふものなのか全く知らない。クリミアをデインから取り戻したときに宴にしたのが宴っていうなら一応は知ってる。ただあの時は料理のほとんどを大将とイレースが二人で食い尽くしていた記憶しかない。

「ねえヘステイア、ここに居る人たちが皆神様なの？」

「君僕の話聞いていなかったのかい？今回の神々の宴は特例として自分のファミリアの眷属を一人連れてくることになってるんだ。だからここに居る半分以上は下界の子供たち、ファミリアの眷属だよ」

そう言えばそうだった。数時間前に話したことを既に忘れていた。あんまり興味が

ないことは覚えられないでしょ？

「すまんなヘスティア、今回は殆ど用意してもらって」

「誘ってくれてありがとう……」

隣に居るのは『ミアハ・ファミリア』の主神のミアハとその眷属、犬人っていう種族のナアーザだ。今回の宴に際して彼らの衣装をあたしがダンジョンで稼いできたお金から出した。ミノタウロスの一件の時にはベルがお世話になったから、そのお返しだ。

あたしは一回ダンジョンに潜ると一週間くらい潜りっぱなしだ。ダンジョンのモンスタースタームもそこに強いのは多いけど、やっぱりあんまりワクワクはしないなあ。

「あら、来たわね」「ミアハもいるとは意外だな」

「ヘファイストス！タケ！」

また新しい人？神？が来た。正直言つて神か人かなんて見わけがつかない。下界っていうのがこつちの世界らしいけど、下界にいる間は神は神の力を使えない普通のベオクと変わらないらしい。

「あら？あなたの連れてきた眷属はベル・クラネルじゃないの？」

「ふむ、初めて見る顔だな。あれからまた眷属が増えたのか？」

「まあ成り行きというかなんというか……」

「やあやあ集まっているようだね！オレも混ぜてくれよ！」

この人も神？なんか飄々としているというか、底が見えないというか。相手に回したら一番厄介なタイプだ。

傍に控えている眼鏡をかけた女性の方は疲れた表情を浮かべながらもそのことを既に諦めている様子だ。つまりこれが彼のいつも通りということなのだろう。

「ヘルメス、なぜお前がこつちに来るんだ。私とお前はそこまで関わりが無いだろう」

「おいおいタケミカヅチ、ともに団結してことに当たったばかりじゃないか！俺だけ仲間外れにしないでくれよ！」

片方がタケミカヅチと呼ばれ、飄々とした方がヘルメスと呼ばれている。彼らの名前だ。

「始めまして、私はヘファイストス。『ヘファイストス・ファミリア』の主神よ。あなた、ヘステイアの眷属なのよね？大変じゃない？」

眼帯をした赤髪の女性、ヘファイストスがあたしに話しかけてきた。手持ち無沙汰なところを気を利かせたのか、或いは単純に話し相手が欲しかったのかは知らないけど。

「始めまして神ヘファイストス。ワユでいいよ。で、大変かどうかだっけ？それでもないよ、少し前の方が金銭面では辛かったくらい」

「あら、言つては悪いのだけれど零細ファミリアなのに金銭面は楽なのかしら？」

「傭兵は依頼が無いとお金が入らないからね。少し前に大きい仕事を片付けたから今は

楽しんでるだろうけど、そのうちまた辛くなつてくるんじゃないかな？」

「今はグレイル傭兵団どうしてるんだらう？でも出費のほとんどが大将の食費だったから少しは楽できてるのかな？」

「諸君！今宵はよくぞ集まってくれた！」

前の方で壇上に上がった人が声を張り上げていた。

「ヘファイストス、あの人だれ？」

「あれは人じゃ無くて神。今回の宴の主催者のアポロンよ」

「今回は私の一存で趣向を変えてみたが、気に入ってもらえただらうか？日々可愛がつている者たちを着飾り、こうして我々の宴に連れ出すのもまた一興だらう」

アポロンの話もそこそこに集まってる神とその眷属はお喋りを続けている。

すると当然会場が騒然とし始め、殆どの男がある一点を見つめている。何事かと思ひあたしもその視線の先を見つめると、そこには美しい女性が後ろに男性を侍らせこちらへと向かってきた。

「ヘステイア、誰あれ？」

「彼女はフレイヤ、美の女神フレイヤだよ。気に入った子をあの美貌で魅了させて、自分のファミリアに入れさせてる性悪女さ」

「なんかえらく嫌ってない？」

「別に嫌ってはいないんだけど……」

「あら、ヘスティアにヘファイストスじゃない。来ていたのね？」

「や、やあフレイヤ、前回の神会以来かしら？」

突然フレイヤがこちらを向き、にこりと微笑みかけて来た。

「貴女は初めて見る顔ね？神ではないし……あなた、どこの眷属かしら？」

「あたしはヘスティアの眷属？ってやつ」

「ヘスティア、貴女の所の眷属は『彼』だけじゃなかったの？」

「あはは……ついこの間ね、少々訳有りなんだ」

「ふーん……面白い子ね。自分よりも強いものに、必死に抗おうとしているのね。ねえ、

うちに来ない？」

「行かせない！」

フレイヤが差し出してきた手をヘスティアがはたき落とす。フレイヤを睨みつけている。

「そう言うわけ何であたしからもお断りするね。なんだかんだで、ヘスティアには拾ってもらった恩もあるし」

「うふふ、残念だわ。貴女、名前は？」

「ワユ」

「そう。ワユ、覚えておくわ。また会いましょう?」

「機会があったら。後ろのお兄さんも今度は戦おうね」

その一言に会場が一斉に静まり返る。数瞬が経ち、フレイヤが声を高らかに笑い出した。

「貴女やっぱりとつても面白いわね。オツタルはオラリオ一の冒険者よ? まあ最近は何が『彼』が一番強いのだけれど……」

「へー、お兄さんやっぱり強かったんだ。あたしの目に狂いはなかったね。それでも、大将の方が強いだろうけど」

そのままくすくすと笑いながらフレイヤは会場を後にした。フレイヤが居なくなつてすぐに、近くにいた神たちが一斉に詰め寄ってくる。

「ワユ君、君馬鹿なのかい!? どうして寄りにもよつてフレイヤの所に喧嘩を売る様な真似をするのさ!」

「彼を誰だか知らないの? 彼は『猛者』、この都市、いいえ、世界に唯一のレベル7なのよっ。」

「あいつに喧嘩を売るなんてよっぼどの無知か馬鹿だ」

「今からでも謝ってきたほうがいい」

「やる前から諦めるのは性に合わないんだ。それにあたしだって負けるつもりはないよ

「あたしだってレベルはムグツ!」

後ろからヘスティアが口を押さえて来た。何事かと思つてヘスティアの表情を窺うと耳元に顔を近づけて来た。

（君のレベルはここで公表するべきじゃない。ばれたらばれたで面倒だけど、自分そんな面倒なことするべきじゃない。分かっているのかい？君もレベル7だけど、そのレベル7はここには一人しかいないことになっているんだ!）

そう言えばそうだった、ギルドの人からも注意されてたっけ？ギルドの人はただひたすら厳しかった記憶しかないや……

「あの色ボケ女にちよっかい出されてたようやな」

誰もが先ほどのあたしの発言で黙っている中、こちらに一人の赤髪の男性？女性？とその後ろに金髪の女性を従えた人がこちらに歩み寄つて来た。

「ロキ!」

「よおードチビ。ドレス着れるようになったんやな。背伸びしてる感じがあつて笑えるわ!」

「いつの間に来ていたんだよ君は!？音も無く現れるんじゃない!」

「うっさいわボケ! 意気揚々と会場入りしたらあのおっぱいに全部持つて行かれたんや!」

赤髪の人は血涙を流しながら絶叫している。発言からして女性なんだろうけど……
後ろの金髪の人がこちらに向かって会釈をしてきた。一応こちらも会釈程度は返しておく。

「ドチビ、後ろの子誰や？めっちゃ可愛いやん！ま、アイズたんには劣るけどな」

「僕の眷属だよ。新しい眷属」

「はあ？ドチビに新しい眷属？眷属はあのベル・クラネルっちゅう兎だけやなかったんか？」

グフフと笑いながら、指をワキワキとさせながらこちらに近づいてくるその女性らしき人が近付いてくる。

「うちはロキっちゅうんや。あんさん名前は？」

「ワユ」

「ワユたん言うんか。所でワユたん、その豊富な胸揉ませてもらうで！」

「だーめ」

訳の分からないこと言いながらこちらに飛びかかってくるロキ。半歩身を翻すだけでその突撃を難なく回避し、床に激突しそうになったロキを左腕で受け止める。

床に激突しなかった自分に疑問を覚えたのか、あたしの顔を見て目をぱちくりとさせるロキ。周りの人たちは今の一瞬の動きを見て少々驚いているようだ。

第二十六話 戦争遊戯③

パーティーは恙なく進んでいき、各々が食事を取ったり気になる異性とダンスに興じたりといろいろなイベントも始まった。

ワユもダンスが始まった最初の方は先ほどのオツタルへの宣戦布告の発言と、ロキを受け止めた時の動きを見て興味を持った男神や男声冒険者、はたまた女神や女性冒険者から次々とダンスの申し込みがあった。

クリミアにいた時からずつと傭兵をし続けてきたワユは当然ダンスの振り付けなどさっぱりだ。さらにそう言った上流階級の物事にはあまり関心や知識もないため、ダンスの誘いを素気無くあしらひ続けていた。

「諸君、宴を楽しんでくれているかな？」

食事をしたり他の冒険者と話をしていると突然声をかけられた。声をかけて来たのは先ほど前に立って話していた男神、今回の宴の主催者であるアポロンだ。

アポロンはヘステイアやヘファイストスやロキ、ミアハとタケミカヅチなどがある一団に近付いてきた。

「盛り上がりつつあるようならば何より。こちらとしても開いた甲斐があるというものだ」

そして先ほどからワユの方をちらちらと見ている。ワユも気が付かない振りをしてるが、アポロンからの視線には少々うっとおしく思っている。

「遅くなつたがヘステイア、先日は私の眷属が世話になつたな」

「……ああ、こちらこそ」

「私の子は君の子に重傷を負わされた。代償を受けてもらいたい」

ワユはその言葉に首を傾げる。ヘステイアとベルに聞いていた話とは食い違いがあ
るからだ。

「言いがかりだ！ 僕のベル君だつて怪我をしたんだ。一方的に見返りを要求される謂れはないぞー！」

「だが私の愛しいルアンはあの日、目を背けたくなる姿で帰つて来た……私の心は悲し
みで砕け散つてしまいそうだった」

胸に手を当てながら、まるで演劇の役者のような喋り方をするアポロン。左右に控えていた従者は泣くようなそぶりを見せ、極め付けにはアポロンの傍に近付いてくる包帯グルグル巻きの小人族が現れた。

アポロンはその小人族に向かって「ああ、ルアン！」とさらに大げさに両手を広げ泣

きつくような素振りを見せる。

「痛え、痛ええよお……」

下らなき過ぎてため息が出そうになる。ここまで下手な芝居を見せられ、何がしたいのかさっぱり分からない。

「更に、先に仕掛けてきたのはそちらだと聞いている。証人も多くいる、言い逃れはできない」

指をぱちんと鳴らすと控えていただろう、『アポロン・ファミリア』の眷属を始め、先ほどから宴を楽しんでいた観客が一步前に出てくる。最初からグルだったというわけだ。

「待ちなさいアポロン。貴方の団員に最初に手を出したのはうちの子よ？その子だけを責めるのは筋違いじゃないかしら？」

「ああ、ヘファイストス。美しい友情だ。だが無理はしなくていい、君の娘がヘステイアの子を焼き付けたのは火を見るよりも明らかだ」

ヘファイストスがヘステイアを庇うが、アポロンはそれを一蹴する。ヘファイストスのその行動が自分の計画を狂わせるとも言いたいのだろう。

「団員を傷つけられた以上、大人しく引き下がるわけにはいかない。ファミリアの面子にも関わる……ヘステイア、どうあつても罪を認めないつもりか？」

「くどい！そんなもの認めるか！」

「ならば仕方がない、ヘスティア。君に『戦争遊戯』を申し込む！」

その一言に会場中の神のほとんどが一斉に声を高らかに響かせた。

「うおお！マジか！」「アポロンがやらかした！」「すっげえ虐め！」

会場のボルテージが上がっていく一方、聞いたことのない単語にワユは疑問を覚え、近くにいたロキに問う。

「ロキ、『ウォーゲーム』？って何？」

「なんやワユたん、知らへんの？ウォーゲーム通称『戦争遊戯』、ファミリア間の戦争や。勝った方は負けた方に対して絶対命令権を手に入れられるんや……どうしたん、ワユたん？」

「はあ……また、戦争か……」

ワユの纏っていた雰囲気は先程のものとは一変した。その雰囲気をアイズは見覚えがあった。

（あの雰囲気、アイクに似ている、気がする……気のせいかも）

「我々が勝ったら、ベル・クラネルを貰う」

「最初からそれが狙いか……！」

ヘスティアとアポロンが『戦争遊戯』について話している。話しているというよりも、

アポロンが一方的に捲し立てているだけであり、ヘステイアは受ける気は一切ない。

「それでヘステイア、受ける気は？」

「勿論断——」

「いいよ、やろうか。その『戦争遊戯』とかいう戦争を」

ヘステイアが答える前にワユがヘステイアとアポロンの間に割って入り、勝手に返答してしまう。

「ワユ君!!」

「君は誰だ？ヘステイアの眷属はベル・クラネルだけだった筈だが？」

「あたしはワユ、最近ヘステイアに拾ってもらった新しい眷属つてやつ」

ワユが前に出ると周りがざわざわと騒がしくなってくる。

「誰だあの子？」「馬鹿、知らないのか？」「さつきオツタルに喧嘩売ってた女の子だよ」

「え?! あんな可愛い子が？」

「それで、アポロン……だっけ？結局やるの、やらないの？」

「ワユ君、少し黙っててくれ！」

「私の方から申し込んだんだ、私は既にやる気だが？」

「ならやろうか、そんな生ぬるい事じゃなくて、本物の戦争つてやつを」

「君は何を言っ——」

「互いの眷属が死んでも一切文句を言わない、戦争遊戯なんて生ぬるい、本物の戦争つてやつだよ」

ワユは戦争に対していいイメージなどあるわけがない。一度は祖国のクリミアがデインに落とされ、その後クリミアはアイクを大将に祀り上げデイン軍に勝利。デイン軍からクリミア王国を取り戻した。

その後はラグズ連合とベグニオン帝国元老院との戦争、ベグニオン・ラグズ連合とデイン軍との戦争、最終的には女神アスタルテに付き従う正の使徒、ゴルドアの竜麟族。今まで数多くの死線を掻い潜り続けてきた。

その過程でたくさんの人を殺めて来た。一本取ったら終了の手合わせではなく、相手を殺すまで終わらない。それが戦争だ。

「まさか戦争とか言いながら、そんな温い事は言わないよね？戦争はどちらかが全滅するまで続けられる。そんな覚悟も無くて、戦争を仕掛けてきたの？」

戦争をやるといふのなら、ワユは全力で敵を排除する。言外にそう伝えている。

「君は最近冒険者になったばかりなんだろう？そんな自信満々に言っているが、負けた時の良い訳が必要なのかい？新米冒険者風情が、神の前に出てくるべきではない」

「あたしが見たことのある神と言ったら世界を滅ぼす神、それに対抗する神、それだけ。下界で燻っている神なんて、今まで戦ってきた女神に比べたら全く大したことが無い

ね」

アポロンに対して挑発をしていくワユ。その挑発を鼻で笑うアポロン他数多の神。しかし後ろにいるロキとヘファイストスは若干表情を強張らせた。

「良いだろう、ベル・クラネルは私が貫うから殺さないで置いてやるが、君はどやら身の程を弁える必要があるようだ。私は私の眷属が死んでも文句は言わん。詳しいルールはまた後日追って連絡させてもらう。それでいいな、ヘステイア?」

「良い訳がないだろう! ワユ君、すぐに撤回を——ムグッ!」

「ヘステイア、少し黙ってて。いいよ、その条件で。『ヘステイア・ファミリア』と『アポロン・ファミリア』の全面戦争、死んでも恨みっこなしだよ」

そのままヘステイアを黙らせたまま、会場を後にするワユ。ロキとヘファイストスは何か話しかけようとしていたようだが、ワユはそれに気が付かずに会場を後にする。

会場から出てしばらく、ヘステイアはずっと不機嫌そうに黙ったままだったが、ホームに近付き周りに誰もいないことを確認すると、

「ワユ君! 君は勝手に何をやっているんだい? いくら君でもアポロンの所全員に敵うはずが無いじゃないか!」

開口一番説教をしてきた。当然だろう。レベルがいくら高くても頭数があれば対抗できないわけではない。

「しかもあんな危険な条件にしちゃって、君は自分の命を何とも思っていないのかい!」

「少し落ち着いてよ、ヘスティア。ホームに帰ったら、改めて自己紹介するから」

「うん? 自己紹介? 君は一体何を言っているんだい?」

ヘスティアの疑問にあえて何も答えずに、ホームへと歩みを続けるワユ。今は何も答えないと判断したワユも、ワユの隣に立って歩く。

「ただいまー」「ただいま……」

ホームに着いていつも通りに挨拶をするワユと、意気消沈といった様子の子のヘスティア。そのヘスティアを見てベルは一抹の不安に駆られる。

「神様、何かあったんですか……?」

「ごめんよ、ベル君。アポロンの所と『戦争遊戯』をすることになってしまった……」

『戦争遊戯』ってあの『戦争遊戯』ですよね? 一体なぜ?」

ヘスティアは宴であったことをベルに話した。話を聞いていくうちにベルは表情を暗くしていく。

「すいません、神様……僕が喧嘩なんてしなれば……」

「二人とも何を落ち込んでいるの? 勝てばいいんだよ勝てば」

「君は、気軽にそんなこと言っているけど、総力戦になったら数の暴力で押し負けるんだぞ?! それなのに、殺されても文句を言わないなんて条件付けて! 正気かい!」

「だから落ち着いてって、レベル云々の前に、あたしがあんな有象無象に負ける筈が無いじゃん」

「そう言えば、さつき自己紹介がどうこう言っていたけどあれって一体……？」

ワユはヘスティアに聞かれたことに呆気からんと答える。しかしワユの正体を聞いたベルは開いた口が塞がらず、ヘスティアは立ったまま気を失った。

「あたしはワユ。今は『ヘスティア・ファミリア』でオラリオで一番レベルが高いレベル7。本当の正体はテリウス大陸のクリミア王国、グレイル傭兵団のワユ。グレイル傭兵団団長のアイクの永遠の宿敵！女神アスタルテを倒した戦いにも参加していたんだ！」

第二十七話〈戦争遊戯④〉

「で、さっきのはどういう事だい？」

「どういふことも何も、全部言つたとおりだよ。あたしは気が付いたらダンジョンにいたんだ」

「どうしてそんな大事なことを黙っていたんだい？」

「どうしても何も、最初に言及しなかったのはヘステイアじゃない？」

「むぐぐ……そう言われたら何も言い返せないじゃないか……」

ワユは現在『ヘステイア・ファミア』のホームで、先ほどの発言について言及されている。ワユはこの世界の住人ではなかったこと、気が付いたらダンジョンにいたこと、そして向こうの世界、テリウス大陸で起こった戦争と世界を救うための抗争の話を。

「ワユさん、その白銀の剣って……」

「ああ、これ？ 神剣エタルド、古の対戦でオルティナが振るっていた二刀のうちの一刀。神剣ラグネルとは対になる白銀の両手剣」

「古の対戦……？ って何ですか？」

「古の対戦というのは女神アスタルテと女神ユンヌの抗争。そこで女神アスタルテは三

人の戦士に自らの加護を与えて女神ユンヌの用意した軍勢と戦ったんだ」

「そんな話初めて聞きました……お伽噺では語られてなかった話ですか？」

「お伽噺か……」

「ああ、すいません！ワユさんにとっては現実の話なんでしたね……」

「まあいいや、それで古の対戦はあたしが生まれるうんと前、約3000年前にあつた対戦だからね。そのお伽噺ってやつは大将の活躍を書いたって話なんですよ？だったらそれが細かく語られて無くてもしようがないよ」

「……嘘は吐いて無いみたいだね。じゃあ君がレベル7なのは？」

「こつちの基準はよく分からないけど、この世界の冒険者が潜りえない死線をいくつも掻い潜つて来たんだ。たしか、偉業を認められたらレベルが上がるんでしょ？」

ヘステイアとベルは首肯することによってその問いに答える。

「あたしが直接為した偉業じゃないけど、それでも国を救ったり、世界を救っている戦いに参加していたんだ。最終的な止めは基本的に大将だったけど、それでもそれは偉業ってことにはならない？」

ヘステイアは顎に指を当て考えている仕草を取る。おいてあつたグラスの水を一口飲み、考えを纏めているようだ。

「君みたいな子は前例はないけど、『神の恩恵』を与える前からダンジョンのモンスター

を難なく倒したり、その……世界を救ったつてというのが『神の恩恵』を与えたことよつて数値として現れた……てことなのかな？」

ワユとベルに確認を取るがワユは肩をすくめ、ベルは少し考えたところで「すいません、分からないです……」と弱弱しく答えた。

「君の話が本当だとして、じゃあ何故あそこでアポロンをあんなに挑発したんだい？ それも今回の『戦争遊戯』の条件として殺しても文句を言わないなんて危険な条件まで付けて」

ヘステイアが発した今回の『戦争遊戯』の条件に、ベルは思わず目を見開き絶句していた。そのベルを見向きもしないで、ワユは淡々と答える。

「この『戦争遊戯』を最後の『戦争遊戯』にしたい。戦争『遊戯』が付くとはいえ、戦争は戦争だ。戦争を経験してきたものから言わせてもらうけど、戦争なんて本当に碌なものじゃない」

ワユは水を口に含み、喉を湿らせ説明を再開させた。

「戦争は殺し合いだ。どちらかの軍の大将が負けを認めるか、敵軍を殲滅させ自分たちの方が上だと相手に示さない限り、戦闘は終わらない。そんな碌でもないこと、今回で終わらせる。下界の人々は神々の玩具じゃない、それを神々に知らしめる。『あたしたちは、神なんかに命令されるだけの駒じゃない！』つて」

「……天界の神々を全否定、か……流石は世界を救った勇者の永遠の宿敵、とても言うべきかな……」

肩をすくめ、若干の諦めと呆れを含めた話し方でワユの意見を聞き入れるヘステイア。ベルの方はあまりの規模の大きい話に着いて行けなくなっているようだ。

「……それが全てかい？まだ何か、目的があるんじゃないのかい？」

「うーん……頭を使うのあんまり得意じゃないし、説明とかあんまり好きじゃないんだけど」

そう言いながらもベルの方を真つすぐに見据え、話し始める。

「ベルの成長の速さはは一般の冒険者の比じゃないくらい早いんでしょ？」

ヘステイアは首を縦に振り、視線で続けてと言う。

「今回のアポロンだけじゃなくて、成長が早いベルにはこれからも色々な神からちよつかいを出されると思う。そんな神たちに対する宣戦布告？みたいなものかな……」

「宣戦布告、ですか？」

『ベル・クラネル』が欲しければ、あたしたち『ヘステイア・ファミリア』を正々堂々と屈服させてからにしろ！っていうね」

「で、現実的な話、今回の『戦争遊戯』勝てそうなのかい？数の暴力で一気に押し切られたら、どうしようもないと思うけど？」

「え？簡単じゃん、あたしが全員倒せば勝ち……いや、あっちの大將はベルに倒してもらおうかな」

『アポロン・ファミリア』の大將つて……ヒュアキントスさんですか!?無理無理、無理ですよ!相手はレベル3、僕はレベル2。レベルが一つ違えば勝てないのは常識じゃないですか!」

「勝てないからつて最初から諦める?悪いけど、あたしそういうの一番嫌いなんだ。大將に何回も挑んで、何回も死にかけても、あたしは一回も諦めようと思つたことは無いよ?」

それに——と続ける。

「それに大將がこの世界に居たら、多分あたしよりもレベルが上だろうね。それでもこの世界でもしも仮に大將に会えたら、あたしは性懲りもなく挑み続けるよ。ねえベル、ベルはどうやってレベル2になったんだっけ?」

「それは……」

「レベル1のベルはレベル2のミノタウロスを一騎打ちで下したんでしょ?レベル差なんて、どうにでもなるっていうのはベルがすでに実証してくれてるじゃん!」

ワユの発言にベルは目を見開き、瞳に闘志を宿し始めた。

「各上には各上に対する戦い方っていうのもある。それとも、一発殴られただけで勝て

ないって諦める?」

「そんなの嫌です!」

「じゃあこれから『戦争遊戯』まで特訓だね。目標は……あたしに一撃でも入れること、
でどう?」

うぐつ!と息が詰まるが、ワユはにやりと笑いベルに対して言い放った。

「それとも、為す術も無く一方的にやられたい?」

首をぶんぶんと横に振る。

「じゃあ明日から、特訓だね。あたしも暫くダンジョン潜らないから、マンツーマンで頑張ろっか」

その光景をまるで母親のような慈愛を込めた表情で見守るヘスティア。この時点でヘスティアは、負ける未来は見えていなかった。

* * * * *

ヘスティア、というよりもワユがアポロンに対して宣戦布告してから三日が経ち、此度の『戦争遊戯』の詳細なルールが公表された。

・戦闘形式は攻城戦、『ヘスティア・ファミリア』側が『アポロン・ファミリア』側が守る玉座を制圧することが勝利条件だ。

・使う武器、魔法、スキルについては一切の制限を設けない。

・あまりにも人数差が有るため、『ヘスティア・ファミリア』側には助つ人を一人認めるというもの。ただし都市外の冒険者に限るというもの。

・他のファミリアからの改宗された眷属は参加可能

・今回の『戦争遊戯』で死者が出て、一切の文句、抗議を行わないこと

これが今回の『戦争遊戯』のルールだ。最後のルールに関して、ギルド側からはかなりの反対の意見が上がったようだが、双方の主神がそのルールで構わないと言っている以上、これ以上の抗議は聞き入れてもらえないだろう。

二つ目のルールはかなり重要であろう。ギルド側からの支給品ではなく、普段自分が使っている武器をそのまま使えるというのはかなり大きい。つまりワユの神剣やベルのヘファイストスが打ったナイフ、魔剣なども使い放題ということだ。

現在ワユとベルの二人はダンジョンの18階層の広場にいる。オラリオ市街の人目が付かない広場で特訓を行ってもよかつたのだが、オラリオで完全に人目が付かない場所などほとんどない。特訓はほぼ一日中ぶつ通しで行われるため、『アポロン・ファミリア』の目が届かないダンジョンでの特訓の方が適していると思つたのだ。

「じゃあもう一回、今日はこれができるまでは地上に帰らないからね」

「はいー」

そう言つてベルは右手に光の粒子が集まるように意識を集中させる。

ベルがレベル2になって新しく会得したスキル、【英雄願望】。チャージによる火力が上がるスキルだ。ワユはこのスキルをどんな状態でも発動できるように特訓しているのだが……

「出てこないね……」

「すいません……」

ベルが以前このスキルを使ったときはヴェルフとリリとダンジョンに潜っている時にインファントドラゴンが出てきた時だ。そして次に使ったのは18階層での黒いゴライアスとの戦闘時。

「うーん……今までそのスキルを使ったときの状況って何か共通点とかあるかな……」

顎に手を当て、うーんと頭を捻るワユ。ベルも同じくこの時の共通点を探そうとして頭を捻る。

あまり頭が良くない二人が頭を捻って考えたところで早々に進展するとは思わないのだが、今回はベルが奇跡的にその時の共通点に気が付いた。

「二回目はヴェルフとリリを守りたかった。二回目は皆を守りたかったことですかね……」

「ねえベル、今どんなこと考えてスキルを使おうとしてた？」

「どんなことを考えて、ですか？特に何も考えずに、スキルが発動するようにひたすら神

経を集中させてましたけど……」

「じゃあ皆を守りたいって全力で思いながらやってみて。それでできなかつたらまた別の方法を考えよう」

アドバイス通り、再び意識を集中させる。思い描くのは皆を守りたいという純粋な思いだけだ。

すると光の粒子は少しづつだが右手に集まって来た。それを見たワユは声を上げる。

「そのまま魔法を発動して！」

「[ファイアボルト]！」

壁に向かってベルは魔法を放つ。雷を纏った蒼き炎は通常使う魔法よりも多少威力が上がっており、魔法が当たった壁は少しのひびが入り、パラパラと石が落ちてくる。

「ワユさん！どうでしたか？」

「確かにいつもより威力は上がってたけど、まだ行けるでしょ？」

「は、はい……」

「まあでも『戦争遊戯』までに任意のタイミングでそのスキルを発動できるようにしておけばいいから、第一関門はクリアかな。じゃあ次は、実際に剣を打ち合ってみようか？」

第二十八話〈戦争遊戯⑤〉

結局あれから一週間、ダンジョンの18階層にワユとベルは潜りっぱなしだった。

ワユは基本的に手合わせや特訓でも手加減をしないため、基本的に一撃でベルが気絶してしまい、帰るに帰れなかったのだ。

しかしその一週間、何もベルが気絶するだけで終わったわけではない。ベルはベルで【英雄願望】の任意発動は大体様になって来たし、各上であるワユとの戦いでは少しずつだが動きを読めるようになってきている。ただ動きを読めてもワユのステータスの関係上捉えられるわけではないのだが、これなら一つレベルが上のヒュアキントスの動きを読み捉えることは不可能ではないのだろう。

18階層から地上に戻るまでのモンスターは殆どベルが倒した。ワユが倒そうともしたのだが、僅かでもベルの経験値にする方が得策だと判断した結果だ。勿論途中で魔石を拾うことも忘れない。

ダンジョンから地上へと帰還し、ベルのステータスを更新するためにワユとベルはヘステイア・ファミリアのホームである廃教会へと向かって歩みを進めていた。やがて廃

教会に、いや、廃教会があつた場所へと到着したベルとワユは驚きの表情を隠せずに行った。

「これは、一体……誰、が……」

呆然とした表情のままベルがぼつぽつと呟く。この廃教会での暮らしは決して楽ではなかったが、それでもここはベルが冒険者として第一歩を踏み出すことができた場所であり、主神であるヘステイアとの思い出が詰まった大切な場所だった。

しかし今の廃教会は入り口は瓦礫で塞がれており、ボロボロだった外見は見るも無残な状態だ。

「ねえベル、こんなことするやつらに心当たりはある？」

ワユはワユで珍しく怒気をにじませた声を発していた。

この廃教会はグレイル傭兵団の砦を彷彿とさせる外見で、中のオンボロ具合も相まってかなり住み心地がよく、ダンジョンに暫く潜つたら帰つてこないとはいえ気に入つていた場所だった。

それがダンジョンで特訓をして帰ってきたら住める状況じゃなくなっていたのだ。ここで二人が暴れ出さなかつただけでも感謝するべきだろう。

「いえ……分かりませんが、『アポロン・ファミリア』の可能性が高いのではないのでしょうか……?」

『戦争遊戯』までは後一週間くらいあるけど、その前に喧嘩を売って来たってことかな？」

「恐らくは……」

戦争をするにはあらかじめ宣戦布告が必要だ。仮に宣戦布告をせずに戦争を始めようものならば、戦争に勝ってもその国は他国からの糾弾、もしくは他国との新たな戦争は免れないだろう。

今回の『アポロン・ファミリア』の狙いは恐らく先にファミリアの団員を戦闘不能にさせての不戦勝狙いなのだろう。

確かに戦争では『勝てば官軍負ければ賊軍』という言葉があるように、勝った方が正しいというものだ。だからそのための手段を選ばない、これも戦術と言えば戦術だ。少々常識に欠けるが。

この時点でワユは『戦争遊戯』で相手に慈悲を持つことを辞めた。視界に入った敵、自分に向かつてきた敵、降伏を宣告してくる敵であっても容赦なく切り捨てる。そう決めた瞬間であった。

「神様は、神様はどこですか？無事なんですか!？」

「落ち着いてベル。その恩恵は神が死なない限り着いて回るものでしょ？あたしたちの恩恵はまだ失われてないからヘステイアは無事だよ、安心して。どこにいるかまでは分

からないけど……とりあえず、ヘステイアが仲が良かった神たちを訪ねて回ろう。何か知ってる神もいるかもしれないよ？」

ワユの言葉に多少の落ち着きを取り戻すベル。ただ動揺は抜けきっておらず、目の焦点も虚ろなままだ。たとえ無事だと分かっても、自分の目で確認しない限り不安なのだろう。

* * * * *

ヘステイアが現在どうしているかは想定していたよりも早くどうにかなった。

とりあえず手近な『ミアハ・ファミリア』に向かい、主神であるミアハ、眷属のナーザに話を聞いたところ、現在は格安の宿を取って難を逃れているらしい。

そして『ヘステイア・ファミリア』のホームを襲撃してきたのはやはり『アポロン・ファミリア』の眷属で、その場に居合わせていた『ヘファイストス・ファミリア』のヴェルフと『タケミカヅチ・ファミリア』のヤマト・命、騒ぎを聞きつけて廃教会へと向かったナーザによってヘステイアは何とか逃がしたらしい。

さらにワユとベルがいないことを知ると、それまでに行っていた抗争を早々に切り上げ帰って行ったらしい。やはり狙いはワユとベルの戦闘不能による不戦勝だったようだ。

「これが私の知っている情報だ。私の所から此度の『戦争遊戯』の援軍を出せないこと、

本当に申し訳ない」

ミアハが知っている情報をワユとベルに伝えた後、ミアハは何故か頭を下げて来た。確かに今回の『戦争遊戯』では他ファミリアから改宗した眷属は戦えるが、そのルールにはそもそもワユは全く期待していなかった。

そして神に頭を下げられてる状況に、ベルは慌てふためく一方だった。

「ミアハ様!? 頭を上げて下さい。寧ろこちらがお礼を言わなければなりません、神様を助けてくれてありがとうございます」

「援軍に行けなくて、本当にごめん……」

「謝らなくてもいいよ、ナーザ。あたしは『アポロン・ファミリア』に対して慈悲は与えない。例えあっちの眷属が望んでやったことじゃなくても、あたしに喧嘩を売ったらどうなるか、それを今回の『戦争遊戯』でたつぷりと教え込んであげることにしたから」

言外に敵は皆殺しと言っている。神格者であるミアハも、ワユの迫力には息を呑み何も言うことができなかった。

「とりあえずありがとう、ミアハ、ナーザ。とりあえずこれはお礼、後でギルドなり、どつかで換金してきてね」

ドサツ! と置かれた革袋の中をのぞきギョつとするミアハとナーザ。そしてその革袋をワユたちに返そうとするが、ワユはそれを頑として受け取ろうとしない。

「あたしは元は傭兵やっててね、情報っていうのはすっごく価値があるものだって知ってる。だからそれは今回の情報量として受け取って、あんまり高くないで申し訳ないけど」

「そんなことは無い、ならばありがたうございませう。今度また店に来ると言い、サービスしよう」

隣のナアアザも珍しく首を縦に振っている。しかしワユはその言葉に苦笑を浮かべる。「それじゃ意味ないじゃん……」と。

『ミアハ・ファミリア』を後にしたベルとワユはミアハが教えてくれた宿屋へと向かっていった。

宿屋に到着し、カウンターにいる宿主にヘステイアがいるかどうかを確認し、居ることが確認された。

宿主に言われた部屋に到着し、ベルがその部屋をノックする。中から「誰だい？」と反応があり、ベルは泣きそうに泣きながらも「ベルです、神様」と返事をした。

ドタドタと床をける音が聞こえ、ドアがバン！と勢いを以って開かれる。ドアから出てきたのは見慣れた主神の姿だ。

部屋から出て来たヘステイアはベルに抱き着き、ベルは突然のことに顔を紅潮させながら狼狽していた。

「あ、あの、神様!？」

「ベル君、ベル君、ベル君! ごめんね、ホーム滅茶苦茶にされちゃって……」

「謝らないでください、神様。僕の方こそ、神様が危険なときに傍にいられなくてごめんなさ……」

「ベル君……」

「このままだと話が進まない。そう判断したワユはヘステイアの頭を剣の腹で軽く小突き、現実へと引き戻した。

「痛い! ワユ君、いきなり何するのさ! せっかく僕がベル君と感動の対面を果たしたというのに!」

「それは後で二人っきりの時にでも存分に楽しんで、それよりも部屋にいる人たちは誰?」

部屋には赤髪の青年、黒髪を結んだ少女、覆面を被った妖精、小人族の少女がいた。

「ふっふっふ……聞いて驚け。彼らは今回、僕たちに手を貸してくれる援軍さ!」

第二十九話〈戦争遊戯⑥〉

「リリ、ヴェルフ、命さんまで！」

「久しぶりだなベル」

「お久しぶりです、ベル殿。その、後ろの御仁は……う？」

「あたしはワユ、少し前に『ヘスティア・ファミリア』に入ったんだ」

とりあえず初対面ということもあって自己紹介から入る。小人族の少女はリリ、赤髪の青年はヴェルフ、黒髪を結んだ少女はヤマト・命、覆面の妖精はまだ一言も言葉を発してはいない。

「それでヘスティア、彼女たちが今回の『戦争遊戯』の助っ人ってどういうこと？」

「言葉の通りさ。彼女たちは今回の『戦争遊戯』のために改宗してくれたんだ。まあ命君は一年間だけけど……」

「今回のルール上問題はありません。オラリオ内の他ファミリアの冒険者は援軍として出ることではできませんが、改宗は特に制限はありませんし、ルールにも抵触していませんから」

「はあ……それで、リユーさんはどうしてここに？」

覆面を被った妖精、リユーは軽くため息を吐きながらベルの問いに答える。

「神ヘステイアに頼まれたからです。それにあなたが他のファミリアに行つてお店に来なくなつてしまうと、シルが悲しむ」

それと——と続けるリユー。

「クラネルさん、覆面をしているのですから、あまり本名を言わないで頂きたい。貴方がたは私を知っているからいいですが、どこで誰が聞き耳を立てているか分かりません。私はギルドのブラックリストに載っていますから」

「す、すいません……でもリユーさんが参加することはルール上問題ないんですか？」

「アストレア様、私の主神様は現在都市外でひっそりと暮らしています。今回の都市外ファミリアからの助っ人は参加可能というルールの問題上、大丈夫だと思います」

「それでさ、この人たちが戦えるの？」

何気ないワユの一言でピシリと空気が固まった。

リリはサポーター専門のレベル1だがヴェルフ、命はレベル2、リユーはレベル4の冒険者なのだが……

「この中で一番強い人はその覆面の人だよね？それでも『アポロン・ファミリア』の軍勢に相手取れるの？」

別に意図して挑発しているわけではない。単に疑問に思ったことを口に出しているだけなのだが、鍛冶師だが戦える鍛冶師を自称しているヴェルフ。準零細だが『タケミカヅチ・ファミア』の数少ないレベル2の命、現在は前線から身を引いているがレベル4のリュウにはそれぞれの冒険者としてのプライドがある。

「そう言うあなたは大丈夫なのでしょう？先ほどの話から察するに、あなたはまだ冒険者になって日が浅いはずだ。いかに『アポロン・ファミア』の構成員の殆どがレベル1と2だからと言って、冒険者になって数か月で相手取れるほどの弱輩ではない」

「あたしは大丈夫、何ならここに居る全員相手取っても無傷で切り抜けられるよ。それに、『戦争遊戯』じゃなくて今回は本当の戦争に限りなく近い、君たちに人を殺す覚悟はあるの？」

「敵を殺さなくても、敵将さえ突破してしまえば我らの勝利です。殺めることを第一目的とするのではなく、あくまで敵将のヒュアキントスを打ち取ることを目的とすれば――」

「敵の目的はベル以外の眷属の皆殺しだ。今回のルール上、あたしたちは殺されてもヘステイアは文句を言えないし、何もできない。自分を殺そうと思ってる相手を殺さないで無力化するなんて、それこそこの世界でいうレベルというやつに差が1、大勢相手取る余裕が欲しければ2以上必要だ」

「ワユ君、そのあたりに——」

「君たちがなんのために戦うのかは知らないけど、殺し殺される覚悟もなしに今回の戦場に踏み込むべきじゃないと思うけど？」

突然、ヴェルフが立ち上がり床に置いていた大剣を抜き、ワユに切りかかってくる。ワユは座りながら正面からその剣をエタルドで受け止め鏢迫り合いに持ち込む。

「友のため、ベルのために戦う。あんたが何様のつもりかは知らないが、あいつのためなら、俺はなんだってしよう」

「ふうん……」

鏢迫り合いの体勢から力を逸らし、ヴェルフをいなし、勢い余ってヴェルフは壁に叩きつけられる。いなしたかと思ったら命の刀がワユを襲う。

分かっていたかのようにその刀を受け止め、またもや鏢迫り合いに持ち込む。

「自分は、ベル殿にまだ何も返せていません。そして約束しました、今度は互いに助け合おうと。見ず知らずのあなたでも、その覚悟を証明できるのならば、ここで切り捨ててみせましょう」

「へえ……」

そのまま命は刀を引き、袈裟切り、逆袈裟、突きと剣舞する。それを片手で防ぎ続け剣を逆手に持ち、柄の部分で命の鳩尾を殴りつける。

息が詰まりその場にうずくまる命に目もくれない。

「覆面の君は何もしてこないの？」

「私は誰かのために戦うなんて綺麗事を言える立場ではありませんから」

「……」

「私がなぜブラックリストに載っているか御存知ですか？」

「いいや、あたしは君の名前しか知らない」

「私は昔、敵対しているファミアリアに自分のファミアリアが罠に嵌められ、私一人を残して全滅しました」

「………続けて」

「その罠に嵌めたファミアリアを、私怨で私は全滅させています。皆、この手で殺しました。敵を駆除し終え、路地裏に倒れていた私を拾ってくれたのはシルとミア母さんです。強いて誰のために戦うのかと問われたら、私はシルのために戦います」

俯いて黙って話を聞いているワユに、リユースはそのまま話し続ける。

「それに私はあなたが先ほど言っている条件を満たしています。私はレベル4だ。殺さずに無力化するのにあなたが必要だと睨んでいるレベルには到達しています」

俯き、表情を窺えないワユの肩が急にプルプルと震えだし、震えがだんだんと大きくなってきたかと思ったら、急に高笑いを始めた。

「あはははは！良いねえ！君たち最高だよ！」

「「……………」」

いきなり襲い掛かり、本気で気狼狽してきたヴェルフと命を最高だという。

不謹慎ながらリユーの話を聞いて最高だという。

（（この人、頭おかしい…………））

三人の考えていたことが見事に一致した瞬間だった。

「で、そこに固まってる少女ちゃんはどうなの？戦闘員じゃないんでしょ？」

「リリは、確かに戦えません。ですが、皆様のサポートは全力でやらせていただきます

よ」

「それが、人を殺すことだと知っていても？」

「ただの殺人鬼に協力するつもりは毛頭ありませんが、皆さまならば是非に」

「ふふふ……………やっぱり君たち最高だね……………ははは！」

何が起きているのかわからないという表情を浮かべている四人に見向きもせず、おもむろに立ち上がったかと思うと、

「そう言えば、ちゃんとした自己紹介がまだだったね。あたしはワユ。今は『ヘステイア・ファミア』でオラリオで一番レベルが高いレベル7。本当の正体はテリウス大陸のクリミア王国、グレイル傭兵団のワユ。グレイル傭兵団団長のアイクの永遠の宿敵！

女神アスタルテを倒した戦いにも参加していたんだ！嘘かどうかは、そこでベルに抱き着いている神様にでも聞くといいよ」

* * * * *

あれから五日間、再びベルとワユは二人でダンジョンに潜る、予定だったが特訓にヴェルフと命とリユも参加したいと言い出し、サポートにリリが一緒に来るという『戦争遊戯』『ヘステイア・ファミリア』全員集合になってしまった。

今回の戦いの場の『シユリーム古城跡地』まではオラリオから二日かかるため、一週間ではなく五日で切り上げるようになった。

ダンジョンから帰還し、真つ先にヘステイアの元に向かい、ベル、命、ヴェルフはステータスを更新してもらった。ワユはこの『神の恩恵』があまり好きではなく、特訓しすぎて強くなるんじゃない！と更新を行わなかった。

ベルのステータスはアビリティオールSS、敏捷に至ってはSSS。ヴェルフと命もアビリティが二段階く三段階上がっているものもあった。

オラリオから馬車に乗り、戦場に向かうこと二日間、『ヘステイア・ファミリア』の眷属は『シユリーム古城跡地』に到着した。

「作戦はどつちにするっ？」

「ここでヴェルフの言う作戦というのは速攻で蹴りをつけるか、エタルドによる障壁で

ただ相手が諦めるのを待つか、というかなり下種な作戦なのだが。

「勿論、早々に蹴りをつけるよ」

「ええ、正直敵が苦しむ姿を一方的に眺めているというのも悪くは無いのですが、恐らくこちらが先に飽きるでしょう」

「リユー殿も中々厳しい事を言いますね……」

「ヴェルフ様、頼んでいた者は用意できませんでしたか？」

「用意してある、がやはり時間が足りなかった。用意できたのはこの二本だけだ」

「でしたらこの二本はワユ様とリユー様に持つてもらおうことが賢明でしょう」

「ええー、あたしは要らないからリユーが二本持つてよ」

「いえ、真つ先に突っ込むのが私たちなら、一本づつ共有しようじゃありませんか。こんな大きなもの、二本も持つてたら動き辛いので」

「リユーさん、本当に言うようになりましたね……」

リユーの性格が若干変わっているのはダンジョンの特訓が原因なのだが、ここでは割愛させてもらう。

「……そろそろ始まりますね」

リリの一言で、弛緩していた空気が一気に引き締まる。真つ先に突っ込むワユとリユーは武器を抜き、後に攻めることになっているベルたちも、油断なく城を見据える。

やがて開始の合図が鳴り響き、合図と同時にワユとリユは戦場へと身を投じる。

レベル4のリユとレベル7のワユではどうしても速さに差が出てしまうため、並んで走るとは叶わない。

ワユの方が早いため、待ち構えていた敵に遭遇するのが早いのも当然ワユだ。

敵は五人、一斉にワユに向かって切りかかってくる。ワユはそのまま速度を緩めずに、敵の群れへと突っ込み剣を振るう。

敵とすれ違い、ワユが砂煙を上げ急停止する。止まると同時、ワユに襲い掛かった冒険者は皆血潮を噴き上げながら倒れ込む。

胸を切られ、内臓まで届いたものもいる。容体を確認するまでも無く、即死だった。

剣を振るい、剣に着いた血を振るう。

「よおーし、絶好調の剣の冴え！我ながら惚れ惚れしちゃうね！」

第三十話　戦争遊戯⑦

場所はバベル30階層、神会が開かれる会議室。そこでは数多の神たちが現在行われている『戦争遊戯』の行方を見守っている。ロキやフレイヤなどの大派閥は自分のホームで見ているものもいるが。

そこには今回の『戦争遊戯』の対戦ファミリアであるアポロン、ヘスティアの両名の姿も見られる。

開始早々、覆面を被った妖精とワユが同時に飛び出す。ワユの敏捷の方が妖精を上回っているため、彼女らを待ち伏せしていた『アポロン・ファミリア』の眷属と先に対面するのはワユだ。

待ち伏せしていた『アポロン・ファミリア』の眷属がワユが近付くと同時、五人で一斉に襲い掛かる。しかしワユはスピードを緩めずにそのまま剣を抜き、剣を一閃。実はこの時五回剣を振るっているのだが、神々やこれを見ている冒険者には剣を抜いて振るったようにしか見えないだろう。それだけワユの剣速は常軌を逸していた。

そしてワユは、切り終えたと同時に、口元を吊り上げていた。

「おい、ヘスティア！彼女を止めろ！今すぐにだ！」

今回の『戦争遊戯』では互いの眷属が死んでも文句は一切受け付けないルールとなっている。アポロンが宴の場で聞いた話では『最近眷属になった』と聞いていた。

つまりアポロンはワユがアポロンの眷属を殺せるだけの技量、実力を持っていないと高を括っていた、慢心していたということだ。

しかしアポロンを責めることななかれ、あの場にいた神々全員がワユは駆け出し冒険者としか思っていないかったのだ。

神たちはあそこで異変を疑うべきだった。『何故駆け出し冒険者であるはずの彼女が、あのような条件を提示したのであるのか？』と。

「今回のルール上、殺されても文句は言えないはずだけども？」

ヘスティアが冷酷ともいえる表情、声でそう答える。ヘスティア自身もワユが実際に戦っているところをこの目で見たことは一切ないし、殺したうえで口元を吊り上げるような残忍な性格だとは思っていなかった。

ワユの正体を聞いた時から、殺すことに躊躇するような人物であることは容易に想像がついた。しかし殺しそのものを楽しむような性格であるとは思わなかった。

実際には殺しを楽しんでいるわけではなく、戦場の空気に懐かしさを覚えているだけなのだが、それをこの場にいる神々が知る術はない。

「だからと言って本当に殺るとは思わないだろう！ いいから彼女を止めろ！ これ以上被害が拡大する前に——」

「うるさいぞ、アポロン！」「お前が受け入れたルールだろうが、黙つてみていろ！」それともお前は自分の所の眷属を信じられないのか？」

次々とアポロンを糾弾する声が上がリ、ぐうツ！と黙らざるを得ないアポロン。

だがアポロンを糾弾した神たちもこの『戦争遊戯』はこのままでは終わらないという確信、『アポロン・ファミリア』の全滅も視野に入れて見なければならぬと決意を新たにした。

* * * * *

城へと向かう途中に起こった戦闘は最初の一回きり、つまり彼らは様子見、もしくは捨て駒だったのだろう。城に近付くと城壁から矢や魔法が飛んでくる。その矢や魔法を切り落とす、躲すなどしてリユートの到着までの時間を稼いでいる。

「すいません、ワユさん。お待たせしてしまいました」

「ううん、じゃあ、作戦通りに」

二人は布にくるまれ、背負った剣を表にさらす。

『クロッゾの魔剣』、ヴェルフの家のクロッゾ家のものが打てる無慈悲な魔剣。ヴェルフの父親や祖父は魔剣を打てないが、なぜかヴェルフには打てるのだという。

その魔剣を作ることを、ヴェルフは酷く嫌がっていた。魔剣は使い捨ての道具だ。武器は己の半身だと思っているヴェルフからしたら、魔剣というものは自分の意義に反するものだ。

その協力無慈悲な魔剣は人を駄目にする。だから魔剣を打ちたがらなかったヴェルフだったが、今回の戦争を以って仲間と意地を天秤にかけることを辞め、仲間のために限り魔剣を打つと決めた。

今回の戦争で準備できた魔剣は二振り、この二振りの魔剣で行おうとしていることは城落とし、『クロツゾの魔剣』を以って城を落とす、あわよくば敵将の撃破だ。

これで城を落とせなかったらワユとリユーが城へ乗り込み、ヒュアキントス以外の敵を殲滅、ベルとヒュアキントスの一騎打ちを演出するというものだ。

「……妖精の私がこの魔剣を使うことになるとは……」

「リユー、準備は良い？」

「……はい、いつでも」

二人はそれぞれ魔剣を振りかぶり、城に向かって全力で振るった。

二人の魔剣からは巨大な炎が生み出され、二つの炎は重なり合い、城壁へとぶつかる。衝撃に備え、ワユとリユーは地へと伏せ城の行方を見守った。

やがて煙が晴れ、城の様子を見る。しかし城はまだその姿を保ったままで、破壊さ

れるまでには至らなかった。

「……駄目だったね」

「まあ破壊できなかった場合は私たちが殲滅ですから、結果は変わらないかと」

「ワユさん、リユースさん！」

「無事ですか？」

遅れて飛び出したベルたちが合流する。途中で戦闘が行われた形跡は無く、皆が皆まだ無傷だ。

「うーん……予定よりも合流が早くなっちゃったね……ベルたちはその辺で隠れてて、あたしたちが城の中にいる兵は粗方片付けてくるから」

「はい、お気をつけて」

「城壁から打ってきた魔法とか矢とかはそっちで頑張つて躲してね」

一言注意を促し、ワユとリユースは城に正面から堂々と乗り込む。

先ほどの爆撃で多少の陣形に乱れがあったようだが、こちらがベルと合流して少し話しているうちに、ある程度の陣形は固まったようだ。

前衛には盾を構えた冒険者たちが壁を作り、後ろでは魔法の詠唱が行われている。

ワユとリユースは即座に突っ込み、ワユは盾なんてお構いなしとエタルドを振るう。エタルドを防いだ盾は一刀両断され、即座にリユースが盾持ちの前衛に飛び蹴り、小太刀に

よる斬撃など浴びせる。

ワユはリユーが前衛を相手している間に、後衛にいた魔導士たちに切りかかる。仮に並行詠唱ができるものが居れば魔法を詠唱をしたまま、ワユの攻撃を捌けたかもしれないが、この場に並行詠唱ができる程の魔導士はいなかったようだ。並行詠唱ができたとしてもワユの剣戟を防ぐことなど彼らには不可能だが。

魔導士たちは為す術も無くワユの剣を食らう。加減など全く考慮しない剣戟は、一撃で魔導士たちの命を刈り取った。

リユーの方も前衛の撃破が終わったことを確認し、階段を上がっていく。階段を上ったところでリユーと別行動を取り、殲滅の効率化を図る。

次の階に続く階段にたどり着くまでの全ての部屋を開け、兵がいなかどうかを確認しながら進軍しているので、ペースはかなりゆっくりだ。

寝室らしき部屋に入ると同時、部屋の中から矢が飛んできた。突然の不意打ちにもかかわらず、前に転がりながら部屋へと侵入、矢を放って隙だらけの兵に向けて斬撃を飛ばす。果敢にも槍やナイフを抜いてワユに挑んでくるが、殆どその場を動かずにその攻撃を躲し、すれ違いざまに剣を振るう。

「うう……だから降伏しようって言ったのに……」

そんな呟きが部屋の隅から聞こえて来た。一人の少女がうずくまりながら、完全に戦

意を喪失していた。

その少女の元に近付き、エタルドを振り上げる。「ひいっ！」という小さな悲鳴と共にさらに縮こまる。

流石に戦意を喪失している敵を殺すことは忍びない、剣の腹で後頭部を殴り気を失わせる。

その後も全ての部屋を回り、小競り合いを繰り返しながら玉座があるであろう最上階に到着する。

部屋の前では既にリユールが待機しており、ワユに気が付くと近づいてくる。

「片付きましたか？つて、聞くまでもない事ですね……」

ワユは全身に返り血を浴びており、剣からも大量の血が滴っている。

「そつちも済んだ？」

「ええ、滞りなく」

「そつつか、じゃあ開けるよ」

ワユは扉に手を置き、扉を開く。玉座に座っている敵軍の大将、その傍に控えている二人の冒険者。

「君が『アポロン・ファミリア』大将のヒュアキントスだよな？」

「そうだ、皆は無事か？」

「さあ？運が良ければ生きてるんじゃないの？」

もちろんワユを相手取った『アポロン・ファミリア』の眷属は一人を残して全滅だが、リユーが相手取った眷属の方はワユには分からない。

「一、二、三……リユー、行くよ」

ヒュアキントスたちに背を向け、部屋を出て行こうとするワユとリユー。

ヒュアキントスの傍に控えていた一人がワユたちに向かって無謀にも突貫してくる。ワユとリユーはそちらを見向きもせずただ一步横にずれる。

すれ違いざまにリユーが小太刀の峰で一撃を加える。手加減された一撃は意識を刈り取ることも無く、ただその場に蹲るだけだ。

「私たちが殺さないのか？」

「殺したいのは山々だけど、君たちを倒すのはうちの大将とその仲間たちだから」

* * * * *

「ベル、ヴェルフ、命、リリ、お待たせ」

「ワユ殿、その血は……」

「ああ、これ全部返り血だから。あたしは一撃も貰ってないよ」

その一言にほっとする。そして三人は意識を引き締める。

「後は玉座に残っている敵軍の大将、その傍に二人控えてたから一人が一人づつ倒せば

私たちの勝利です」

リユートの言葉にうなづく三人、各々が武器を手に取り、玉座の間がある最上階を見据える。

「敵将のヒュアキントスはレベル3です。クラネルさん、油断なさらないで下さい」

「分かっています、リユートさん」

「ベル、各上に対する戦い方、しっかり覚えてるよね？」

「ええ、大丈夫ですワユさん。では、行つてきます！」

「ご武運を」

ワユとリユートとリリがその場に残り、三人が城に入つていくのを確認する。

「じゃありり、リリの作戦も分かっているよね？」

「あのお……本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫、場所は二階の寝室、そこで一人気絶してるから……」

ワユは事前に練っていた作戦をリリに伝える。なお作戦を考えたのはワユではなくリユードだ。

第三十一話〈戦争遊戯⑧〉

「……ワユさん」

「ん？何、リユー」

「クラネルさんたちは、あちらの団長に勝てますでしょうか？」

「さあ？勝つ確率を上げるための特訓はしたけど、絶対の勝ちなんて有り得ないからね。まあベルが持つてる刀はあたしが渡した武器だから、結構いい切れ味はあるけど」

「そちらの剣は渡さなかったのですか？あなたは自分の使う武器にそこまでのこだわりは無いのでしょうか？」

リユーの質問にワユはエタルドをリユーに差し出すことで答える。リユーが何事かと思いいワユの方を見る。

もう一度リユーに向けて突きだし、持ってみると催促する。

リユーは何も考えずに受け取り、ワユがエタルドから手を放す。それだけでリユーはエタルドを持っていられずに、地面に落としてしまう。

「……この剣は一体何なんですか？レベル4の私が持てない剣なんて……」

「残念だけど、この剣はそんな単純な腕力だけで扱える剣じゃなくて、十全に使いこなす

ためにはこの剣に認めて貰わなくちやいけないんだ」

「剣に認められる……？」

「そ、もつと言えば『剣が使い手を選ぶ』ってこと。剣をずっと使い続ければ一応、エタルドも力を貸してくれはするけど、エタルドの力を引き出すためには、この剣に選ばれる必要があるんだ」

「剣に選ばれる、ですか？」

「そ、もう一本のラグネルはうちの大将が選ばれたんだ。何でか知らないんだけど、エタルドにあたしが選ばれてね……」

「まあいいでしょう、これでクラネルさんにその剣を渡さなかった理由が分かりました。それで、勝算はどの程度なのでしょう？」

「4・6であつちが勝つんじゃないかな？まあ勝てる確率はそれなりにあるけど、それでも勝てたらラツキー程度に考えておけばいいんじゃない？」

「それでいいんですか……？」

「この戦争のこつちの敗北条件は特に提示されてなかったけど、順当に考えてこつちが全滅したらでいいんじゃないかな？勝つだけなら、あたしかりユで全然構わない訳だしね」

「まあそうですが、なら尚更私たちが倒せばよかったのでは」

「あれ？リユウってこの茶番が始まった理由知らなかったっけ？」

「神アポロンがクラネルさんを欲したからでしょう？」

「そうなんだけど、この茶番が始まる前、『アポロン・ファミリア』の眷属がうちの神様馬鹿にしたらしくてね、それで酒屋でベルがあつちの眷属に殴りかかったとかなんとか。その時にベルがあつちの大將に殴られてね。要はベル、一回あつちの大將に負けるんだ」

「そうなんですな」

「そ、だから今回のこの『戦争遊戯』っていう舞台で借りを返したいんだって」

* * * * *

ベル、ヴェルフ、命の三人は玉座の魔へと足を進めていた。通った道がワユが『アポロン・ファミリア』の眷属を倒し続けてきた道なので、壁や床が血で赤黒く染まっていた。

玉座の魔の扉に到着し、ベルを先頭に扉を開ける。開けた瞬間の不意打ちなどは無く、『アポロン・ファミリア』の大將のヒュアキントスが玉座に腰掛け、両隣には二人の眷属が控えていた。何故か片方の眷属は痛みを我慢するかのように若干顔を顰めているが。

「来たか、ベル・クラネル。貴様のファミリアの精鋭一人に我が『アポロン・ファミリア』

が文字通り壊滅させられようとは……仮に貴様に勝ったとて、此度の『戦争遊戯』は我らに勝ち目はないだろうな」

「……降参しますか？」

「冗談を、たとえこの『戦争遊戯』に敗れようとも、貴様は倒す。そうでなくては、私のプライドが保たん」

「そうですか……では、始めますか」

背中に背負った刀を鞘ごと抜き、鞘から刀をだす。鞘を放り投げ構える。後ろに立っているヴェルフと命も武器を構え、臨戦態勢に入る。

ヒュアキントスたちもそれぞれが武器を構える。ヒュアキントスは大剣を、後ろの二人はそれぞれ槍と弓矢を構える。

槍を持った猫人が最初に動く、ベルに向けて突き一閃。ベルと猫人の間に命が割り込み、槍を刀で弾き弾かれ体勢を崩された懐に回し蹴りを入れる。

「貴殿は私が相手だ！」

部屋の左に飛ばされた猫人の元へと向かう命。

ヒュアキントスの後ろで弓に矢を番え構えている妖精が、魔法の詠唱をしている。

「【燃え尽きろ、外法の業】」

ヴェルフも同時に魔法の詠唱に入る。しかしヴェルフの魔法は超短文詠唱、強制的に

魔力暴走を起こさせる反魔法。

「ウイル・オ・ウイスプ」！

魔力暴走した魔法はその場で爆発を起こす。爆風に吹き飛ばされた妖精は、咳き込みながらも立ち上がり弓を背負いナイフを二本構えた。

「ベル！あいつは俺に任せろ！」

命とヴェルフが他の二人の眷属を相手にしている間に、ベルは【英雄願望】のチャージを行っていた。

「【ファイアボルト】！」

ベルが放つ速効魔法、雷を纏った蒼き炎は速効魔法とは思えない威力でヒュアキントスに向かって飛んでいく。

ヒュアキントスは構えていた大剣を咄嗟に自らの身体の前に滑り込ませ、蒼き炎から自らの身を護る。衝撃を全て防ぎきることはできず、たまらずに後ろに後退させられた。

【英雄願望】は攻撃の威力を上げるスキルだ。代償は自らの体力をすり減らすことだ。戦闘の最初に繰り出すようなスキルではない。

しかしベルは敢えて戦闘開始後すぐにこのスキルを使った攻撃を行った。これはワユと組み立てた作戦だ。

『最初に高火力の攻撃を一つぶちかましておきな。そうすれば、敵はその攻撃を意識しながら戦わざる負えなくなる。精神面で有利な格下と、精神的に不利な格上だったら、精神的に有利な格下の方が勝機はあるから』

大技を最初に繰り出させることによってその攻撃を警戒させながら戦わせる。目の前の攻撃だけではなく、来るかどうか分からない攻撃を警戒しなければ戦わなければならない相手は、必ず精神をすり減らしながらやがて大きな隙を作る。

「貴様、正気か……？」

「さて、どうでしょう——ね！」

片手で構えていた刀を後ろ手に持ちながらヒュアキントスと一気に距離を詰める。接近しながら刀を上段に振り上げ、切りかかる。

基礎的な上段切りをヒュアキントスは大剣を掲げ防ぎ、すぐさま剣を引き追撃を取ろうとする。

ベルは一撃を与えたところでバックステップ、ヒュアキントスから距離を取り右手をヒュアキントスに向け速効魔法を発動する。

「【ファイアボルト】！」

先ほどよりもかなり威力が低い炎がヒュアキントスに向けて放たれる。ヒュアキントスは大剣を薙ぎ払い、炎を切断、その場で小規模な爆発を起こす。

その爆発の煙に紛れ、ベルはすぐさま後ろに回り込み刃を突き出した。気配だけを感じ取りヒュアキントスは咄嗟に前転、ベルの刀を回避した。すぐさまベルは追撃、ヒュアキントスは地を転がり続け回避する。

ブレイクダンスの要領でヒュアキントスは下半身を振り上げベルに向けて蹴りを放った。ベルは腕でそれを受け止めるが、ここでレベルの地力差が出てしまう。不安定な姿勢から放たれた蹴りでも、レベルが一つ違えば真つ正面から受け止めるのは困難だ。ベルのアビリティがSだとしてもそれは変わらない。

ベルはその場から吹き飛ばされてしまい、ヒュアキントスと距離が開いてしまう。しかし不安定な姿勢のまま迎撃してくることは無く、ゆっくりと立ち上がりながら体勢を整え直していた。

「不意打ちのつもりだったが、咄嗟に後ろに飛んで威力を殺したか……レベル2の貴様が、レベル3の私とほぼ互角にやり合っていることに驚いたぞ」

ヒュアキントスの言葉に何も返さず、ベルは立ち上がり刀を構えヒュアキントスをしっかりと見据える。全ての動きを見逃さないと言わんばかりだ。

「来ないならば、こちらから行くぞ！」

大剣を構えたままベルに突貫してくるヒュアキントス。ベルはヒュアキントスの繰り出してくる剣戟を刀で受け、時には躲し罅迫り合いに持ち込む。

レベル差が有る鏝迫り合いは基本的に高レベルのものが勝つ。技術があらうとも、力で押し切れるためだ。

しかしベルは押しきられる直前、漆黒の『神のナイフ』を抜きゼロ距離のヒュアキントスに向けて切りかかった。咄嗟に後ろに飛ぶものの、躲しきれずに右腕に赤い線が走った。

ベルの超変則二刀流、刀とナイフという長さに差が有り過ぎる武器の二刀流だ。しかし虚をつくことはできても、常にこのまま戦うのは相手がどうこうの問題ではなく自分の距離感的に極めて難しい。こういったゼロ距離、或いは超近距離の時しか使えない。

ナイフを仕舞い再びヒュアキントスと距離を詰めるベル。上段から切り下ろした刀をヒュアキントスは紙一重で躲す。刀を振り切つて動けないところにヒュアキントスはカウンターを叩きこみ、ベルは壁まで吹き飛んだ。

「ヒュアキントス様！」

玉座の魔の扉の方向から少女の声が響き渡った。その方向をベルトヒュアキントスが見るが、ベルは見覚えがある顔ではなかった。

「ヒュアキントス様！ご無事ですか!？」

「カサンドラ？無事だったか……」

「え、援軍……」

「ベル、動けるか？」

「助太刀いたします！」

「ヴェルフ、命さん……」

「あの二人はどうした？」

「あ？あんなの、あの悪魔みたいな奴に比べれば全然大したことないぞ」

「まあ、あの人と比べるのがそもそも間違いかと、ヴェルフ殿」

五日間とはいえ、ヴェルフも命もワユの特訓、という名のサンドバッグになっていたのだ。その中でもワユの動きに目を慣らしていた彼らからしたら、レベル2の冒険者の動きは緩慢に見えても仕方がないだろう。

ヒュアキントスは後ろに飛び、ベルたちから距離を取る。その間にベルは刀を杖代わりに立ち上がり、

「ありがとう、リリ、ヴェルフ、命さん。後は、僕がやります……い！」

「……そうか、よし、行けベル！」

ヴェルフがベルの背中を叩き激励する。リリと命がベルの方を見て頷く。

ベルも三人の方を振り向き頷いてヒュアキントスに向けて突貫する。ベルは刀を袈裟切りに振るう、ヒュアキントスは大剣でそれを防ぐ。すかさず片手を開け、その手をヒュアキントスに向ける。

「フアエアボルト」!

ゼロ距離から発射された魔法がヒュアキントスに直撃する。思わず後ろに後ずさるヒュアキントスに向けて追撃、『流星』の剣技を舞う。

高速の五連撃がヒュアキントスに向けて放たれる。最初の二撃は何とか防ぐが、全て剣舞を防ぎきることはできずに三回の剣戟を食らう。ワユの流星よりは速さに劣るが、前回のミノタウロス戦よりも早い剣戟がヒュアキントスを襲う。

『流星』を放った後にバックステップで距離を取る。かなりのダメージをヒュアキントスは負ったが、攻撃を食らったことを意にも介さずにベルに向けて攻撃を次々と放つ。

ベルは後退し、時には地を転がりながら全ての攻撃を回避した。回避しながら「英雄願望」をチャージする。

それに気が付いたヒュアキントスは回避の態勢を取る、が先程リリに刺された足の痛みに動作が遅れ、

「フアエアボルト」!!

一撃目の魔法よりも高威力の魔法を放った。ヒュアキントスは咄嗟に剣を目の前に翳すが、余りの火力にを防ぎきれず剣を貫通しヒュアキントスに直撃した。

最大火力の魔法が直撃したヒュアキントスはその攻撃で意識を失った。

全滅した『アポロン・ファミリア』のから空きの玉座にベルが腰掛ける。その瞬間『戦争遊戯』終了の合図が戦場に鳴り響いた。

第三十二話〈戦争遊戯 a f t e r〉

戦争遊戯から二日後、各所では先日の『戦争遊戯』の熱冷めやらぬ状況だ。

そしてここ、『ロキ・ファミリア』のホームもその一つである。

「いやー、一昨日のあれ、すごかったよねー?」

「ホント、あの賭け負けてる人が多くて助かったわ」

「ねえアイク、どうして『ヘスティア・ファミリア』が勝つてわかったの?」

『『ヘスティア・ファミリア』で大暴れしていた破天荒剣士』

「……え?」

「それが答えだ」

「おいアイク、どこかに行くのか?」

「今日『ヘスティア・ファミリア』の面々が帰ってくるのだろう? 少し挨拶をと思つてな」

「挨拶?」

「アイズ、『アロンダイト』借りて行っていいか?」

「借りていくも何も、アイクに渡された剣でしょ? 確かに今は私が持つてるけど……」

アイズは部屋に戻り持ってきた『アロンダイト』を渡した。アロンダイトとラグネルを背負った。

「ではな」

そしてアイクは『黄昏の館』を後にし、オラリオの正門に向かう。『ヘスティア・ファミリア』のメンバーの帰還を待ちながら。

* * * * *

現在『ヘスティア・ファミリア』のメンバーは馬車に揺られながらオラリオに帰還していた。

「まさかベルが本当にあつちの大將倒すとは思わなかったよ」

「あ、アハハ……結構酷いこと言いますね、ワユさん」

「だってレベルが一つ違うだけでかなり動きに差が出るんですよ？それにベルはそんなに戦闘経験つてというのが向こうよりも短いわけだし、まあ勝つための特訓はしていたわけだけど」

「何はともあれ勝つてよかったじゃねえか！ベルは『ヘスティア・ファミリア』の存続が決まったしな」

「まあ『アポロン・ファミリア』の今後を考えたら同情を禁じ得ませんが」

今回の『戦争遊戯』で『ヘスティア・ファミリア』が『アポロン・ファミリア』に出

した条件は『アポロン・ファミリア』の全財産、及びホームの没収、アポロンのオラリオ永久追放だ。

そして今回の『戦争遊戯』では『アポロン・ファミリア』の眷属の内7割の死亡が確認された。

アポロンのことを嫌っている神も多いが、流星に今回の出来事には同情を禁じ得ない様だ。

「まあ今回の目的は達成できたでしょ？ 今後はあたしに恐れてベルを欲しがってもちよつかいを出されることは無いと思うけど」

「クラネルさんが他のファミリアに行かれても困ります。クラネルさんはシルの伴侶となる御方ですから」

「ちよつと、リユーさん!？」

「ムムム……ベル様！ 鼻の下が伸びてます!」

「ちよつとリリっ!？」

馬車の中で戯れていると、急に馬車が止まった。中にいたベルたちは何事かと辺りをキョロキョロする。

「御者殿、何かあったのですか?」

「い、いえ……目の前に人が居まして……進むに進めないのです」

馬車の進行方向にローブを着た大柄な男性と思わしき人物が立ちふさがっている。このままでは馬車が進めないため、馬車に乗っている『ヘステイア・ファミリア』のメンバーは馬車を降りた。

「おいあんた、そこに突っ立ってると進めねえんだ。退いてくれねえか？」

「……」

ヴェルフが男に詰め寄るが、男は何も言い返さない。

「ヴェルフ殿の言う通りです。このままでは私たちの馬車が進めず、オラリオに帰れなくなってしまう」

「こちらの言い分が通らないなら。実力で押し通ることになります」

そう言いながらリユーは小太刀を抜いて男に詰め寄る。男は背負っていた剣を抜き、行動でリユーの質問に答えた。

リユーが男に切りかかる。男は身を翻しそれを躲すが、もう一本の木立を鞘から抜き逆手に持って男に向けて突き出す。

男は振り返りながら剣を振るい、二刀目の小太刀の攻撃を捌き男が持つ剣を逆手に持ち柄でリユーの背中を殴り地面に叩きつける。

「にやろー！」

「御免！」

命とヴェルフも武器を取り男に向けて切りかかる。ヴェルフの大剣をいなし、命の刀を躲す。

がら空きになった懐に手刀を一閃、ヴェルフはその一撃で意識を刈り取られる。命は男がヴェルフに攻撃している隙に背中に向けて刀を薙ぎ払う。しかし男は振り向きもせず、背中に剣を回しその一撃を受け止め男はその場にかがむ。そのまま命の腕を取り背負い投げ、命は背中から地面に叩きつけられ気を失う。

「ベル下がってて、あたしがやる」

ワユが前に出て腰を落とし、抜刀の構えを取る。

男は持っていた剣を仕舞い、背中に背負っていたもう一本の黄金の剣を抜く。背中から現れたのは黄金の両手剣。

男が黄金の剣を抜くと、エタルドともう一本の剣が輝き共鳴し出した。

それを意に介さず、ワユと男は同時に地を蹴り距離を詰める。

ワユは抜刀、居合切りのようにエタルドを繰り出す。その動きに合わせて男はだらりと下げていた剣でその一撃を受け止める。

ワユは一度下がり、剣を抜いて男と距離を詰め激しい剣技を繰り出す。男の方もその剣技に対応し、受け止め、躲しを繰り返す。

見る限りワユが攻めているように見えるが、ワユの方は表情に余裕がなさそうだ。

ワユがエタルドを男の頭に向けて突き出す。男は首を曲げながら前に出ることによって距離を詰めながら攻撃を回避するという神業を見せた。

しかしワユの攻撃は男のロープのフードを引きちぎり、男の顔を露わにした。

「少しお痛が過ぎるんじゃないの……大将!」

ベルとリリはその男の顔を見て驚愕する。その男の正体はベルをミノタウロスから救った、そしてワユの所属していた傭兵団の団長だった男、アイクだったからだ。

「久しぶりだな、ワユ」

話しながらも剣舞は止まるところを知らない。ワユが奥義『流星』を繰り出す、アイクはすべてを「見切り」その攻撃を回避する。

「嘘でしょ!」

「お前は俺のスキルを忘れたのか」

最後の一撃を放って隙だらけのワユに向けてラグネルを振るう。

ワユは血潮を噴き上げながら吹き飛ばされた。

「やはり以前よりも弱くなっているな、お互いに」

「いやいやいや、何してるんですかアイクさん!?普通に死んじゃいますから!」

「あの程度では死なん、まあ放っておけば死ぬが」

「大問題ですよ!早く治療しないと——」

リリがワユの傍らに近寄ろうとするが、それより先に動き出していたアイクにワユが担がれる。

「こいつは俺の所属しているファミリアでちゃんと治療して送り届ける。心配するな」
「他の三人はどうするんですか!？」

「そいつらは放っておけば目を覚ますだろう。特に外傷もないから……最初からこいつが突つかかかってくれれば無駄な戦闘をせずに済んだんだがな」

そう言い残しその場を去っていくアイク。その場に取り残されたエルとリリと馬車の御者は呆然としたまま見送る。

* * * * *

「リヴェリア、こいつの治療を頼む」

ワユを担いだまま『黄昏の館』のリヴェリアの私室を蹴り開けるアイク。突然の来訪に咄嗟に振り返り、アイクとアイクが担いでいた大物に目を見開く。

「お前は一体何をしているんだ……」

「言っただろう、挨拶だ」

「死にかけてるじゃないか!?!そのどこが挨拶だ!それに彼女は『ヘスティア・ファミリア』の——」

「俺の仲間だ」

ワユをベッドに寝かせ、リヴェリアが回復魔法を行使する。普段の特訓でアイクがアイズを半殺しの状態で担ぎ込んでくることが多いため、治療の魔法の出番が最近かなり増えてきたように感じるリヴェリア。

「それで、仲間というのは」

「文字通りの意味だ。こつちに来る前の世界で俺が団長をしていた傭兵団の団員だ」

「……少し彼女を見てやっててくれ、今ロキを呼んでくる」

少し経ち、ロキがフィンとリヴェリアを従えて来た。来て早々ロキはアイクの襟元を掴みガツクンガツクンさせている。

「お前はワユさんに何やらかしとるんや!?アホか!アホなんか!」

「こいつと面識があったのか?」

「この間の宴でドチビが連れてきてたわ」

違う眷属ってこいつのことかと思っていると、ベッドの上から軽い呻き声が聞こえ頭をさすりながらワユが上体を起こしていた。

「ワユたん、大丈夫か?どつか痛いところないか?胸とか、胸とか、後胸とか?」

「胸ばつかじゃん、つてロキ?あー!大将!もう一回、もう一回勝負!」

「少し落ち着け、話が済んだらまたやってやるから」

「やってええわけないやろ!病み上がりやぞ!」

「やあ、ワユさん……だったよね？少し話良いかな？」

「ええつと……誰？」

「僕はフィン。『ロキ・ファミア』の団長をやってる」

「え？この大将つて大将じゃないの？」

「あはは……まあ冒険者として僕の方が経験あるし、それにそちのファミアの団長も君じゃないだろ？」

「うん、あたし団長とかそういう柄じゃないし」

「……話を進めてもいいかい？君はなんで、ここに居るんだい？」

「へ？どういうこと？」

「何でこの世界にいるんだということだ？本当に何でいるんだ？お前はテリウス大陸旅して回ってただろ？」

「それを言うなら大将だつて何でこの世界にいるのさ？」

「知らん、青い光に包まれたと思ったらダンジョンにいた」

「あたしも。皇帝からエタルド受け取ったその日に青い光に包まれて、気が付いたらダンジョンにいた」

「理由は分かるか？」

「大将の方は？」

「俺は分からん」

「あたしも」

なんとも頭の悪そうな会話が続けているのだろう、他の三人が思ったかどうかは定かではない。

「ワユ、今すぐというわけではないが、力を貸せ」

「へ？いきなりどうしたの？」

「ダンジョンに漆黒の騎士が現れた。ご丁寧に、女神の加護を宿した鎧を着こんでな……」

「……ゼルギウス將軍？」

「いいや、鎧の中身はただの植物、或いはモンスターだ」

「へえ……強いのか」

にやりと笑いながらアイクに問いかける。その様子にリヴェリアはため息をつきながらこめかみを押さえた。

「大したことは無い。が、女神の加護を宿している。通じる武器は俺のラグネルとエタルドだけだ」

「で、具体的にはどうするの？」

「ダンジョンに潜る時に声をかける。遠征には……着いて来てもらえばいいか」

後ろを振り向きフィンとリヴェエリアに確認を取る。二人とも少し考えるそぶりを見せた後に首を縦に振る。

「そう言うわけだ。見返りはどうする？」

「うーん……ねえロキ、ここに来れば大将と戦える？」

「まあこいつがホームにいればな」

「じゃあ大将と好きなきときに戦える権利、後ろにいるお姉さんの治療付きで。お姉さん回復職でしょ？なんか同時に魔法も使えそう。なんかセネリオみたいだね」

それと——と続けるワユ。

「グレイル傭兵団の復活、とかは？」

「俺とお前だけでか？それは団ではないだろう。傭兵をしたければ個人でやっている」
「つてことは大将も傭兵続けてるつてこと？」

「心証的にはな」

「それでいいよ。何かあったらお願いね、お互いに……じゃあ、もう一回勝負！さつきは少し調子が悪かったけど、今度こそ勝つ！」

「そう言ってお前が勝った例がないだろう。やるなら中庭だ」

そう言つてリヴェエリアの私室を後にするアイクとワユ。その後『ロキ・ファミリア』の中庭が二人によつて荒れに荒れたのは言うまでもないだろう。

第三十三話

ダンジョンには広場と言われる開けた場所が各所に存在している。『戦争遊戯』が終わりアイクがワユを『黄昏の館』に連行し、その後アイクとワユが再戦をした影響で『黄昏の館』の中庭は見るも無残なものとなってしまい、『黄昏の館』の持ち主であるロキからは『黄昏の館』での戦い禁止令』が執行されてしまった。

だがワユとしてはアイクの都合が付くときはいつでも戦える状況の中、戦わないという選択肢は存在しない。しかしオラリオの広場で戦ってしまったも『黄昏の館』での二の舞になると考えるまでも無く分かったワユは、ダンジョンの広場で戦うことに決めたのだ。

さらにアイクは基本的にやる事が無い。それこそ館にいるときは誰かしらと模擬戦をしているか、用も無く館をうろついていることぐらいしかない。広場でのワユとの戦いはアイクの方もそれなりに良い提案ではあるのだ。

アイクとワユは上層の広場で戦闘を繰り返していった。その戦いを周りにいた冒険者は見て見ぬふりをしながら素通りしていく。

『戦争遊戯』で大暴れしたワユを押ししているアイクの方を目にもくれず。関わりたくないというのが周りの冒険者の本音だろう。

そして現在、幾ばくかの戦闘の後の休憩中だ。

「ねえ大将、『歓楽街』って知ってる？」

「歓楽街？名前だけならば聞いたことはあるが、行ったことはないな。そもそもオラリオを歩き回ったことが無いんだがな」

「なんで？『ロキ・ファミリア』って言っても常にダンジョンに潜っているわけじゃないんでしょ？」

「無用なトラブルを起こさないためだ。俺が外に出歩くと、この都市では碌なことにならない」

アイクがオラリオを歩き回ったときと言ったら、『怪物祭』の時くらいなのだが、その時はオツタルをけしかけられ、フレイヤに目を付けられ、謎の新種のモンスターと戦う羽目になったり。

あの一日以降碌なことが起こらないというアイクの直感の元、都市に出歩くことはあまりないのだ。

さらにアイクはレベル8ということでエイナが情報に規制を付けている。アイクとワユの巡り合わせがここまで遅くなったのは、色々な要因が働いていたからだだった。

『イシユタル・ファミリア』が運営しているっていうことしか知らないな。どんな所なのかすらさっぱり分からん。どうしたんだ突然？」

「ベルが昨日歓楽街に行つてからうちの神様カンカンでね。別にあたしは関係ないと思ふんだけど、どんな所なのか気になつて」

「そうか、だが俺も知らないものは知らないからな。同じファミリアのやつか知つてそう奴にでも聞いてくれ」

* * * * *

「歓楽街い？」

ワユとダンジョンで出たところで別れ、アイクは『黄昏の館』に帰つて来た。ワユとの話に上がった歓楽街というものがどういふものなのかリヴェリアに聞いたところ、明らかに怒気を滲ませた表情と声音で返答された。

「歓楽街つてどんな所なんだ？ 『イシユタル・ファミリア』が運営してるってことしか——」

「知らん！ そんな下らない事を聞いてくる暇があつたらこれでも買つて来い！」

リヴェリアにメモ書きとヴァリスが入った麻袋を渡され部屋から追い出されたアイク。何故あそこまで怒つたのか理解ができない。

このまま誰かに聞くのもいいが、最低限命令されたことをこなそうと『黄昏の館』を

出てオラリオに向かうアイク。メモ書き通りのものを買ってきて機嫌が直るのならば安いものだど割り切るしかない。

メモ書きに書かれていたのは食料品、それとポーションの類が少々。食料品はメイン通りの商店街に行くのが一番安く効率がいい。

メイン通りを物色していると、路地裏に入るところから何やら声が聞こえて来た。

「へへっ、良いだろう？少しくらい」

「そ、そんな……困ります……」

「ぐはは！良い反応だなあ、嬢ちゃん？」

この世界でいうナンパという奴だろうか。路地裏へと視線をやると柄の悪そうな冒険者と思わしき人物が鈍色の髪を結び緑色の制服に身を包んだ少女を三人で取り囲んでいた。

ため息を付きながら路地裏へと入っていくアイク。トラブルは御免だが、目の前で困っている人を見捨てる程非情ではない。

「あんたら、一体何をやってるんだ？」

「ああ？誰だてめえ？」

少女を取り囲んでいる男が一斉にアイクを睨みつける。その睨みなど無かったかのように続ける。

「あまり褒められたものじゃないな。別に女が弱いとは限らないが、見るからにひ弱そうな女を何人もの男で囲むなんてな」

「何だ何だ、正義の味方気取りか？」

「俺たちはレベル2の冒険者だ。怪我したくなかったら回れ右してさっさと消えな」

「お前たちが俺の前から消える気はないということだな？」

「生意気言ってるんじゃないぞ！」

一人が殴りかかってくる。アイクは避けようともせず、まっすぐ伸ばされた腕を抱え込み地面に叩きつけ後ろ手にくませ行動を封じる。

二人目が地面に叩きつけているアイクの顔目がけて拳を振るう。咄嗟に組み伏せていた男を盾にし、殴りかかってきた男はアイクが組み伏せていた男を容赦なく殴りつけた。

その隙に後ろに回り込み手刀を振るう。首に当たった手刀は神経を一時的に麻痺させ気を失わせる。

残り一人の冒険者を睨みつけるとジリジリと後退り、悲鳴を上げながら逃げていく。追いかける理由も無いので殴られた男を見据え

「これ以上怪我したくなければそこに倒れている奴を持ってどっか消えろ」

「は、はい！」

あまりの実力差に本能的に勝てないと悟った彼は、気を失っている男を抱え逃げて行った男と同じ方向へと走り去っていった。

アイクもその場を去ろうとしたが、佇んでいた少女から声をかけられ振り返った。

「あ、あの！ありがとうございます！何かお礼を……あら？あなた確か、大分前にうちで大量にご飯食べてた冒険者さんですか？」

「さてな、何も用がなければもう行くが」

「待ってください、何かお礼を」

特に礼を求めてやったことではないのだが、何も例を貰わずにこの場を去るというのは勿体ないと思いとどまった。特に助けた本人が何か礼をしたいというのならば尚更だ。

「じゃあこれを安く売つてるところを教えてください」

その少女にメモ用紙を見せてつけ、食料品を安く扱っているところを尋ねることにした。幼気な少女に金を要求するのも間違っている気がするためだ。

「これなら……ご案内します——きやつ！」

アイクの手を引き表へと出ようとした少女。そのアイク目がけて飛び蹴りをかましてきた人物に驚き、その場へとしゃがみ込んでしまった。

またため息を付きながらその顔面めがけて放たれた跳び蹴りを首を傾け回避し、通

り過ぎる直前足を掴みそのまま背負い投げ。地面に叩きつけられた人物は気を失ってしまった。

「リユーー！」

蹲っていた少女がリユーーと呼ばれた妖精の元へと歩み寄る少女。

「知り合いか？」

「同じ店で働いている同僚です」

「悪いことをしたな。お前たちの店まで送り届けよう」

「すいません、よろしくお願ひします」

* * * * *

準備中という札が掛けられた店の扉を開けるアイク。扉をくぐって最初に目に着いたのは床を磨いていた茶色い毛並みの猫人だ。

「お帰りにやシル……リユーー!? 誰にやられたニヤ?」

「路地裏で襲われたな、反射的に反撃してしまった」

「おミャーは、この間馬鹿食いしてた『ロキ・ファミア』の所の!」

「話は後にしてくれ。とりあえずこいつを寝かせる場所に案内しろ」

肩に担いだリユーーを示し、猫人に案内を要求する。一緒にここまで来たシルが前へ出てアイクの腕を引く。

「こちらです」

カウンターの裏に回り、階段を上る。二回に上がると従業員用の部屋であろうものがいくつかあった。

そのうちの一つをシルが開き、手を上げてここに連れてくるように指示する。

アイクはシルがいる場所に歩みを進め、部屋に入りベッドへとリユーを寝かせる。背中から地面に叩きつけられたため、頭は無事だろう。

「すみません、ここまで運んでいただいて」

「こいつを気絶させたのは俺だ、敵ではないのなら介抱するくらいは筋だろう」

もともと本気で投げたわけではないため、少し経つとリユーは目を覚ました。目の前にいたアイクに驚いてはいたが、互いが事情を説明し勘違いは解決された。

「リユー、シルでもいいんだが、一つ聞きたいことがあるんだがいいか？」

「何でしょうか？」

「歓楽街ってどんなところだ？」

第三十四話

「歓楽街つてどんなところだ？」

シルとリユウの二人にそう尋ねると、部屋の空気がピシッ！と固まった気がした。

「あの、アイクさん……それ本気で私たちに聞いてます……？」

シルなんかは信じられないようなものを見たような表情を浮かべ、リユウなんかは汚物を見るような目で見てくる。

「そうだが、何か拙かったか？」

「い、いえ……そういうわけではないのですが……」

「貴方の傭兵団は碌な人がいないのですか？ 戦闘狂の剣士だったり、女神殺しの貴方だったりと今までであった貴方の傭兵団に碌な人がいらつしやらない気がするのですが」

「ちよつと待て、何であんたが俺が傭兵であることを知っている？」

「……気が付かないのも仕方がないですね。私はこの間の『戦争遊戯』の『ヘステイア・ファミリア』の助っ人冒険者です。その時に貴方の傭兵団の自称貴方のライバルを名乗る剣士の方がいらつしやいます。グレイル傭兵団はお伽噺では有名ですし、貴方の所の剣士が嘘を付いていないのは神ヘステイアに確認が取れていますので」

「……ちなみにそれを知ってるのはどれくらいの人数がいるんだ？」

「ワユさんが吹聴して回っていなければ『ヘスティア・ファミリア』に所属している眷属と私だけです」

その事実を胸をほつと撫で下ろす。折角ギルド側には情報を規制してもらってるのに、同じ傭兵団の団員に裏切られて事実が広まったとなると間抜け過ぎて言葉が出ない。

「それでアイクさん、なぜ歓楽街のことを私たちに聞くのでしょうか？ 新手のセクハラですか？」

「違う、今日ワユに話を聞いてな。生憎、向こうにはそんななぞの施設が存在しなかったものでな。ベルが歓楽街に行つてヘスティアに怒られたらしい」

「……へえ、そうなんですか……それで、アイクさんがなぜ歓楽街のことを知りたがるのでしょうか？」

「どうもこのまま何も起こらないで済む問題ではない気がしてな。『ヘスティア・ファミリア』内で済ませれば良い問題を、なぜだか俺の所にも持つてこられそうな気がしてな」

「その心は？」

「直感だ」

「……あなたほどの手練れの戦士の直感は、意外と馬鹿にできないものがありますから

ね。仕方ありません、歓楽街がどんな所かお教えいたしましょう」

歓楽街は『イシユタル・ファミリア』が営んでいる。その場所では『イシユタル・ファミリア』に所属している女が、歓楽街に来た男に買われ一晩を共にするという場所だ。買う、ということは基本的な倫理から外れなければ何をしてもある程度は黙認される。つまり淫行に耽ることもままあるのだ。

そして『イシユタル・ファミリア』の構成員は殆どがアマゾネスだ。アマゾネスはエルフと違って、潔癖などところはない。寧ろ強い男を求めて襲ってくるくらいだ。それに男に自らの身体を差し出すことにもほとんど抵抗がないものが多いらしい。

ここまでの話を聞いて、『ロキ・ファミリア』に所属している双子のアマゾネス、特に妹の方は少々特殊なのだと思った。彼女は現在強いものよりも、将来的に強くなりそうなもの、それこそベルにかなりの興味を示している。

アイクが歓楽街に入って戦鬪を起こそうものならば、アマゾネスの本能の元真つ先に狙われるのだが、アイクはその可能性に至らなかつたようだ。

そして話を全て聞いたところで、今までなぜ彼女たちが機嫌を傾けたのかが分かつた。確かにこれは女性に聞くような内容ではなかつた。

「悪かつたな、お前たちに聞いていいような内容じゃなかつたな」

「本当ですよ、女性に歓楽街の内容を聞くのは後にも先にもアイクさんだけかと思いま

すよよ?」

「まあそういうことです。知らなかったとはいえ、以後気を付けることをお勧めします」
「そうはいってもな、まあ肝に銘じておく」

「ええそうして下さい。ついでに今度うちに食事に来てくれると助かります。貴方が来ると接客が大変ですが、その分給金が普段よりも弾むので」

「ふふつ、リユールがそんな冗談いうなんて珍しいね」

「偶にはこういうのもいいでしょう。彼の傭兵団のメンバーにはかなりの迷惑を被つてますから」

「そろそろ俺は行かせてもらおう。何か頼みごとがあつたら『黄昏の館』にでも来てくれ。金を払えば可能な限り仕事を請け負うぞ」

「そう言つて部屋を出て行くアイク。そして部屋を出る直前に振り返り、シルに声をかける。」

「そう言えば、シルの方はどこかで会つたことがあるか?俺が店に来た時以外で」
「いいえ、無いと思いますよ?」

それだけを確認して今度こそ『豊穡の女主人』を後にするアイク。帰る途中にリヴェリアに渡された買い物と、アイクの私金でリヴェリアに『新緑の宝石が埋め込まれたペリダント』を買つて『黄昏の館』に到着した。

* * * * *

次の日も『いつも通り』にワユが『黄昏の館』を訪れ、アイクとダンジョンに向かつていく。怪我をしてもいいように回復薬も多めに持って行っている。

ちなみにその回復薬は『ミアハ・ファミリア』で購入されたものであり、最近の『ミアハ・ファミリア』は彼らのおかげで少々儲けが増えてきたようだ。

そして『いつも通り』にダンジョンでワユが満足いくまで戦い、ダンジョンを出ようとした所で偶然ワユを除いた『ヘスティア・ファミリア』がダンジョンに潜るところに遭遇した。

「あれ、ベルじゃん。どうしたの皆して」

「少しお金が必要になりました……と言うかワユさん、昨日話していたとき部屋にいましたよね？」

「昨日？なんか話してたっけ？」

「お前少しは自分の所属しているとところに貢献しろよ」

「あの……ワユ殿、後ろの御仁はどなたでしょうか？」

長い黒髪を結び、和風の鎧を身につけた少女がワユに訊ねる。そしてワユそれが当たり前だという様にアイクの紹介をし始めた。

「この人うちの大将」

「おい、お前何考えてるんだ」

「え？何かいけない？」

「俺たちはこの世界からしたら異分子だぞ。それに俺たちのレベルなんかを考えたら俺たち、とくに俺を知ってる人は少ないほうがいいんだよ」

「というのはリヴェリアやロキ、エイナなどに言われた受け売りなのだが、そのことをここでいう理由は無いのでここでは黙っておく。」

「そして今の回答はワユの言ってることが本当だという遠回しの受け答えでもあった。」

「本当に彼の英雄、なのですね！自分、ヤマト・命と申します！以後よろしくお願いします、アイク殿！」

「あ、ああ」

「アイクの方へと詰め寄り、自己紹介をしてくる命。目の前にお伽噺の英雄がいるとなつては興奮するなと言う方が難しいのだろうか。」

「あなた、あの時の……『ロキ・ファミリア』に所属してたよな？」

「そうだな、一応な」

「ヴェルフ・クロツゾです。その剣、見せて貰ってもいいですか？」

「ワユの剣と同じでお前たちは持てないぞ？」

「構いません」

地面にラグネルを突き刺し、ヴェルフがその剣をじつくりと見回す。

そんな彼らの様子を見てベルとリリは微妙な表情をするしかない。ついこの間、『戦争遊戯』からの帰り道で襲い掛かり返り討ちにしたのがアイクなのだが、その時と使っている武器は違うし、ローブを羽織っていたためどうやら気が付かないようだ。

「ワユ様、リリ達これからクエストに行くんですけど、一緒に来てくれませんか？ どうにも今回のクエスト、怪しいところが多すぎるんです」

「別にあたしは構わないけど、大将はどうする？一緒に受ける？」

「構わんが、面倒事は御免だぞ？」

「で、依頼の内容は？」

「14階層の食糧庫で、石英を採掘して来い」、報酬は100万ヴァリスです。これだけの依頼で100万ヴァリスはキナ臭いんです。何かあった場合の為に、少しでも戦力が欲しいんです」

「そつちの金に余裕が出来たらいつか報酬せびりに行くからな」
「ありがとうございます、アイク様！」

* * * * *

14階層までに向かう間のモンスターはアイクとワユが率先して討伐していった。アイクの戦いざまを初めて見る（本当は二回目）命とヴェルフは彼の戦いざまに驚愕を

隠せずにいた。

すると突然、多方向からモンスターの方向が響き渡った。

「『怪物進呈』!？」

「『怪物進呈』?なんだそれは？」

「とりあえず説明は後です、一旦引きましよう」

ベル、リリ、命、ヴェルフは踵を返し殿にアイクとワユが着いて行き先ほど通った十字路で止まると別の方向からもモンスターの方向が響き渡った。

「二方向から!？」

「なるほど、ダンジョンであつたモンスターの擦り付けか……ワユ、お前はもう一方の方に対処しろ。さっきの方は俺が対処する」

「了解!」

アイクとワユが方向が聞こえた道に張り付き、ベルたちはサポーターであるリリを守る陣形を取っている。

「三方向!？」

また別の方向からも『怪物進呈』がされた。そしてそのモンスターを引き連れた冒険者たちはリリを守っていたベルたち、二方向からくるモンスターに対処していたアイクとワユへと襲い掛かった。

アイクとワユは咄嗟に地面を転がり冒険者の攻撃を躲し立ち上がった瞬間襲い掛かって来たモンスターに向けて斬撃を飛ばし魔石ごとモンスターを撃破した。

しかしベルの方はそううまくは行かなかった。襲ってきた冒険者のレベルが恐らくベルと命とヴェルフで対応できるレベルであつたとしても、多人数を同時に相手取る経験は不足している。

(厄介な――！)

次々と襲ってくるモンスター、隙をついて襲ってくる冒険者たちに内心で毒づき、アイクは同時に相手取るという選択肢を変えた。

冒険者の方に完全に背を向け、襲ってくるモンスターを先に討伐し、そのちに冒険者がまだ襲ってくるようならばそちらの相手を取ることにした。

モンスターが来る進路へと進み、ラグネルを振るい次々とモンスターを討伐していく。その間も後ろからの攻撃に少しの注意を払いながらも次々とモンスターを討伐していく。

やがてモンスターを討伐し終え、後ろを振り返ると二人の冒険者がちやうど武器を振り上げていた。片方の攻撃を剣で受け止めながら空きの鳩尾を左拳で殴りつけ、次いで襲ってきたもう一人の攻撃を身を翻す最小限の動きで躲しカウンターを叩きこむ。

二人の冒険者を撃退したアイクは先ほどの十字路まで引き返す。ワユが戦っていた

方を見ると大量の魔石が転がっているところを見るに、ワユはモンスターを討伐し終えたようだ。しかしワユは地面に倒れている。

そしてベルたちの方も命を除き地面に倒れていた。何事かと確認しようとしたところでアイクは急激な眠気に襲われる。

ここでアイクとワユの弱点らしい弱点を説明しよう。アイクとワユはもともと冒険者ではない、つまり他の冒険者がレベルが上がった時に取れる『発展アビリティ』が取れていない。

アイクの方は『負の女神の加護E』という発展アビリティ。ワユの方はそこに『剣士SS』という発展アビリティが入ってくる。しかし両方とも『耐異常』の発展アビリティは存在しない。

そしてアイクもワユも魔法の攻撃に対する耐性は低めだ。つまり魔法による状態異常、もしくはは状態異常にする攻撃をされた場合、その攻撃を躲す以外に彼らがそれらを防ぐ術はない。

そしてこの空間にはいつの間にか『怪物進呈』をしてきた冒険者のうちの誰かが放った睡眠薬が散布されていた。

命は耐異常Iを持っているため何とか起きてはいるが、それも時間の問題だろう。

そして相手の冒険者の殆どが耐異常H以上なのだろう、誰もが意識を手放そうとはし

ていなかっただ。

「ゲゲゲゲゲゲゲ」

そんな不気味な笑い声を聞きながら、アイクも意識を手放した。

第三十五話

ガチャリという聞きなれない音を聞き、ベルは目を覚ます。起きた際に少し身じろぎするが、何やら身体の自由がほとんど聞かず腕を動かそうにも後ろ手に結ばれた銀の鎖がその動きを阻害する。

「ゲゲゲゲ、やっと目覚めたかあい？」

「貴方は、さっきの……！」

「後ろのガキはまだ目を覚まさないようだねえ。全く、貧弱すぎる」

ベルは動き辛い身体を必死に動かし首を後ろに向ける。そこには青い髪をした青年、アイクが今だにに意識を戻さないまま地面に座らされていた。

「アイクさん!？」

「そつちのガキはアイクっていうのかい？ゲゲゲゲ、彼の勇者の名前と同じなくせに貧弱じゃないか」

ゲゲゲゲと不愉快な笑いをし続ける目の前のアマゾネス。

フリユネ・ジャミール、『イシユタル・ファミリア』のレベル5の冒険者だ。

「……は……？」

「ここはアタイの愛の部屋でねえ」

舌を出し自分の口元をべろりと嘗め回す。その行動にベルは本能的な恐怖を覚えた。

『ダイダロス通り』に隣接してる影響さあ。ホームの地下にはこんな秘密の部屋と通路がある。アタイはここに気に入った男を運んでいるのさあ。ここはあの不細工共も、イシユタル様ですら知らないよお」

後ろで何かが動いた気がする。後ろにいるアイクははまだ目を覚ましていないはずなのだが。

「誰かの残飯なんてまっぴらごめんだよお。喰うなら一番最初、うまいところも全部独り占めえ。そうだろお？」

「ひ、ひいいいいいいいいー!!!」

みつともなく後退りし、フリユネから距離を取ろうとするベル。しかし一緒に繋がれているアイクが全く動かないので足を動かして距離を取ろうとするだけの抵抗に止まった。

ならばと思いがシャガシャと拘束されている鎖を破壊しようとする手を動かす。

「無駄だよお、その鎖は『ミスリル』製。何重にも巻かれれば上級冒険者でも簡単には壊せない」

四つ這いになりながらこちらにジリジリと近寄ってくる。そして舌を出しベルの頬

をべろりと嘗める。

「ああ、美味そうだなあ」

ベルは比喻抜きで昇天されそうになる。フリユネはベルの足元を見るとため息を付いた。

「はあ、これだからガキは……仕方がない、精力剤を持つてくるか」

小さな声で呟き立ち上がる。出口の方へと歩いて行き扉を開けるとこちらを振り返った。

「待つてな、すぐに盛った兎みたいにしてやる。可愛がつてやるからなあ」

扉を閉め姿を消すフリユネ。足音が遠ざかりベルは即座に行動に移ろうとした。

「に、にににににに逃げなくちや……!」

「少し落ち着け」

「……え?」

後ろを振り返るとアイクがいつの間にか目を覚ましていた。恨みがましい視線と共にアイクを睨みつけるベル。

「アイクさん……いつから起きていたんですか?」

「お前たちが話し始めたときからだ。だがあそこで俺が起きたところで何も事態は好転しなかつただろうし、あんな化物みたいな奴の相手などしたくなかつたからな」

基本的に誰とでも普通に話せるアイクだが、流石にあれは自分の範囲外だったようだ。それだけあのアマゾネスが強烈だということでもある。

「あの人の相手を僕一人に押し付けられないで下さいよ！」

「すまなかつたな、だが少し落ち着け。他の皆はどうした？そこで起きていたのはどうやら命だけのようだったが」

「分かりません、ワユさんも倒れていましたし……あれは一体何だったんでしょうか？」
「大方睡眠薬か何かだろう。冒険者ではない俺とワユにはあれを防ぐ手段はない。それよりもじっとしている」

アイクは腕に力を込め、何重にもまかれた『ミスリル』製の鎖を引き千切った。

アイクは立ち上がり肩をグルグルと回し、自分の身体にどこか異常がないか確かめている。

「ここから逃げるぞベル。いつまでもここに燻っていると、さっきのやつが戻って——」
キイト扉が開く音が聞こえ、反射的に背中の中の剣の柄に手をかけ扉の方を睨みつけるアイク。ベルも黒いナイフを抜こうと腕のプロテクターに手をやるが、ナイフは無かつたらしくいつでも魔法を発動できるように腕を扉の方へと掲げる。

しかし入って来たのはフリユネではなく金色の髪狐人の少女だった。手には鍵をジャラジャラとぶら下げていた。

「クラネルさん、大丈夫……そうですね」

「は、春姫さん？」

「はい、実は私フリユネさんがここに来るのを見かけたことがあって。フリユネさんからは誰にも話すなど口止めされていたのですが……」

「話は後だ、ここから脱出するぞ」

「えっと、貴方は……？」

「それも後でいいか？あいつが戻ってくると少々面倒なことになる」

そして部屋にいた三人は辺りを警戒しながら部屋を後にする。のちにフリユネが部屋に戻ってきた際に大声を上げたことは言うまでもない。

* * * * *

外に出るための道をアイクを先頭に三人は歩いていった。時折アイクが春姫に道を尋ねながら、周囲の警戒を怠らずに歩みを進めていた。

「あの、春姫さん……」

「何ですか、クラネル様？」

「本当によかったんですか？僕たちが逃げるための手助けなんてして。本来あの人がいなければ手錠の鍵だって春姫さんが解錠してくれたのでしょうか？」

「まあそのつもりでしたが……あれだけの『ミスリル』製の鎖を引き千切るなんて、あの

人は一体何者なのでしょう？」

「あ、あはは……」

アイクは春姫からの尋ねに対して自分の名前を名乗らなかった。名前を名乗るだけならすぐに済むことなのだが、教えていないということは教えたくないということなのだろうとベルは解釈した。

実際は今までの流れ的に騒ぎになって時間の無駄になることが分かっているからなのだが。

「それにこれは私の最後の我儘です。アイシャさんたちも大目に見てくれるはずですよ」

春姫は傍げに微笑みながらベルにそう伝える。アイシャと言うのは春姫が『イシユタル・ファミリア』に来てから身の回りの世話をしていた者だ。

「……春姫さん、僕と初めて会った時のことを覚えていますか？」

「クラネル様と初めて会った時のことですか……？はい、英雄譚が大好きだという話、あの時はとても楽しかったですから」

「その時院僕たちが一番好きだった物語が何かと言うのも覚えていますよね？」

「勿論でございます、『暁の女神』。蒼炎の勇者アイク様が世界を救うお話、あのお話は何度も聞いて、読んで、覚えていきます……」

「春姫さん、僕は貴女を『身請け』しようと思っていたんです」

「っ!？」

「でも、僕よりもあなたを助けるのに相応しい方がいるって言ったら、あなたはどうしますか？」

「それって、どういう——」

春姫の返答を待たずに前を歩いているアイクに小走りで近付くベル。アイクの耳元で口元を隠しながらぼそぼそと話している。ベルが話し終えるとアイクは少し逡巡するものの指を五本立てて首を縦に振った。

ベルはぎこちなく首を縦に振ると春姫の方へと歩み寄って来た。前を歩いているアイクも足を止め、後ろを振り返っている。

春姫はベルと青年の一連の流れに疑問しか覚えていない。

「春姫さん、あの方があなたを必ず救ってくれます」

「えっと……クラネル様？」

「あなた、いくつか聞いていいか？」

突然アイクに話しかけられた春姫はビクッ!としながらもその問いに答える。

「は、はい……何でしょうか？」

「あなたはここから逃げたいか？」

「……どういう意味でしょうか？」

『イシュタル・ファミア』の言いなりとして、あんたはずっと娼婦をし続けたいのか？ それとも、誰かにここから連れ去ってほしいのか？」

「……私はどつちにしろ今日までの命です。満月の夜、今夜、私の魂は……」

突然の告白にベルは目を見開く。悠長なことをしている場合ではないと悟ったのだ。

「本当に、それでいいのか？ あんたは自分が死ねばすべて丸く収まるとでも思っているのか？」

だがアイクは眉一つ動かさず、問答を続けている。

「俺は『イシュタル・ファミア』が何をしたいのかは知らないし、あんたの魔法だからキルだかも全く知らない。あんたの命が今日までということもたつた今知った。それを踏まえてもう一度聞く。俺があんたを助けられるとしたら、あんたは俺に助けを求めるか」

——生き続けたいか、今日でその命を散らしたいか、好きな方を選べ、と。

春姫は思わず目を見開く。目の前にいる青年が何者なのかは知らないが、初めて会った自分を、卑しい自分を、自分がそう望めば助けしてくれるかもしれないというのだ。

「……生きたい……私はまだ、生きたいです……」

「……」

「こんな私でも、卑しい私を助けて下さるんですか……？」

「お前が、心からそう望むのならば手を貸そう。幸い報酬は既に目処が着いているからな」

そう言つてアイクはベルに視線を向ける。ベルは少々苦笑いしているがつまりはそういうことなのだろう。

「……お願いします……！私を、春姫を、助けて下さい！」

「その依頼、承ろう。あんた、名前は？」

「春姫……サンジヨウノ・春姫と申します」

「俺はアイク。あんたらが『蒼炎の勇者』だ何だと持て囃しているお伽噺の主人公、なんだろう？」

最後の一言はベルに向けて放たれた一言だ。ベルは自信を持つて頷く。春姫はあり得ない邂逅に口を押え、目を見開き、驚きを隠せずにした。

第三十六話

「ここは『フレイヤ・ファミリア』の本拠『戦いの野』。現在フレイヤはそこにいた。

「フレイヤ様、『イシユタル・ファミリア』に動きがありました」

「詳細は？」

「歓楽街のホーム周辺に娼婦たちがいつになく動き回っている模様です」

「監視は、アレン達だったかしら？」

「はい。オツタル様がダイダロス通り側から監視の指揮を、アレン様やグレーール様たちが歓楽街に潜入しています」

「ええ、分かったわ」

「それともう一つ、ダイダロス通りに白髪の少年と青髪の青年を担いだ『男殺し』を見かけたとの情報が——」

「へえ……」

報告の途中でフレイヤの目がすつと細められ、その迫力に報告をしていた少女は身じろぎする。

「いけないわ、それはいけないわね……『彼』ならば自力でなんともなるでしょうが、『あの子』にはまだ早いわ」

そして俯き肩を震わしながら大きな笑い声をあげ天井を見やる。そして少女の方を向き、微笑みながら命令を下す。

『イシュタル・ファミリア』を潰すわ。私のお気に入りに手を出すとどうなるか、しっかりと分からせてあげる必要がある様ね……」

「は、はい……」

「それと今回は私も出るわ。『イシュタル・ファミリア』の本拠を監視している子たちも全員、歓楽街に集まるように指示して頂戴」

「り、了解致しました！」

急ぎ部屋を出て行く少女。そしてフレイヤは窓の外に見える満月と、次いで歓楽街のある方向を不気味に微笑みながら睨みつけた。

* * * * *

アイクたちは現在外に出る為に歩き続けている。その場に止まって事情を聞いてみると、確実にフリーユネに追いつかれてしまう危険性があるため、少しでも早く外に出る必要があるためだ。

「それで、お前が今日このまま何もしないと死ぬのには、何か訳があるのだろう。話して

くれるか？」

「は、はははは、はひー！」

目の前にいることがあり得ない、物語の中の勇者であるという事実には春姫はすっかりと委縮してしまっている。

流石に嘘だろうとベルの方を見たが、アイクの最後の一言に自信を持って頷いているところを見たら、彼が嘘を付いていないということが分かってしまった。

このままその様子を眺めているのも面白いのかもしれないが、今は一刻を争う時だ。春姫の命の為、そしてこのままその場に止まっていればフリユネに見つかるのも時間の問題だということとは、想像に難くないだろう。

「少し落ち着け、取って食おうなんてしてないだろう」

「は、はい、すすすいません！」

アイクは頭を押さえ溜息を付いてしまう。最近自分の名前の影響力をようやく分かってきたアイクだ。だから逃げるとき名前を言ったら大なり小なり慌てふためくことも想像に難くなかった。

だから部屋を出るとき名前を尋ねられても、あえて何も答えずに部屋を出て来た。

今までの神たちのように怖がられているわけでも遊ばれているわけでもない。ただ驚いているだけだというから余計に何もできずにいる。何か行動を起こしたところで

逆効果だからだ。

自分で聞きだすことを諦めたアイクはベルの方を見やり、春姫から事情を聞きだすように視線で指示を出した。

「春姫さん、先ほどのことってどういうことですか？ 今日が自分にとって最後の日って言うのは」

「は、はい……お二方は『殺生石』というものをご存知でしょうか……？」

アイクは首を横に振る。ベルは「名前だけ……」と。

「その殺生石と言うのは狐人専用の道具です。『玉藻の石』というアイテムと『鳥羽の石』という二つの道具を使って生み出される、いわゆる禁忌の道具として用いられています」

『玉藻の石』というのは狐人の遺骨から作られ、狐人の魔法の効力を劇的に跳ね上げる効果がある。

もう一つの『鳥羽の石』というのは別名『月嘆石』、『ルナティックナイト』と呼ばれる石で、月の光を浴びることで色を変え、光を放ち、魔力を帯びる特殊な鉱石だ。

そしてその石は、月の光に応じて硬度、威力、効果を変える。

そしてその石は、満月の夜、最大限に効果を発揮する代物だ。

「そして殺生石は、狐人の、この場合は私の魂を石に封じ込め、私の魔法の効果を増大さ

せる。そして、石に魂を封じられた私は……」

最後の一言は発さずに、胸に組んだ手をやり俯いてしまう。ベルはどうしていいか分からず、アイクは顎に手をやり、どうすれば春姫を救えるか考える。

そしてとてもシンプルな答えを導き出した。

「今日中にその『殺生石』とやらを破壊する。それだけじゃ駄目なのか?」

「恐らくは……前回はアイシャさんが殺生石を壊したのですが……あれからまたどこからイシユタル様は殺生石を入手してきましたから」

「そもそも『イシユタル・ファミリア』はお前の魔法を使って何がしたいんだ? お前の魔法の能力は何だ?」

「わ、私の魔法は、任意の方を一人に限ってレベルを一つ上昇させます。勿論一時的にですが……その力を殺生石に封じ込め効力を上げることによって、恐らくは複数人、或いはレベルの二段階上昇を出来ると目論んでいるのでしよう」

春姫の魔法の効果にベルは驚きを隠せない。レベルの一時的な上昇、そんな魔法が本当に存在するのかという疑惑の念が湧いてきてしまう。ここで春姫が嘘を付くメリツトが何一つないと分かっただけだ。

だがアイクはレベルという概念をいまいち理解できていない。レベルが一つ違う相手にはほぼ確実に勝てないと言われているが、ワユには元から負けたことはないし、こ

の世界の戦士、或いは冒険者はほぼ確実にテリウスで戦った戦士よりも実力が劣る。

それに今までにベルが自分よりもレベルが高い相手を撃破してきていることから、本当にレベルというのが関係あるのかどうかという疑念が、頭の中を渦巻いている。

彼らが頭の中を整理している間も、春姫の説明は続いていた。

「そしてイシユタル様の目的は、『フレイヤ・ファミリア』を、もしくはフレイヤ様に一泡吹かせることだと仰っていました」

フレイヤという名前が出てきた瞬間、アイクは眉を顰める。特段何があつたというわけではないが、初対面の印象はあまりよくないのだ。

「ど、どうかしましたか、アイク様？何か不愉快なことが……？」

「いや、何でもない。続けてくれ」

「は、はい……イシユタル様の目的は褒められたものではありませんが、イシユタル様はその目的を達成しようとするのなら、どうしても今の『イシユタル・ファミリア』、いえ、『イシユタル・ファミリア』に限らず、この都市のどのファミリアに所属している冒険者にも、彼は倒せないでしょう。『猛者』オツタル」

出てきた名前に本格的に頭を抱えなくなってきた。アイクがもしこのまま春姫を助けたとして、その助ける方法が『アイクが殺生石を破壊する』だと、イシユタル、ひいては『イシユタル・ファミリア』の眷属に目を付けられ、『フレイヤ・ファミリア』に対

する意趣返しに使われるかもしれない。

最も、アイクがそれを拒否して『イシユタル・ファミリア』を潰してもいいのだが、これを行えば確実に『ロキ・ファミリア』に多大な迷惑をかけてしまう。

「だ、大丈夫ですかアイク様……？先ほどから御様子……」

「いや、本当になんでもないんだ。ただフレイヤという名前とオツタルという名前が出てきてただろ。もしこのまま俺が殺生石を破壊した後のことの最悪な展開を考えると
な……」

「アイクさん、その……事情を聞いてもいいですか？」

「言っておくが、お前も全くの無関係じゃないんだぞ？」

「……へ？」

「お前がレベルアップするときと戦った時のミノタウロス、覚えているか？」

「ええ、勿論です……」

「あの時お前たちと一緒にいた小さい奴が俺たちに助けを求めて来たんだが、お前の元に向かう途中にオツタルの妨害が入ってな」

「……」

「それだけじゃなくて怪物祭の時、その時もオツタルと戦わされて、そのあとフレイヤに勧誘された。御丁寧に『魅了』までしてきてな」

「二回も『猛者』と戦っているなんて……」

「あの、つかぬ事をお伺いしますが……その戦いの結果は？」

「二回とも俺があいつを倒している」

「……………」

春姫とベルはその事実には絶句してしまふ。さらに『魅了』をされておきながら何事も無かつたかのようにしているアイクを信じられないようなものを見る目で見ている。

「ベル、お前に『殺生石』の破壊頼んでいいか？」

「え？それってどういうことですか？」

「俺が直接出向いて破壊してもいいんだが、その間に『イシユタル・ファミリア』の誰かに春姫が捕まっても駄目だ。『イシユタル・ファミリア』はレベルがほとんど2か3なのだろう？」

「はい、それに加えてアイシャさんはレベル4、フリユネさんはレベル5です」

「だとすると、お前たちの所で『イシユタル・ファミリア』のやつの相手をする事ができるのはワユだけだ。そのワユは今どこにいるのかわからないからな。だったら俺が『イシユタル・ファミリア』の面々を相手取っている間にお前が『殺生石』を破壊しろ」

「え、アイクさん一人で全員相手するんですか!？」

「そんな、無茶です！いくらアイク様でも、全員相手取るのは——」

「春姫は俺が守ろう。お前は『殺生石』の破壊に専念すればいい」

作戦らしい作戦は思いつかないが、これが一番確実なのだろう。アイクは本気でそう思っているし、今『ヘステイア・ファミリア』の面々がどこにいるか分からない以上、今回の戦闘員は最悪アイクとベルだけなのだ。

そうこうしているうちに出口思わしき扉を見つけ、アイクは春姫に確認を取ってその扉を開ける。

「……あれ？大将？」 「アイク殿、ベル殿……春姫殿も、よくぞご無事で……！」

第三十七話

命とワユはダンジョンで気を失った後、『イシュタル・ファミア』の眷属によって捕えられてしまった。命は身じろぎをした際の鎖の音を聞き、意識を暗闇から浮上させていく。

「……は……まさか私はダンジョンで捕えられて——ッ！」

立ち上がろうとして、後ろ手に繋がれている鎖に引っ張られてしまいうまく立ち上がれなかった。

何が自分を引っ張ったか確認するために、動き辛い身体を無理やり動かして後ろを振り返る。すると後ろにはいまだに目を覚まさないワユが繋がっていた。

「ワユ殿……ワユ殿！起きて下さい！」

後ろ手に繋がれた腕を動かし、ガチャガチャと鎖がけたたましく音を鳴らす。ワユも何か異常を感じ、ゆっくりと目を見開いた。

「……あれ、どこどこ……？」

「目覚めましたか、ワユ殿」

「み、こと……？あれ、どこどこ？あたし確かダンジョンで……」

「とりあえずここから出ることに専念しましょう。ワユ殿、後ろ手に繋がれてる鎖、ワユ殿ならば何とかできませんか？」

ワユと命と一緒に繋がれている鎖は『ミスリル』製でもなければ、幾重にも巻かれていない。

ワユのレベル7の力を使えば問題なく引き千切れる範疇だ。

ワユが繋がれている腕に力を込めると、鎖は千切られ二人は立ち上がり自分の体のどこかに異常がないかを確かめる。

「ワユ殿、とりあえずここから脱出しましょう。ヴェルフ殿やリリ殿、ベル殿も心配ですが」

「うん、分かった」

「それと恐れながら、自分現在武器を持っていないのでもし先頭になった場合はお任せしてしまうことになりましたが……」

「大丈夫、それよりも急ぐよう」

ワユは出口の数センチ開き、隙間から辺りを見回す。近くに人影は見当たらないためそのまま扉を開き外に出る。

「命、確か命のスキルって味方がどこにいるか分かるスキルあったよね？」

「はい、同じ『恩恵』を刻まれているという条件付きですが」

「それを常時発動してもらっていい？ 大将……は『ロキ・ファミリア』か……ベルカリリ
かヴェルフの誰かが反応に引つ掛かったらすぐに知らせて」

首を縦に振り、命は意識を集中させる。周りの知覚することに集中している命の足を
歩き、辺りの気配を探りながらゆっくりと進んでいくワユと命。

突き当りを曲がろうとした所で廊下の光に人影が写り、命に向けて手で止まるように
制する。その人影がいなくなるまで息をひそめ、やがていなくなつたところで再び歩き
出す。

「――！ ワユ殿、あちらの方からベル殿の反応が、向かいますか？」

「うん、案内して」

命と並びながら歩き、命が止まつた部屋の扉を押す。しかし鍵が掛かっているのか開
く気配はない。命を下がらせエタルドを抜いて扉に向けて一閃、扉を破壊して中に侵入
する。

「これは……ベル殿のナイフ……？ それとワユ殿の刀ですか？」

「……うん、これはあたしの倭刀だ。エタルドは回収できなかつたみたいだけど、あたし
の方もこの剣を使えないでも思つたのかな？」

「とりあえずこの武器は回収しておきましょう。それとこの部屋にある回復薬もいくつ
か強奪していきましょう。この先何があるか分かりませんから」

そう言いながら命は柵に置いてあつた回復薬などを持てるだけ強奪していく。その様子はまるでこそ泥そのものだった。

そしてその一室にあつた一冊の本を手に取り、命はおもむろに本を開いた。

そしてそのまま読み進めていくと、命の表情は驚愕と怒気に包まれていった。

『殺生石』……これが春姫殿を捕えていた理由か……!』

「命?」

「あ、すいませんワユ殿。急いでここから出ましょう」

「結局ここがどこかは分からないままだったね」

「いえ、恐らくは『イシユタル・ファミリア』の拠点の一つかと。ダンジョンで『怪物進呈』してきた冒険者は『イシユタル・ファミリア』の者でした。そしてそのあと違うファミリアの誰かが私たちを拘束する理由は有りませんから」

「ふーん……まあいいや。とりあえずここから出よう。一旦ホームに戻るか、『イシユタル・ファミリア』の拠点の一つだつていうんなら、恐らく歓楽街のどこかに誰かが捕えられてるはずだから、回収していこう」

命は首を縦に振り、部屋を後にする。屋内を適当に歩いていると、出口だと思わしき扉を発見し、そこを開けるとやはり歓楽街だった。

「命、スキルの発動できそう?」

「問題ありません、同じファミリアの者の探索に入りましょう」

命がスキルを発動するが早いのか、早速命のスキルに反応があったようだ。

「ワユ殿、あちらの方に誰かの反応がありました。少々遠いので誰かまでは判別できませんが」

「了解、じゃあ反応があったほうに向かおうか」

再びワユと命は歩き出す。夕方とあって人影はまだまばらだが、今まで捕えられていた事実を知っているものにあつたら即捕縛できるように心がけながら行動をする。

やがて命の反応が鋭敏になって来たとき、命が足を止めた。扉の方に視線を向けるとガチャリと扉が開いた。

そして中から出てきたのは青い髪をした青年、白い髪をした少年、金髪の狐人だった。

* * * * *

「……あれ？大将？」 「アイク殿、ベル殿！……春姫殿も、よくぞご無事で……！」

フリユネの巣窟から外に出ると、偶然ワユと命と合流できた。命は春姫の方へと駆け寄り何やら話している。

アイクとベルはワユに向き、これまでに何があつたか聞きだしている。

「大将今までどこにいたのさ？ ついでにベルも」

「つ、次いでつて……」

「お前こそどうしていた？ダンジョンではお前も眠らされたはずだが？」

「んー、なんか命と一緒にあつちの方の娼館？つてところの一室に閉じ込められてたんだけど、命と一緒に脱出してきたんだ。あ、そうだ！ベルの武器、なんか没収されてたから回収してたよ、命が」

「ワユ、お前は『殺生石』つてやつを知ってるか？」

「せつしようせき……？そう言えば命がさつきなんか言つてた気が……」

命の方を振り返り、アイクは命に問う。

「命、『殺生石』を知っているか？」

「アイク殿？ええ、ついさつき娼婦の館でその文献を読みました」

「『イシユタル・ファミリア』の目的も分かっているな？」

「ええ、勿論です。彼女たちの目的は、私が何をしてでも阻みます」

拳を握り、高らかと宣言する命。その命の宣言を聞いて、アイクは再びワユの方へと振り返る。

「ワユ、仕事だ」

アイクの一言に、目をぱちくりとさせた後ににやりと微笑む。アイクからしたら見慣れた光景でしかない。

「傭兵として？」

「そうだ」

「内容は？」

「そこにいる狐人の保護、護衛、及び救出。『殺生石』を破壊して『イシユタル・ファミリア』の目的をここで潰す」

「あたしは何をしたらいいの？」

ワユに指示を出す前に確認しておくことがあるため、命と春姫の方を振り返り彼女らに問う。

「命、殺生石がどんなものか分かっているか？」

「え、ええ。『殺生石』に狐人の魂を封じ込めるのは満月の夜、とある儀式をする必要があります」

「春姫、儀式をやる場所は『イシユタル・ファミリア』の本拠で良いのか？」

「は、はい」

「狐人の面倒は俺が見よう。お前はベルと命と共に『イシユタル・ファミリア』の本拠に乗り込んで『イシユタル・ファミリア』の眷属の足止めだ。それと、『イシユタル・ファミリア』の眷属は生かしておけ。抗争の種は少ないほうがいいだろう」

ベルと命の方にも振り返り、団員に命令を出すときと同じようにアイクは二人に指示を出す。

「ベルと命も『イシユタル・ファミア』の本拠に乗り込んで二人で何とかして『殺生石』を破壊して来い。細かい判断はその場で各自が行え、どうやら悠長にしている場合にはなさそうだ」

「春姫ええええー!!!」

カエルの鳴き声のような不愉快な絶叫が響き渡る。大斧を担いだアマゾネスがこちらに向けて走ってくる。

「行くぞ、『グレイル傭兵団』出動だ！」

ワユが命とベルを引き連れその場を後にし、アイクが春姫を庇う様にラグネルを抜きながら前へ立つ。

「フ、フリユネさん……」

「春姫え！お前え、よくもアタイの獲物を逃してくれたねえ!」

「す、すいません……」

フリユネに委縮してしまっている春姫、その前に立っているアイクはフリユネに向けてラグネルの切っ先を向ける。

「どきなあ！貧弱なガキに用はないよお！」

「試してみるか？」

「………何い？」

「言っておくが、お前に春姫の魔法が追加されたとしても、お前は俺には勝てん」

「へえ……言うじやないかあ、貧弱なガキが」

「春姫」

「は、はいいい！」

「しっかり捕まっておけ」

「な、何を……ひゃあ！」

後ろにかばっていた春姫を肩に担ぎ、フリユネに相對するアイク。フリユネはそんなアイクを見てさも不愉快そうに眉を顰める。

「ガキ一人背負いながらアタイに勝とうってか？アタイも嘗められたものだねえ……！」

「庇いながら戦うよりも、一緒に戦った方が守りやすい。それだけだ。春姫、お前は何もしなくてもいい、お前はただ俺にしっかり捕まってる」

「は、はひい……」

「何だい春姫え、そんな貧弱なガキに絆されたのかい？」

「御託は要らん、来るなら来い」

「……少し教育してやる必要が、あるようだねえ！」

その言葉を切つ掛けに、フリユネは担いでいた大斧を振りかぶり、全力でアイクに向

けて振り下ろした。

* * * * *

ワユと命とベルは現在『イシュタル・ファミリア』の本拠へと向かっていた。命は何か気になることがあるのか、一緒に走っているワユに向けて疑問に思っていたことを問う。

「ワユ殿、一つ聞きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「うん？ どうしたの？」

「アイク殿の腕を疑うわけではないのですが、春姫殿を守りながらあの『男殺し』に勝てるのでしょうか？ いくらアイク殿でも、一人担ぎながら戦うことはかなりの負担になると思うのですが……」

「命、ついでにベルも。あたしと大将の戦績って知ってる？」

「いいえ、存じておりません」「僕も分かりません……」

「今までに確実に100回以上大将と戦ってる、でもあたしが大将に勝ったことは一回も無いんだ」

「……………」

「あのカエルみたいな人がどれくらい強いかは知らないけど、一人背負ってるくらいじゃハンデにもならないんじゃないかな」

話しながらも移動を続ける。そして彼女らは『イシユタル・ファミリア』の本拠へと到着した。

「生まれ！貴様等、何者だ？」

「ねえ命、ここって普段門番なんて配置してるの？」

「いえ、基本的に『イシユタル・ファミリア』の本拠は男の冒険者が連れていかれることが多いので、門番は基本的に居ない筈ですが」

「つてことはやっぱり今日なんか重要なことが有るつて言ってるようなものか……」

ワユは腰に差している刀、『倭刀』を抜いて門番に向けて剣を向ける。

「生まれ、痛い目を見たくなければ来た道を大人しく引き——」

最後まで言わずにワユは倭刀の峰で門番を一人気絶させる。もう一人の門番が付きだしてきた槍を身を翻して躲し、再び峰打ち。二人の門番を気絶させた。

二人の門番を気絶させたワユは本拠の扉に手をかけ扉を押すが、扉は開かない。試しに引いてみるがそれでも開かない。

鍵がかかっていることを確認し、倭刀を腰に差し直しエタルドを抜くと扉に向けて一閃。木製の扉は木っ端みじんになった。

「二人とも、準備は良い？」

ベルはナイフを構え、命は刀を抜いて戦闘態勢は整えられている。二人が首を縦に振

り、三人は『イシユタル・ファミリー』の本拠へと乗り込んだ。

第三十八話

『イシュタル・ファミリア』の本拠へと乗り込んだワユ、命、ベルの三人。臨戦態勢を解かないまま本拠を歩き続けるが、いまだに誰とも交戦を起こしていない。

儀式が行われるという場所に戦力を集中させているか、歓楽街全体に戦闘員を展開させ他の妨害を警戒しているか、あるいはその両方かだ。

「命、ベル。これって不自然過ぎじゃない？」

「ええ、ここまで誰とも会わないとなると逆に不安になります」

『イシュタル・ファミリア』の規模ってそれなりの大きさですよ？これだけの大きさの町一つを牛耳っているわけですよ……」

「あたしたちを警戒するに値していないか、或いはあたしたちがまだ捕まっていると思っているか……」

『イシュタル・ファミリア』はこの間の『戦争遊戯』を見なかったのでしょうか？見ていたなら少なくともワユ殿は警戒の対象になるでしょうし……」

「アイクさんの存在ってオラリオに広まっていますよね？知っている人たちは所属ファミリアと僕たちだけ、ですよ？」

「誰も吹聴していなければ。アイク殿とベル殿は同時に捕えられていましたし、『ミスリル』製の鎖を幾重にも巻かれ碌に行動できない状態にされていたのですよね？」

「はい、アイクさんが引き千切りしましたが……」

「いや、それでもおかしい……儀式の現場に春姫がいないのにどうやって儀式をするの？春姫があたしたちを救出しに来たこと、というよりも抜け出したことは流石に知られてるでしょ？あのデカブツがその手の報告を怠っていたとしても」

三人は話し合いながらも本拠を進んでいく。少しづつ歓楽街が喧噪に包まれていく気配も感じているが、今は目先のことに集中するしかない。

上へと上がっていく階段を見つけては登って行き、やがて最上階の空中庭園へと到着する。そこには一つの『石』を奉られており、それを守護するかのようアマゾネスたちが取り囲んでいた。

「おや、お客人かい？悪いけど、今は営業時間外なんだ。回れ右して今日は帰ってくれないかい？」

アマゾネスとは別の、褐色肌の女性がワユたちを見据え言い放つ。ワユはその発言を聞き流し『倭刀』を抜いてアマゾネスたちの方へと切っ先を向ける。

「ねえお姉さんたち、そこにある石が『殺生石』ってやつ？」

「へえ……嬢ちゃん、この石を知っているのかい？と言うか門番はどうしたんだい？」

「今頃下で伸びているか、あたしたちの侵入を許したっていう報告をしに向かっているかじゃない？で、お姉さんは誰？」

「私はイシユタル。この歓楽街を取り仕切ってる『イシユタル・ファミリア』の主神だよ」「じゃあ話が早いや。イシユタル、その『殺生石』こっちに渡してくれない？お宅の狐人、うちの大将が今預かっているからその石だけあつても意味ないしね」

ワユが発した一言に、イシユタルはその美貌を歪ませる。だがあくまでも冷静を装ってワユとの対話を行う。

「へえ……うちの春姫を、ねえ」

「なら話が早い、こちらに春姫を渡せ。あの子は今どこにいる？」

「そう言うわけにはいかないんだ。あたしたちの今回の仕事は『殺生石』の破壊、それとそれを妨害してきた『イシユタル・ファミリア』の眷属の足止め、撃退だ」

ワユの後ろに控えていたベルと命がそれぞれ武器を構えている。アマゾネスたちもワユの言葉を切っ掛けに臨戦態勢へと移る。

「あんな低級の睡眠薬で眠らされたあんたが私たちの足止め、撃退……あつはつはつはつ！とんだ道化もいたもんだ」

「……ベル、命、準備は良い？あたしがあそこにいるアマゾネスたちを相手する。二人で『殺生石』を破壊、即離脱。分かった？」

後ろを軽く振り返りベルと命が頷いたことを確認した。それを確認するや否や、ワユは刀を構えアマゾネスの一団に突貫した。

先頭に立っていたアマゾネスが突貫してきたワユに向けて刀を振り下ろす。ワユは腰に差していたもう一本の剣、エタルドでその刀を受け止め、その衝撃にアマゾネスの持っていた刀は粉々に砕け散る。

「何っ!?!お前たち、こいつを何としても取り押さえろ! 『殺生石』に近づけさせるな!」
「分かりました、アイシャさん!」

アイシャの指示により、イシユタルの傍に仕えていたアマゾネスたちもワユへと群がり、各々が武器を構えワユへと振り下ろす。

ワユは二本の剣でその攻撃を受け止め、躲し、後退する。踵を返し、来た道を少しずつ振り返りながら戻っていく。

アイシャを含めたアマゾネスたちはワユを追いかけ、イシユタルの傍には二人のアマゾネスが控えている。

「あなた方はワユ殿を追わないのですか?」

「なんだ、追いかけてほしいのか?」

「ええ、あの方が全員相手してくれれば、『殺生石』の破壊は簡単に済みますから」

「神イシユタル、なぜあなたは春姫さんをその石に閉じ込めようとするんですか?」

「教えるとも思っているのかい?」

「いいえ、でもある程度の予想ならば着きますが。例えば、『神プレイヤーへの復習、報復』とかでしょうか?」

イシユタルに挑発的な視線を向ける命、命が出した答えにイシユタルの表情は驚愕に染まる。それでは答えを言っているようなものだ。

「鎌をかけたつもりでしたが、予想よりも早く真相に辿りついてしまったようですね……そんなことのために春姫殿を利用しようだなんて、絶対に許しません!」

「行きなお前たち、あの生意気なガキと小娘を叩きのめしてやりな!」

その言葉を切っ掛けに、イシユタルの傍に控えていた二人のアマゾネスがベルと命に肉薄してくる。その隙にイシユタルはテラスから抜け出してしまった。

「待て、神イシユタル!」

「よそ見している場合?」

「ッ——!」

一人のアマゾネスが命に向けて曲刀を振り回す、命は己の刀でそれを受け止め懐に忍ばせていた短剣を抜き、空いた手で振りぬく。咄嗟に刀を引きバックステップで距離を取るアマゾネス。

するとベルと戦っていたアマゾネスの方が手甲を装着した拳で短剣を振りぬいた命

の懐目がけて拳を振るう。回避できずに命は地面を転がされた。思わぬ衝撃に命は咳き込む。

「命さん!!」

「だ、大丈夫です……!」

二人のアマゾネスが倒れこんでいる命に向かって突貫する。慌てて命とアマゾネスの間に入り、右手に持ったナイフで手甲が付けられた拳を、開いた左手で命の刀を取りその攻撃も受け止める。刀を引き、急に惹かれて前のめりに倒れてくるアマゾネスに足刀を繰り出す。受け身を取りながら転がり四つ這いになりながら地面を引き摺り急停止する。

片方のアマゾネスが吹き飛ばされ、もう片方は吹き飛ばされたアマゾネスの所まで下がる。

「助かりました、ベル殿……」

「いえ、それよりも、どうしますか……? 刀を持っている方はレベル2だとしても、手甲持ちの方は恐らくレベル3です」

「……無茶なお願いをしてよろしいですか、ベル殿?」

「何ですか……?」

「私が『殺生石』を破壊します。その時間を稼いで欲しいのです……二人を相手取って私

を二人の意識から逸らして下さいますか……? 合図をしたらテラスから飛び降りて下さい、その刀はお貸しします」

「……分かりました、無茶はしないでくださいね?」

「……それは、聞きかねるかもしれませんがね」

ベルが二人のアマゾネスに突貫する。ただしベルの方からは攻撃を仕掛けず、相手の攻撃を捌くことに集中している。

「掛けまくも、畏き——」

命は自分の身体を抱きながら魔法の詠唱を開始する。それに気が付いた片方のアマゾネスが命の魔法の詠唱を止めようとするが、ベルが間に入り命への接近を許さない。

「いかなるものも打ち破る、我が武神よ——」

刀を持ったアマゾネスが命に向けて刀を投擲する。咄嗟にベルもその刀目掛けて命の刀を投擲、見事命中させその刀を弾き、空いた左手で手ぶらのアマゾネスを殴りつける。

「尊き天よりの導きよ、卑小のこの身に巍然たる御身の神力を——!」

その一言を切っ掛けに、今まで練り上げてきた魔力を暴走させる。魔法を放つには多大な精神の集中が必要だ。そして集中を欠いた、或いは意図的に暴走した魔力はその場で大爆発を起こす。

ヴェルフの『ウィル・オ・ウィスプ』は意図的に相手の練り上げた魔力を暴走させる魔法で、その効果は相手の魔力暴発を引き起こし、爆発を起こしてダメージを与えること。

つまり命はこの場で魔力暴発を引き起こし、その爆発でアマゾネス両名を戦闘不能及び『殺生石』の破壊を目論んでいるということだ。

「命さん！」

「ベル殿！早くこの場から離脱を……！」

命の方を案じたベルを一括し、伝えた通りベルにその場から離脱することを伝えさせる。ベルは躊躇しながらも空中庭園から地上へと飛び降りた。かなりの高さがあるが、『神の恩恵』を貰っている冒険者ならば問題ない。

ベルを相手取っていたアマゾネスたちが命の方へと走ってくるが、もう遅い。

「【救え、浄化の光】！」

その言葉を最後に、魔力暴発を引き起こし空中庭園で大きな爆炎が上がる。その爆発にアマゾネスの二人は吹き飛ばされ、『殺生石』は粉々に砕け、その爆発に命諸共吹き飛ばされてしまい、命の身体は宙を舞っていた。

『殺生石』へと蓄えられていたエネルギーは紅き光の残滓となって空高く放たれた。

そして命が意識を失う直前、歓楽街から爆音が響く音を聞いた気がした。

* * * * *

命とベルが『殺生石』を破壊するための戦いをしていたところ、アイクはフリユネと戦っていた。アイクはフリユネの攻撃を受け止め、いなし、躲し、アイクからは一切の反撃をしていない。

「どうしたんだい？反撃してこないのかい？」

斧を振り回しながら、アイクが反撃をしてこないことを訝しんでいるフリユネはアイクに向けて問いかけた。アイクとしてはここでフリユネを倒す理由はないため、ベルたちが『殺生石』を破壊し終えるまでここでフリユネの足止めができれば充分だと判断していた。

「ここでお前を倒す理由はない、潔く春姫を諦めるというのならばここでお前を見逃してやってもいい」

「ハッ！アタイに傷一つ付けられないが気が大きく出たね！」

「お前こそ俺に一撃も与えられないで随分と大口をたたくんだな。俺は人一人背負いながら戦っているにも拘らず、だ」

「あんまり調子に乗ってるんじゃないよ、クソガキイ！」

フリユネは再び斧を振り下ろす、しかし狙いはアイクではなく左肩に背負っている春姫だ。アイクは春姫の前にラグネルを掲げ斧を受け止める。片手を剣で、もう片方は春

姫を担いでいるアイクに向けてフリユネは瞬時に斧を引き体制を変え、回し蹴りを放つ。

アイクも瞬時に剣を引き、剣を掲げながら右腕でフリユネの回し蹴りを受け止め、カウンターで回し蹴りを放つ。

フリユネはそこで反撃をされるとは思わずに脇腹にアイクの回し蹴りが直撃する。全力で放つてはいないとはいえ、フリユネはその場に何とか踏ん張り一転して攻性に移ろうとする。

しかしアイクは体術を放ったところでフリユネから大きく距離を取り、フリユネの様子を窺っていた。

突然、天に赤い光が上っていくのが見えた。方角は『イシユタル・ファミリア』の本拠の方だ。

「春姫、無事か？」

「……へ、あ、は、はい……何とか」

「あの光は何だか分かるか？」

「あれは、恐らくベル様たちが『殺生石』を破壊したものだと思われます。前回アイシャさんが『殺生石』を破壊した際にも同様の光が上がっていました」

「なるほど、これで依頼は殆ど完了だな。後は『イシユタル・ファミリア』の目的を潰せ

第三十九話

『イシユタル・ファミアリア』の本拠、そこではワユと多数の『イシユタル・ファミアリア』の眷属による戦いが行われていた。

ただし、『イシユタル・ファミアリア』が多数の意識不明者を出しているという結果だが。ただし、『ハアハア……あんた一体何者だい？この前の『戦争遊戯』を見たときは一人で『アポロン・ファミアリア』の眷属を多数殺してはいたが、私たちはあのファミアリアよりもレベルは高い……それなのにここまで一方的だなんて……」

「うちの大将一人の方がよっぽどここにいる全員よりも強い、あたしは大将に勝ったことが無いけど、あんたたちに負けてるようじゃ絶対大将には勝てないからね」

「……ベル・クラネルかい？」

「いいや、あれはまだまだこれから。それとは別」

空中庭園へと続く渡り廊下で戦っていたワユたち、空中庭園で爆発が起こったかと思うと、天に昇る赤い光が見えた。

それを見たアイシヤはどこかほっとしたような表情を浮かべた。

「ふう……今回も、失敗か……」

「あれって『殺生石』が破壊でもされたの？」

「ああ、恐らくお前の仲間の誰かがその身を犠牲にしてな」

「へえ、目的が潰えたにしては、随分と晴れやかな表情をしてるね」

「ああ、これでお前たちが春姫を浚ってくれたら満点だ」

「……最初からこれが目的？『殺生石』の傍から離れたのも、多数の眷属をこっちにおびき寄せて『殺生石』の警戒を緩めたのも、春姫を救い出すための手段？」

「……そうだ。あんな下らない事のために、あの子の命が失われるのは忍びない……だが私はイシユタル様には逆らえない。あの神の美しさにすっかり『魅了』されちゃったからね」

「ワユさん！」

唐突にベルの声が渡り廊下に響いた。その声に反応し、後ろを振り返るワユとアイシヤ。

「ベル、お疲れ様……命は？」

「それが……魔力暴発で『殺生石』を破壊したんですけど、それ以降姿が見えなくて——」
「空中庭園から落ちたんじやないかい？魔力暴発の爆風で自分が吹き飛ばされても不思議じゃない」

「貴女は先ほどの……」

「良いからお仲間を追いかけなよ、もう私があんたたちを足止めする理由はないんだ」
「一緒に来る？」

「遠慮しておく」

「そっか。ベル、命を探しに行くよ」

ベルは頷き、二人は空中庭園に向かう。二人は空中庭園をぐるりと見まわすが、命の姿は見えないため、空中庭園から飛び降りた。

空中庭園を飛び降り、着地したところで大柄な男がその場で倒れている女性に何やら液体を振りかけていた。その液体を振りかけられた女性は、その身に浴びた傷をみるみると再生させていった。

「命さん!？」

ベルが倒れていた少女に駆け寄ろうとしたところでワユがそれを制した。そして代わりにワユが大柄な男と命の傍へと近づく。

「久しぶり、えつと……オツタルさん、だっけ？」

「む？お前は、この間の宴の時の……」

「命の治療してくれたの？ありがと」

「ただの気紛れだ、それよりも神イシユタルはどこにいる？」

ワユは下りて来た『イシユタル・ファミリア』の本拠を指さし、オツタルはそれを確

認すると「助かった」と礼を言った。

「ところで、このいざこざを起こしているのは『フレイヤ・ファミリア』なの？」

「ああ、神イシュタルはあの方の逆鱗に触れてしまった。神イシュタルは今日下界から去ることになるだろう」

「あたしの協力は？」

「必要ない、それよりも巻き込まれないためにもここで倒れている奴を持って早くここから離れろ」

「分かったよ、今度こそ戦おうね」

「ふっ……まあいいだろう」

ワユは命を背負い、ベルの方へと歩みを進める。オツタルは対照的に『イシュタル・ファミリア』の本拠の方へと歩みを進める。目を凝らすと、入り口付近にはすでに『フレイヤ・ファミリア』の眷属であろう者たちが次々と集まっていた。

ワユたちは歓楽街の出口の方へと向かって小走りで向かっていた。歓楽街の入口の所には見知った顔がいくつも見える。

「ベル！」「ベル様！ワユ様も！」

そこにいたのはヴェルフ、リリ、他には『タケミカツチ・ファミリア』のものだが、ワユは『タケミカツチ・ファミリア』の者たちとは面識がなかったため、それが誰かかは

分からなかった。

「命！」

大柄な男性と、前髪で顔を隠した少女がワユが背負った命の方へと歩みを進めて来た。

「大丈夫、命は無事。ところでどちら様？」

「ああ、済まない。『タケミカツチ・ファミリア』団長の桜花だ」

「千草です……」

「あたしはワユ。命は大丈夫、治療は住んでるからゆっくり休めばそのうち目を覚ますよ」

ほっとした様子で胸を撫で下ろす千草と桜花。そして彼らはもう一つの気になるとをワユへと尋ねた。

「『殺生石』はどうなったのだ？それと、春姫は……？」

「『殺生石』は命が壊したよ。春姫は、頼りになる護衛が付いてるから心配しなくてもいいよ」

「頼りになる護衛……？」

「放っておけばそのうち帰ってくるんじゃないかな？二人揃って、もしくは春姫一人かも知れないけど」

* * * * *

春姫を背負ったアイクは『イシユタル・ファミリア』の本拠へと到着した。ただし正門から入るのではなく、空中庭園に直接乗り込んだのだが。

辺りを見回すと二人のアマゾネスが座り込んでいた。春姫は渡り廊下の方を見やると、突然走り出しアイクはそれを追いかける。

「アイシャさんー！」

アイシャと呼ばれたアマゾネスは春姫の呼びかけに対して目を見開いた。春姫はそのままアイシャに抱き着き、嗚咽を漏らした。

「ぐすつ……ア、イシャ、さん……ご無事で、良かったです……！」

「春姫、何でここにいるんだい？それとあんたは……」

「あんた、白い髪をした少年とかに心当たりはないか？三人でここに乗り込んで来た筈なんだが」

「あの三人はもうここにはいないよ。もう歓楽街からも出てるんじゃないかい？」

「でしたら、アイシャさんも一緒に逃げましょう？この方がきつと逃がしてくれます」

春姫はアイクの方へと振り返り、懇願するような表情を浮かべる。アイクとしてはどちらでもよいのだが、依頼とあつては報酬によつては受けない理由はない。

「後で金をとるからな」

「ありがとうございます！」

「それよりも、早く歓楽街から逃げたほうがいい。フリユネが追いかけてきているというのもあるが、それよりもここは戦場になるぞ」

「あのヒキガエルが……それよりも戦場になるって？」

「恐らくフレイヤ本人、或いは『フレイヤ・ファミリア』が攻め込んできている。既に各所では小規模とはいえ戦闘が起こっているようだ。逃げるなら急ぐぞ。あんたは動けるのか？」

「……一応、でも飛び降りて無事かどうかは分からないけどね」

それを聞くと、アイクは春姫とアイシャを纏めて方へと担ぎ、空中庭園の方へと駆け出す。そのまま勢いを緩めずに空中庭園を飛び降りた。

肩に担いだ春姫が絶叫しているが、今はそれを気にしている場合ではない。一番手っ取り早く、尚且つ確実に逃げ切る方法なのだから仕方がない。

アイクが地面に着地すると、春姫はゼエゼエと息を吐き、アイシャの方はクスクスと笑っていた。

「何だ！春姫、男に触れられて気絶しないとは成長したじゃないか？」

アイシャから茶化されるが、顔を真っ赤にしてあたふたとしながらも、春姫は毅然と答える。

「い、いえ、その……この御方は安心できるといふか……」

二人が話しているのもお構いなしに、アイクは二人を下ろし、歓楽街の出口の方へと歩き出す。振り返り、着いてこないのかどうかを確認する。

アイシャと春姫は二人で顔を見合わせ、クスリと笑うとアイクと共に歓楽街の出口の穂へと歩き出した。

* * * * *

後日談、『イシユタル・ファミリア』が経営する歓楽街は『フレイヤ・ファミリア』によつて滅茶苦茶にされ、さらに神イシユタルはそのいざこざに巻き込まれて天界へと強制送還されたという発表がギルドから通達された。

アイクと春姫を追ってきたフリユネは『イシユタル・ファミリア』の本拠に乗り込んだが、先に乗り込んでいた『フレイヤ・ファミリア』のぼつたりと会つてしまい、その後交戦せざるを得ない状況に陥った。何でも、『フレイヤ・ファミリア』の前でフレイヤを馬鹿にしたといううわさが飛び交っている。

その戦闘の影響で、フリユネは男性がトラウマになつてしまい、宿に引きこもつていくそうだ。

『フレイヤ・ファミリア』は今回の戦闘でギルド側から多大なペナルティを負つたようだが、フレイヤ本人はどこ吹く風と全く気にしていない。

主神を失ったことによつて事実上の解散となつた『イシユタル・ファミリア』。眷属たちは現在自分たちを受け入れてくれるファミリアを探しているか、無所属の状態を楽しんでいるかという状況だ。そしてイシユタルがいなくなつたことによつて、イシユタルに『魅了』されていた眷属や冒険者たちも正気を取り戻したようだ。

そして現在、『ヘスティア・ファミリア』の本拠の前では『タケミカツチ・ファミリア』の眷属、主神であるタケミカツチ、そして歓楽街から戻つて来た春姫を彼らは出迎えていた。

「春姫ちゃんー!」春姫……すまなかつた。お前がこのような状況になつていふに、俺たちは何もできなかつた」

「いいえ、桜花様。春姫はまた皆様に会えて幸せでございます」

「春姫ちゃん、あのね、私話したいことがいっぱい、いっぱい溜まつてるの。だからね……」

「はい、千草様。必ずお伺いさせていただきます」

「ところで、誰がここまで春姫を連れて来たんだ? 後ろにいるアマゾネスのあんたは満身創痍じゃないか」

「そう言えば、あの青年はどこに行つたんだい?」

「あれ……? そう言えば、見当たりませぬね」

「……ワユさん、アイクさんどこに行つたんでしようか?」

「大将? 会おうと思えばいつでも会えるよ。今はここにはいないけど、所属先は知ってるし、ほぼ毎日会いに行つてるからね」

「それで、春姫。お前はどつちのファミリアに所属するんだ? 俺の方は、結構貧乏で苦しいが、それはヘステイアの所も変わらない……というか借金がある分、ヘステイアの方が厳しいんじゃないか?」

「タケ! 借金のことは黙つておいてくれよ!」

「……『ヘステイア・ファミリア』の方でよろしいでしょうか、ヘステイア様?」

「何故だい? 自分で言うのもなんだけど、僕のファミリアは結構財政上厳しいぜ?」

「ワユ殿といればあの御方といつても会えますし、春姫を最初に見つけて下さったクラネル様には感謝しています。あの御方と合わせていただいたことも、その恩を少しでも返したいのです」

「まあ君が良いなら反対はしないけど、本当にいいのかい?」

「はい、これから末永くよろしく願います」

森の陰で心配を消しながらその様子を窺っていたアイクは、春姫の最後の一言を聞き、その場を後にして『黄昏の館』へと歩き出した。

深夜と言える時間、そんな時間に帰つたアイクに待っていたのはリヴェリアからの説

教だった。夜遅くに帰って来たことと、身体に着いた香水の匂いを嗅ぎ取りどこに行っていたのか問い詰めたリヴェリア。

アイクは今までに有ったことを話さざるを得なくなり、説教は日が上る直前まで続いた。

だがアイクがこの間買ったペンダントはちやつかりと首から垂らしていた。